

第 66 回

# 読売教育賞

最優秀受賞者 実践報告書集

「実践活動の概要」

2017年(平成29年)

読売新聞社

## 第66回 読売教育賞表彰式



高円宮妃殿下と第66回最優秀賞受賞者、関係者  
(2017年11月17日、読売新聞東京本社よみうり大手町小ホールで)

読売教育賞は、読売新聞社が教育の発展の一助にと創設し、  
1952年に第1回募集が行われました。

対象は教育の現場で意欲的な研究や創意あふれる指導を行い、  
優れた成果をあげている教育者や団体です。

各部門最優秀賞受賞者に賞状、盾と副賞(1件50万円)を、  
優秀賞受賞者には盾、選外の方には記念品を贈ります。



第66回読売教育賞は以下の13部門の募集を行いました。

①国語教育②算数・数学教育③理科教育④社会科教育⑤生活科・総合学習⑥健康・体  
力づくり⑦外国語・異文化理解⑧児童生徒指導⑨カリキュラム・学校づくり⑩地域社  
会教育活動⑪N I E⑫幼児教育・保育⑬美術教育

## 第66回 読売教育賞選考委員

①国語教育	明治大学教授	斎藤 孝
②算数・数学教育	東京理科大学理数教育研究センター長	秋山 仁
③理科教育	NPO法人ガリレオ工房理事長	滝川 洋二
④社会科教育	筑波大学名誉教授	谷川 彰英
⑤生活科・総合学習	上智大学教授	奈須 正裕
⑥健康・体力づくり	筑波大学教授	田中喜代次
⑦外国語・異文化理解	津田塾大学教授	田近 裕子
⑧児童生徒指導	東京学芸大学名誉教授	河野 義章
⑨カリキュラム・学校づくり	学習院大学教授	佐藤 学
⑩地域社会教育活動	東京大学名誉教授	佐藤 一子
⑪NIE	福山大学教授	小原 友行
⑫幼児教育・保育	東京大学教授	秋田喜代美
⑬美術教育	横浜国立大学名誉教授	宮坂 元裕

読売新聞東京本社編集局教育部長 丸山 謙一  
(部門順、敬称略)

\*うち、国語教育、算数・数学教育、生活科・総合学習の3部門を除く、10部門で最優秀賞授賞。

---

# 目次

## 【理科教育】

科学部活動を通して、自分を見つめ、前進しようとする生徒を育てる

..... 佐藤 由美

## 【社会科教育】

上機嫌な授業のために「現代社会授業ノート」の活用と  
「最近の出来事」を軸として

..... 川末 修

## 【健康・体力づくり】

中学生の生活習慣の確立を目指した健康教育の実践

..... 岡山市立西大寺中学校(団体)

## 【外国語・異文化理解】

生徒の柔軟な発想を生み出すプロジェクトを軸にした授業

..... 田中 里美

## 【児童生徒指導】

大規模な専門高校で教育相談を校内に浸透させるまでの取り組み

..... 金澤 容子

## 【カリキュラム・学校づくり】

「科学課題研究」を中心に据えた女子の理系進学支援教育プログラムの開発

..... ノートルダム清心学園清心女子高校(団体)

## 【地域社会教育活動】

地場産業を軸とした地域連携

..... 大阪府立堺工科高校校定時制の課程(団体)

## 【NIE】

まわしよみ新聞 新聞の魅力・可能性を伝えるNIE

..... まわしよみ新聞実行委員会(団体)

## 【幼児教育・保育】

日本の伝統文化 蚕の飼育体験を通して

..... 小林真理子

## 【美術教育】

「地域の色・自分の色」をテーマとした美術館×学校×地域の取り組み

..... 「地域の色・自分の色」実行委員会(団体)

# 科学部活動を通して、 自分を見つめ、前進しようとする 生徒を育てる



秋田県由利本荘市立大内中学校  
研究主任 科学部顧問

さとう ゆみ  
**佐藤由美**

---

1962年生まれ。1985年秋田大学教育学部教育心理学科卒業。1988年秋田県南秋田郡八郎潟町立八郎潟中学校勤務。1990年秋田県由利郡鳥海町立直根中学校勤務。1996年秋田県由利郡仁賀保町立仁賀保中学校勤務。2002年秋田県由利郡由利町立由利中学校勤務。2009年秋田県由利本荘市立本荘東中学校勤務。2012年秋田県由利本荘市立出羽中学校勤務。2015年秋田県由利本荘市立大内中学校赴任。現在に至る。連絡は、秋田県由利本荘市中館字堤台6の同校まで。

---

【理科教育】



紙風船を手に生徒たちと語り合う佐藤教諭（左）＝6日、秋田県由利本荘市立大内中学校で

放課後の実験室にパン、パン、パン……と乾いた音が響く。科学部の7人が紙風船を手ではたき上げていた。一見、子ども遊びだが、同部で2015年夏から取り組む実験だ。研究テーマは「紙風船はなぜふくらむか」。

佐藤教諭は「強弱を変え、膨らみ方の違いに気をつけてみて」と注意を与える。生徒たちは隣同士で互いの紙風船を見比べて、「強くだたくと大きくなるね」などと変化を確かめ合った。

実験通し自発性育む

理科教育 秋田県由利本荘市立大内中学校 佐藤由美教諭 55

同部では昨年、紙風船をはたき上げた時に出る音と膨らみ方の関係性を研究し、日本学生科学賞（読売新聞社主催）で文部科学大臣賞を受賞した。

今年、はたき上げた時に紙風船に生じるエネルギーの作用について研究を深めている。

佐藤教諭はテーマを生徒らに選ばせる。これまでも「絞ったマヨネーズがとろろを巻くのはなぜか」「ジュースを注ぐと音が出る理由」など身近な事象を研究。成果は地域の小学校などで開いた「サイエンスショー」で発表し、発信力の強化にも取り組んできた。

佐藤教諭は「達成感を味わい、自発的に考えて行動する人間に育ってもらいたい」と話している。

（伊福幸大）

滝川洋二・NPO法人ガリレオ工房理事長「部活顧問として理科研究のテーマ設定や集団研究の工夫、大学との連携などを具体的に紹介した。教育に不可欠な探求心を育てる指導法であり、評価に値する」

【最優秀賞選評】

滝川洋二 NPO法人ガリレオ工房理事長

「部活顧問として理科研究のテーマ設定や集団研究の工夫、大学との連携などを具体的に紹介した。教育に不可欠な探求心を育てる指導法であり、評価に値する」

## 1 はじめに

秋田県における全国学力学習状況調査の結果は、これまでに報告されているとおり高いレベルにある。しかし、我々教員がそれをどれだけの価値として捉えているかといえば、報道で扱われているほど重要視していない現実がある。なぜなら、結果は平均であり、もうすでに終わった過去の結果となるからである。我々の実践は、日々、試行錯誤の繰り返しであり、前進しているものである。一時の結果にあぐらをかいては、未来に何も生まれません。

私が勤務する大内中学校は、秋田県の沿岸に位置する由利本荘市の内陸部にある。生徒数162名、秋田では中規模校である。農業や商業、電子部品工業など様々な職種があり、兼業農家も少なくない。高齢化が進み、人口減少のため二つの学校が3年前統合し今に至る。地域と共に育つ生徒達は、朝夕に地域の方とあいさつを交わし、職場体験活動などは30か所もの企業のご協力を得ながら行うことができる地域コミュニティがある。大家族の中で育った生徒が多く、お年寄りを大切に、温和で明るい。しかし、公の場所で自分の考えを主張したり、問題（ここで言う問題とは机上の問題だけではない）に果敢に挑戦したりするような気概のある生徒は少なく、リーダーシップを発揮できる生徒も極端に少ない。勝負より仲良く楽しむことを好む傾向がある。

ある大企業の社長が、「私は由利本荘市出身の人間を雇う気はない。なぜなら、彼らは従順で指示されたことは確実に行うが、自分の発想で新たな問題を見いだしたり、解決したり、失敗しながらも修正を加え自分の考えを貫こうとしたりしないからである」と断言したと聞いた。なるほ

ど、もっともであると考えながらも、私の感情は正反対に動いた。それは過去のことであり、今の我々が前進すればその考え方を根本から突き崩すことができる。

幸い、私は教員をしており、研究主任に加え、学級はもっておらずとも科学部の顧問ではある。研究の舵<sup>かじ</sup>を取る立場であり、科学部の運営の中でも問いを発したり、発想の転換や自分の考え方を主張したりできる生徒を育てていくことが可能である。それを教育課程で生かせば良いと考えたわけである。

**研究の目的：科学部活動を通して、自分を見つめ、前進しようとする生徒を育てる**

## 2 科学部運営の考え方

高齢化が進む大内地区では、若者が県外へ流出している現実がある。学問を突き詰めなくとも、この地に残り家を継いでほしいという願いが地域に根強くある。そのような環境が大きく影響している彼らの心を開拓するには、「自分でもやれる」という自信(自己有用感)が必要である。また、「自分がやらなければならない」も同時に感じることができれば生徒の人生そのものが変わることとなる。これらの言葉の中には「田舎町に育った、こんなちっぽけな自分にでさえも」という意味合いが込められている。

誰でも偉大な先人の伝記を読むたび、その素晴らしさに感銘を受ける。その後の運命の分かれ道となるといっても良い。自分でもできるかもしれないと考えるか、自分に到底できないことと思いつむか、この二つの違いは大きい。大抵の人間の場合、後者となる。しかし、これらの人間に

価値がないかと言えばそうではない。ただ、気がついていないだけなのだ。彼らを育て上げることこそ戦後の日本を支えてきた教育の本当の目的であったのではないか。人を育てることができるのは、何物でもない「人」である。

30年後、職業として成立していない職業リストの中に「教師」があげられてあった。しかし、私は異議を唱える。人を育てるのは、機械ではなく、効率でもなく、人の歴史の重みであり、人の思いなのである。100年後もその職種がなくなることはないと断言したい。

ここからは、科学部活動を主軸にした生徒の育成に取り組んだ軌跡を記す。

### 科学部の活動を通した生徒の育成

- ① 内発的な問題意識の中から生まれる魅力的なテーマ設定
- ② それぞれの個性を生かした研究推進
- ③ 責任を伴うリーダーの育成
- ④ コーディネート力の重要性
- ⑤ 伝える喜びから生まれる自己有用感  
研究の成果や内容を魅力的に伝える様々な方法
  - プレゼンテーションソフトによる発表
  - ポスター発表 ● サイエンスショー
  - 英語訳発表 ● 映像動画

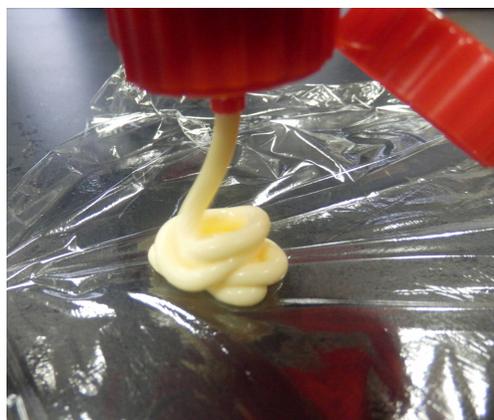
## 3 科学部の活動を通した生徒の育成

### 1. 内発的な問題意識から生まれる魅力的なテーマ設定

とかく科学のテーマは壮大なものとなることが多い。「宇宙に果てはあるのか」等。身の丈より大きいテーマがあがった場合、もっと専門の数学や科学の知識や考え方を磨いてから、ぜひ研究してほしいと付け加える。それゆえ、大内中学校科学部のテーマ設定は身近な対象物に近づけるため、食べ物漫画の観賞から始まる。また、具体的に大事にさせていることは、現象の繰り返しに焦点を当てることである。繰り返しが法則となり、法則を使えばその現象を再現できるところに研究の目を向けるのである。テーマ集めは、一人1日数テーマを見つける計画で行い、毎年1週間後には100テーマほど集まる。自分で見つけたテーマでなくとも家族からの進言でもかまわない。また、先輩の研究を学習する期間も設けていることや、先輩の研究をサイエンスショーに仕立てて地域の子どもたちに伝えるという使命が後輩たちに課せられているため、先輩の研究の中からテーマを持ち出す生徒も多い。しかし、100テーマのうち、1～2年間じっくり考え深めることができるテーマは、毎年ひとつあるかないかである。ここ5年間のテーマを挙げる。

平成24年度 「マヨネーズのとぐろの秘密」	A
25年度 「トクトクを科学する ～ピンから出る音の秘密～」	B
26年度 「トクトクを科学する ～ク音の是非～」(継続研究)	
27年度 「紙風船が語りかけるもの」	C
「カブトムシとミミズと月と」	D
28年度 「紙風船はたたくとなぜふくらむか ～音による考察～」(継続研究)	
「カブトムシのフンの質量と月に関する考察」(継続研究)	
29年度 「紙風船はたたくとなぜふくらむか ～音の分析と分子構造から迫る～」	

### マヨネーズのとぐる



### ビンから出るトクトク音



(A) マヨネーズを出したときに渦巻きができるわけを追究した研究(らせんの繰り返し)と(B) ビンからジュースを出したときに鳴るトクトクという音の原因を追及した研究(トク音の繰り返し)は、身近な食卓から生まれたものである。また、(C) 紙風船のテーマは、生徒の祖父が子どもの頃に抱いた疑問から生まれたものである(たたくという繰り返しの力が加わることで膨らむ)。また、(D) カブトムシのテーマは個人研究であり、幼い頃から300匹あまりのカブトムシを飼育した経験から生まれたカブトムシ博士によるものである(フンの質量と月の周期の繰り返しとの関係)。どのテーマも魅力的であり、身近にある小さな疑問

が形を変え科学部のテーマとして生かされた。

これらのテーマは、あまりにも身近なため見落とされがちであるが生徒の目線から見れば万物が研究の対象となり、それが研究の面白さを生み出すこととなる。このようなものの見方や考え方は、一般的に、生まれて間もない頃に備わっていたものであり、徐々に消え去っていったものではないかと推測される。幼い子どもが親に向かって「どうして〇〇は〇〇なの?」といった問いかけで親が困っているのを見たことはないだろうか。そんな子どもたちが、知識偏重の教育の中で、「問いを発すること」を忘れてしまっている。科学部員もしかりであった。しかし、現在は、日本学生科学賞中央最終審査など他校の素晴らしい研究テーマに触れ感銘を受けたり、たくさんの方々から自分たちの研究を認められたりすることで、これまで無関心だった身の回りの小さな事象を見逃さず、おもしろいテーマを生み出す傾向が後輩へと引き継がれている。これらの見方や考え方、自己有用感が生涯の宝物となり、本当は幼い頃、誰でもがもっていた能力が発動し、努力している限りにおいて消え去らなくなる。これがいずれは地域、日本、世界に貢献できる人材となり得る大きな要因であると考えられる。

## 2. それぞれの個性を生かした研究推進

部活動としての科学研究には、相乗効果が計り知れないほどにある。個人研究は、研究の専門性を深め、生涯をかけてひとつの研究に没頭する本物の科学者を生む。第60回日本学生科学賞において内閣総理大臣賞を獲得した高校生は、昨年度の内閣総理大臣賞とダブル受賞となった。専門性を深め応用したのである。地道な長い時間をかけた研究成果が多くの人々の目に触れ、受け入れられた瞬間を彼はしみじみと感

じ、涙の受賞となった。その瞬間を、部活動として参加した大内中学校科学部の生徒達6名に見せられたことが、大きな収穫となった。彼は生涯、研究者として日本の未来を支える人材となるだろうということは、あの表彰式の会場にいた大内中学校科学部員のみならず、会場の全員が感じ取ったことである。もしかしたら、そのような人材を部活動として生み出すのは難しいかもしれない。しかし、限りなく近づくことはできる。

### 【個性を生かした予想と実験】

予想の段階では、部員の数だけたくさんの考え方が出される。その証明のために行う実験方法も十人十色である。それぞれの方法をいったん整理し直し、チームを組み、予想の検証実験を行う。条件制御の問題が話し合わせ、どの実験に妥当性があるかを検討できるのも共同研究の利点と言って良い。まさにアクティブラーニングがここで行われる。ここからさらに試行錯誤の結果、もう一度、再現性を実証するための本実験が始まっていくのである。まずは、失敗や実験器具の破損を恐れず、思った実験を行ってみることから始まり、そしてその過程から重要なファクターが生まれるのだ。

次に示すのは、予備実験や予想検証実験に至

るまでの計画や器具、実験の実際、データの処理、考察、まとめまでどのような生徒がどの分担を担っていくのかを具体的に挙げたものである。

### 生徒から出される予想

#### 実験1 とくろのしくみを明らかにしよう

#### 予想

- ① 出口の形状の細工
- ② 押し出されるときの力のばらつき
- ③ 地球の自転による力の影響
- ④ 床からの抗力

### 平成27～28年度研究実験のための訪問施設

科学技術館（東京）  
秋田県産業技術センター（3回）  
秋田県立大学（4回）  
TDK株式会社にかほ工場（2回）

実際の実験は、理科室または関係施設（上）にて行われ、データの読み上げ、ホワイトボードへの記録、実験開始の合図担当など、部員全員が実験に加わる。もちろん、学校教育の一環で

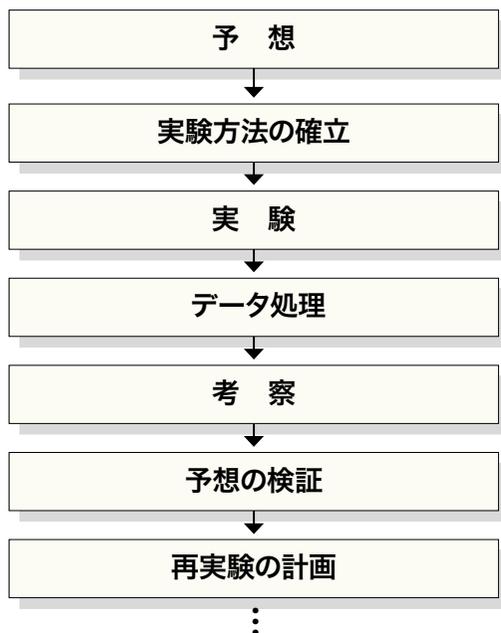
### 個性に応じた部内の役割分担

- 物づくりが得意な生徒 → 実験考案者の要望に応え、物づくり
- 新入部員 → 実験器具の洗浄や清掃、器具の受け渡し、準備
- 手先の器用な生徒 → 繊細な実験の実務担当
- 計算ソフトや電子部品に詳しい生徒 → データの処理やPCソフトの選別と解読
- 着実、実直型生徒 → データの記録とPCへの入力
- 全体を俯瞰できる生徒 → 実験の妥当性ややり方の改良案の提言、実験の指示伝達
- 映像に詳しい生徒 → 写真・ビデオ、映像メイク
- 英語の得意な生徒 → 英訳

行われている科学部の活動であるため、教科の未提出物のため1時間程度活動時刻に遅れてくる生徒もいる。だが、遅刻という多大な迷惑をかけた後は、よほどのことがない限り期限内提出を目指すようになる。担当顧問の私からガミガミ言われるよりも、先輩や周囲の仲間から白い目で見られる方がよほど堪えるらしい。とにかく、このような役割分担は、はじめは顧問の要請からではあったが、次第に毎日の小さな実験の中に自然にできあがるようになる。もちろん、担当顧問が問題提起し、データ処理の仕方をいくつか示したり、考察の方向を修正したりすることは必要不可欠である。

### 3. 責任を伴う実験とリーダーの育成

小さな実験の積み重ねが、いずれは規則性の発見や研究の鍵を握る考察につながる。



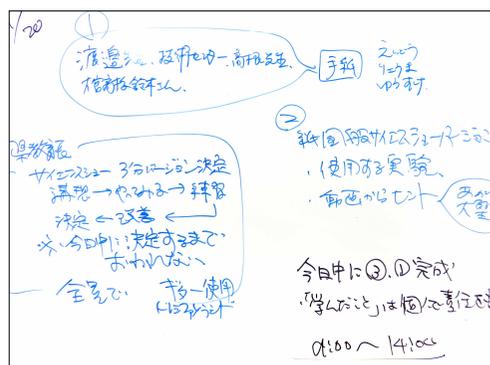
小さな実験の一つ一つに上記のような過程が含まれており、そのような実験がいくつも積み重

なって、ひとつの大きな仮説が検証できる。そのため、それら小さな実験であっても大切な共同研究の材料であり、自主性を高めるための格好の材料ともなる。その一つ一つの実験にリーダーをつくり、実験を行う。毎日、部活の最後には、データ確認とその時点での考察、つまり何が見えるかというリーダーの考察をみんなで聞く時間がある。このような経験を経ることで、自分たちでリーダーを選び、実験を行うようになる。生徒の責任で小さな実験を積み上げ、記録していくわけである。もちろん、その日の実験のノルマは、前日の実験の状況や考察から前日のうちに反省会と称する部活動の終わりに行う会で決定する。また、顧問のコーディネート力が試される最大のポイントもこの部分にあると言って良い。

### 4. 顧問のコーディネート力の重要性

科学部ホワイトボードには、前日の話し合いから見える今日の実際について顧問からの伝言が毎日載ることとなる。主に、実験の指示と確認を具体的に記録し、責任者についても記録される。もちろん、研究は大きな目標の下に、中くらいの目標をいくつか立て、また、その下に小さな目標をいくつもつくり、それらが一つ一つ繋がって、

部活ボードの例



大きな目標に近づいていくという構図になっているのはご存じの通りである。この構図をうまく利用すれば、最大の目標を達成できる頃には、部員の心がひとつになり、達成感や自己有用感で満たされることは間違いない。

科学部顧問としてのコーディネートの例を記した。内容は次のとおりである。

### 科学部顧問としてのコーディネートの例

- ① 今日の始まりと終わりの挨拶
- ② 今日の部活の目的の確認
- ③ 仮説の確認と実験計画
- ④ 実験の計画(具体的な動きや器具の確認)
- ⑤ 実験結果の確認と考察の話し合い  
→ 明日の計画の話し合い
- ⑥ 大学や各研究施設との連携調整
- ⑦ 発表方法の選定
  - 市研究発表会 ● 県研究発表会
  - 学生科学賞
  - 地域の小学校でのサイエンスショー
  - 科学館でのサイエンスショー
  - 自然観察コンクール
  - 物理学 Jr.セッション
  - 齋藤憲三 ● 山崎貞一顕彰会

紙風船の体積を発泡ビーズで測定



#### ① 今日の始まりと終わりの挨拶

礼儀作法と時間のけじめにあたる。

#### ② 今日の部活の目的の確認

小さな今日のテーマの選定にあたる。それをどのように内発的なものとして生徒におろしていくかが重要である。

#### ③ 仮説の確認と実験計画

生徒に仮説や予想を立てさせ、それを証明するために必要な実験の計画を自主的に練らせるために必要な時間である。このまま仮実験をさせる場合もあるが、たいていの場合、顧問のアドバイスを経て④の実験計画となる。

#### ④ 実験の計画(具体的な動きや器具の確認)

実験に有効かつ必要な器具や試薬や条件統一などのアドバイスを経た実験計画を大まかに立てる。生徒は、ノートに丁寧に計画するのではなく、あくまでもおおざっぱに、必要な部分のみをメモすることになっている。ここで、実験の数や必要人数によって自主的に複数の実験に分かれる。

#### ⑤ 実験結果の確認と考察の話し合い

→ 明日の計画の話し合い

実験結果を持ち寄ることで、それぞれの実験のつながりを考察する段階である。また、ここで今日の目的やねらいを達成するべく、顧問のコーディネートが考察を深める効果を生み出さなければならない。いわゆる授業の中で一番大切な、学習を深める部分にあたる。そして、その考察から次の課題につながっていく過程を生徒の思考が途切れないように行う必要がある。このような日常が積み重なって、大きなテーマへと近づいていく。

この科学部での研究の過程は、結局は理科の授業の拡大バージョンになっている。

## ⑥ 大学や各研究施設との連携調整

もちろん、研究は理科室だけで行われる地味なものだけではない。各施設を訪問して行われることも多い。また、大学の先生や企業の専門家とのやりとりも必要となる。

平成27～28年度にお世話になった団体は、先に(p6)示したとおりだが、団体とのやりとりも顧問の大事な仕事となる。そのコーディネート例を下に示した。

### 協力団体との交渉内容

- ① 研究の説明
- ② 研究内容の送付
- ③ 実験内容の相談
- ④ 実験期日
- ⑤ 輸送の手配
- ⑥ お礼の手紙(生徒)

しかし、顧問の仕事の重要な部分は、これらの事務的な手続きよりも、電話やメールによる相手との連絡の中に込める研究に対する思いが一番大きく相手を動かすことと感じている。地域の子どもたちを育てたいと願うのは学校現場の教師だけでなく、地域や日本に貢献している企業や団体の理念の根本にあるからである。また、専門機関との実験やそこからのアドバイスや議論は、研究をさらに深めたり、これまでの研究の結果や考察を確認・修正したりすることにつながる。自分たちの考えが、違った方向から証明できることもあり、達成感や向上心につながる。これは、授業で行う発展的な学習にあたる。

## NASAジェット推進研究所 福森一郎さんとの交流



## ⑦ 発表方法の選定

発表方法の選定も生徒の自己有用感を高める機会となる。プレゼンテーションソフトによる講義形式の発表、サイエンスショー、ポスターによる発表、論文など、発表形式を変えることでそれぞれの個性が発揮されたり、思わぬ才能が開化したりする。いったん開花した才能は、周りの共同研究者(グループメンバー)の賞賛の声に後押しされ、すぐさま自己有用感に変わる。その生徒は、次の日からある意味別人となる。また、自分の考えを発表することで本当の学びとなることや、それを説明したときの相手のうなずきからさらなる達成感や自己有用感を得るということを彼らはよく知っている。今までの苦労が一瞬にして消え去るのもこの瞬間である。

それでは、実際にいくつかの発表方法で得た生徒の成長の例を挙げる。

## 5. 伝える喜びから生まれる自己有用感

### 【コミュニティスクール活動の一環としてのミニ実験やサイエンスショー】

科学研究は、運動部に比べ地道で静的なものというイメージが強い。ところが、実際は運動部と比較しても劣らないほど時間も根性も体力も必

要とする。野球部の活動は、「巨人の星」に代表されるように涙を誘うほど感動を伴う。また、最近では男子バレーボール部物語「ハイキュー」という生徒一人一人を大切にした感動青春アニメが登場した。勝負にかける部員たちの思いが、毎日の地道でつらい練習の積み重ねの上に築かれていればいるほど感動が大きい。であるならば、科学部であっても十分に同等なつらさや実験の積み重ね、うまくいかないときの焦燥感など、研究テーマにかける思いや地道な努力は負けていない。十分にアニメ化できるくらいの重みを持っている。

科学研究は、常に理科室で行われているものではない。もちろん、理科室にいる割合は大きいですが、先に述べたような関係施設に赴き指導を受け

#### 東芝未来科学館サイエンスショー



る。また、指導を受けるだけでなく必要な器具をつくったり、アイデアをいただいたりすることもある。加えて、他の研究作品を見たり、博物館や科学館に出向いたり、また大学の先生の講演会にも足を運んだりする。むしろ、研究ばかりしては宝の持ち腐れである。研究は、人にも知ってもらい、評価してもらい、分かってもらって実を結ぶものだからである。だから、発表会に参加したり論文を提出したり、サイエンスショーなどを行ったりすることも科学研究の中に含まれていると考えている。天才物理学者、山村斉さんも論文を書くだけでなく、テレビ番組でわかりやすく身ぶり手ぶりを交えたサイエンスショーを行っているのではないか。今や、科学者は実験室で試験管を振っているだけでは収まらない。もちろん孤高の学者を愚弄するものではないことも付け加えておく。

さて、大内中学校科学部は、その前身出羽中学校であった頃からサイエンスショーをつくり全国規模で活動している。例えば、「トクトクを科学するサイエンスショー」は、ガリレオ工房が主催する「BoSS2015」において、全国大会で優勝している。その後、音の研究を小学生に伝えるべく、東芝未来科学館をはじめ、次に示した施設にてサイエンスショーを行った。市や県の事業からも要請があり、20人～300人規模の集会でも研究を楽しんでもらっている。自分たちの研究にうなずいてもらえることの意味を大内中学校科学部員ならば誰しもが経験し、知っている。



### 【これまで訪問した施設】

- 地域各小学校（3校） ● フェライト子ども科学館 ● 能代子ども館 ● 東芝未来科学館（川崎） ● 赤田公民館 ● 老人福祉施設（マイともだち） ● カダーレ大ホール（市冬期教職員研修会、滝川洋二先生の市内中2年生への講演会前座） ● 県総合教育センター（県理数レベルアップセミナー） ● 大阪市立科学館 ● 箕面第一中学校 ● 札幌市青少年科学館

### 【プレゼンテーションソフトによる講義形式の発表】

10分以内という時間制限で、研究内容を伝える。研究内容が深ければ深いほど、どの要素を使って説明するかを選択が難しくなる。研究内容が中学生の範囲を超えている場合、また研究内容が前例のないものだった場合、困難を極める。そのため、研究を数段階に分け発表するようにしている。相手が中学生の仲間であることや相手を飽きさせないパフォーマンスを取り入れた発表を心がけ、紹介をする。地域での発表は、お互いの研究内容だけでなくパフォーマンスの在り方も刺激となる。発表中、発表後の観客のざわめきがその発表への評価となる。

### 市研究発表会での研究発表



### 【ポスター発表】

発表形式の中で、一番手強く、一番満足感の得られるバージョンである。

- ① 相手が誰であるのかという想定
- ② 1分、5分、10分 … 時間による内容の準備
- ③ 質問項目の想定
- ④ わかりやすくするための置き換えの実験、動画等の実験証明の準備
- ⑤ いかなる場合でも動じない心、会話を楽しむ心の準備
- ⑥ 発表者の経験値、練習

以上の準備ができて初めて、満足の得られる相手との会話によるポスターセッションが完成すると考えている。発表した生徒が相手に認められるようなパフォーマンスができなければ、自己有用感は生まれない。生徒の発想の豊かさや、臨

### 第60回学生科学賞最終審査



機応変に対応できる頭の柔らかさ、そしてその場面を楽しむ心が磨かれて初めて、このバージョンは完成する。話し手が満足する瞬間とは、聞き手が満足する瞬間と同時である。そして密かな楽しみとして、顧問の楽しみもそれと同等に生まれる。生徒と同じ目線に立ち(同時に違った目線も存在する)、生徒の満足感を共有するということは、生徒と教師という壁を越えて、人と人との心の結びつきを感じる瞬間となる。

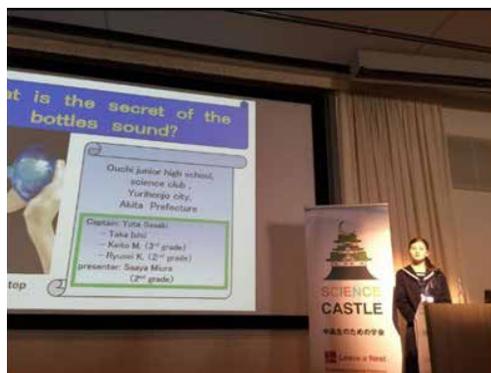
### 【個人研究 ～国際的な舞台を意識しての発表～】

個性を尊重したり将来の自分を見据えることで、今の自分に何が必要かがわかる。部員の将来の目標が国際的な活躍であるならば、当然、英訳での発表をアシストしたい。平成27年度は、ALTと共同し、生徒一名が英語での発表を行った。もちろん、研究内容を英語に直すことは、英訳することとは意味が違って来る。専門用語や推量、再現性のある言い切りなど日本語とは違ったニュアンスがある。ここではALTに加え、先輩(大内中学校科学部卒業→北海道大名誉教授 佐々木陽一先生)の協力を仰いだ。研究は、パワーポイントのみならず、ポスターにもまとめられ、この生徒は1年以上かかって、目標であったサイエンスキャッスル(中高生のための学会)での研究の発表を終えた。また、近隣の秋田県立大学との連携でも発表を経験した。もちろん、ネイティブな発音にもこだわったことを付け加える。その後のこの生徒の成長は、研究にとどまらず、秋田県英語弁論大会、生徒会長立候補など、様々なことにチャレンジできる意欲的で前向きな考え方ができる人間に変化していった。

### 【個人研究 ～小さな頃からの興味の発展～】

科学部に入ったきっかけが小学校の頃からの興味関心の延長であることはあるが、それがその

### サイエンスキャッスル関東大会参加



### 小学生の頃の研究記録ノート



後の研究内容と連動することはまれである。カブトムシを300匹あまりも毎年育て愛でていた科学部員は、半月の夜にフンの質量が多いことに経験から気がついていていた。中学校の研究では、データ値が重要となる。目で見ただけではなく、統計から推量することで科学研究が成立し、本物となる。Newton別冊「統計と確率」を生徒と共に学習し、統計学からカブトムシのフンの質量に挑んだ。毎日のフンの質量計測というアナログと、統計から得られるふたつの因子のつながりを読み解くデジタルの鍵が統計学にあった。もちろんエクセル処理は、PCに堪能な先輩の生徒の指導の下で行われた。ここに、個人研究といえども部活動としての人と人のつながりの良さがある。

この研究は、「カブトムシのフンの質量」と「月

の満ち欠けの周期」という本来結びつくことのないふたつが結びつくからこそおもしろい。この感覚は、この生徒の小さな頃からの生活経験が生んだものであり、大切にすべき感覚である。そして、このような生徒の科学的な見方や考え方の芽を摘んではならない。

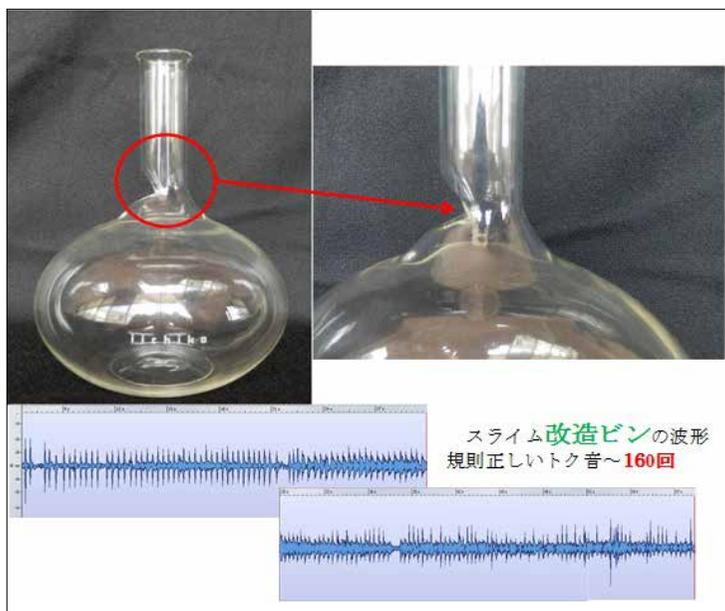
### 【発明としての研究発表】

ビンから出る心地よい音の研究からトクトクが長く続くビンの開発という発展的な研究も行っている。ビンの特徴や音の分析から考察し、ビンを制作した。秋田公立美術大学の協力を得て行われた研究である。科学的根拠のもとでビンを作成し、市村アイデア賞では、首都圏で行われた表彰式に出席した。「挑戦し、努力し、発表したものが評価され、表彰いただく」という一連の流れが、いかに一人の人間を変えていくのかを見守ることができる幸せがここにもある。

### 【映像や動画での発表】

個性は様々で、サイエンスショーなど声や動作で表現することは苦手でも、PCを通しての表現に長けている生徒も多い。会話を通してのコミュニケーションは大事であるが、PCでの表現が得意な生徒にとって、その能力を伸ばしていくことも必要である。コマ送り映像のつなぎ合わせなど、中学生であれども自分の得意とする分野ともなれば専門的な技術に関しても予想以上の能力を発揮する。大学レベルのImageJソフト(全文

## 第46回市村アイデア賞奨励賞受賞(科学部 部長 真坂圭都)



### 第14回全国子ども科学映像祭出品

「ビンから出る音の秘密」より

このDVDには、この3年間の<sup>おも</sup>想いが込められています。先輩達と一緒にやった実験の思い出や仮説が検証されたときの感激もすべて。また、せっかく終わった大量の実験がやり直しになったこともありました。それでも真実に近づいている確かな何かを頼りに、この3年間研究を続けることができました。世界初のハイスピードカメラ映像や、考え方の転換を図り行った研究結果も誇れるものです。しかし、先輩達とともに科学部みんなで創り上げた歴史が僕たちの最大の誇りです。今年度の科学部のテーマは、「発信」。お世話になったたくさんの方々へ、感謝とともに発信します。

英語のバージョン)を読みこなし、使用した生徒も科学部には存在する。いかに若い能力が開花するとすばらしいものだろうか。P13に出品コメントを付け加えたが、生徒らしい先輩との心の絆が表現されており、ほのぼのとする。

## 4 終わりに

これまで、学校教育の中の部活動を主に取り上げながら、生徒の活動を紹介してきた。部活動は、教師と生徒が教育課程の中で行うものであり、秋田県ではその重要性が認識されている。

部活動から生まれた相手に対しての感謝の気持ちや礼儀が学校教育現場だけでなく、地域にまで広がりを見せている。科学部の活動も部活の域を超え、教育課程、コミュニティースクールへも影響を与え続けている。科学的な探究活動に対する向き合い方が、狭い範囲の教科や学習にとどまらず、自分の生き方や生かし方にまで影響を及ぼす効果があることを感じる。少なくとも、入部したての1年生の頃よりたくましくなった生徒を、卒業式にはお互いの涙で見送ることができるようになった。ここに私の研究目的である「科学部活動を通して、自分を見つめ、前進しようとする生徒を育てる」の意味が存在する。

地域ボランティア(科学フェスティバル)に参加



# 上機嫌な授業のために

～「現代社会授業ノート」の活用と「最近の出来事」を軸として～  
及び「主権者教育」「キャリア教育」の実践



宮崎県立宮崎農業高校  
教諭（地歴公民科）

かわすえ おさむ  
**川末 修**

---

1962年生まれ。1984年立命館大学産業社会学部卒業。1985年宮崎県立延岡高等学校勤務。1995年県立宮崎大宮高等学校勤務。2003年宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校勤務。2009年宮崎県立高鍋高等学校勤務。2014年より県立宮崎農業高校赴任。現在に至る。連絡は宮崎県宮崎市大字恒久春日田1061の同校まで。

---

【社会科教育】



「授業ノート」を回収する川末教諭（右）＝宮崎農業高で

クイズで時事を楽しく

「（希望の党前代表の）小池さんのライバル」「安倍さんがどうなった？」。衆院選の投票日直後の10月24日。2年生の現代社会の授業中、生徒たちが次々に選挙に関する言葉を口にしていた。

川末教諭が授業冒頭に行う「時事クイズ」。出題者が決めた時事ワードを、解答者1人を除いたクラスメイトで共有し、解答者にヒントを与えて答えに導く。この日は「安倍政

社会科教育 宮崎県立宮崎農業高校 川末修教諭 55

権勝利」が答えだった。

時事クイズは川末教諭がこだわる「上機嫌な授業」の一環。楽しく学んでもらう工夫だ。生徒の一人、長嶺真心さん(17)は「テレビや新聞をよく見て、いま何が起きているか分かるようになった」と話す。

授業中には時事問題の小テストも行う。この日も新聞記事を題材に衆院選に関する問題を出した。授業を分かりやすくするために生徒に配っている独自の「授業ノート」では、毎日のように新聞記事の要約を求めている。

川末教諭は「教科書だけの授業は面白くないが、ニュースとリンクさせると生徒は興味を持つ。新聞を読むことで日本語力も養われる」と力を込める。

（光安素子）

谷川彰英・筑波大学名誉教授『上機嫌な授業』をキーワードに高校の『現代社会』の授業改善を行った。日本語能力を育むために新聞を活用するなどの実践も含まれ、後続の教師に大きな示唆を与える報告だ

【最優秀賞選評】

谷川彰英 筑波大学名誉教授

「『上機嫌な授業』をキーワードに高校の『現代社会』の授業改善を行った。日本語能力を育むために新聞を活用するなどの実践も含まれ、後続の教師に大きな示唆を与える報告だ」

## 1 はじめに

まず、教諭としての経歴を記す。

昭和60年4月に宮崎県に採用される。当時の採用試験の専門科目は「政治経済・倫理社会」。現在は地歴公民科に再編されたが、当時は社会科学教諭として、若山牧水の母校である延岡高校に赴任し、10年間勤務。その後、宮崎大宮高校8年、五ヶ瀬中等教育学校6年、高鍋高校5年勤務。現在、宮崎農業高校4年目。その間経験した担当教科は現代社会、政治経済、倫理、地理、世界史。現在は、初めての勤務となる専門高校で、2年生対象の現代社会(2単位×5クラス)と3年生の選択政治経済(2単位×1クラス=15名)の計12単位を担当している。

中高一貫校の五ヶ瀬中等教育学校で、中学生の授業を担当したことで、授業力アップの必要性を痛感し、自らの授業改革に本気で取り組み始めた。高校3年生(中等教育学校のため6年生と呼んでいる)のための「倫理」の教科書整理ノートを作成したことがベースとなり、次の高鍋高校でオリジナルの「現代社会授業ノート」を作成し、生徒全員に一冊ずつ持たせ始める。平成24年度には宮崎県の地歴公民科「教科指導力向上支援教員」として、県内の地歴公民科の先生方を対象とした授業公開等を行った。高鍋高校を離任するまでの29年間は、普通科で「センター現代社会」「センター倫理」さらに国公立大学の社会科学系統の学部の二次試験小論文受験の指導に当たった。

宮崎農業高校に転勤し、一般入試の学力試験では、大学を受験する生徒のいない学校での初めての授業を行って4年目。普通科でも同様のクラスの授業は経験していたが、一人で2学年全クラスの「現代社会」を担当することをアドバン

テージにした教科指導の中で、いかに生徒の学力を向上・定着させ、学習への意欲を高めるのか、日々生徒と向き合っている。つたないが本気の実践の一端をまとめ、応募することにした。

なお、昨年からは各県立学校に1名ずつ配置された主権者教育推進リーダーの任も負っている。

## 2 実践(1) 現代社会授業ノート

プリントの整理をしない生徒への指導をどうするか考えたことが、作成の契機の一つとなった。テスト問題をはじめとするプリントを、現代社会専用のファイルを準備するよう年度当初に指導するのだが、なかなか実行しない生徒がいる。他教科、特に国語・英語・数学のプリントの量は膨大である。勉強しようと思っても、宿題のプリントが行方不明となり、必死で探しているうちに、貴重な時間を失うことにいら立ちながら、学習意欲も衰退するという高校時代の情けない思い出もある。プリントの精選と管理負担を軽減することで、生徒に合理的な学習を促すことができるのではないか。また、年度当初に配布すれば、年間を通した学習への取り組みが提示でき、授業が安定するのではないか。

地元の印刷業者に3月末に原稿を渡し、印刷・製本をお願いし、4月の最初の授業(授業開きと呼んでいる)で、生徒に配布する。平成24年度から始めて、今年で6年目。構成は、ほぼ変わっていない。第1号となった「倫理」の授業ノートの表紙は生徒に依頼した。書道部の生徒が、篆書で私の名、「修」を書いてくれた。その一文字が表紙を飾った。翌年からは、「みやぎき犬」として宮崎県が採用した、「ひい・むう・かあ」の、いわゆる、ゆるキャラの3匹の犬のイラストを採用させていただいた。念のため、県の担当部署に著作

権上の問題がないかを確認したことを思い出す。

「はじめに」では、学ぶことの意味を訴えている。学習に専念できる時間を与えられる日常は、文字を発明し受け継いできたご先祖様からの贈り物である。震災など非日常が訪れる可能性を考えれば、たまたま災害に直面していない幸運も当たり前のことではない。「なぜ高校生は勉強しなければならないのか」気づいてほしい思いで、書いた。特にパソコンの普及により漢字を書かない、書けなくなりつつある、私を含めた日本人への警鐘でもある。

母国語は母の胎内に存在し始めたときから学び始める。そのとき「こんなことを学んで何になるのか」と学びを拒絶した人は、一人もいない。そこに、学びの本質があることを生徒とともに確認し、宣言する授業開きでもある。次の2ページにわたる新聞記事(宮崎日日新聞コラム「くろしお」と「ひと」)は、その流れで掲載している。

次の「離任式でのお話」は、3月下旬の離任式での先生方のお話をメモし、その夜の職員送別会で配布するという作業を2年前までの10年間継続してきた。去りゆく教師が教え子に語る別れの言葉は、教育的価値を持つことがある。ここ2年間は、出張と重なり記録できなかったのだが、生徒の母校への思いを、本気で語った教師の言葉は、それを読む高校生に良い影響を与える力があると信じた。迷った末、今年度も一昨年分を掲載した。そういう意味で、私は始業式や終業式などの集会で校長を始めとする教職員の話を実践の機会として重視している。職員がその話に関心入り、自らメモをする学校長と巡り合えることは生徒にとっても、職員にとっても幸せなことであるが、極めてまれではなかろうか。全校集会や学年集会に緊張感を持たせることも、その学校の教育の質を左右するものと認識している。

次のP1がシラバス(年間指導計画)である。何を教えるか、日程とともに年度当初に伝えておくことは、授業を安定させるためにも有効である。同様の効果を期待して、P2～6を年度内の授業日程表。記入して活用してくれる生徒には好評である。P7、8は授業プログラム。「黄金の三日間」という言葉が、小中学校では金言であることは、高校教師には一般的ではないのかもしれない。新年度を迎え、担任としてのクラス開きの最初の3日間、教科担任としての授業開きの最初の3時間で1年間の流れが決まる。そういった意味で、1時間目に授業ノート(特に「はじめに」)、2時間目に「正しい自己紹介とはいかなるものなのか」、3時間目に「正しい新聞の読み方とはいかなるものなのか」を実施している。その略案がP7、8ということである。

そしてP9には、夏季課題と課題テスト範囲を掲載している。夏休みに生徒が、自ら「公民科」を学ぶ時間をとることは、難しいことがわかってからこそその工夫である。夏休み中に新聞を読み、教科書を読み、税に関する作文を書き、レポートまたはスクラップ帳を作成することを強いている。P10～31が、次の3で詳述する「最近の出来事①～⑩」。そのあと15枚の通常のノートのページ。現代社会のノートはこの一冊で、ことたりる。別途購入不要。

「おわりに」は裏表紙の裏のページにある。東日本大震災のあと、作成した詩を掲載した。一部、「ひよっこりひょうたん島」からの引用もあるが、本気で勉強することを訴えたものである。「本気」「元気」をキーワードに、息子・娘ほど年の離れた若者を前に、自らを奮い立たせる意味合いも込めている。

1部220円程度。全国有名書店でも買えない、価値あるノートと生徒に説明し、生徒の一括納入金から支出している(14ページの写真4)。

### 3 実践(2) 最近の出来事

「最近の出来事」という題名の課題を年間通して生徒に課している。新聞記事から気に入ったものを一つ選び、見出しとリード文を要約させる。それぞれが21日分の①～⑩の提出を年間を通して求めることになる。「現代社会授業ノート」に印刷してあるので、生徒には定期考査のタイミングでの、ノートによる提出を求めている。

私が制作した完成版が定期考査や課題考査で必ず出題する時事問題の範囲となる。私は、完成版を作るために、当然新聞を読むのだが、どの記事を選ぶかをテーマにすることで、新聞の読み方が変わることを実感する。まず、今授業で取り扱っているテーマと関連のある記事がないかを探す。定番としては、子どもの日の前の子どもの人口統計、死刑執行、自殺者の統計、8月の原爆投下、終戦記念日に関する記事などがある。決定打に欠ける日は、「ひと」の欄から、人物を紹介することもある。生徒には、どの新聞にもある「ひと」の欄を読むと、素敵な出会いがあるよ、と伝えている。特に10代の若者が取り上げられている記事は、チャンスである。生徒が、自分の生き方の指針とする可能性もある。どうしても決められない場合は、トップ記事にすることが多い。宮崎日日新聞を熟読している。他に、学校図書館にある全国紙2紙、電子版で読む全国紙1紙を読んでいる。交通機関を利用する時など、自分で購入する場合は、それ以外の全国紙を買うようにしている。

宅配による新聞の定期購読をしない世帯も増加している中、若者に限らず新聞離れが進んでいる。新聞は、失礼を承知で言えば、ITが主導する情報化社会の進展の中で、残念ながら斜陽産業化しているメディアであろう。しかし、新聞は生きる力を育むうえで、大きな力がある。キャ

リア教育の視点からも、公民科の授業で取り入れられないことはありえないツールである。

期待される効果の一つは、日本語力の向上である。毎日、良質の日本語を読みながら、日本語で考える力を高めていくことができる。ワープロは打つが、字を書かない生活の中で、特に漢字力の低下は、今や日本人全体の問題であると痛感する毎日である。まず、板書をしながら漢字を書けなくなっている自分がいる。字を筆記用具で書くのは、板書だけという一日があるという教師は、おそらく私だけではないだろう。

効果の二つ目に、自分の進路を社会の一員として考え、進路選択をするための有効な情報を「思いがけず」得ることである。ネットでニュースを見ることは、この「思いがけず」という点で、新聞に劣ると考えている。ネットでは自分の知りたい情報を求めることが多いのに対し、新聞は自分の知らなかった、関心のなかった世界の魅力を伝えてくれることがある。生徒には「あなたが変われば(=新聞を読めば)世界が変わる」と伝えている。

効果の三つ目に、主権者教育には欠かせない。ということは、公民科の授業では、必須であるともいえる。自ら主体的に判断する主権者、社会を向上させる市民として成長させる力を新聞は有している。

学習時間が少なくなるということは、日本語を読み、自らの手で文字を書く時間が減っているということである。日本語力の低下と新聞離れの相関関係は小さくならず。母国語の共有力の低下は、コミュニケーション能力の低下という、日本社会の危機的状況の原因である。教師の言葉や親の思いが生徒に伝わらない。子どもの考えがわからない。話を自分の都合のよいようにしか理解しないわが子に向かって、「勝手耳(カッチェミ)」と揶揄した母親が印象的である。私も「石の上にも三年」「しんがり」などという言葉を生徒

に理解してもらえないという経験が日常的になっている。生徒にとって死語化している日本語を使うときには、しっかり説明しなければならない。ジェネレーションギャップは、母国語にある。

キャリア教育の根幹は、「学力の保証＝日本語力の向上」にあるという思いで、私は「最近の出来事」の取り組みと提出、チェック、評価に時間を割いている（チェック印として使用しているスタンプ。14ページの写真5）。

新聞を取っていない世帯に配慮して、学校図書館及び県立図書館など近隣の図書館の利用を呼び掛けている。また、自宅で購入している新聞を、提出状況の良い生徒にプレゼントすることもある。それでも、提出しない生徒もいるので、私の完成版を写して提出することも認めている。最近の出来事②の完成版と、それを範囲とした時事問題のプリントを同封する。50分の試験時間を余らせて、退屈する生徒がいないように、毎回、読売ワークシートから、1ページをおまけしている。テストを返却する時間に、共通の教材として取り上げ、新聞を読む動機づけをするよう利用させていただいている。

時事問題の出題形式は、パターン化されており大問1－見出しの完成、大問2－漢字の読み書き、大問3－空所補充によるニュース完成、大問4－正誤問題、大問5－論述。ここでは死刑制度の是非や自殺の是非を論じることで、絶対に親より先に死なない決意をするよう求めるメッセージを、毎年、必ず発している。これが、キャリア教育の出発点であると、私はひそかに思う。

## 4 実践(3) 上機嫌な授業のために

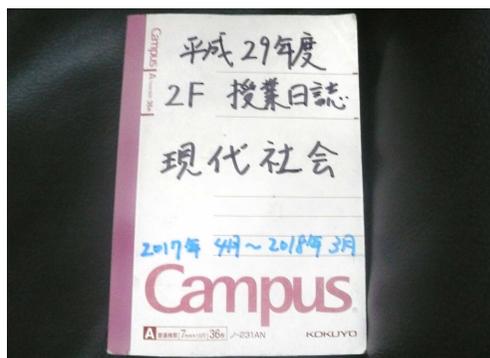
10年前に鹿児島市で実施された高校公民科教諭向けの教育講演会で、講師は「先生方、ど

うぞ上機嫌に授業をしてください」という言葉で締めくくられた。聴いた当初は、何とも陳腐な言葉だなと感じたのだが、日を追うにつれ、毎時間上機嫌に授業することが、私にとっては容易でないことに気づかされていく。不機嫌になる要因は、日々いくらかでも生じる。それにとらわれず、気持ちを切り替え、笑顔で穏やかに、楽しく授業をすることが、教師としての修行である。今日「上機嫌」は、私の座右の銘である。上機嫌を教室にもたらすために、「授業日誌」（表紙・写真1、記入例・写真2）と「二つの儀式」を取り入れている。

### <授業日誌の書き方>（ノートの表紙裏に添付）

- ① 記入者の出席番号 氏名
- ② 日時（月 日 曜日 時限）総計  
—— 時間目（板書するので、写してね）
- ③ 欠課者の出席番号・氏名・欠席の理由（忌引き、出停）
- ④ 本日のテーマ
- ⑤ 今日の授業のポイントはこれ（重要語句や資料など）
- ⑥ ⑤以外で最も印象に残った点は（ニュースや雑談等も含めた中から）
- ⑦ 感想、意見、疑問点
- ⑧ 次回の担当者を指名し、その人物の魅力（長所）を紹介する
- ⑨ 最近のニュース、イラスト、格言などでスペースを埋めなさい

■ 写真1



■ 写真2

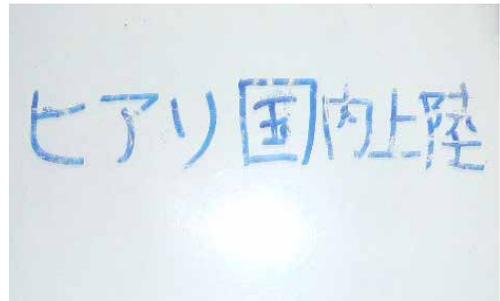
授業 (日誌付録)	
①	①
② 4月27日 (金) 4回目 5時間	② 4月27日 (月) 5回目 6限目
③ 渡辺君が欠席	③ 大仏さん発表
④ 課題テスト返却と音読の方法	④ 正しいシリーズ
⑤ 「向上する 本気で100点」	⑤ 正しい新聞の読み方
⑥ 「オマエハ!!?」	⑥ 先生はドクエエホ、マシ?
⑦ この日の予備校テストも頑張、ていざい	⑦ 新聞について深く考えたのは
PS 勉強のモチベーション(⑧)よりも、その	時がた
り方が好きです。	⑧ みんな、心にちほ!! 公認でなし
⑧ 優しい、面白い、一つ結び	⑧ 突然ですが、次に登場して
深慮(部、今にびがあら)と明かしては	発表したは、思、有、た、ド、モ、
さん	( )イ、 Fight!!
⑨ 陸上の 第四回記録会 (15回)	⑨ 2017年、ク、ラ、マ、シ、に
女子内監、投、げ、で、具、高、校、新、記、録	輝、き、今、年、4、月、26、日、に、CD、と、発、売、し、た
で、優勝、した、高、校、は、?	ゆ、る、や、ら、は、音、程、で、し、ょう、?
A、 高、崎、高、校	A、 く、ま、じ、ん

この授業日誌は、「できるだけ授業当日の放課後か、翌日の昼休みに、職員室まで持参する」よう、指導している。その場で、教科担任としての面談ができる。訪れてくれた生徒には、必ず「高校を卒業したら、どこで何をしたいか」を問う。答えによって、その職種や進学先での情報を話題にする。そのうえで、新聞や本を読むことの魅力を伝えている。ささやかながら、キャリア教育の実践の場となり得ることがある。担当した生徒は、次の時間の冒頭で私の横に立ち、クラスメートに「好きな言葉」を復唱してもらう。「復唱してください」(全員で復唱)「(例)笑顔が一番」(全員で復唱)。復唱後は、盛大な拍手をして、最後は、担当者の合図で、パン・パパンという手拍子を合わせて一体感を得る。これから「現代社会」の授業だぞというけじめを、楽しくつけることができる。

教材を準備しない生徒がいる。他の教科の教材やプリントが机におかれたままのこともある。朝の読書で読んでいるのか、お気に入りの文庫本を手にしたまま、机には何も無い状態であったりする。現代社会に興味・関心のある生徒には手はかからない。やる気のない生徒に、どうやって火をつけるか。それが、怒鳴りや脅し、説教であれば、愚策である。上機嫌がキーワードである。

次の儀式が「時事クイズ」である。ニュースに関する単語を正解として出題するのは、前回の授業日誌の担当者。私が持参するA4判サイズのホワイトボード(写真3)にマーカーで記入する。

■ 写真3



解答者は本日の授業日誌担当者。本日の担当者が誰かは、私がクイズ形式で発問しながら、生徒に答えてもらう。ヒントは前回担当者の書いた、その人の長所。時には長所?と疑いたくなる表現もあるが、概ね好意に基づいたわかりやすい人物像がヒントとなるので、すぐに本日の担当者の名前が、生徒の口から出てくる。直後に、時事クイズの趣旨の口上を、全員で唱和する。「皆さんの質問力、反応力、時事力を試す、時事クイズの時間です。今日の出題者は～さん。解答者は～さん(～は、フルネームで全員で発声することになっている)。問題はこれです」と私が司会をして、出題者が、教壇に立つ解答者の背後の黒板にホワイトボードを掲示して、解答者以外の全員に解答を周知する。そのうえで、出題者が解答者へ「はい」か「いいえ」で答える質問をする。これがヒントとなる。例えばQ「外国から運ばれたコンテナの中にいましたか」、A「はい」。ここで、答えを知っているクラスメートが反応することになる。「そうだよね」「こわいよね」「何のこと?」。その反応を確認しながら解答者が「ヒアリ」と正解を答えてくれるのが理想の展開である。ど

うしても答えが出ない場合は、全員に、このニュースを知っているかを発問し、知らないのは一人ではないことを確認するなどしながら、振り向いて、解答を確認するよう促す。いずれにせよ、今度も手拍子。解答者が、音頭を取って、パン・パパン・パン・パパン・パン・パパッパ・パンと全員で合わせて、最後に解答者が右手を上げながら正解を発声する。このあと、出題された背景となったニュースに、若干の解説を加えた後、教科書の題材に入っていく。ニュースと題材がリンクできると、生徒と私の上機嫌度は高まっていく。

この儀式を始めてからもう5年以上たっている。60回の授業で毎回やらされる生徒以上に、私の方が飽きてしまい、やめようかと思うことがなかったわけではない。事実、一部生徒の不規則発言等で授業が不安定になったクラスでは、中断したことがあった。続けるエネルギーに、次の新聞記事がある。

《歌手の松任谷由実さんが尋ねた。「(私は)こんなにステージをやってきて、お客さんも喜んでくれているけど、この先に何かあるんですか」。森光子さんが答える。「飽きないでください。それだけでいいです」。松任谷さんの対談集「才輝礼讃」にそうあった。放浪記の主人公、林芙美子を41歳から演じること2017回、とざらりと書いてしまうのも憚られる。48年間、後半は短くなったとはいえ、しばらくは5時間半の舞台。代名詞にもなったでんぐり返しは3回続けてやっていた。役に恵まれなかった前半生から一転、遅咲きの輝きは、日々新面目あったればこそだろう。…中略…「飽きないでください」は何より自らへの戒めだった。

酒は強くなく、晩年は「私、2センチください」とワインを飲むのがつねだったそうだ。気取らない森さんのこと、席の楽しさが目に浮かぶようである。松任谷さんは、34歳年上の先輩の言葉に「ズッシリ受け止めました」と応じた。飽きないでくだ

さい。こちらはその難しさをかみしめつつ、大女優をしのいでワイン2センチ》(日本経済新聞春秋 平成24年11月16日付)

私の「飽きない」ための考え方は、日々授業の向上を追求する=変化なきところに向上なし。健康でいる。上機嫌でいる。本を読む。体操、運動をする。本を読まなくなると、授業力が落ちることを実感する。「むさぼるように本を読む」。本や新聞記事とは、必要なときに出会うという経験を幾たびもしてきた。「求めよ、さらば与えられん」である。また、授業は、講演会の講師のつもりで行う。ただし、参加者は、ほぼ全員が「動員」であり、身銭を切った参加者はいないと考えるべし。自分が身銭を切って何度も講演会に行った。自分が講師になるのはいつ?と考えるようになる。「そうだ、毎日の授業が講演会じゃないか!」と気付く。17、8歳の若い聴衆に伝える幸せ。楽しからずや。自分が楽しくなければ、生徒が楽しいはずがない。

しかし、上機嫌を壊してくれる生徒の反応も、たびたびである。例えば、授業中に寝る生徒への指導。授業が始まる前に指導したうえで、寝ない状況を褒める。授業後、職員室に呼んで指導したこともあったが、最近では、一人も寝ない授業が続けば、生徒が偉いと感じるようになった。授業中、睡魔に襲われた時の感覚は、自分が研修等で、生徒の立場になると、いやでも思い出される。眠たい時はある。内容に関心が持たず「つまらない」時は、なおさらである。生徒を寝かせ続けない一つの技として、「呪文」がある。ドラクエの中で「ザメハ!」が目覚める呪文だという。熟睡の続く生徒には、近寄って行って、呪文をかけることもある。周囲の生徒は楽しみにしているのだが、これは伝家の宝刀として、極力抜かない方が効果がある。上機嫌な起こし方である。

最後に、5回の定期テストと3回の課題テスト。

特に不出来な答案が続くクラスの採点は不機嫌になってしまいがちである。○×をつけながら、準備をしていない生徒に怒りがつのるが、やがて、そうさせた教科担任の自分が反省すべき点がないのか、という視点に立ち返ると、幾分、機嫌は持ち直されていく。「勉強しなくていい。赤点さえとらずに単位だけ取られればいい」という生徒が、どうしたら学習活動をするようになるのか。

去る7月の成績不振者生徒との三者面談(教科担任、保護者、生徒)では、「現代社会授業ノート」の「はじめに」を手に、勉強することの意味を話題にすることから始めた。母親の一人は、「先生、こんな息子は叩いてください」と言われた。本人の前では「よし、お墨付きをもらったぞ(この言葉も理解できるか、生徒には確認する必要があった)」とは言ったものの、当然、生徒を叩くわけにはいかない。体罰は、教師の敗北である。「本気で100点」を目指すよう、日々の授業の中で、生徒に火をつけることができるように、上機嫌に種火をともし続けることが、最善の策である。

テストの採点に関しては、漢字にはこだわる(ひらがな書き、誤字は×)。漢字を書かないことを、大人、特に教師が容認してはならない。次世代に文化を伝えていく重要な使命がある。母国語は、文化の根幹である。それができなくなると、社会は衰退していくという危機感を持つべきところまできている。隣国・韓国のように漢字を捨てる愚策(私からすればであるが)をとる将来が来ない、とも限らない。関連して、公民科の授業で、英語をどう指導するかもテーマにしている。基本的に、UN(United Nations)やニート(Not in Education、Employment、or Training)などの欧米圏で発生し、日本でも使われている略語は、キーワードとして定着するよう指導している。テストでも英単語の回答を求めることがある。同時にフリーターなどの和

製英語は、きちんと指摘するよう心掛けている。一時期、社会の授業を英語でやってみようか、と考えたこともあったが、今は、そんなことはするべきではないと思い直している。それは、英語教育の小学校への導入が契機となった。英語教育を否定するものではないが、まずは日本語である。日本企業での入社式で、日本人社長の祝辞が英語で行われたという報道に接すると、失望感を禁じ得ない。日本語力が低下していると実感せざるをえない状況下、日本の公教育における英語教育の在り方を問い直したいのだが、自分のやれることは、日本人としての母国語への愛情と信頼を基盤とした、英語使用であると思っている。五ヶ瀬中等教育学校時代には、親密にしていたALTと一緒に、現代社会の授業を実施したこともある。

テストに戻る。テスト返却時の「やり直し」の指導もポイントである。正解のプリントを見て、解答を写すだけの生徒達を見るにつけ、「今日の学びの現実」を嘆きたくなる。問題を読まずに正解を書き写すことに、何の意味があるのか。特に選択肢の記号の「ア」「イ」「ウ」を書き写して、何になるのかを生徒に問いかける。同一問題を次のテストで出題し、同じ過ちを繰り返さない準備をすることは、人間力を高めることにもつながると伝えている。たかが試験、されど試験である。

## 5 本県・本校の高校卒業者の 動向と高校教育の使命、 キャリア教育

高校教育の重要な使命の一つが、生徒の進路保障である。本校の定員は、1学科40人が5クラスの200人。ここ数年のおおまかな実績は進学6割(=120人中4年制大学・短期大学各20人、専門学校80人)、就職4割(=80人中県内6割、県外4割)である。農業高校でありな

がら、卒業後すぐに就農する生徒はいない。このことを伝えると、進学先や就職先のリクレーターとして来校される多くの方々が驚かれる。しかし、我が国の急速な産業構造の高度化は、農業県宮崎にも進展しているのは当然のことである。日本全国で、高卒新規就農者は、限りなく0名に近いのが実態であると認識している。農業高校の特色としては、就職よりも進学面がわかりやすい。4年制大学の農学部への進学が毎年10数名。専門学校に分類される県立農業大学校への進学が、10名近い。

さて、就職について、近年本県の課題としてあげられることに、離職率の高さと県外流出の割合の高さがある。前者については、高卒就職者3年以内の離職率が全国で40%、本県はプラス10ポイント。つまり2人に1人が3年以内に高卒後新規採用された職を離職していることになる。県外流出については、以下に新聞記事を示す。見出しは「高卒県内就職率1ポイント増 55.8%全国最下位脱出 今春卒業」 本文-文部科学省は8月3日、本年度の学校基本統計調査(速報値)を発表した。今春卒業した本県高校生の県内就職率は55.8%と、昨春から1.0ポイント改善し、都道府県別で46位と3年ぶりに全国最下位を脱した。ただ、高卒で就職する人の半数近くが県外に流れている現状は変わらず、県は「若者の県内就職を促す取り組みを今後も地道に続けていく必要がある」としている。-中略-調査によると、本県の今春高校卒業者は1万329人。就職したのは3031人(前年比62人減)、うち県内は1691人(同4人減)。本県の高卒者全体のうち就職者の占める割合は29.3%(前年比0.2ポイント増)で、都道府県別では、7番目の高さ。大学・短大進学者は4644人だった。本県高卒者の県内就職率は、2015年の54.0%、16年54.8%と2年連続で全国

ワーストに。県や県教委は危機感を強め、15年度から、県内の企業見学や説明会に高校1、2年生から参加させるなどしてきた。「県内企業を理解してもらうための事業を行ってきたことで、一定の成果が表れた」と四本孝・県教育長。県は19年度までに、65%に引き上げる目標を掲げるが、全国的な労働力不足で県外企業との人材獲得競争は激化しており「かなり高いハードル」(教育関係者)との声も。県雇用労働政策課の主幹は「高校生や保護者に対し、宮崎で働き、暮らす魅力をしっかり伝えていく必要がある」と話している。(宮崎日日新聞 平成29年8月4日付)

就職指導をする際においても、ミクロの視点(生徒の適性・保護者の希望等)とマクロの視点(社会の雇用動向)から複眼的に進路指導を理解し、推進することが肝要である。そもそも、ミクロとマクロは経済学を学ぶ際の視点としてよく知られているが、社会科はもちろん、進路指導の場面でも有効な視点である。そのような意味でも、新聞は欠くべからざる媒体である。この記事については、最近の出来事⑤に収録し、時事問題で出題し、授業で取り上げた。

ところで、この記事から、問題提起したいことが、2点。一つは県内就職率が全都道府県最少という現実を「ワースト」と捉えるのはなぜなのか。逆さにみれば、県外就職率トップである。宮崎の高校生は、全国的に(現実には首都圏に)人気が高いのである。我が国の首都圏への一極集中というマクロな状況からすれば、ワーストという語句の響きは気になるところである。もう一つは、労働力不足。看護、介護、建設、土木、サービスなど、多くの業種に係る企業での人手不足、教育機関での定員割れは、今後改善される見通しは立たない。

人口減社会、少子高齢化社会による影響は深くなっていくことは、間違いないとされる。仕事は

あるのに、人がいないために業務が維持できず「人手不足倒産」する企業も増加していくのではないか。考えられる対応策は三つ。一つは外国人労働者の活用。これは現在進んでいるが、周知のとおりわが国では、諸外国に比べれば動きは鈍い。EU諸国同様、移民についても議論される機運が、今後高まるかどうか。二つ目がAIによる労働ロボットの導入。「へんなホテル」やペッパー君、自動運転車を皮切りに、今後想像を超える速さで活用されていくのではなからうか。三つ目は、定年年齢引き上げなどによる、高齢者(男女とも)の雇用推進。こういった社会の動向に、公民科教諭が、まず敏感であるべきことを自覚し、授業を含めた様々な場面で、進路にかかわる情報を提示し、生徒自らが情報を得る意欲を高め、そのことで自らの将来、日本社会の将来を予想し、それを支える一市民として生きる自覚を高めるよう意図しなければならない。現代社会の教材は、そのための適切な糸口となる。

例えば、本校の使用している教科書では、第Ⅱ部 現代社会のしくみと私たちの生き方 第1章 現代の社会生活と自己実現「3男女について考えよう」「4社会参画について考えよう」のテーマでは、社会参画の場での男女平等や、働くことの意義に関する知識を得たうえで、職業について考える時間となる。そこを範囲とした、1学期の期末試験を同封した。冬休み課題テストでは、教科書で取り上げられている消費者教育と求人票のページを範囲としている。在学中はもちろん、将来にわたって悪質商法の被害を受けないこと、就職活動の準備をねらいとし、求人票から情報を読み取る問題も出題している。進学する生徒も、将来必ず就職することを自覚し、求人票への興味・関心を高め、正確に読み取れるようになることがねらいである。また、12月実施の修学旅行について、教科担任として実施する、

独自のアンケート結果からも出題する。東京ステイの修学旅行を終えた後の質問の一つに「将来東京で暮らしたいか」がある。「暮らしたくない」が7割、「暮らしてみたい」が3割だが、修学旅行が東京ステイになったこの3年間では、「暮らしたくない」が増えている。このような取り組みを通して、「現代社会」を、キャリア教育のリーダー的科目であると認識するようになった。

本校では平成28年7月26日に「キャリア教育の視点に立った授業研究」をテーマに校内研修が実施されたのを受け、同年9月にキャリア教育の視点に立った研究授業を各教科・学科で実施した。終了後のアンケートでは、●キャリア教育の解釈がぼんやりしている。●キャリア教育と授業をどう結び付けるか、普通教科の場合は困難ではないか。●今後、キャリア教育をどのように発展させていくのか先が見えない。といった感想が出された。キャリア教育とは何か。「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」のこと。(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について-答申)

「子ども達が将来、社会の中で自分の役割を果たし、自分らしい生き方を実現するための力を身に付けさせるべく日々の教育活動を展開することこそがキャリア教育です。したがって、教育活動内にある、子どもたちのキャリア発達を促すのに有効な諸要素-学習内容や指導方法、学習習慣、体験的な活動-を意図的に相互につなげながら、学校の教育活動全体で進められるものです」(国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 平成28年3月発行パンフレット 語る 語らせる 語り合わせるで変えるキャリア教育 P2より抜粋)

私はキャリア教育実践のゴールイメージを次の

ように理解したい。①高校卒業後の進路選択と実現 ②生涯にわたる生きる力を育む。①についてはいわゆる出口指導で、その後の離職した卒業生への対応などについては、ほとんど制度化されていない。人手不足・県外流出解消のためにも、早期離職者についての対応を、高校ができる範囲で担えるシステムが構築されるとよいのではなかろうか。②は教師が見届けることは、ほぼ期待できない。学校教育が自らの生きる力にどのように有効だったかを自覚することは、本人しかできないことである。よしんば、有効だったことを自覚しないまま、日々を過ごす者も少なくないだろう。大村はま先生の名著『教えるということ』によれば、実は、そのことが「仏様の指」であり(『教えるということ』共文社P129～131)、教育の醍醐味でもあるのだが、教師の感じるキャリア教育の分りにくさや、ハードルの高さはそんなところからも生じているように思う。そうであれば、これまでの高校教育の役割の再確認という意味合いで、キャリア教育をシンプルに捉えてよいのではないかと思う。新たなことをしようと模索するよりも、これまで行ってきた授業をはじめとする指導の場面で、キャリア教育の視点を入れることで、教育実践が工夫・改善され、継続されるエネルギーが生じると感じる。そのように考えれば、キャリア教育実践の覚悟も決まるのではないだろうか。現代社会は、そういったモデルになりやすい科目だと感じている。

## 6

### 主権者教育を契機に社会科教育の意義を再考する

本校の昨年度の主権者教育の実績である。

- ① 4/23 (土) PTA総会で話す(5分) 選挙に行くこと、選挙違反をしないこと

- ② 5/26(木)主権者教育リーダー研修会 参院選模擬選挙の提案には、今回は応じず(7/5の宮日の報道によれば、7月9日までに県内19学校が実施=延岡学園など私立高校も含む。県立では本庄、西都商、宮崎工業など)
- ③ 6/14(火)青木宮崎産経大准教授による講座「難しく考えない選挙」
- ④ 6/22(水)3学年PTA集会 選挙啓発チラシと「私たちが拓く日本の未来」配布。15分間選挙の話。内容は、選挙権年齢引き下げの経緯、期日前投票の利用、インターネットの使用に注意
- ⑤ 6/24(金)3B南波君が、読売新聞西田記者の取材を進路室にて30分程度受ける。川末同席
- ⑥ 6/27(月)職員朝礼で期日前投票への配慮と「選挙活動は有権者のみ」の確認
- ⑦ 7/1(金)全校集会(容儀指導の前)で、⑥と同様の話をする
- ⑧ 7/4(月)職員朝礼で、期日前投票は今週中。1限 選択政治経済(9名)授業で参院選のしぐみを説明
- ⑨ 7/5(火)1限 統一LHR(3年)体育館で期日前投票のすすめ
- ⑩ 7/7(木)校長が職員朝礼で「今一度、有権者には選挙にいくよう伝えてほしい」。1限目3D 国語の自習監督で、川末が選挙の話を5分。「期日前投票あと3日と当日の中で投票しよう。参院選のしぐみ」
- ⑪ 10/6(木)県議会事務局に「こんにちは!県議会です(県議会議員講座)」につ

いて問い合わせ。3月定例議会関係で、2月下旬の実施は不透明

- ⑫ 11/11(金) 職員朝礼で、13日投票の国富町長選挙への投票機会確保のための部活動の時間的配慮等をお願いする
- ⑬ 11/15(火) LHR(3学年集会)で、実施済みの国富町長選挙、都城市議会補欠選挙と今後実施される高鍋町長選挙を話題にする。低投票率と卒業後の住民票と選挙について言及
- ⑭ 12/20(火)(本年度第2回)主権者教育リーダー研修会
- ⑮ 1/30(月) 選挙啓発事業「Voter's Cafe」(県選管事業)参加。3B南波君(引率 岩切先生)
- ⑯ 1/31(火) 10:15～11:10  
3年生対象に宮崎市選挙管理委員会より3名みえて講座
- ⑰ 2/22(水) 14:00～15:00  
教職員研修(大会議室) 講師 宮崎産業経営大学 徳地慎二教授
- ⑱ 「私たちが拓く日本の未来」を使用した授業を、1年生は地理(学年末テスト終了後)、2年生は現代社会(2学期末試験終了後)で実施(各クラス1～2時間)
- ⑲ 2年生現代社会の3学期の授業で、第2章 現代の民主政治と民主社会の倫理 第2節 日本の政治機構と政治参加 「7政党政治のしくみとマスメディア～選挙に行こう」(教科書P92～99)を実施。学年末試験の範囲とする。大問のテーマは、

#### 大問1 課題テストの復習問題

#### 大問2 日本政治の変遷と課題

#### 大問3 選挙制度とその課題について

#### 大問4 「政党政治のしくみとマスメディア」 「選挙に行こう」について

公民科としては、授業で政治を取り上げるチャンスである。ただ、目標は投票率をあげることで良いのだろうが、目的は何か。政治的関心を持つという、市民的資質を培うことであろう。となれば、これまでの実践でも政治や選挙制度に関しての授業はなされていた。生徒は、小・中学校の社会科でも学習している。20歳から18歳に引き下げられたことで、確かに誕生日を迎えた現役の高校3年生が有権者になるのだが、そのことで、高校の教育活動の中で何がなされるべきなのだろうか。それが、模擬投票であるという考えには、私は容易に同意することができなかった。

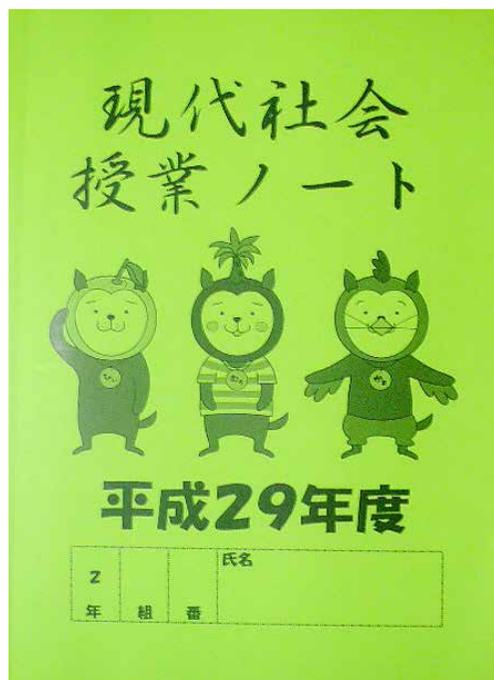
投票に行くか行かないか、誰に投票するのかの判断をする力を高めるための学習は、これまでもなされてきている。政治的無関心や各種選挙での投票率の低下は、高校教育の無策にあるわけではない。ただ、主権者としての意識を自覚するチャンスであることは間違いない。保護者とともに投票に行くことを理想イメージとし、PTA総会や学年PTAでは、保護者へのメッセージを伝えた。投票率の低下は「大人の問題」である。なぜ、大人が選挙に行かないのか。主権者教育リーダー研修会では、他校の出席者から、これまで一度も選挙に行ったことがないという職員が、初めて選挙に行ったことの契機が、校内での主権者教育であったという話も耳にした。主権者教育は、むしろ教師を含めた、大人になされるべきであろう。

## 7 終わりに～幸せな教師修行～

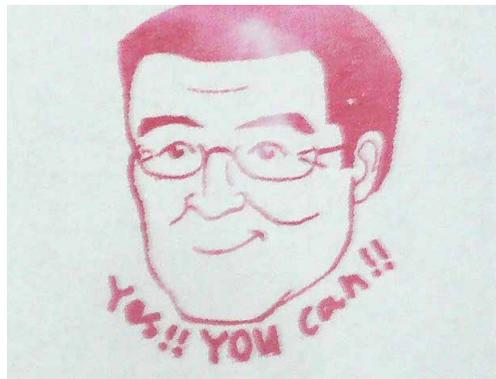
市民的資質を培うための社会科教育としての実践がどれだけ成果を上げているのか。「仏様の指」を尺度にすれば、成果は図ることができない。これが、教師の逃げ道になるとは思わない。教育活動は、生徒の幸せを実現させることを目的として実践されなければならない。そのために、一人ひとりの生徒を理解することは重要であるが、簡単ではない。

まず、顔と名前を一致させること。必修授業のない3年生の学年主任として、生徒の顔と名前を忘れずに一致させることは基本であると思うが、これが正直難しい。朝の読書の時間に曜日を決めて、5クラスを輪番で訪れることにしている。10冊前後の本を袋に入れて持参していた時期もある。本を持ってきていない生徒に取りに来

■ 写真4



■ 写真5



るよう呼びかけ、手渡す。取りに来ない生徒には、こちらが机の上に置く。「川末文庫」と名付けていた。遅刻してくる生徒、本を持ってこない生徒との会話の契機にもなる。2年生は全クラス授業に行くのだが、200人近い生徒の顔と名前を一致させるには、週2時間の授業は、私には十分ではない。年度当初は、クラス写真を持参し、できるだけ指名しながら授業をする。夏休み中に忘れてしまいそうなので、折を見ては生徒写真を見るようにしている。

昨年度の2学期の終業式の日には学年主任として、3学年通信を、練習初めの1月6日には野球部部長として野球部通信を発行した。どちらも「少年老い易く学成り難し」という題名にした。生徒の将来にかかわる教職員の使命を考えると、「今」を精一杯生きることの大事さを繰り返し伝えていきたいという思いからである。題材は、生徒との個人面談からの情報を生かすこともある。面談をすることで、「指導より理解を」という言葉が腑に落ちる。通学方法、通学時間を確認するだけでも、その生徒の頑張りを認める気持ちになってくるし、遅刻に対する指導の仕方も変わることを実感できる。

学年主任として学年通信を、教務主任や生徒指導主任として全校生徒に思いを込めたタイト

ルを付けた通信を作成されている先生方は少ないだろう。保護者にも読んでもらうことを意識した「通信」には、生徒の心に火をつけるという、最上の教育効果が期待できると思う。私も3年前に担任をした際に、「上機嫌」と名付けた学級通信を発行し続けた。3学期の終業式に最終号No.48(写真6)を発行した。恒例にしていた冒頭の「今日の一言」を、「あなたには恩師がいますか。師匠がいる人生はきっと楽しいよ」にし、私の経験を踏まえた「恩師論」を展開した。日々、ネタを考えるのは、時に苦痛でもあるが、基本的に楽しい。始業式や終業式での学校長や各部主任等のリーダーが語られる内容にもアンテナを立てて、メモをしながら聴くこともあった。自分の思いと共通する話をされれば嬉しくもあり、良好な人間関係の構築にもつながる。集会もキャリア教育のチャンスだと捉えるようになると、自らの集会への参加意識も変化していく。そのような意識が共有されれば、生徒に、より良質なメッセージを伝える機会が増え、集会の時の話を全職員と生徒が共有できるなどといった学校文化が醸成されることにもなるだろう。

生徒の幸せは教師の幸せである。人間は、一人で幸せになることはできない。教師は幸せな市民、社会を育成するという、崇高な使命を与えられている幸せな職業であることを日々自覚し、飽きずに教師修行を続けていきたい。

## 参考文献等

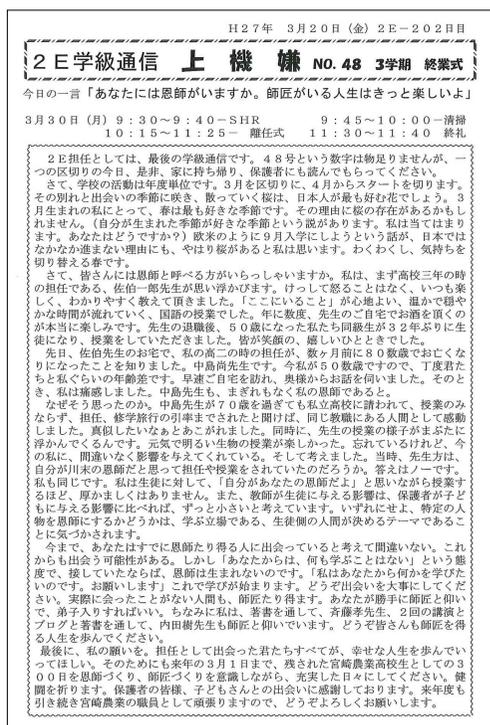
- ① 平成29年度 現代社会授業ノート
- ② 平成29年度 1学期期末試験 現代社会 (問題と解答)
- ③ 学級通信「上機嫌 No.48」(平成26年度 2年E級 最終号)
- ④ 「時事クイズ」誕生の契機となった講座「社会科学授業成功の極意」佐藤正寿先生(佐藤

先生は、当時岩手県奥州市立広瀬小学校副校長 平成25年8月24日 佐土原町にて実施された、教師力アップセミナーで)

## ⑤ 「上機嫌」の重要性を教えてください師匠

- 内田樹先生(平成21年8月6日 九州高等学校高校公民科研究協議会第12回研究大会講演「脱=市場原理の教育」)
- 斎藤孝先生(『上機嫌の作法』その他多数の著書)

## ■ 写真6



# 中学生の生活習慣の 確立を目指した健康教育の実践



岡山県岡山市立西大寺中学校 代表  
西大寺中学校 学校長

かじわら さとし  
**梶原 敏**

1958年生まれ。1971年北九州大学外国語学部卒業。1971年岡山市立岡輝中学校勤務。1978年岡山市立上道中学校勤務。1983年岡山大学附属中学校勤務。1998年バンコク日本人学校勤務。2001年岡山大学附属中学校勤務。2003年岡山市立竜操中学校勤務。2006年岡山市教育委員会学事課勤務。2009年岡山市立岡輝中学校勤務。2013年岡山市立西大寺中学校着任。現在に至る。連絡は、岡山市東区西大寺上一丁目20-60の同校まで。

第66回 読売教育賞から  
【健康・体力づくり】



道徳で食べ物への感謝について指導する  
光森栄養教諭(右)＝岡山市立西大寺中

大切に飼っていたヤギをおいし  
いと泣きながら食べた「私」の気持ち  
はどうだっただろう」。担任の問  
いかけに3年生の生徒から、「大事  
な命をいただいているという気持  
ち」と、声が上がった。

食べ物への感謝の気持ちを養う道  
徳の授業的一幕。自ら健康管理がで  
きる生徒を育成しようと、2011  
年から、様々な科目と健康や食を結  
びつけてきた。社会では古代の食文

## 健康管理できる生徒育成

健康・体力づくり 岡山市立西大寺中学校

化、理科では臓器や器官の仕組みな  
ど。授業計画を立てた光森麻里・栄  
養教諭は「色々な分野で健康や食に  
触れることで、多角的に学べる」と  
話す。

毎年10月には健康測定や生活習慣  
調査も実施。専門機器で貧血度や骨  
密度まで調べ、運動や睡眠時間、食  
事の内容まで生徒自身が把握するこ  
とで、「自分のこと」として健康を  
考えるようになるという。

同校の16年の調査では、朝食をと  
らない2、3年生の割合が6・3%  
で、前年より4・8%減少。授業中  
の居眠りが減り、集中力の高まりが  
感じられるという。一方、健康な生  
徒は生活習慣病への危機感が乏しい  
傾向も。光森栄養教諭は「学んだこ  
とを、どう継続させるかが課題」と  
話す。  
(坂下結子)

田中喜代次・筑波大学教授「5年  
間にわたり運動、食、睡眠について  
戦略的行動プランに取り組んだ。健  
康教育と良好な生活習慣の確立を通  
して、生徒の健康リテラシーを向上  
させた点は高く評価できる」

### 【最優秀賞選評】

田近裕子 津田塾大学教授

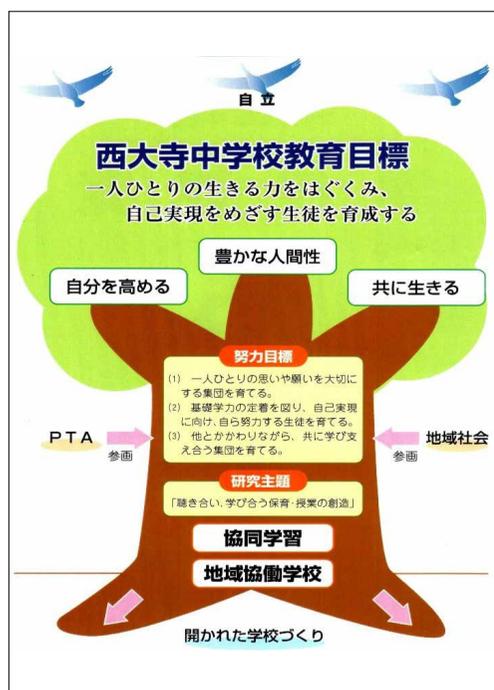
「5年間にわたり運動、食、睡眠につ  
いて戦略的行動プランに取り組ん  
だ。健康教育と良好な生活習慣の確  
立を通して、生徒の健康リテラシーを  
向上させた点は高く評価できる」

## 岡山市立西大寺中学校の概要

本校は、昭和22年4月に西大寺町立第一西大寺中学校として開校し、昭和44年、岡山・西大寺両市の合併により現在の岡山市立西大寺中学校と改称した。

西大寺中学校校区は、岡山市の東部に位置し東部地区の中心地区となっている。学区は4小学校区よりなり、それぞれの学区の特色としては、西大寺南小・西大寺小学区は旧西大寺を中心にした商業・工業地区、雄神・豊小学区は吉井川をはさむ南北に位置し、農村地帯であり自然環境に恵まれている。

「研学・協和・健康」が開学以来の校訓であり、学校教育目標は、「一人ひとりの生きる力をはぐくみ、自己実現をめざす生徒を育成する」で、具体的目標に、「自分を高める生徒」、「豊かな人間性を備えた生徒」、「共に生きる生徒」の育成を掲げている。



## 平成29年度学校経営

### 基本方針【具体的な学校経営目標&計画】

1. 学びの共同体(協同学習)の理念である「すべての生徒の学びと育ちを保証する」、「子どもも教師も学び合う」「教室を開く」、「教室を共生できる場所にする」「親や地域の信頼を得て連帯する」等の考え方を、全ての教育活動に具現化させる。
2. 全教科・全教職員による「協同学習」の実践を通して、「授業放棄ゼロの学校」、「全員が安心して登校できる学校」、「学力が向上する学校」をめざす。
3. 支え合う集団づくりを基盤にした生徒の「自治能力」を育成する。《人権教育の充実》
4. 特別支援教育の充実を図る。
5. 学習の「基礎・基本」を身につけさせる。
6. 環境美化を充実させる。
7. 保・幼・小・中連携による0歳～15歳までの責任ある教育を実践する。(12校園の連携)
8. 保護者や地域のニーズに応える学校運営を行う。《開かれた学校づくり》
9. 保護者や地域への広報活動を充実させる。

## 研究要旨

ポジティブな生活習慣を確立させるための健康教育と位置づけ、有効で戦略的なアクションプランを構築するために、本校の中学生を対象として、経年的に肥満関連指標や脈波伝播速度、体組成等を測定し、小児期のメタボリックシンドローム発症のリスク要因である運動習慣、食行動、睡眠習慣に関する基本的な生活習慣指導を行い、健康関連指標や生活様式の経年変化、体力・運動能力との関連性について検討した。成長期の生徒にとって脈波伝播速度や貧血などの測定結果が予防的あるいは可逆的に作用

し、将来の生活習慣病のリスクを軽減させる効果のあることを学修し、健康の維持増進に関するモチベーションが高揚し、適切な生活習慣が確立した。また、成長期の身体活動が筋量の増加や体力・運動能力につながり、睡眠や食習慣の改善が血圧や体脂肪量の減少効果、および肥満改善に有効であり、将来の健康的な生活習慣を念頭においた健康づくりに重要な視点であることを理解し、生活習慣の見直しや改善につなげることができた。

## 1 研究の背景

近年、生活習慣病の増加が問題となり、成人期になると発症しやすい「高血圧症」、「糖尿病」、「脂質異常症」といった生活習慣病の治療は、単独でも難渋する疾患であるが、これらの危険因子が集積すると動脈硬化が急速に進展し、最終段階として心筋梗塞や脳梗塞などの重篤な動脈硬化性疾患を発症することは周知の事実である。このような病態の発症要因に内臓脂肪の蓄積が指摘され、予防医学的観点から内臓脂肪量を減らすことを目指した生活習慣病対策をメタボリックシンドローム(MS)として警鐘されている。

小児の健康問題に関する研究では、運動不足や過食による肥満と歪んだ体型認識による痩身志向の二極化、朝食欠食や睡眠不足など悪しき生活習慣に関する報告も数多く、生活習慣病の発症起源が小児期にあることから、2005年より小児メタボリックシンドローム(小児MS)の病態や診断基準の確立を目指したコホート研究が全国規模で実施された。しかし、これら臨床的エビデンスに基づいた大規模研究が学校現場に導入されることはわが国では皆無であり、今後の児童生徒を対象とした生活習慣への効果的な

介入の方向性を示唆する健康教育の指針となるものである。

一方、学校保健領域における健康教育では、成長期の児童生徒の健康状態を把握し、生活習慣を改善させることだけではなく、将来的な健康を見据えた健全なライフスタイルを小児期から確立させるための知識を提供し、悪しき行動様式の変容を期して実践されるべきであると明記されている。しかし、生徒の健康意識の高揚や生活習慣の改善に健康教育が即座にその効果を発揮するものではない。そこで、生徒が生活習慣を見直すきっかけとして、自らの身体情報を認識し、それらを基盤として将来の健康を意識させることは有効な手法になると考えられた。そこで、その方策として、現行の健診項目に加え、小児MS健診項目である腹囲(臍囲)や血圧の測定、体脂肪量や筋量、骨量、貧血度などの体組成測定、貧血度や動脈硬化の進展を簡便に非侵襲的な手法で測定できる脈波伝播速度(Pulse wave velocity :PWV)など医療機関で活用されている器機を用いた測定を試みた。腹囲や体脂肪量測定は、内臓脂肪型肥満の一次スクリーニングの有効な指標であり、皮下脂肪型肥満との判別が可能で、肥満の改善や不要な痩せ願望による体型認識のズレを是正させることが期待できる。血圧や骨量、貧血度は、成長期に重要な食習慣や運動習慣を反映し、筋量や体脂肪量は体力・運動能力との関連性が強い。PWVは、骨格や筋量、血圧、内分泌などの血管壁性状因子の影響を受けるが、将来の動脈硬化性疾患の発症要因となる成長に伴う身体機能の変化が客観的に評価できる指標である。また、これらの健康関連指標は、成人期までトラッキングするため、将来の生活習慣病予防や健康生活を構築する礎を担う指標でもある。

## 2 研究目的

加齢に伴い動脈のコンプライアンスが低下し、弾性を失って硬くなるのは、誰にでも見られる老化現象である。動脈硬化はこのような機能的変化に加えて、アテローム形成などの種々な病理学的変化を伴う病的過程である。老化現象と病的な動脈硬化との区別は必ずしも容易ではないが、集団健診における動脈硬化のスクリーニングでは非侵襲的で簡便な手法により測定できることが望ましい。脈波伝播速度(PWV)は、波動が動脈壁を伝播していく速さを意味し、動脈壁の弾性と関連し、硬くなるほどPWVは高値を示す。本校では2011年から成長期の集団健診における動脈硬化性疾患の発症や進展の可能性を判断する指標としてPWVの有用性を確認しており、肥満や生活習慣病の改善予防とした健康教育を通して、その介入効果を継続的に検証してきた。具体的には、小児期のメタボリックシンドローム(小児MS)発症のリスク要因である運動習慣、食習慣、睡眠習慣に関する基本的な生活習慣に着目し、肥満関連指標や脈波伝播速度、体組成などを測定し、数値化された検査結果を通して、体型や生活習慣の経年変化を再確認させ、健康度や体力の自己評価を行い、将来的な健康の維持増進を目指した生活習慣の確立に必要な知識を学修させる健康学的意義は大きい。そこで、体力・健康・能力づくりを基盤とした「健康づくり教育」の一環として、健康関連指標の測定や食育指導による健康教育プランを実践し、成長期に獲得すべき適切な生活習慣を確立させることを目的とした本校の健康教育を報告する。

## 3 主題設定の理由

成長期の中学生自身の生活習慣を見直す機会を与え、より良い生活習慣や食習慣を身につけさせることは、体力の維持増進とともに学力の向上につながることは明らかである。しかし、これまでの健康教育では悪しき生活習慣を改善するには解決すべき課題も多く、食育指導の成果がすぐに表れにくい側面もあり、有効な指導を行うことに難渋していた。そこで、身体測定できる医療機器を用いて生徒の健康関連指標を測定する機会を得て、測定された身体情報を自己評価することで、ポジティブな生活習慣を確立するための健康教育と位置づけた指導を展開した。

研究仮説として、成長期の経年的な測定結果や生活様式が、健全な発育発達や体力・運動能力へ影響することを理解することで、運動習慣、食習慣、睡眠習慣などの生活習慣を見直し、改善しようとする健康意識が定着し、充実した学校生活を過ごすための健康指標になる、と設定した。

## 4 研究方法

本校に在籍する生徒全員を対象に、2011年から2016年の10月に健康教育の一環として実施した。測定項目は、身長、体重、腹囲を測定し、肥満度は年齢別、男女別標準体重法により算出した。また、各種測定機器を用い、体脂肪率、血圧、脈波伝播速度、血管狭窄度、貧血度、骨密度の測定を行った。生活習慣に関する調査は、「児童生徒の健康状態サーベイランス調査」を基に作成した記名式の質問紙を用いた。質問項目は食習慣や睡眠習慣、運動習慣等の生活習慣(32項目)、集中力や疲労感、不定

愁訴等の自覚症状(16項目)より構成し、測定時に配布、回収した。また、健康関連指標への興味関心や健康意識や生活習慣の改善などに関する健康意識の変化については縦断的検討を行った。結果は、個人データの解析とともに学年別、男女別に健康関連指標と健康意識との関連性を入学年度からの測定結果と比較検討した。

### (測定・調査)

身体計測値として身長、体重、腹囲を測定した。体脂肪率はインピメーターⅢを用いて両手甲部間を測定した。PWV測定は脈波伝播速度測定器を用い、血圧は左上腕部より測定した。体組成はインピーダンス法により測定した。

生活習慣の具体的な質問内容は、睡眠に関する質問を4項目、食行動に関する質問8項目、運動やダイエットに関する質問4項目、帰宅後の塾や習い事、家庭での過ごし方に関する質問6項目とともに、2年生と3年生には前年度からの日常生活の改善や健康意識の変化に関する質問5項目より構成した。体力・運動能力は文部科学省制定の新スポーツテストの測定結果を用いた。

生活習慣への介入方法としては、学級や学年単位で生活習慣病の予防や良好な生活習慣の確立に関する健康教育を行った。また、個々の生徒には、健診結果と健康アドバイスを記載した用紙を返却し、3年間の成長過程や生活習慣の改善傾向が比較、考察できるようファイルに保存できるよう指導した。

### (健康教育の概要および内容)

- ① 身体計測とともに体組成や健康関連指標を測定する。
- ② 生活習慣調査結果や各人の学年毎の測定結果を自己評価させる。
- ③ 適切な生活習慣や食習慣に関する指導を学

級・学年単位で実施する。

- ④ 食育推進委員会の活性化を図り、保護者へ食習慣や生活習慣改善の啓発活動を行う。
- ⑤ ①～④の結果から、体型変化や生活習慣の行動変容の経年的変化を精査し、生活習慣の改善や健康意識の高揚を目指した一連の健康教育を検証する。

健康教育の指導内容として、健康づくりの観点からは、適切な生活習慣に関する知識の定着を目指して生活習慣病の病態や予防に関する資料による指導を実施する。

体力づくりの観点からは、日常的な運動量を確保するために、運動部への積極的参加や徒歩通学を推奨する。食行動の観点では、朝食摂取を重視し、摂取食品の組み合わせや摂食リズムの固定化の重要性を指導し、日常的な行動変容を学年別、男女別に健康関連指標と比較検討する。

### (食育指導の概要)

- ① 成長期に必要な栄養素に関する知識の習得。
- ② 食事マナーの体得、家族との絆、食文化の継承、感謝の念などの学習指導。
- ③ 健全な食生活の実践を通して心身の成長と豊かな人間性の育成。
- ④ 高エネルギー食や脂肪摂取量の増加を見直し、低脂肪で食物繊維の多い和食の推進。
- ⑤ 食への方向性を身体づくりと疾病予防、体調管理の観点から他教科と関連しながら指導。
- ⑥ 食の安全、安心など身近な事柄に向けた食育活動の内容の充実と強化。

健全な食生活を確立させるために食育は不可欠で、乳幼児期から思春期に至るまで、年齢に応じた継続的な対応が必要であると考えられている。平成17年に「食育基本法」が公布され、

## 動脈硬化度の測定



翌年に文部科学省より「早寝早起き朝ごはん」が提唱された。平成19年には、給食の目的を「栄養改善」から食の大切さや文化、栄養のバランスなどを学ぶ「食育」が導入された。また、平成23年には、この事業をより発展させる観点から、第二次食育推進基本計画が提示された。これら一連の制度改革では、子ども達が食について考え、よりよい生活リズムをつくり、生活習慣病の予防に繋げていく能力が求められている。家庭での楽しい食卓は、心の栄養となり、精神的に安定した生活が活力となって、充実した楽しい学校生活が過ごせるのではないだろうか。

## (分析方法)

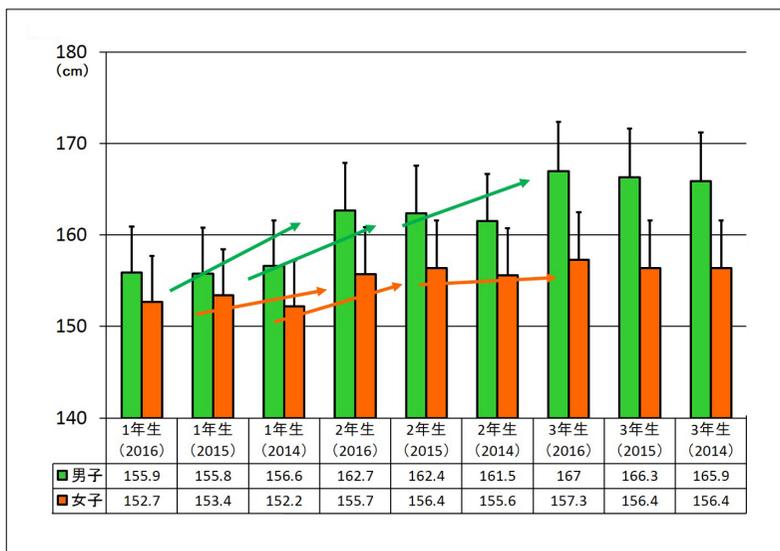
身体指標は、年度ごとに対象者が異なるため、入学年度ごとに体型の変化を検証した。肥満度は標準体重法を用いて算出した。生活習慣に関する質問紙調査の集計結果は、入学年度ごとに単純集計し、入学年度ごとの比較と、3年間の縦断的検証を行った。また、2年生と3年生には、前年度から生活習慣が「改善した」と回答した群(改善群)と「変化なし」と回答した群(非改善群)の2群に分類し、測定結果の経年変化と肥満関連指標や健康関連指標等と比較検討した。

尚、倫理面への配慮として、保護者および本人の同意を得て、特定情報の秘守義務に留意し、学校および地域の健康教育の一環として実施した。

## 5 結果と評価

### A. 研究成果I (2014年～2016年)

■ 図1 男女別学年別身長の年次比較

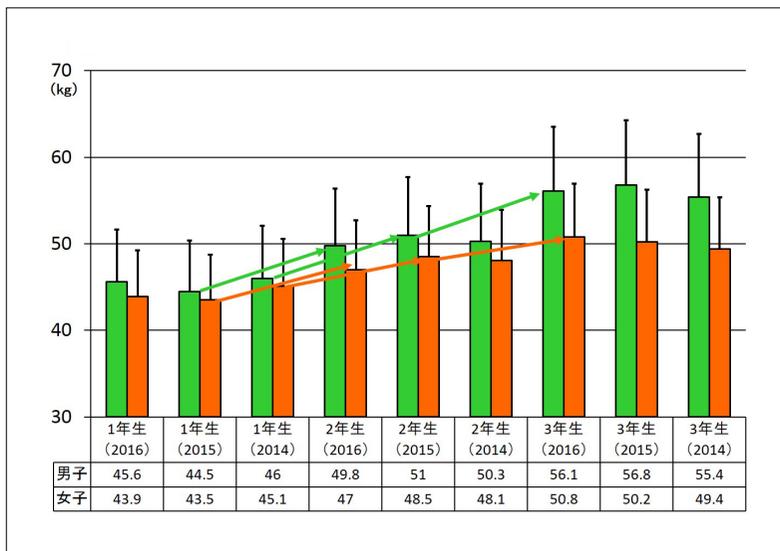


## ① 身体関連指標

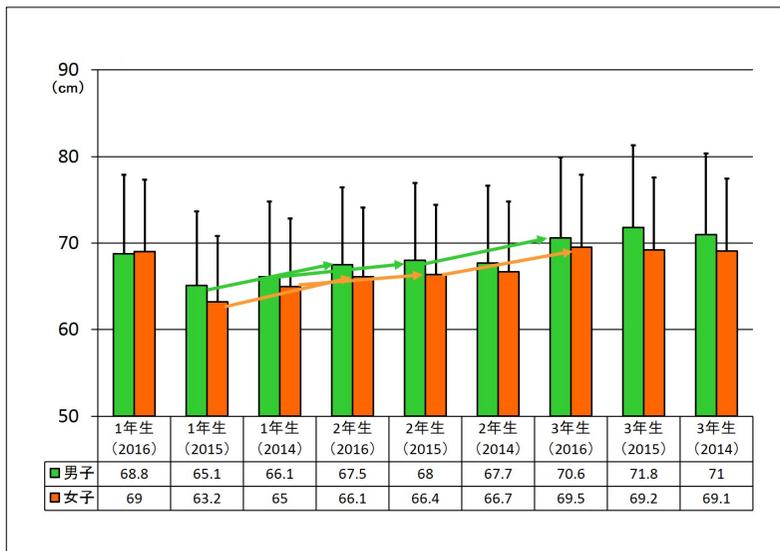
成長期の身長、体重は全国平均と比較し、有意な差は認めず、2014年度入学した生徒の成長度は、男子の3年間の平均増加量は、身長は $10.5 \pm 4.6$  cm、体重が $9.8 \pm 5.3$  kg増加し、女子はそれぞれ $4.6 \pm 3.4$  cm、 $6.5 \pm 5.1$  kgで

あった。しかし、腹囲の増加量は、男女とも4.5 cm増加し、身長との比較では、女子の腹囲は、二次性徴による体型の変化がみられた。(図1～図3)

■ 図2 男女別学年別体重の年次比較



■ 図3 男女別学年別腹囲の年次比較

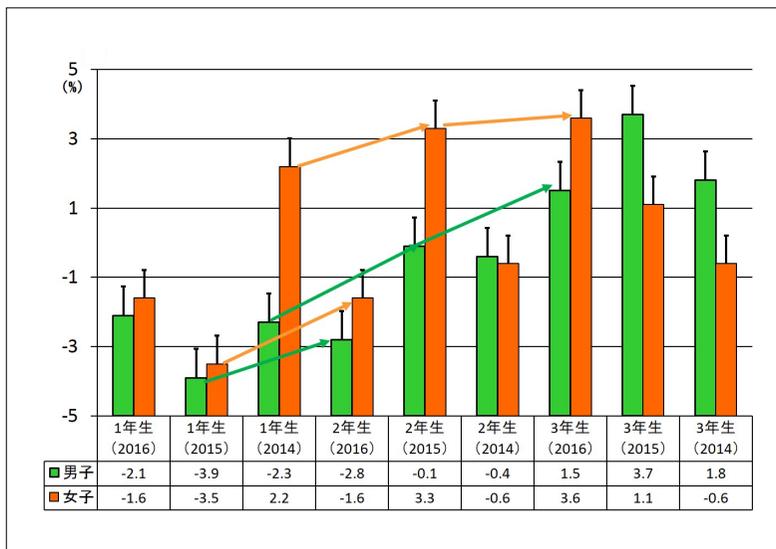


## ②肥満関連指標

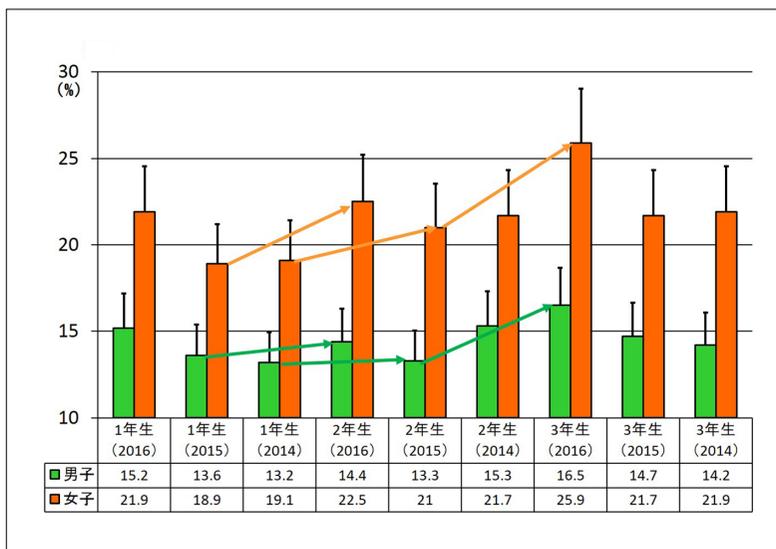
毎年、入学した男子生徒の多くが痩せ傾向にあり、体重（筋量）を増加させることが課題であった。2014年度入学した生徒の3年生時の肥満度は、男子は-2.3%から1.5%に増加し、痩せ体型から筋肉質体型になった生徒が多くみ

られた。女子は2.2%から3.6%と微増であった。一方、体脂肪率は、男子は13.2%から16.5%に増加していたが、女子は19.1%から25.9%と増加し、腹囲の増加率と比較すると下半身型肥満の生徒が増加したと推察できる。（図4、図5）

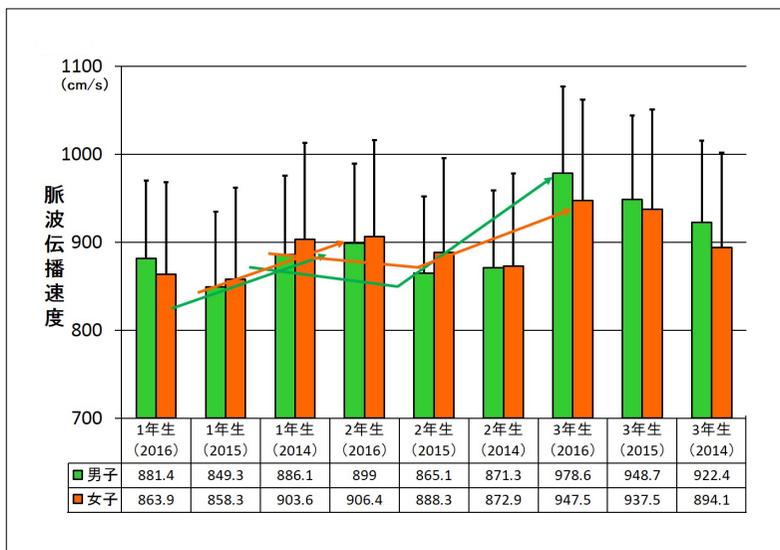
■ 図4 男女別学年別肥満度の年次比較



■ 図5 男女別学年別体脂肪率の年次比較



■ 図6 男女別学年別動脈硬化度の年次比較



### ③ 脈波伝播速度

脈波伝播速度は、年齢とともに高値を呈する傾向にあり、2年生から3年生になると、有意に上昇する傾向にあった。また、男女比較では、男子は女子より高値傾向にあり、肥満度や血圧、睡眠時間と有意に正相関していた。体型比較では、男女とも痩せ体型や肥満体型の生徒は、標準体型の生徒と比較し高値傾向にあり、高度肥満の生徒のPWV値は最も高値であった。将来の動脈硬化性疾患の指標であるPWV値は、思春期後半にその発症起源があるが、血圧や運動習慣など生活習慣との関連性がみられたが、成長期は血管組織も伸長変化することから、血管増殖に必要な栄養素の摂取や睡眠習慣、肥満が改善することで可逆的に改善することが推察できる。(図6)

### ④ 収縮期血圧

収縮期血圧は、脈波伝播速度と同様に、年齢とともに高値を呈する傾向にあり、特に3年生になると、有意に高値を示す生徒が男女とも増加し

た。痩せ傾向の生徒は低値、肥満傾向の生徒は高値を呈し、肥満度と正相関していた。肥満生徒は、日常的に過食や塩分の多い食品や間食の摂取が影響し、収縮期血圧の上昇に悪影響を与えたと推察する。また、収縮期血圧は睡眠習慣と関連性がみられ、受験期にあった3年生は慢性的な睡眠不足が悪影響していると推察する。

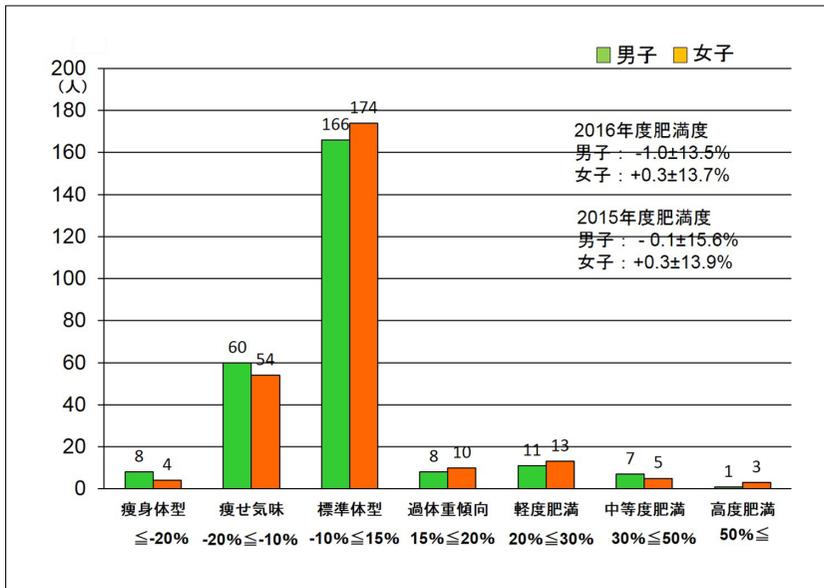
## B. 研究成果Ⅱ (2016年度の結果)

### ① 肥満関連指標

肥満度が20%以上の生徒は男子13.1%、女子9.6%で、前年度より肥満が改善された者は、男子4名、女子9名、新たに軽度肥満と判定された者は、男子6名、女子9名であった。一方、肥満度-20%以下の痩せ群は、男子4.1%、女子2.2%で、前年度より男子6名、女子13名が改善され、新たに痩せ群と判定された生徒は男女ともなかった。(図7)

腹囲80cm以上は男子11.0%、女子6.6%で、前年度より改善した生徒は、男子5名、女子3名で新たに80cm以上となったものは男子

■ 図7 男女別体型の分布



9名、女子5名であった。腹囲80cm以上で、肥満度20%以上は男子30名、女子15名であった。日常的な健康意識との比較では、女子は体重や体脂肪率の測定結果を意識し、男子では身長や体重の増加を意識する生徒が多かったが、学年が上がると少なくなった。

## ② 脈波伝播速度

PWVの経年変化は、2015年度は男女とも横這い傾向にあったが、2016年度は前年度より有意に高値を示した。過去の報告から、PWV1100cm/s以上を高値とした場合、2年生では、男子17名で、肥満群5名、血圧高値2名で、前年度より高値の者は3名であった。女子では11名で、痩せ群1名、肥満群1名、血圧高値2名で、前年度より高値の者は1名であった。3年生では、男子21名で、肥満群4名、血圧高値群9名、1年時より連続して高値の者は2名、2年時より高値の者は1名であった。女子では17名で、痩せ群1名、肥満群1名、血圧高値

群6名で、1年時より連続して高値の者は1名、2年時より高値の者は4名であった。(図8)

## ③ 血圧

収縮期血圧(SBP)125mmHg以上または拡張期血圧70mmHg以上の者は、男子31.0%、女子21.5%で、前年度より血圧が改善された者は男子16名、女子10名で、新たに血圧高値と判定された者は、男子37名、女子23名であった。血圧高値群は男女とも3年生に有意に多かった。血圧高値群で肥満度20%以上の者は、男子21名、女子12名であった。(図9)

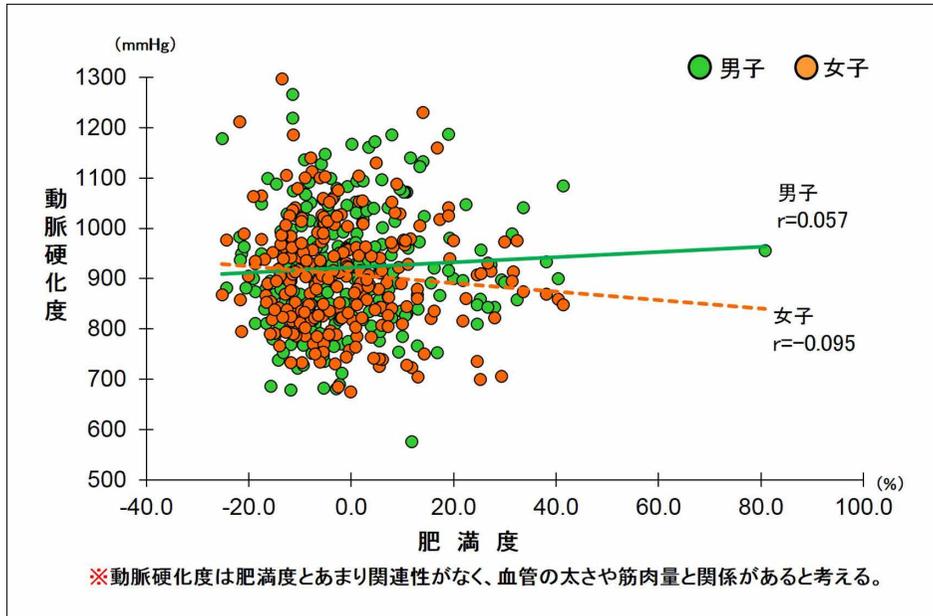
## ④ 貧血度

ヘモグロビン値は、女子の方が男子より低値を示していたが、悪性貧血を疑う生徒はいなかった。また、ヘモグロビン値と肥満度との関連性は認められず、低値傾向の生徒は、運動量や運動内容、女子では月経期間中、食事内容が影響し

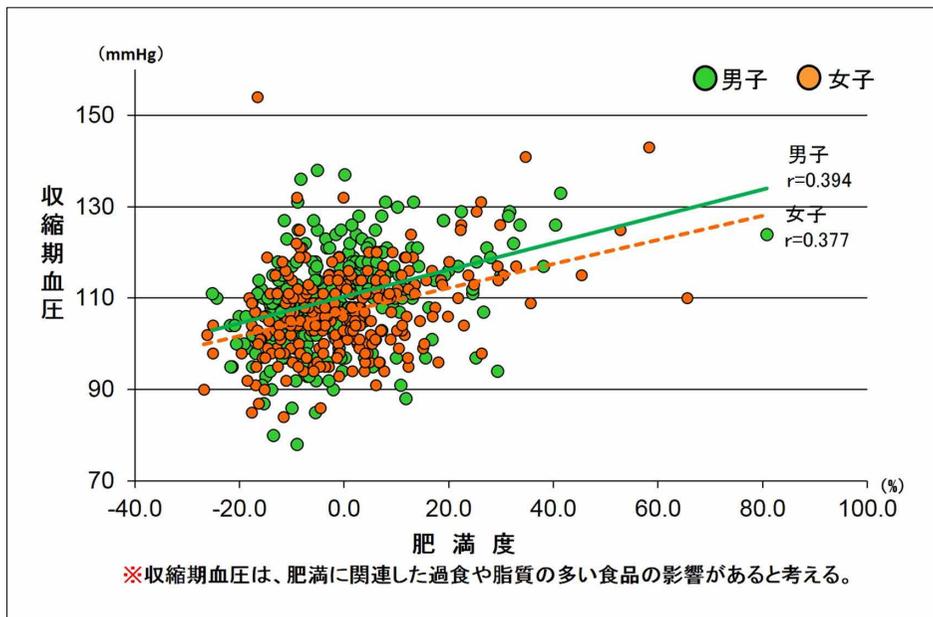
ていると考えられた。特に、女子の痩せ傾向の運動部員に低値傾向がみられ、スポーツ貧血を疑い、不適切な練習、食生活の不備、月経などが

影響していたと推察する。男子では、身長との急な伸長にともない筋肉が一時的に引き伸ばされ一時的に低値を呈する生徒も確認できた。(図10)

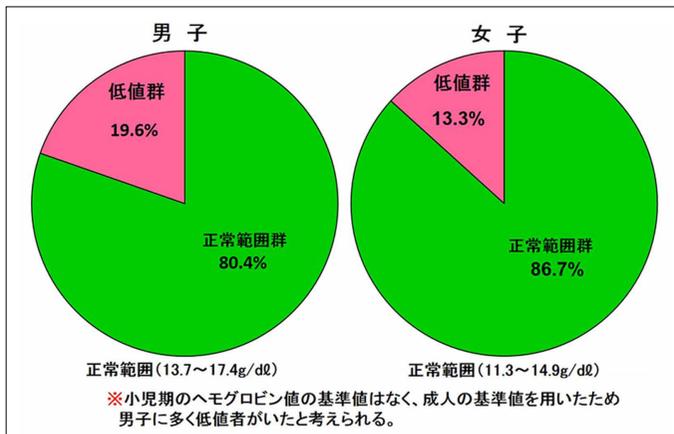
■ 図8 動脈硬化度と肥満度の関連性



■ 図9 収縮期血圧と肥満度との関連



■ 図10 ヘモグロビン量低値群の割合

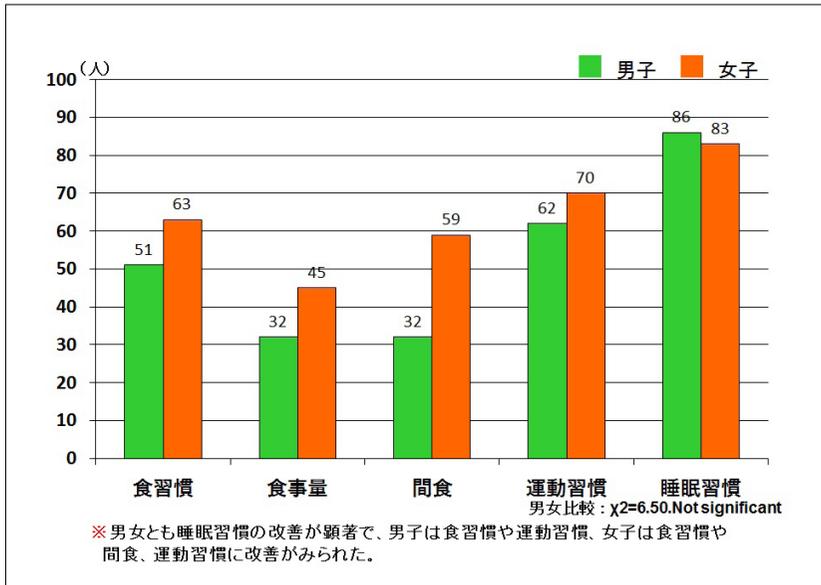


⑤ 生活習慣 (※年次比較は2年生・3年生のみ)

生活習慣の改善群は63.5%と前年度より増加し、改善した項目では睡眠習慣が最も多く、運動習慣、食習慣の順であった。PWV値の変化と生活習慣改善との比較では、改善群は非改

善群に比べ有意に低値であった。尚、今回の調査では、健康意識が高く、生活習慣が確立している生徒も多くみられたので、家族の健康に視点を向けて学習させた。(図11)

■ 図11 改善された生活習慣



1. 睡眠習慣

睡眠時間は、3年生は男女とも前年度より有意に減少し塾や学習時間が増加していた。2年生

ではゲームやメール睡眠問題の性別、学年別の比較では、男子では1年生に比して2年生、3年生と学年が進むにともない睡眠問題の「あり群」

が有意に多くなる傾向にあったが、女子では、有意な分布の偏りを認めなかった。睡眠問題の有無に及ぼす関連要因の検討では、有意なロジスティック回帰係数が認められた因子は、性、学校での眠気感、朝食摂取状況、始業前、昼休み、放課後の身体活動、通塾状況、携帯・スマホ利用時間、ゲーム利用時間、テレビ・ビデオ視聴時間・パソコン利用時間・健康度であった。その中でも、学校での眠気感、朝食摂取、始業前の身体活動、携帯・スマホ利用時間、健康度が強く関連している要因であった。また、性別、学年別に検討した結果では、男子に比して女子の方が睡眠問題を抱えている者が多いものの、関連要因は学年が進むにともない次第にその差が消失していく傾向にあった。

## 2. 運動習慣

運動時間は、男子は2年生が他学年より有意に多かった。女子は1年生が最も多く、学年が上がるにともない減少する傾向にあった。2年生、3年生の運動習慣の主な改善項目は、「部活動を頑張る」、「徒歩通学」、「休日に運動する」などであった。

体力・運動能力得点と日常的な運動時間の比

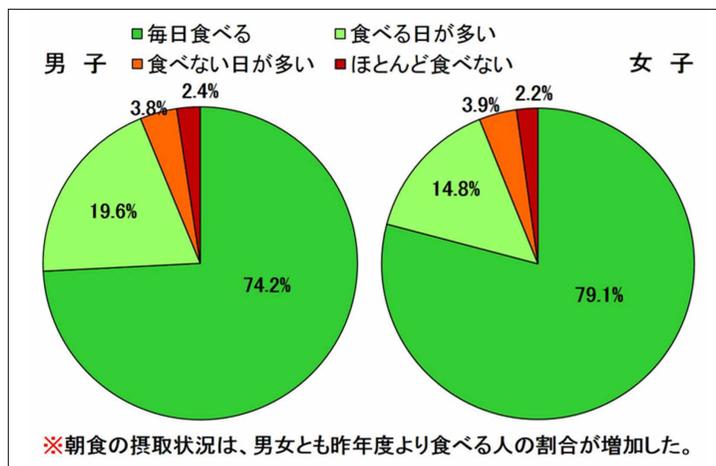
較では、女子は男子よりも少なく、3年生女子に顕著に見られた。体型と体力・運動能力との比較では、男子は正常群>痩せ群>肥満群、女子は正常群>肥満群>痩せ群であった。

運動習慣を阻害する要因は多面的であり、単純に身体的アプローチだけで行動変容させることは難しい。運動嫌いな生徒の多くは、なんらかの身体的不安や不定愁訴を有する者も多く、運動を開始、継続させるために、本人の主体的意思だけでなく問題とされる身体的条件や心理的要因の相互の関連性に留意が必要であろう。将来的には、運動習慣による身体の変化に合わせて心理的、社会的に活力ある日常生活が期待できる。

## 3. 食習慣

朝食欠食は、全体では6.3%で前年度より4.8%減少した。欠食理由は「時間がない」、「食欲がない」に大別された。食習慣の改善項目は、食事内容、間食、食事量の順でそれぞれの項目で前年度より改善傾向にあった。また、日常食と睡眠習慣の関連を検討したが、睡眠習慣が良くない者の多くはファストフードの摂取頻度が有意に高かった。(図12)

■ 図12 朝食摂取習慣の男女比較



日常的な摂取食品の男女別比較では、全体として、米飯や麺類などの炭水化物を摂取し、蛋白質は肉類と魚類を偏りなく摂取していたが、牛乳や大豆製品、海藻の摂取頻度は低かった。また、全体的にレトルト製品の使用頻度は低かったが、スナック菓子やジュース類の摂取習慣は「有る・ない」に分かれた。男女比較では、米飯、パン類、鶏卵、乳製品、味噌汁などに男女差はなかったが、麺類、肉類、魚類、揚げ物類、レトルト食品の摂取は男子の方が有意に多く、女子が有意に多かった摂取食品は緑黄色野菜や清涼飲料などの摂取頻度であった。体型と摂取食品の関連性では、痩身群は米飯や麺類など炭水化物の摂取頻度が有意に少なく、肥満群は、肉類や揚げ物類など脂質を多く含む食品の摂取頻度が有意に多かった。

#### 4. 不定愁訴

愁訴項目では、男子は「気分の落ち込み」、「身体の怠さ」、「イライラする」の順で、女子では「気分の落ち込み」、「立ち眩み」、「頭痛」の順に多くみられた。休日の起床時刻が9時以降の生徒の愁訴項目は、「気分の落ち込み」、「午前中調子が悪い」、「身体の怠さで起きにくい」の順であった。「頑張り屋さん」は、自覚的な愁訴や疲労感を有

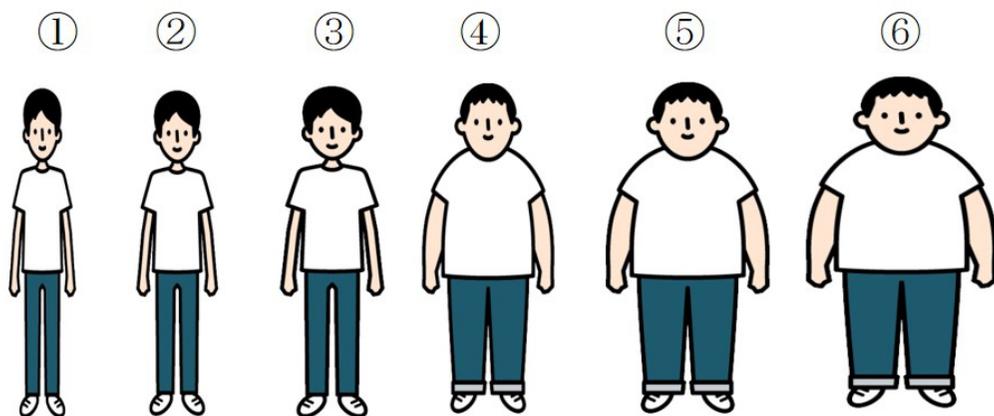
していても、遅刻や欠席をすることもなく、せめて休日の午前中くらいは休養を自己の主体のもとに取り戻させてやりたい。

中学生は身体的・精神的に変化の激しい時期であることから、心の健康とともに心身の機能や発達について理解を深め、生涯を通して積極的に健康の保持増進を目指すような態度の育成に努めることが大切であろう。よって、運動習慣を通して、不安やうつ状態が軽減し、ストレスを発散させる効果が得られることが確認されており、運動を積極的に実践していくことを推奨している。

#### ⑥ 体型認識の改善

現在の体型と希望する体型を選択させ、体型認識を調査した。体型別比較では、標準群男子は、「現在の体型で良い」と回答した生徒が比較的多く、標準群女子では「痩せたい・少し痩せたい」と回答した生徒が多かった。また、痩せ群では、「太りたい」と回答した生徒が34.4%で比較的男子に多く、「痩せたい」と回答した生徒は27.5%で女子に多かった。一方、肥満群は、肥満改善意識を有する者は67.0%で、有意な性差はなかった。

体型認識の調査結果では、痩身傾向にある生徒の方が肥満群や標準群よりも痩せ願望が強



(男子用)

い傾向を認め、体力・運動能力も低値で低血圧、貧血傾向などの自覚症状を呈する生徒も多く、免疫力の低下や二次性徴発現の遅延など成長期特有の症状が、将来的な重篤な疾患を発症する可能性を危惧している。

## 7 測定および調査項目への興味関心

1. 興味関心を示す体型指標は、男子は身長が最も多く、体重、筋量、内臓脂肪量の順であった。女子は、体重が極端に多く、身長、貧血度、皮下脂肪量、内臓脂肪量、筋量の順であった。
2. 測定項目への興味関心では、男子は動脈硬化度、血管狭窄度、体脂肪率、肥満度がほぼ同じ割合を示したが、女子では体脂肪率や肥満度が多く、血管狭窄度、貧血度、動脈硬化度、骨量の順であった。
3. 生活習慣で意識している項目は、男子は運動>食事>睡眠>学習で、女子が食事>睡眠>運動>学習の順であった。
4. 生活習慣の改善に関しては、約半数の生徒に改善が見られ、改善項目は、男女とも食事>睡眠>運動>学習の順であった。
5. 今後、改善したい項目としては、男子は体力向上が最も多く、学習習慣>身体発育>友人関係>病気予防、女子では学習習慣が最も多く、体力向上>友人関係>病気予防>身体発育の順で、男女間に生活環境や人間関係に微妙な意識の違いが見られた。

## 8 健康教育

1. 本校では学級活動の一環として、食育指導を行っている。1年生に「何をどれだけ食べたらよいか考えよう」「強い血管を作る食事のとり方を考えよう」、2年生には「骨密度を高めよう」、「体脂肪を正しく理解しよう」、3年生には

「ヘモグロビン濃度を高めよう」という主題で行い、授業終了後に、「今までの食事内容を振り返って、これからの食事について考えたこと」や「自分の健康のために、特にがんばってみようと思うこと」を考えてワークシートにまとめさせた。食事内容では、朝食摂取や各種ビタミンミネラル摂取の必要性、バランスの良い食事に生徒の理解がみられた。骨密度を高める食事では、牛乳や乳製品、小魚の大切さが理解できた。また、健康意識には、部屋の環境を整える、睡眠時間を増やす、運動を頑張るなど、それぞれの生徒が自分の健康状態を再確認し、生活習慣を見直す機会となった。

### ★授業例「ヘモグロビン濃度を高めよう」

貧血測定の結果、貧血傾向にあった生徒が多くみられ、栄養教諭による貧血改善を目指す食育指導を行った。貧血を改善するための具体的な食事例を示し、生徒が理解しやすいよう説明し、毎日の食習慣で自分で決めたことが継続できるよう、担任教諭が声掛けを行っている。

また、ヘモグロビン量は再度測定を行うことを伝え、それまでに食事内容を見直し、改善を目指すよう意識づけを行った。

2. 測定結果や生活習慣に関する調査結果に基づいて、測定を行って頂いた大学の先生から指導講評を受けた。1年生は、学級ごとに「生活習慣の改善を目指して」という主題で、生徒が最も興味のある、身長を伸ばし体力を向上させるために必要な食事、睡眠、運動に関して分かりやすく講義をして頂いた。2年生は「ライフスタイルと健康や体力との関連性」と題して体力運動能力を高めクラブ活動で好成績を残すための体調管理や練習中の障害

予防など、3年生は「将来の健康を目指した生活習慣の確立」と題して、3年間の成長過程と将来の健康について講話された。受験を控えた生徒は健康上注意すべき内容などに興味関心を示していた。生徒から活発な質問もあり、それぞれの学年で健康の重要性を理解し、日常的に実践できる具体的な内容も多く意義ある健康指導となった。

### 3年生食育学活：ヘモグロビン濃度を高めよう



### 測定結果個人報告書

体脂肪率測定と血圧測定検査の結果(岡山市立橋南中学校) 検査日: 2012年9月

あなたの体型は? (体脂肪率と腹囲測定から肥満度をチェックしましょう。)

ID番号	3101	15歳	性別	男子	標準体重	62.9 kg
身長	176.2 cm		体重	59.0 kg	腹囲	71.0 cm

※腹囲を身長で除いた腹囲身長比の目安は0.5以下ですが、80cmを超えると要注意です。

肥満判定	標準体型	血圧判定	正常血圧
肥満度	-6.2 (-5.3) %	測定時平均心拍数	73 回/分
体脂肪率	10.2 (13.2) %	収縮期血圧	124 mmHg
腹囲身長比	0.403 (0.412)	拡張期血圧	64 mmHg
貧血判定	正常範囲		
ヘモグロビン値	15.3 (13.3) mg/dl		

( )は昨年度

血管の硬さ(PWV)は?

脈波伝播速度(PWV)

(右)	1年: 773	2年: 903	3年: 867	cm/s (90%)
(左)	1年: 841	2年: 917	3年: 920	cm/s

今回の推定血管年齢は 年齢相当

※PWVは主に大血管の硬さを測定したものです。  
 ※小児期は筋量や血管の太さが測定値に影響します。  
 ※PWVは低値ほど弾性があることを示しています。血管年齢は血管の統計データから割り出した目安です。

足の血管の詰まり(ABI)は?

血管狭窄度(ABI)	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4
(右)①: 0.88	②: 0.93	③: 0.78									
(右)④: 0.97	⑤: 0.87	⑥: 0.84									

今回の測定結果は、

血管狭窄の可能性あり

※ABIは低いほど血管壁にコレステロールが沈着し、血流の流れを妨げていることを示します。(上図はイメージであり実際の状態を表すものではありません。)

検査結果よりアドバイス

- ※ 体型は「標準範囲」で、血管狭窄度が低い数値を示し、30代以上の食品摂取には注意が必要です。
- ※ 炭水化物やタンパク質を十分に摂取する(ランスの長い食事を通して健康な身体を作ってください。)
- ※ 実験結果、運動や睡眠時間が不足傾向になりました。体力が低下しないよう、運動習慣を今の規則正しい生活習慣を維持しましょう。

## 6 考察

社会が複雑になり健康問題が多様化した今日、健康や生命にかかわる科学・技術の急激な発展とあいまって、豊かで健康的な生活を送るための健康に関わる知識は以前より格段に多くなり、以前にも増して複雑な問題を解決する能力が必要になってきている。生活習慣病の発症起源は小児期にあり、その生活習慣の確立には幼少期からの食事や運動・睡眠等の生活習慣の確立が必要である。このことは、本校の経年的な健康教育を通して成長期の生活習慣への介入効果が、自己の発育発達を客観的に把握でき、身体面や心理面に関する疑問や不安を解消できる能力の定着に有用であることを確認している。また、これら一連の健康教育は中学生の学校生活に好影響を与えるとともに、地域全体にも良好な健康意識が定着してきた。特に、現行の学習指導要領の内容だけでは経験できない動脈硬化や骨密度、貧血検査などの各種測定と腹囲や血圧など日常的な健康パラメータによる客観的な指標はセルフレギュレーションの達成に有効であると考えられた。

中学生は身体的・精神的に変化の激しい時期であることから、心の健康とともに心身の機能や発達について理解を深め、生涯を通して積極的に健康の保持増進を目指すような態度の育成に努めることが大切である。一方で、行動変容を目指す健康教育の観点からは、「知識の習得・理解」「態度」「行動の見直し・改善」より構成されているが、知識があっても行動しなければ意味がない。このことは、健康を保持増進するための、個人の行動選択が大切であるというヘルスプロモーションの考え方が生かされていないことになる。子ども達は、幼少期から今までの生活

の中で得た生活の知に基づいて、自分なりの健康リテラシーを築きあげている。しかし、それらの経験知は、往々にして知識同士に関連性を持たない断片的で素朴なものが多く、定型的な知識のまとまりとなる知識のネットワークを習得することが必要となる。そのために、生活習慣病予防への効果的な介入手法として、中学生のライフスタイル改善を目指した一連の健康教育を継続して、過去に学習した知識以外の様々な健康行動に影響する要因が確認できた。このことを認めながら、知識が行動変容に帰結しない最大の要因に知識・理解の不備や不十分により生じると捉え、その知識がもつ意味や価値、手段の認識の充実・深化によって解決できる糸口を見いだすことが可能ではないかと考えた。その方策として、一般的な学校教育では体験できない精密な医療機器による各種測定や最新の医学情報を健康教育に導入した。結果として、健康に関係した知識・技術や物の見方を得て、合理的に判断できる一定の水準と内容の共通性を維持する役割を果たし、適切な健康決定するのに必要な基本的能力の開発に寄与するものであると示唆された。

今後とも、あらゆる教科領域間の横断的・縦断的な学習内容の充実に加えて、大学の研究機関や医療機関との連携を深め、食育をはじめ健康教育に携わる教職員や教育委員会、地域等の理解と協力を得ながら、より綿密で有用な健康教育を推進していきたいと考えている。

## 7 研究の成果

1. 主観的ではあるが、健診時や健康指導時の生徒の行動に以下の変化を認めた。

① 健診中の私語が少なくなり、受診態度も良

く、測定後の挨拶もできるようになった。

② 汚れた服装や服装の乱れが少なくなり、爪や髪型に清潔感が感じられた。

③ 健診時や質問紙の回答が丁寧になり、無効回答が極端に減少した。

④ 健診の意義を理解し、身体情報に興味を示すようになった。

⑤ 健診や健康指導時に健康や食事、運動に関する質問や話題が増えた。

2. 学校生活で、生活習慣の改善や健康意識の高揚が確認できた。

① 肥満傾向生徒が減少し、肥満や痩せを指導された生徒に改善傾向がみられた。

② 男子は血圧や貧血、女子は肥満や貧血の指導を受けた生徒に良好な改善傾向がみられた。

③ 朝食欠食や間食、夜食をする生徒が減少し、食育指導の効果が認識できた。

④ 適切な睡眠時間が確保できたことで、授業中の居眠りをする生徒が減少した。

⑤ 学習時間は増加し、学習に集中力が出て、学びをあきらめない生徒が増加した。

⑥ 運動習慣が定着し、運動部活動の成績も向上し学校全体に活気が感じられるようになった。

3. 今後の健康教育の課題

① 標準体型で適切な生活習慣が定着している生徒により高いレベルの指導内容の構築。

② 生活習慣非改善の特徴として、学校生活の満足度が低い生徒への健康指導。

③ 将来的な動脈硬化性疾患に対し実感が乏しく、現在の健康観との意識の乖離。

④ 肥満体型の生徒や自分の体型に歪みを抱く生徒への具体的な指導内容の方策。

- ⑤ 生活習慣の改善は即座にその効果を発揮するものではなく、継続させる指導法の確立。
- ⑥ 家族や地域住民への健康意識の拡大や浸透。

## 8 まとめ

生活習慣病予防への効果的な介入手法として、中学生のライフスタイル改善を目指した一連の健康教育を実施し、健診で得られた将来の疾病発症に起因するリスクファクターを客観的な指標を通して指導することが、生活習慣の改善に有効であると考えられた。また、疾病予防の観点からは、発達段階や地域の特性を含めた具体的な事象に基づいた指導法を提示することが、生活習慣改善や健康意識の高揚に寄与すると

### 1年食育学活:強い血管を作る食事のとり方



### 2年食育学活:骨密度を高めよう



考えられた。中学生がより確かで豊かな健康リテラシーを形成するための基盤づくりの役割を担う健康教育の意義は大きいと考えられた。

### 参考文献

- 大関武彦:小児科臨床ピクシス(6):小児メタボリックシンドローム;中山書店, 2009
- 清水俊明:小児生活習慣病ハンドブック;中外医学社, 2012
- 藤原寛:子どもの肥満をめぐる問題と栄養・生活指導:臨床栄養;110-7, 833-836:医歯薬出版株式会社, 2010

最後に

健診時の測定にご協力賜りました多くの保護者の皆様に感謝申し上げます。

今後とも、子ども達の健康維持増進を目指した健康教育を推進し、楽しく、安全な学校を構築する所存ですので、ご理解賜りますようお願い申し上げます。本当に有難うございました。

(学校長 梶原 敏)

# 生徒の柔軟な発想を生み出す プロジェクトを軸にした授業

～ 話すこと(やり取りと発表)と書くことの継続した繰り返しを通して ～



金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校  
教諭

たなかさとみ  
**田中里美**

---

1977年生まれ。2000年金沢大学教育学部中学校教員養成課程卒業。2000年石川県金沢市立城南中学校勤務。2003年石川県内灘町立内灘中学校勤務（A中学校）。2007年石川県金沢市立高岡中学校勤務（B中学校）。2012年石川県金沢市立兼六中学校勤務（C中学校）。2014年石川県金沢市立野田中学校勤務（D中学校）。2016年より金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校（E中学校）勤務。現在に至る。連絡は、石川県金沢市平和町1-1-15の同校、またはパソコンメールtanakas@staff.kanazawa-u.ac.jpまで。

---

第66回 読売教育賞から  
【外国語・異文化理解】



田中教諭（左）の指導で英語による即興対話を披露する生徒

「歌手は誰が好きで、CDは何枚ある？」「何枚かわからない。嵐が好き！」  
1年生の英語の授業で11月、生徒2人が立ち、お題の「How many」に基づいて50秒間、即興で対話した。約40人の生徒は熱心に聞き、2人が言葉に詰まると英語で助け舟を出した。

### 即興対話で表現力養う

田中里美教諭 40

同じお題には後日再挑戦もする。五嶋菜々加さん(13)は「繰り返し返すうちにどうしたら伝わるかわかってきた」と語る。

即興対話は、田中教諭が2003年度に始めた英語での卒業文集作りがきっかけ。単調な英文や似た内容が多く、表現する力が必要と感じて後に取り入れた。

このほか、例えば、2年生は、オチのある90秒間の英語寸劇を作る。1分間の英語CMも制作し、生徒が商品考案から撮影まで行い、どうすれば魅力が伝わるかを考える。3年生は「有名人になりきった英語インタビュー」で表現を学んでいく。

田中教諭は「柔軟な発想力や、相手を意識して自分の考えを発信する力など、社会で役立つ力も育つ」と強調した。(補宜雄一)

外国語・異文化理解

金沢大学人間社会学域  
学校教育学類附属中学校

田近裕子・津田塾大学教授「生徒が自分から発信したいことを英語で話し、書くことができるようカリキュラムを作り上げた。中学の3年間で英語能力をここまで養えることを示した優れた実践だ」

#### 【最優秀賞選評】

田近裕子 津田塾大学教授

「生徒が自分から発信したいことを英語で話し、書くことができるようカリキュラムを作り上げた。中学の3年間で英語能力をここまで養えることを示した優れた実践だ」

## 1 はじめに

私は3年生を担当したときに、卒業文集を作っている。卒業を前に、クラスで1冊の文集を英語で作る活動である。中学校3年間の英語学習の集大成として、14年前から取り組んでいる。その間に、卒業文集を作成したのは6回で、そのうち、3年間持ち上がったのは2回(A、B中学校)である。

1冊になった卒業文集を渡した瞬間、夢中で英語を読む生徒たち。その卒業間近に見せる真剣な眼差しは、英語教師としての宝となっている。

この活動を始めるきっかけとなったのは、14年前のことである。当時、英語特区として全国的にも早くから小学校で外国語活動を導入し、「英語での授業」が比較的できた金沢市内の初任校から、金沢市郊外の「英語での授業」の土壌がない中学校(A中学校)へ異動したことによる。A中学校で起きることは、教師生活4年目の若い私には衝撃だった。新任式の最中にしゃべる生徒。チャイムが鳴っても教室に入らない生徒。立ち歩きや私語で授業が中断されることもあった。想像以上の厳しい現実だった。ある生徒が、授業が始まって早々に、英語で授業をしないで欲しいと申し出てきた。私にとって「英語での授業」が通用しない、初めての体験だった。英語でのコミュニケーション能力を育てるための英語でのやりとりやペア活動も断念した。ワークシートをもとに、日本語で進める授業で規律を保つしかなかった。空き時間は校内を巡回して終わり、心身ともに疲弊していた。

この現状を変えたいと思い、その年の8月に東京のセミナー(6 way Street)に参加した。苦労しながら実践を積み重ねている先生方のお話を聞いて、心が動いた。変わらなければいけな

いのは、自分だと感じた。セミナーの後、講師のお一人だった中嶋洋一先生の著書を読み返し、「英語の卒業文集」と出会った。「文集を、私なりのやり方で試しにやってみよう!」と決意したのが卒業文集の始まりだった。入試までの授業時数、パソコン室の使用、印刷・製本など不安なことはたくさんあったが、その半年後には完成させることを目標にした。無謀だったが、印刷・製本までほぼ一人でしたため、途方もなく時間がかかった。それでも、記念すべき1冊目が完成した。「友達は宝物」「(先生のような)英語教師になりたい」「世界平和についてもっと考えるべき」など、生徒の内面に向き合える卒業文集の魅力は、想像以上のものだった。

A中学校の2年目は1年生ということもあり、気持ちを切り替えて「英語での授業」が実現した。授業や学級での時間が楽しいものへと変わっていき、そのまま3年間持ち上がった。3年生で担任をしたクラスに、2年生の秋から欠席の続く生徒がいた。しかし、その生徒は、5月の修学旅行が終わってから、登校するようになったのである。これまで誰にも打ち明けることのなかった胸の内を、最後の卒業文集で次のように書いた。

**“I have some good friends and am in a good class. It is the most wonderful year in my life...”**

私にとって、これは貴重な1ページとなっている。3校目はB中学校で、毎日のように生徒指導上の問題が起きる3年生を担当した。「どんな状況でも文集はできる」と信じて、文集を作成した。その後、3年間持ち上がった学年で、初めて、学

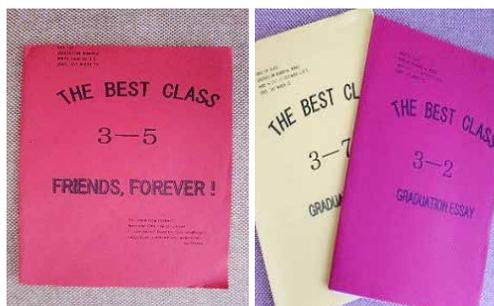
年共通の卒業文集が完成した。4月の教科部会で、同学年の英語科の先生方に協力を依頼したのだ。C中学校でも1年目は3年生だったが、作成できた。

私の経験から言えることは、「英語の卒業文集は、どの(国公立)中学校でも、生徒がどのような状況でもできる」ということである。実際、A、B中学校とも、私が赴任した当時は、1つの学年

が7クラス以上の県下最大規模の学校で、教育が困難といわれていた学校だった。

最近の教科書の改訂で、“SUNSHINE ENGLISH COURSE3”(開隆堂)に、Special Project「卒業に向けて」が新たに導入された。今後、卒業文集の取り組みが全国に広がることを願っている。卒業文集は、私の授業実践の原点であり、これからもずっと続けるつもりだ。

図1 実際に作成した卒業文集



A中学校(2004)

A中学校(2005)



A中学校(2007)

B中学校(2008)



B中学校(2012)

## 2 英語の卒業文集(プロジェクト)の良さは?

卒業文集には、次の3つの良さがある。

1つ目は、柔軟に自己表現ができることである。作品は、詩や散文・物語とどんなスタイルでもよいので、生徒たちの個性がでる。英語で表現することで心が解放され、普段の印象とはかけ離れた英文を書く生徒がでてくる。その柔軟な発想は、大人では考えが及ばないものばかりである。

2つ目は、全員が参加できることである。一人が1ページを必ず担当するので、自己責任が生まれる。一人ではできなくても、仲間がいるから書き始める生徒がでてくる。普段は進んで英語を書かない生徒も、卒業文集では1ページを完成させる。1冊の作品を仕上げるために、自分ではなくてはならない存在になるからだ。

3つ目に、英語授業の集大成になることである。文集を英語で書くということは、3年間英語を学習してきた軌跡になる。卒業文集がこれからもずっと残る、英語の授業最後の作品だと思うから、生徒は俄然燃えるのである。

この3つは、ある期間かけて行う全てのプロジェクトに共通する。A中学校で3年間持ち上がった生徒たちに、3年生の最後の授業で、無記名の授業アンケート(2007)をした。その中で「英

語の授業で一番心に残った活動は何ですか」という質問をした。一番多かったのが、「卒業文集作り」だった。B中学校のアンケート(2012)でも同じ結果だった。選んだ理由として生徒たちは、「真剣に文を考えた」「自分の意見が書けた」「書くことが楽しかった」「難しかったけど楽しかった」「クラスの思い出が増えた」などと答えた。自分の力で書けたことを、生徒たちは素直に喜んでいた。

### 3

## 卒業文集に見られる 生徒の柔軟な発想

高校入試が近い時期にも関わらず、生徒たちは納得がいくまで文集を仕上げる。英語が苦手な生徒も最後までやり遂げる。

生徒のこだわりは、形式・レイアウト、タイトル、内容など、文集の随所に見られる。

### ア 形式・レイアウトのこだわり

- フォント・文字スタイル
- 段落、行間
- 背景の写真(絵)
- 文章の種類(メッセージ、詩、散文、物語)

### イ タイトルのこだわり(実際に生徒が考えたタイトル)

- Wonderful Class  
Now I Want to Tell  
The Last and Best Class(クラス)
- What Do You Think?  
Don't Forget  
Love, Peace, Happiness  
(社会に対するメッセージ)

- Club Activity  
Basketball is Fantastic!  
After School(部活動)
- Very, Very Important (Thing/Friend)  
My Favorite… (Thing/Music/Song)  
(好きなもの)
- High and Dirty  
Do You Know Who I Am?  
I Am “Can”(なりきり)
- I Have a Dream  
Do You Have a Dream?  
Keep a Dream Leave for a Dream  
Having a Dream A Dream I Have  
I Will Be…  
Dreams Come True  
We Have a Chance  
Of Myself By Myself For Myself(夢)

### ウ 内容のこだわり

文集の内容はプラス志向で、過去、未来、自分、他人をすべて肯定している。ある生徒は、授業で書いた英作文『戦争と平和』をさらに深めて表現した(図2①)。また、ある生徒は、自分が将来成し遂げたいことを、別の人物になりきって『伝記』として書き、未来形ではなく過去形で書いた(図2②)。鉄道が大好きな生徒は鉄道の歴史を英語でまとめ、「桃太郎」をオリジナルの恋愛物語に変えた生徒もいた。クラスについて書いた生徒は、クラス写真を嬉しそうに文集に載せた。自分のレストランを持つことが夢だった生徒は、「いつか担任の先生を招待して、料理をご馳走したい」と書いた。

<p>①</p> <p style="text-align: center;"><b>What do you think?</b></p> <p>What do you think about war? I think war is a very bad thing. But I don't think war will not happen. Because if war hadn't happened, Maybe we wouldn't be here.</p> <p>We can't change how things end. But we can change the world! We can change the world!</p> <p>We should not cause war. We must make a peaceful world. We must not make a dangerous world. For the future. For little children.</p> <p>We must make a fair world. You may think fairness is not good. But I think fairness is good.</p> <p>There are many poor people in the world. We must help these people. Let's start what we can do!!</p> <p style="text-align: center;"><b>Let's change the world from the small thing!!!!</b></p>	<p>②</p> <p style="text-align: center;"><b>GREAT</b> ○○○○○○○○○</p> <p>○○○○○○○○ was a game creator who made a famous game. He has loved games since he played it for the first time. He was interested in the world of the games.</p> <p>He played it every day.</p> <p>His interest in games became stronger and stronger.</p> <p>He decided to be a game creator.</p> <p>He studied hard about how to get that job. He really wanted to be a game creator.</p> <p>A little time passed and he joined Capcom. Capcom is a company making a game.</p> <p>He has worked hard for a long time.</p> <p>So he finished making an original game. His game made everyone smile.</p> <p>It became the most popular of all games.</p> <p>Later, everyone called him "A legend creator".</p> <p>He said, "Respect all things and you must look inside yourself again".</p> <p>He believed his motto and he became good and rich.</p> <p>He gave the game to children because he wanted to spread games. The children were very happy.</p> <p>He was also happy.</p> <p>So he lived a happy life.</p> <p style="text-align: center;">THE END</p> <p>game creator ゲームクリエイター legend 伝説 respect 尊敬する</p>
---	--

B中学校では、計画的に文集を作ることを心がけた(表1)。文集の下書きを2回書いた後に全体で発表し、さらに考えを深めて3文以上書き足した。この3回目の原稿をパソコンのWord文書に打ち込み、製本した。生徒は、1回の発表を

挟んで、同じ原稿を4回は繰り返して見直した。生徒にかける言葉にも気をつけた。4月は「これまでの学習が卒業文集につながる。先輩を超えるようなものを作って欲しい」と。冬休み前には、「今の自分が一番伝えたいことは何か、じっくり

り考えて書いてきて欲しい」と。卒業1か月前には、「卒業まで残り1か月。最高の文集を完成させよう。20歳になった自分に向かって書いてごらん」と。公立入試前は、「入試の間に全部印刷して1冊の文集にしておくから、精一杯頑張ってきて

て」と励ました。すでに進学先が決まって公立入試当日に登校する生徒には、製本を手伝ってもらった。これも、この年からの恒例となっている。

■ 表1 卒業文集 年間計画(B中学校2012)

時 期	内 容	ポイント
4月教科部会	卒業文集を作成することを共通理解する	教師間で目標の共有
4月授業開き	過去の卒業文集を見せる	最終目標の提示
9月初旬	卒業文集の各自のテーマを持たせる	テーマについて考える
12月冬休み前	下書き原稿①を配布 モデル文①	一番伝えたいテーマを絞る
1月初旬	原稿の提出、添削	正しい英文を書く
2月私立入試後	下書き原稿②を配布 モデル文②	文章の構成・問いかけ・引用
2月中旬	各クラスでスピーチ発表会(10文以上)	聞き手に伝わる発表をする
2月下旬	再度書き直し③、最終原稿完成	発表後、3文以上追加する
2月下旬	パソコン室で文集原稿完成④	スペルの間違いを点検する
3月公立入試前	表紙・文集の印刷	入試への励まし、文集の完成
3月公立入試	製本→文集を各机の上に置く	学年教諭・管理職に手渡し
3月公立入試翌日	登校後、すぐに文集を読む	内容に注目する

## 4 達成感を味わえる卒業文集へ

A中学校の1冊目の文集(2004)で、気がなることがあった。それは、中学校初期段階の単調な英文の羅列や他人の英文をそのまま真似した原稿がいくつか見られたことだった。違いを受け入れ、英語で表現する機会が豊富になれば、生徒は自由に英語で表現できないと考えた。

いずれも3年間持ち上がったA、B中学校では、1年生から「英語での授業」を習慣にし、3学年で継続した活動を試みた。A中学校では、授業の帯活動(1年生:What am I? 2年生: Show & Tell, 1 minute chat 3年生:10分間英作文)を、B中学校では、各学年末にプロ

ジェクト(1年生:Show & Tell 2年生:英語の詩 3年生:卒業文集)を実施した。その結果、A、B中学校とも英語で表現することに抵抗がなくなった。この学年の授業を3年生で担当した先生からは「みんな英語の発表に慣れていて意欲的だね」と言われた。卒業文集も個性あふれるものばかりだった。書いて表現するだけでなく、英語でのやりとりや発表を通して、生徒が伸び伸びと表現できるようになることを学んだ。

英語(学)力も自然に向上した。A、B中学校の持ち上がりの3年生の県学力調査では英作文の無回答が少なく、市(郡)統一テストでは例年になく平均を上回った。また、C中学校の3年生は、県学力調査(4月)で市平均以下だったが、市統一テスト(1月)で市平均を大幅に上回り、市内

全中学校実施(12月)の英語能力判定テスト(現IBA)では、5人に1人が準2級以上レベルで過去10年間でも上位の結果だった。D中学校の生徒は、入学時は市平均以下だったが、1年後の学力調査(ベネッセ)には市・全国でも上位となり、英検3級合格者も増えた。E中学校の2年生(3月)では、156人のうち、25%(40人)が準2級以上(2級)を取得した。

## 5 生徒の柔軟な発想が生まれる 発表プロジェクト

【1年生】一人一人の良さを見つけ、違いを楽しむことが、卒業文集作りの土台となる

### ① Show & Tell (B中学校)

Show & Tellでは、「松井秀喜選手のサイン入りボール(図3)」「祖父にお土産でもらった水晶」など、他の人が持っていないような特別な宝物を紹介した。

■ 図3 生徒の原稿と感想 (B中学校 2010)

### Show and Tell

Class No Name \_\_\_\_\_

紹介するもの  
サイン入りボール

Hello, everyone.  
This is a ball.

My uncle gave it to me.  
He got this ball in New York.  
Hideki Matsui wrote down his name.  
I like Hideki very much.  
So I was happy.  
I always keep it on my desk.  
Thank you

(25) (73)

---

自己評価

声の大きさ	A: 大声で言えた	B: 中声で言えた	C: 声が小さかった
なめらかさ	A: つまらずに言えた	B: 少しつまづいた	C: たくさんつまづいた
視線	A: 前を見て発表した	B: 少し原稿を見た	C: ずっと原稿を見てしまった
練習量	A: 20回以上練習	B: 10回以上練習	C: 9回未満

\*\*\*\*\*

### クラスメートの発表を聞いて

- 紙を見ないで言えていてすごい。
- 上手に発表できている人がたくさんいた。
- 全体的に大きな声が出ていたのでよかった。
- ずっと原稿を見ている人もいたので、練習した方がいいと思った。
- 自分もスラスラ言えるようになりたい。

### 気づいた点

- みんなの宝物が違っていておもしろかった。
- みんなの大事なものが英語でわかってよかった。
- 自分の持っていないものがあり、楽しかった。
- ○○さんの文鳥がかわいかった。
- ○○さんの発音がきれいで、すらすら言えていた。

### ②好きな人を紹介しよう(C中学校)

クラスメートが知らないことを1つ以上入れるように伝えると、下のように「スヌーピーの誕生日・兄弟の数・好きな食べ物」「ルーフィの出身・好きな食べ物」など新しい情報を入れて発表した。

■ 生徒の原稿と感想 (C中学校 2013)

- Hi, everyone. Do you know this boy? He is Snoopy. His birthday is August 10. He is cute, popular and easy going. He has four brothers. He has many friends. He likes ice cream. I like him. Thank you.
- Hi, everyone. Do you know about this man? He is Monkey D. Ruffy. He is from a windmill village. He is a pirate. He is active, strong and fine. He has a straw hat. He likes meats. I like him. Thank you.

- みんなの友達や家族、芸能人の紹介から、意外と知らないことがあるとわかった。芸能人の趣味などきくと調べたと思うから、その努力がすごいと思った。○ ○さんなど、見ている人の興味をひいていいと思った。
- 写真とジェスチャーを上手に使っている人の発表は、すごく分かりやすかった。できるだけジェスチャーをつけて、写真を指さしてできたのでよかった。緊張して人に伝えようとするのができなかったの

で、次のマイプロジェクトでは、もっと練習して、みんなの顔を見て発表できるいいと思った。

全てのプロジェクトに共通するが、実際は約1か月以上かけて1つのプロジェクトを行う。時間をかけることで、生徒はじっくり原稿を考え、練習ができる。ALTには、原稿の添削や発音指導などを依頼しておく。発表はビデオ撮影し、後で全員(モデル)の発表映像を見ることにしている。

■ 表2 プロジェクトまでの計画(C中学校2013)

	授業時数	内容	教師の準備・指導など	ALT
3週間前	1時間目	紹介文の練習	教科書で書き方指導 過去のモデル映像視聴	
2週間前	2時間目	原稿作成①	教師と過去のモデル提示 評価基準の説明	
	(授業外)	原稿提出 ものの準備	ALTによる原稿の添削 発表会に向けたお知らせ掲示	○
1週間前	3時間目	発音練習 原稿作成②	発音と読み方の個別指導 原稿の書き直し	○
	4時間目	発表会	発表マナーと評価基準の確認 発表のビデオ撮影 JTEとALTによる感想と評価	○
	5時間目	発表映像視聴	発表映像編集	

**【2年生】** 伝えたいことを(パソコンの)文字や写真で表現することが、卒業文集作りにつながる

### ①英語の詩(B中学校)

B中学校(2011)では、2年生の3月に5行以上の詩をパソコン室でWord文書に打ち込み、詩の世界観に合うイラストや写真を入れた。マザー・グースの作品をいくつか紹介すると、韻を踏んでいる、言葉を繰り返しているなどの規則を自分たちで見つけ、言葉にこだわるようになる。目に見えるもの以外に、地球などの目に見えない

ものでメッセージを伝える生徒もいた。「あなたの心は(雲や雪のように)白いですか」「僕たちも今、(地球と同じように)動いているところだ」「海(彼女?)が何色かって答えることはできないよ」など、比喩(擬人)表現や哲学的な文が出てきた。図4の「ひまわり」について書いた生徒は、1か月後の転校を控え、友達とのつながりを太陽とひまわりの関係で表した。

デザインや内容などでモデルになる作品は、図5のように学習室などに掲示して、学年で良いモデルを共有するようにした。

■ 図4 生徒の作品 (B中学校2011)

<h3>MOVE</h3> <p>The clock is moving now Time is moving now The earth is moving now Everything is moving now And we are moving now!!</p>	<h3>Sea</h3> <p>What is sea? For example, what color? Black? Blue? Clear? What will you answer? Many colors, many places I can't answer Sea is very interesting</p>	<h3>Sunflower</h3> <p>Sunflowers and the sun Sunflowers are the sun's partner Sunflowers need the sun The sun needs sunflowers, too They are best friends</p>
--	---	---

■ 図5 掲示した作品



②私の夢～こんな人になりたい (D・E中学校)

将来の夢や憧れを書いた後、パソコン室で1～2時間かけて、Power Pointのスライドを3枚作成する。発表本番では、自分でパソコンを操作する。普段から教師がスライドを使って授業

をしているので、それをイメージして生徒たちは発表する。プロジェクトの発表前には、過去のモデル(原稿・映像)を提示する。学校や学年を超えて過去のものを見ることで、生徒たちはそれを超えようと必死になる。

アニメーションを工夫したD中学校の生徒のスライド(図6)を、E中学校の生徒たちに事前に見せた。同じ職業でも、E中学校の生徒(図7)は独自の発想で考えた。話すテンポに合わせて、事前に複数のアニメーションを設定した。「これぞ練習の賜物!」といえる、スライドと話す英語がぴったり合った素晴らしい発表だった。

■ 図6

(D中学校 2015)

S1 Hollywood Movie Director

S2

S3 Steven Spielberg

I'd like to tell you about my dream. I want to be a director of Hollywood movie in the future. I like American movies very much. The movie I saw for the first time was the Harry Potter. I thought the director did a really fantastic job because the novels were expressed surprisingly well. I think good actors are necessary for a movie, but the director can draw out their skills. I have seen many Hollywood movies such as "Percy Jackson", "twilight" and "JAWS." If I become a movie director, I want to make movies in my own style and I would like to touch people's hearts with my movie. Before that, I want to improve my English. My goal is to become a movie director like Mr. Steven Spielberg. I will step forward to my dream.



■ 図7

(E中学校 2016)

S1

George Lucas

S2

STAR WARS

S3

Do you know him? He's George Lucas. He's a famous director and he made the movie, STAR WARS. I respect him and I like his movies. Now who do you think of your life? I feel my life is boring. But good movies pull me into the world of the movie and they get the boring, sad and painful life out of my mind. I always get power from his movies. I think being a movie director is a very good job. In the future, I want to make wonderful movies and make people happy.

■ 生徒の感想(E中学校 2016)

私は今回の発表で原稿を書いたり、スライドを作ったり、練習したりして、自分の成長を感じることができました。約2年前、初めて英語を学習してたくさんの学習を重ねて使える英語が増えていき、ここまで発表できるようになったんだなと思い、ちょっと嬉しかったです。もっと本場の外国人が話すような、なめらかな発音ができるように、上手な人の発音を聞いたり、音読しながら頑張っていきたいです。また、なかなかこうやって自分のことや将来の夢について語る機会がないので、とても良い経験になりました。私はフィギュアスケートの宮原<sup>さとこ</sup>知子選手に憧れているので、宮原選手に一步でも近づけるよう努力したいです。

発表の原稿には、5段階の評価基準を記している。原稿を書くときや発表に向けて練習するときも、目指して欲しい像を意識して欲しいからである。生徒たちが相互評価をするときは、3つの観点でABC評価をし、さらに教師と同じように5段階で点数をつける。

発表の内容に注目できるよう、評価シートには、商品名(例:Super Shoes)と困っていること(例:運動会のリレーでビリになった)をあらかじめ全て記載しておいた。1回目の発表は、全員がクラスで発表して教師がベスト3を決めた。その後、2回目は4クラスのベスト3を編集した12のCM映像を見て審査し、生徒たちでCM大賞を決めた。実際のCM大賞(日テレCM大賞)の選考基準をもとに、2回目は観点を変えた。テレビの前の視聴者を意識する

■ 図9 CM発表の様子



③CMで商品の魅力をアピール(E中学校 2016)

1分間で商品の魅力をアピールするCMを、ペアで発表した。8か月前のプロジェクトで、90秒でオチのあるスキットを発表していたので、内容を1分間に凝縮したユニークなCMがたくさん出た。

点は、3年生のプロジェクト(インタビューショー)の布石となっている。

■ 図8 実際に生徒が書いた対話

2nd Grade My Project 6

**ペアで1分間の魅力のあるCMを演じよう!**

Class No. Name \_\_\_\_\_

1. お好きな商品、困っていること、ものの魅力・特長と特典をペアで考えましょう。

困っていること	頭が長く悩む。
おススメの商品	スリヤピロー
設定の人物	A (頭が悪い人・高村) B (頭が良い人・杉)
ものの魅力・特長	①中に本を入れたら、覚える。 ②よくわかる。 ③どこでもいい。
特典	542 30円

2. 2人で設定したことをもとに、対話文を考えて書きましょう。自然な流れになるようにしましょう。

A: I have an important test tomorrow.

B: Oh, you have to study hard.

A: Yes, that's right. But I don't want to.

B: I have a good thing for you.

A: Really? What do you have?

B: This is a "study pillow". It's made in Russia.

A: Is it? Wow. How do we use it?

B: Well, we put some books in the pillow.

A: Then?

B: Then, just sleep.

A: ??

B: You can't sleep well. And it's very comfortable.

A: Really? 'OK. Goodnight ...

B: Wake up! It's ...

A: ...? What happened?

B: That's right. Could you believe the effect?

A: Yes. By the way, how much is it? It may be expensive.

B: It's only fifty dollars.

A: Really? Just fifty dollars?

B: Yes! But if you buy it now, it will be thirty dollars!

A: I'll buy it!

B: Oh, thank you!

A: Everyone! It's time to buy this "study pillow"!

B: すごいね!

原稿点検 シム先生・松下先生2月15日(水)MP6発表 審査員:田中2月26日(月)27日(火)

My Project 6 評価基準

<1つのものの魅力が伝わるように、1分間のCMをテンポよく発表することができる>

5点 1つのものの魅力や特長を3つと買いたいと思わせる工夫を1つ入れて、原稿を見ずに高断らしい発音で、ペアでテンポよく1分間のCMを演じることができた。

4点 1つのものの魅力や特長を3つと買いたいと思わせる工夫を1つ入れて、原稿を見ずに、ペアで1分間のCMをほとんど話まらずに演じることができた。

3点 1つのものの魅力や特長を3つと買いたいと思わせる工夫を1つ入れて、原稿をほとんど見ずに、ペアでCMを演じることができた。

2点 1つのものの魅力や特長を2つは入れて、原稿をときどき見ながら、ペアでCMを演じることができた。

1点 1つのものの魅力や特長を入れて、原稿をほとんどみながら、ペアでCMを演じることができた。原稿を作ることはできたが、CMを演じることができなかった。

0点 CMの原稿が作成できなかった。CMを演じることができなかった。

↑5段階評価基準

■ 審査観点 1回目:クラス発表(20組)

聞き手の意識	A B C
ジェスチャー・視線・テンポ	A B C
英語らしい発音と強弱	A B C

■ 審査観点 2回目:学年ベスト映像(12組)

It's very useful and convenient for us.	A B C
The idea is new, interesting and impressive.	A B C
I want to buy it if I have enough money.	A B C

**6** 生徒の柔軟な発想が見られる  
継続プロジェクト

1. 教科書の基本対話 (Basic Dialog) をオリジナルの対話 に (E中学校)

話す場面を想像できなければ、表現の幅は広がらない。これまでD中学校までは暗唱していた教科書の基本対話 (Basic Dialog) を、E中学校からは、人(もの)・場所・設定を変えてペアで対話を創作することにした。原稿は書かず

に、基本対話 (太字) を変えて、3往復のやりとりをする。教師はクラスの半分の生徒の創作対話を点検し、残り半分は点検を終えた同じグループの生徒が点検する。全員が終了したら、発想が面白い“Today's Best Skit”に選ばれた1組が発表する。この協同学習の繰り返しにより、教科書の対話を超えるような発想豊かな対話が次々生まれるようになる。1年間継続するので、毎月席替えをしても、誰とでも自然な対話ができるようになる。

■ 教科書の基本対話(1年生Program 5-1)

A: This is my bag. **Is that your bag?**

B: **Yes, it is. /No, it isn't.**



■ 生徒が創作した対話(E中学校 2017)

A: Is this *soba*, B?

B: Yes, it is. I love *soba*. How about you, A?

A: I love *soba*, too. But I don't like *udon*.

B: Really? I like *udon* because it's yummy.

A: I usually eat *soba*.

B: I see.

(実際の音声より)

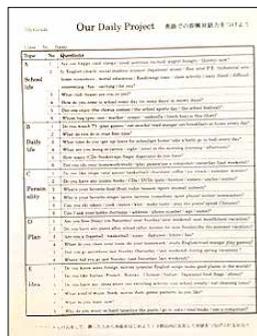
2. 帯活動での即興対話(D、E中学校)

①即興対話のハードルを段階的にあげる

即興での対話を短い時間でも続けられないことには、本当に英語を話せるようにはならない。A中学校の2年生で取り組んだ“1 minute chat”をもとに、D中学校の2年生では、さらに対話が続くような帯活動での即興対話を独自に考えた。出だしから対話がつまらないように、出だしの質問リスト(学校生活・日常生活・個性・計画・考えの5種類:2年生40問、1年生30問(図10))を、教科書の基本本文を参考に作成した。実際の授業では、教師がその日の授業内容に関わる質問を1つ選び、生徒たちは50~70秒間対話を続ける。慣れてくると反応が単調になるので、反応7パターンリストで、その都度表現を確認し

た。E中学校では、この活動を大きなプロジェクト成功のための地道なプロジェクトと位置づけ、名称を ODP(Our Daily Project)とした。以下の通り、3つのSTEPで段階を踏みながら、1年間欠かさず行った。D中学校ではSTEP2で終わっていたが、E中学校では、時間をさらにのばし、他の発表を聞いて即興でレポートするSTEP3を加えた。4月当初は、平均して2往復のやりとりだったが、1年間でどのペアも5往復~10往復は続くようになった。

■ 図10  
ODP質問リスト(1年生)



STEP1 4月~6月

- ①教師が質問リスト(40問)から1つの質問を選ぶ。
- ②じゃんけんで勝った人が出だしの質問をして、**ペアで50秒間**の対話を行う。
- ③教師と任意に選ばれた**1人の生徒が、みんなの前で50秒間の対話**をする。  
(全員1回)

STEP2 7月~11月

- ①教師が質問リストから1つの質問を選ぶ。
- ②じゃんけんで勝った人が出だしの質問をして、**ペアで60秒間**の対話を行う。
- ③任意に選ばれた**ペア1(2)組が、みんなの前で60秒間の対話**をする。  
(全員3回以上)

### STEP3 12月～3月

- ①任意に選ばれた**1人の生徒**が1つの質問を選ぶ。
- ②じゃんけんで勝った人が出だしの質問をして、**ペアで70秒間**の対話をする。
- ③任意に選ばれた**ペア1組**が、みんなの前で**70秒間の対話**をする。(全員3回以上)
- ④発表した生徒の周囲2メートル以内にいる、任意に選ばれた**1人の生徒**が、**2人の対話を3文で報告**する。自分と比較して自分のことを伝えてもよい。(全員1回)

#### ② 授業でのやり取りが外国の人とのやり取りへ

金沢大学附属高校と交流のある台湾師範大学附属高級中学生が、昨年度E中学校を2月に訪問し、2年生の英語の授業を参観した。英語運用力が高いという6名が参観すると聞いていたので、英語で対話をするいい機会だと考え、普段通りのODPと新出表現を使った90秒間の対話をすることにした。ODPでは、“Which season is the best to visit Kanazawa(Taiwan)? And why?”を皮切りにやり取りした。その後、生徒と台湾の学生2組が、みんなの前で再度対話をした。授業の後半の即興対話も盛り上がり、ともに2分を超えた。生の早いテンポでのやり取りを必死に聞き取る生徒たち。対話をする生徒はもちろん、聞いている生徒たちも刺激を受けていた。台湾の学生は、日本の中学生と英語で交流できてとても喜んでいて。

D中学校、E中学校ともに1年間即興対話を続けることで、2年生での英検3級以上の合格者が例年より大きく増加した。特に、2次面接での得点が高い結果となった。E中学校の生徒からは、「ODPのおかげで、突然外国の人に(外で)話し

かけられても、英語で話すことができた」という声。ある生徒の母親からは、「授業の対話活動のおかげで、塾に行かなくても、英検準2級を取ることができました」という声をいただくなど、反響があった。

#### ③ 学年や校種を超えたつながりへ

今年度から、E中学校では即興対話(ODP)を3学年共通の帯活動として取り組んでいる。1年生は40秒、2年生は60秒、3年生は90秒間途切れることなく英語で対話を続けることを目標としている。現在、私が担当する1年生では、5月末からSTEP1の形式で40秒間の対話を始めている。

今年の6月中旬に、金沢大学で実習予定の学生たちが、中学校の授業を参観した。参観した4年生が「ついこの前まで小学生だったのに、1年生のこの時期でここまで英語で話せることに驚いた」と感想に書いた。この学生は、前年度、附属小学校で実習を経験していた。2020年度から小学校高学年で英語が正式科目となる。教員養成課程の学生が他校種も含めた授業を参観する、私たち教師も他校種の先生方と情報交換をするなどして、小中高のつながりを意識していきたいものである。

## 7 生徒の柔軟な発想が見られる1(2)時間の授業プロジェクト(タスク)

対話をする前に書かせると、生徒たちは書いた英文を読もうとする。しかし、実際のやりとりは、その場で瞬時に考えて話さなければいけない。帯活動と創作対話活動という限られた時間だけではなく、授業全体をコミュニケーションの場にしなければ、生徒たちは書いた英文を読む習慣をなかなか断ち切ることはできない。

昨年度、E中学校2年生の5月の研究授業を契機に、「書く」→「話す」から、「話す」→「書く」へ授業を大きく転換した。新出現表を扱う授業で、1年生では90秒、2年生では90秒～2分間対話をしてから書く時間を授業の中に入れた。このことで、授業がより実際の場面に近いものとなり、英語が世界へ発信するための手段に変わった。

こうした普段の授業をもとに、E中学校の1・2年生の研究発表会の授業を2つ紹介する。この2つの授業とも課題解決型の授業で、課題に関わる対話を即興で2回～4回繰り返した後、終末で、ある程度まとまった英文(対話文、メッセージ)を書いた。その場で相手の反応を受けて、対話を繰り返しながら修正しているので、最後の書く段階では、さらに深く思考した意味のある言葉として書く。また、モデルを後半に提示することで、生徒の自由な発想を生かしたやり取りができた。

生徒が書いた英文は、廊下に掲示したり、昨年度から本校が交流を始めた海外の交流校(スウェーデン・ホーラベックス校)に実際に郵送したり、学校のHPに掲載するなど、校内外に広く発信するようにしている。

## 1. アミットとの対話を想像して、我が家の家庭料理を海外に発信する (E中学校1年生2017)

課題解決: 『アミットに我が家の家庭料理をご馳走しよう!』 (SUNSHINE Program 5)

### <事前インタビュー>

事前に調べる料理を1つ決め、家族から材料・分量・作り方を聞いてくる。(家庭科と連携) ○○汁、うどん、天ぷら、おでん、鍋、肉じゃが、すき焼き、焼きそば、焼き餃子、オムライス

①帯活動:40秒間の即興対話 『What's

your favorite food?』

- ②前時に学習した「ナン」「チャパティ」から、日本の「寿司」「手巻き寿司」を例にあげ、日本の家庭料理に話題をつなげる。
- ③事前に調べてきた家庭料理の材料や作り方について、英語で情報交換する。
- ④教科書に登場する日本に滞在中のインド人(アミット)を自宅に招き夕食をご馳走するという設定で、ペアで即興の対話をする。……………対話I
- ⑤違う料理を調べた同じグループの人と即興で対話をする。……………対話II
- ⑥インド人は、宗教上、牛肉、豚肉、魚介類などが食べられないことを写真で確認する。
- ⑦アミットが食べられない食材が1つある設定で、どう対応するか考え対話をする。……………対話III
- ⑧教師のモデルを見せた後、座席を移動し同じ料理を調べた人と即興で対話をする。……………対話IV
- ⑨席の離れたペアが対話を発表する。自分の対話を振り返り対話文を書く。  
(…対話V)

■ 図11 授業の様子



⑩我が家の家庭料理の材料と簡単な作り  
方、魅力が伝わるように、雑誌の原稿と  
して、5文でまとめて書く。

→教室前の廊下に『附属雑誌』として掲示  
し、海外に発信する。

実際の授業での生徒の対話(文) <A:Amit B:Amit's friend>

1回目の対話(対話I)(実際の音声より)

B: Welcome to my home. Please  
come in.

A: Thank you.

B: Amit, today's dinner is yakisoba.

A: Yakisoba? What's that?

B: It's ... noodle. We cook... We cook  
noodle. We cook... yakisoba with  
...

3回目の対話(対話III)(実際の音声より)

B: Welcome to my home. Please  
come in.

A: Thank you.

B: Amit, today's dinner is yakisoba.

A: Yakisoba? What's that?

B: It's Japanese noodle. We cook  
pork and cabbage and bean  
sprout and noodle with sauce.

A: Do you usually ...make ...at  
home?

B: Oh, yes, I do. I usually, I usually  
make yakisoba at home.

A: Do you use pork?

B: Oh, yes.

A: Sorry. I can't eat pork.

B: ...Oh, sorry, bye.

■ 図 12 対話の様子



4回目の対話(対話IV)後に書いた対話文

B: Welcome to my home. Please  
come in.

A: Thank you.

B: Amit, today's dinner is yakisoba.

A: Yakisoba? What's that?

B: It's delicious Japanese noodle. We  
cook pork, vegetables and noodle  
together with sauce.

A: Do you usually cook yakisoba at  
home?

B: Yes, I do.. I usually cook yakisoba  
because my family like(s)  
yakisoba.

A: Oh, your family like(s) yakisoba.  
Do you use pork?

B: Yes.

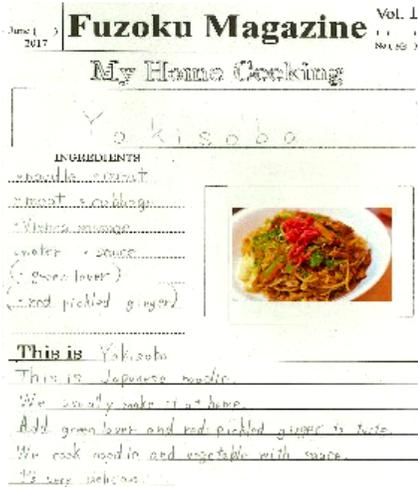
A: Sorry, I can't eat pork.

B: Oh, I will eat all pork.

A: Oh, thank you.



■ 図13 『附属新聞 我が家の家庭料理』



下線：生徒の創作部分        ：後半で追加した部分

C:建物・設備

- ③互いが考える理想の学校を、マインドマップをもとにペアで対話をする。……対話I
- ④和英辞書で未習語句を調べて、マインドマップに書き込む。
- ⑤席が近い違う相手と、理想の学校について再度、即興で対話をする。……対話II
- ⑥指名された席の離れた生徒2人が、モデル対話をする。 (…対話III)
- ⑦副校長(元英語教師)宛てに、未来の理想の学校の提案文を書く。(対話をもとに5文以上)
- ⑧生徒たちに向けた副校長からのアドバイスの手紙(下記モデル)を読む。
- ⑨参考となる表現があれば、提案文を書き直す。
- ⑩3つの視点で、代表の生徒が理想の学校を提案する。

## 2. 理想の学校を副校長に英語で提案し、学校のHPに提案文を掲載する (E中学校2年生2016)

課題解決: 世界の人たちと共存するために、未来の理想の学校を提案しよう! (SUNSHINE Program 9)

- ①帯活動:1分間の即興対話『What do you think of our school?』
- ②2030年の未来の理想の学校を想像し、3つの視点でブレインストーミングする。  
A:学校生活・生徒会活動  
B:行事・授業

副校長からのアドバイス(単元の新出表現や考える視点(中学生の義務、予算、グローバル化)に配慮)

Dear my students

Hello. How are you doing? I heard you thought about the future of our school in today's English class. I'm very glad to hear that. I hope you'll change our school in the future. However I'd like to give you some advice. Let me tell you three important things.

First, don't forget that school is the place to study. You have to study at school. There are a lot of poor people in the world. We also have environmental problems, for example global warming and air pollution. If you want to learn about the world more, you can make new events and classes. Second, you can use only a small amount of money to study and to save the earth. If you want to buy something, you should buy something good for us. We can't use much money for the future school. It's difficult to spend more than 3,000,000 yen. Third, the world is getting globalized. Our school should be the model of the global J.H.S. in the world. You should get the chance to communicate with others around the world in English. You can make a student exchange program. I'll be happy if You learn English more.

If your proposal is attractive, I'll put it on our school's HP next year. I hope I will get your nice proposals soon.

#### 副校長への提案文

Dear Mr. ○○

Hello. I'm thinking about our school for the future. I think our school should change to be a Global

School. First, our school teachers should teach all classes in English. Maybe it'll be hard for us. But it's very important for the future. Japanese people have to talk in English with people from other countries now. I think we have to do this in the future. So we can speak in English well. We have to speak English at school. Second, in the future we should have a student exchange program during summer vacation. We can speak English a little, but not well now. If we go abroad, we can talk with people in English. So, please change our school life. (B:行事・授業の視点)

[その他 学校HPに掲載]

## 8 英語で「話す」「書く」力を同時に育てる3年間計画

平成29年3月に告示された新学習指導要領では、英語を「話すこと」が[やり取り]と[発表]の2つに分かれ、5領域となった。『話すことに関しては、関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うこと・話すことができるようにする』とある。私が考える、生徒が英語で「話す」「書く」力を育てるイメージは、以下(表3)の通りである。「やり取りをしてから書く」「書いてから英語で発表する」という流れを、矢印(1年生のみ)で示した。普段の授業で、話すことと書くことにつながりを持たせて繰り返すことで、生徒たちはプロジェクトで真の達成感を味わうことができる。

■ 表3 プロジェクトを軸にした3年間計画

1 年生			
			海外発信：海外交流校に郵送 ⑤：パソコン使用
話すこと (やり取り：毎時)	話すこと (やり取り：タスク)	書くこと	話すこと (発表：プロジェクト)
<p>ペアで40秒の即興対話 →教師と生徒の1対1 発表</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">教科書の基本対話 (Basic Dialog) の創作 やりとり3往復</div>	<p>ALT にインタビュー なりきり自己紹介スキット 校舎案内スキット</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● アミットを家に招待してご馳走しよう! (課題解決)</li> </ul> <p>Who am I? なりきりゲーム</p>	<p>ALTに日本に関わる質問5文</p> <p>ポスター エコキャップ回収 (タイトル、目的、イラスト) →掲示</p> <p>附属雑誌 我が家の家庭料理 →海外発信、掲示</p> <p>自己PR10文以上 なりきった人物紹介5文</p>	<p>自己PR(My Project) →海外発信</p>
<p>ペアで50秒の即興対話 →隣同士での発表へ →席の離れた人と発表へ</p>	<p>隣の人にインタビュー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● スウェーデンの中学生と年末年始恒例の○○について話せるようになろう! (課題解決)</li> </ul> <p>自分のお気に入り Show &amp; Tell</p>	<p>隣の人のプロフィール10文 年末年始の習慣の紹介6文 興味ある人・キャラクターの紹介13文 冬休み中にALTへの絵葉書(日記)</p> <p>グループで学校PR文 →HP</p>	<p>興味がある人・キャラクターの紹介 (My Project)</p> <p>ALTとの即興対話(90秒)と Show &amp; Tell</p> <p>絵本の朗読 (Program 12)</p> <p>学校PR 動画2分</p>
2 年生			
話すこと (やり取り：毎時)	話すこと (やり取り：タスク)	書くこと	話すこと (発表：プロジェクト)
<p>ペアで60秒の即興対話 →教師と生徒の発表 →隣同士での発表へ</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">教科書の基本対話 (Basic Dialog) の創作 やりとり4往復</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 外国人観光客に金沢の名所を案内しよう! (課題解決)</li> <li>● チャリティについて意見交換</li> </ul> <p>予算内での買い物スキット</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 職場体験について情報交換</li> </ul> <p>観光したい国スキット</p>	<p>ポスター チャリティイベント (時間、内容、費用) →掲示</p> <p>スキット10回以上のやりとり</p> <p>附属雑誌 職場体験10文 + 写真1枚 →掲示</p>	<p>スキット大会 (My Project) 90秒でオチのあるスキット</p>
<p>ペアで70秒の即興対話 →席の離れた人と発表へ →別の生徒が3文で即興レポート</p>	<p>観光客に道案内スキット 未来の理想の学校について提案しよう! (課題解決)</p>	<p>私の夢10文 + スライド3枚⑤</p> <p>副校長への提案文 →HP</p> <p>日本文化クイズ →旅行しおり</p> <p>附属雑誌 京都奈良名所10文 + 写真1枚 →海外発信、掲示</p> <p>春日めぐみさんへの手紙 10回以上のやりとりと小道具</p>	<p>私の夢 (My Project)、 輝く附属中 CM 大賞 (My Project)</p> <p>1分間で商品の魅力をアピール</p>

3年生				
	話すこと (やり取り: 毎時)	話すこと (やり取り: タスク)	書くこと	話すこと (発表: プロジェクト)
前期	ペアで80秒の即興対話 →教師と生徒の発表 →隣同士での発表へ  教科書の基本対話 (Basic Dialog) の創作 やりとり5往復	● 困っていることを聞いて解決しよう! (課題解決)  観光客に乗り換え案内スキット ● 平和について意見交換  電話でのスキット	おすすめの日本世界遺産15文 ポスター 身近にできる5R (問題、正しい方法、図・表) →揭示  平和を願う詩8行 <sup>Ⓟ</sup> →揭示  インタビュー原稿やりとり15回以上	インタビューショー (My Project)  ● 有名人になりきりTV番組で2分間インタビュー
後期	ペアで90秒の即興対話 →席の離れた人と発表へ →第3者が3文で即興レポート	● 持ちよった最近のニュースについて意見交換  ● 未来の理想の街づくりを提案しよう! (課題解決)  ● 中学校の思い出の振り返り  ● マララについて意見交換	附属新聞→海外発信、揭示 ● 日本文化紹介記事 2×10文 ● 最近のニュース記事15文  ホームページに学校PR <sup>Ⓟ</sup> →HP  有名人の名言紹介 →揭示  卒業文集作成 20文以上 <sup>Ⓟ</sup>	日本文化をALTで紹介 (My Project)  卒業プレゼンテーション (Special Project)

授業の最後に、生徒たちはEnglish Learning Recordで授業を振り返る。学習の見通しが持てるように、予め半年分の評価項目を記し、プロジェクトなどの評価を記入していく。自主的に家庭学習を進められるよう、課題自己点検表もつけている。B4画用紙を2つ折りにして半年で更新し、3年間使用している。

## 9 おわりに

中学校の卒業は義務教育を終え、自分の意志で生きていく節目となる。英語で表現したことは、級友とのいい思い出となるだけではなく、将来、夢に立ち向かうときに背中を押してくれるだろう。8年前のA中学校の成人式で、懐かしい教え

子たちに卒業文集を見せた。「懐かしい!」「私こんなに書いたんだ。もう書けないよ」と言う教え子たち。思い出を振り返るひとときとなった。

全国のセミナーや学会に身銭を切って出かけ、刺激を受けて実践を改善してきたことで、最近では、研究会等で実践を発表するようになった。

私の根幹には、偉大な先輩方の存在がある。大学時代、教育実習でお世話になった平松仁史先生には、「英語での授業」を鍛えていただいた。「教師は授業が命」という言葉は、常に私を奮い立たせてくれる。中嶋洋一先生(関西外国語大学)には前に進む原動力を何度もいただき、心から感謝している。「授業が生徒指導」の精神を受け継いでいきたい。高橋一幸先生(神奈川大学)の著書『授業づくりと改善の視点』は、授業のバ

イブルとして何度も読み返してきた。英語授業研究会の発表で貴重なご意見を頂いたことが、今につながっている。

これまで教育実習生を公立中学校で5人、現校では昨年度3人担当した。1か月という短い期間だが、実習最終日には、まるで卒業生を送り出すような気持ちになり、一緒に涙を流すこともあった。残りの教師生活では、先輩の先生方から学んだことや私の経験から得たことを後輩たちに伝えていこうと思う。それと同時に、これからも授業を改善し続ける教師でありたい。

---

### 参考文献

中嶋洋一(2000)『英語好きにする授業マネジメント30の技』明治図書

高橋一幸(2003)『授業づくりと改善の視点』教育出版

田中里美(2014)『My Project で生徒を伸ばす』My Projectを使いこなす技—SUNSHINE 1年(別冊)

田中里美(2016)『金沢大学人間社会学域学校教育学類 研究紀要 外国語』

文部科学省(2017)中学校学習指導要領 外国語

# 大規模な専門高校で 教育相談を校内に 浸透させるまでの取り組み

～ 国語科教員の特性を生かしながら組織的な体制を作りあげるための工夫 ～



茨城県立水戸工業高等学校  
教諭（国語科）

かなざわようこ  
**金澤容子**

---

1981年茨城大学卒業、茨城県内の県立高校に勤務。2003年茨城県立水戸工業高等学校に赴任。現在に至る。2016年第65回読売教育賞国語教育部門優秀賞受賞。連絡は、茨城県水戸市元吉田町1101の同校まで。

---

【児童生徒指導】



学校の廊下で生徒と会話する金沢教諭（右）

ある日、友人関係に悩んだ生徒の相談を校内で受けた。「教室に行きたくない」と切り出した生徒の話聞き、「手前の階段まで行ってみて」「まずは参加できそうな授業から」と具体的にアドバイス。その後も、再び元気に登校できるよう面談を重ねることになった。

児童生徒指導 茨城県立水戸工業高校 金沢容子教諭 60

何げない会話で悩み聞く

だ。2003年に着任以降、「生徒から声のかかる教師」を目指し、廊下ですれ違ふ生徒と顔を合わせる度に「おはよう」「こんにちほ」と声をかけ続けた。

「長期休み明けは不安定になる生徒が多い」と感じ、5月の連休明けと夏休み後の9月に教育相談室を開放。自ら発行するカウンセリング通信で「教育相談週間」として周知を図った。これまでに30人超がこの期間に利用してくれた。

高校生の悩みは進路や恋愛など様々で「採用面接で緊張する」との相談には呼吸法を教えたことも。3年の益子佑太さん(18)は「心の底から相談したいと思う先生です」と話す。金沢教諭は「生徒が健やかに卒業してくれるのが一番の願い」と笑顔を見せた。(木口慎太郎)

河野義章・東京学芸大学名誉教授  
「『教員自身が教育相談の担い手になるべき』との思いが、学校全体の相談システムとして立ち上がっていく過程に感銘を受けた。多くの学校で参考にできる実践だ」

【最優秀賞選評】

河野義章 東京学芸大学名誉教授

「『教員自身が教育相談の担い手になるべき』との思いが、学校全体の相談システムとして立ち上がっていく過程に感銘を受けた。多くの学校で参考にできる実践だ」

## 1 はじめに

筆者は今年度で定年退職を迎える工業高校の国語の教員である。本校に赴任して15年が経つ。現在、筆者は同僚から「先生、A子の話を聞いてやってください」と言われる時がある。

しかし、以前は違った。「先生は授業だけで…」と先輩教員に言われた。それで本当に良いのだろうか、いや生徒が何かに悩んでいるなら少しでも話を聴いてあげたいと思って関わってきた。そして同僚の中から仲間を見つけて、校内に教育相談が浸透するまで奮闘してきた日々がある。振り返ると稚拙なアイデアもあったと思う。しかしその時はそれしか思いつかなかったのだ。

昨年度、筆者は教科教育の拙文を書いて読売教育賞優秀賞(国語部門)を受けた。しかし、筆者が教員生活で最も情熱を燃やしたのは教育相談であるので、本論文を書くことにした。

## 2 主題設定の理由

本校は、今年で108年の伝統を持つ1学年8クラス6学科(工業化学、機械、電気、情報、土木、建築)を有する県内で最大規模の工業高校である。生徒たちはたくさんの資格取得に励み、部活動に熱心に取り組む。インターハイや国体に出る選手もいる。国公立大学の進学や有名企業への就職と、生徒の希望を実現させる進路指導が行われている。

全国的に話題になってしまった大きな問題が起こった次の年度に、筆者は本校に赴任した。その事件はマスコミに取り上げられ、教員一丸となった事後処理や生徒集会、保護者集会で沈静化したと聞いた。赴任当時、その話題に触れることはタブ

ーになっているように感じ、また、生徒や教員の心の動揺が徐々に治まって来ているようにも感じた。

筆者は国語科教員ではあるが前任校でも教育相談を担当していた。カウンセリングマインドという言葉がある。大規模校でこの言葉が浸透すれば学校が変わるだろうと考えた。

ここで教育相談やカウンセリングの定義を細かく論ずると紙面が尽きる。高野(2000)は「教育相談は、現代の学校教育のもとで確立された教育活動の一環で、『ひとりひとりの児童生徒の教育上の問題について、本人、保護者、教師に適切な援助を行い、個人の持つ問題を解決して生活に適応させ、調和の取れた人格の形成を図ろうとする』ことである」「カウンセリングとは何らかの不適応状態にあつて援助を必要としている人と、その人を援助しようとする専門的な訓練を受けた人との間に成立する相談関係を言う(以下文献引用は点線アンダーライン)」と言う。

## 3 ねらいと仮説

教育相談やカウンセリングが学校現場で必要でないわけではない、という思いで活動していれば、徐々に理解者が現れ、校内に浸透していくであろう。そして、このような取り組みは教育相談ばかりでなく他の領域にも良い影響となるのではないかと。そこで、**本実践のねらいを「たった一人でも様々なアイデアで教育相談を校内に浸透させれば必ず定着することを実践を通して検証する」とした。**

仮説は以下である。

**仮説** ①国語科教員という特性を生かし広報活動を上手く取り入れて、教育相談を個人から全体へと大規模校の中に広めることができるのではないかと。②本校の先生方

には「本校生は能力もあり明るく元気で部活動に一生懸命だから、自己責任で問題解決に当たれば良い」という教育観の持ち主が多いようである。その考え方を尊重しつつも、生徒を支援し教育相談活動をすることで救える生徒がいるのではないか。

## 4 実践計画

「校内に浸透させる」と簡単に言っても約100人の職員と960人の生徒を抱える本校を見渡すと巨大な山が聳えているように感じた。

### ①個人の資質と能力

筆者の問題としては、教育相談を行おうとする自分自身の資質や人間性が大変重要である、と同時に力量が問われる、と感じた。

今津(2015)は「教師の『質』という幅広く暖

味なことばを分解してみたい。『質』はこれまで『資質・能力』とか『力量』、『職能』そして『専門性』と呼ばれ、その向上は『専門性発達』、『教師の成長』などとさまざまに言われてきたが…内容的にはそれほど大きな違いはない。…『資質』とは生まれつきの性質で得手不得手や人柄などと関わり、あまり変化することのない個人の特性である。…『能力』とは教育によって成長して変化する知識・技術を意味する。…資質・能力は六層からなる」といい、**A:問題解決技能、B:指導の知識・技術、C:マネジメントの知識・技術、D:対人関係力、E:教育観、F:探求心**、をあげている。「AからFに向かうほど『資質』的側面が強くなり、FからAに向かうほど『能力』的側面が強くなる」という。これは教育相談を行う筆者に非常に参考になる。

### ②組織の問題

本校には校務分掌の委員会として「教育相談委員会」があるが4月当初に委員長を決めただけ

■ 表1 教育相談が校内に浸透するまでの4期 (2003～2017年)

活動内容	4期の分類			
	I単独活動期	II体制構築期	III校内浸透期	IV活動安定期
個人の研修	○	○	○	○
個人でのカウンセリング活動	○	○	○	○
「カウンセリング紹介」の掲示	○	○	○	○
委員会の開催		○	○	○
「カウンセリング通信」の発行		○	○	○
研修会の開催		○	○	○
係になっている教員の写真掲示			○	○
「年報」の発行			○	○
悩みのアンケート調査			○	○
教育相談週間			○	○
オリエンテーションの実施			○	○
委員会の外部組織にての研修			○	○
緊急時のチーム援助			△	○
委員会教員のカウンセリング活動(注)			△	△
掛かった年月	2年間	3年間	3年間	7年間

※ 表中の○は活動ができたこと、△は活動が不完全であることを表している。(注)「委員会教員のカウンセリング活動」とは、教育相談委員会に入っている先生方が教育相談室を利用しての教育相談活動を年に一回でもしているかどうかということ。

で、一年間活動が何もなかった。こんな委員会  
は不要、という意見が委員会のメンバーから出  
る。職員室の雑談でも囁かれ、職員会議にも出  
される場面があった（その時は筆者は教育相談  
の必要性を訴えた）。そこでまず、委員会メンバ  
ーの意識を変えること、そして、主な活動で「教  
育相談」を校内に知らせることが大切だろうと思  
った。その後、粘り強く細かな活動をしていけば  
校内に浸透させることができると考えた。

ただし、小倉（2011）は「強制は反発を産む」  
から「どうしたらいいと思いますかと仲間に質問  
をする、話すより聞く」ことが人間関係を滑らかに  
するという。コーチングの視点は参考になった。

筆者がやるべきことがまず重要であり、その姿  
を見せること、口で説明するのではなく行動で示す  
ことで校内に影響が及べば幸いである、共感者  
が増え、徐々に体制が構築されていく形が望まし  
いと考えた。ここで筆者が考えたのは「覚悟を持  
って」という言葉である。いかにも「私やっています」  
と周囲が感じるような言動は慎む、静かに行動す  
る、「人不知而不愠（人知らずして愠らず）」（論  
語）の心境で実践していく、昔読んだ下村湖  
人の言葉「白鳥蘆花に入る（白い鳥が白い蘆の花  
の中に舞い降りても目立ちはしない、しかし風が  
起こるから蘆は脈々と揺れて周囲に伝わってい  
く）」という気持ちを持ちたいと考えた。

## 5 実践の結果

15年間で教育相談が校内に浸透していく過  
程を振り返ると、筆者の体験は、表1に示すよう  
な4期に分けられると考える。Ⅰ単独活動期→  
Ⅱ体制構築期→Ⅲ校内浸透期→Ⅳ活動安定期  
の4期である（表1）。

「単独活動期」とは文字通り、一人で相談活動

をした時期である。「体制構築期」とは少しずつ共  
感者が現れた時期で、教育相談体制の基礎作り  
の時期である。「校内浸透期」とは校内に教育相  
談が組織活動として浸透し始めた時期である。

「活動安定期」とは筆者が言わずとも学校の年間  
計画に教育相談関係の行事が組み込まれ、委員  
会が定期的実施され、どの先生が教育相談の  
委員会に入っても無理なく活動ができる時期であ  
る。当然、教員同士の人間関係は良く、生徒指  
導問題は少なく、また問題が起こっても教員の協  
働で解決が出来る体制が整っている状況である。

### I 単独活動期

#### 1. 単独の活動

##### ①スキルや資格等について

力量不足では相談が出来ない、何となく面談  
しているのではなく、雑談しているのでもなく「カ  
ウンセリングをする、教育相談をする」能力を付  
けるべきだと感じた。研修することや、心理関係  
の資格を取ることで知識を深めた。筆者の実践  
したことや入った学会について触れたい。

##### ◆研修

- 筑波大学内地留学（6か月間）前任校にて
- 茨城県教育研修センター教育相談課 長期  
研修相談員（2年間）：毎週水曜日の午後に研  
修センターに赴き、生徒や保護者の教育相談  
に携わる。また、事例検討会にて自分が関わ  
っている事例を提出し、近隣大学の心理専門  
の先生方に指導を受ける。
- 茨城県教育研修センター教育相談初級講座  
助言者

##### ◆資格

- 学校心理士（一般社団法人 学校心理士認

定運営機構)

- 上級教育カウンセラー (特定非営利活動法人 日本教育カウンセラー協会)
- ガイダンスカウンセラー (スクールカウンセリング推進協議会)

#### ◆学会

- 日本カウンセリング学会
- 一般社団法人日本教育心理学会

#### ◆学校外の活動やネットワーク

- 茨城県高等学校教育研究会 (以下「高教研」) 教育相談部役員:教育相談に関心・興味のある県内の高校教員の研修活動の企画運営。主な仕事は調査研究、研修会開催、部報作成などである。

筆者は、7年間役員を務め、特に研修会開催に力を注いだ。水戸少年鑑別所、水戸地方裁判所、県警交通管制官、児童相談所、養護施設、少年院等の見学会と研修会を企画・運営した。

#### ②生徒とのコミュニケーション

教育相談に携わるのに必要なのは資格か人間性かという問い掛けは時々頭をもたげて来る。研鑽が大事と考えたり、いや人格だろうと考えたり、筆者の気持ちはさまよった。心構えとしては生徒から声が掛かる教師になりたいと考えていた。コミュニケーションの第一は挨拶である。そして簡単な会話であると考えている。廊下、トイレ、校庭、図書館などでも、生徒に声を掛ける。

教室では、当然生徒の顔・表情・言葉に出会う。教壇や机間巡視では、バーバルメッセージだけでなくノンバーバルメッセージもある。筆者は国語の授業で毎回、7分間の漢字テストを実施している。その用紙の下にコメントを書く欄を設けた。漢字テスト終了後に「今日のコメント」と

■ 図1 ある日のお題(建築科の生徒へ)  
「本校に来た目的は?」への回答



して「昨日寝た時間は?」「スマホ代は誰が払っているの?」「今朝の親子の会話は?」等の「お題」を出している。毎回実施していくと生徒の回答から、夜遊びをしているようだ、友達がいらないようだ、苦勞しているようだ、元気だ、等の様子が分かってくる。「不安要素」を抱える生徒達を気をつけて見ていたり、担任や学年主任、学科の先生と情報を交換したりする。廊下ですれ違ったときには声掛けが出来る。日常の教員の注意や態度は重要であると考えている。

#### ③心の地図 今の自分グラフ 作文

もう少し細かい生徒理解にはどうしたらいいかと考えて筆者が考え出したのが「心の地図」というシートである。「バウムテスト」や「エゴグラム」の研修を受け実際に生徒に検査したこともあるが、筆者は、教員としてできるものがあるはずだと熟考した。その結果、自己流ではあるが、A4判の用紙「心の地図」を思いついた(図2、図3)。

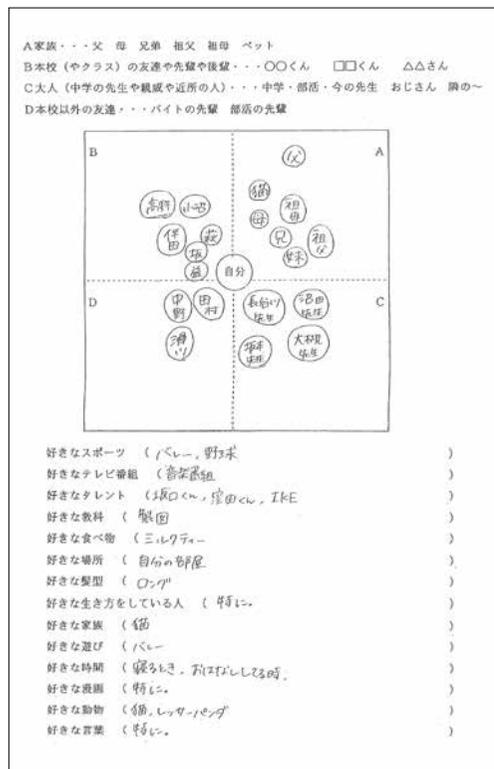
これは、日頃生徒を取り囲んでいる人をABCDのゾーンに分けて書かせる方法である。真ん中は本人とする。自分との距離が近い人は自分の近くに、遠い人は離れて名前かイニシャルを書くというシートである。Aゾーン:家族、Bゾーン:本校の生徒(同級生・先輩・後輩等)、Cゾーン:大人(家

族以外、例えば隣のおじさん、中学校の恩師、親戚のおばさん等)、Dゾーン:本校以外の友人、ワークシートの下には「好きな○」を書かせる。このシートで生徒の日常が解る。

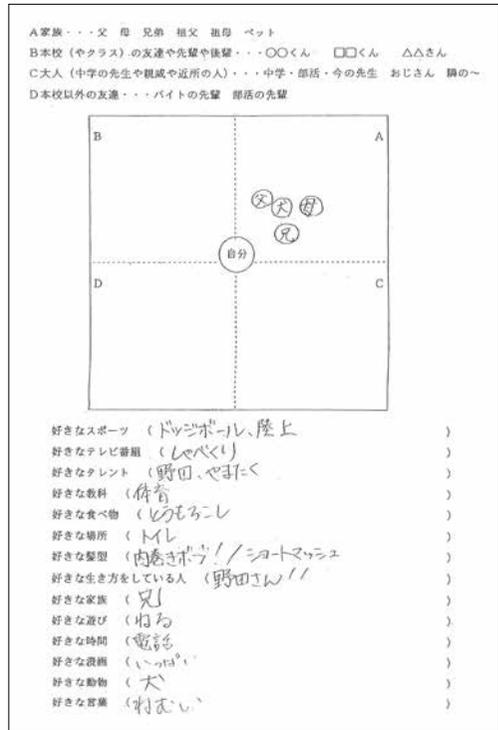
例えば図2 (①) は毎日が生き生きと生活している生徒のシートである。図3 (②) は欠席の多い生徒のシートである。「好きな場所:トイレ」にも驚く。シートから生徒の日常生活が表れていると感じる。生徒の心を知るというには大袈裟ではあるが、教員が気にかけることは出来る。

もう一つ、「今の自分」と「作文(高校生活)」も有効だと筆者は感じている。方法は、(a)「今の自分」(図4)と称してアンケートをとる。質問は「自分に自信があるか」「目標に向かった生活をしているか」などである。そのアンケート結果を点数化して五角形のグラフにして(b)「今の自分グラフ」

■ 図2 心の地図(①)



■ 図3 心の地図(②)

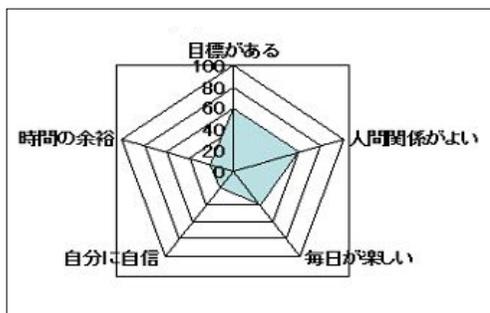


■ 図4 (a)「今の自分」



(図5)と名付ける。そして400字詰め原稿用紙に(c)「高校生活」(図6)の題で作文を書かせる。「今の自分グラフ」と作文を比べながらみると、生徒の胸の内は具体的に理解できたと、生徒理解には有効である。いじめや「死にたい」が分かったこともある。

■ 図5 (b)「今の自分グラフ」



■ 図6 (c)作文「高校生活」



■ 図7 教室掲示用



## 2. 掲示物「カウンセリングってなあに」

「教育相談」「カウンセリング」を広めるにはその言葉を見える場所に掲示することも一案である。自然に生徒・教員・保護者に興味をもってもらえるだろうと考え4月には担任の先生に教室掲示をしてもらっている。

「カウンセリングってなあに？」(図7)には、①カウンセリングとは何か ②申し込み方法 ③場所と時間 ④担当者、などを紹介するようにした。

## II 体制構築期

### 1. 校内の仲間集めと環境整備

校内組織として「教育相談委員会」がある。内規は「生徒指導部、学習指導部、進路指導部か

ら各1名、各学年から1名、及び希望者」のほ  
ぼ6名の構成になっていたが、前述のように機能  
していなかった。100人も職員がいる学校では、  
単独活動してばかりはいられない。同じ志の仲  
間や日頃の生徒との関係を見ていて教育相談に  
理解があるように感じる先生方に「どうですか  
か」と聞いて同志を集めた。特に「希望者枠」に  
目を付けた。養護教諭の先生は教育相談には欠  
かせないメンバーになると思い希望者枠で入っ  
て頂いたり、以前の研修会で会ったことのある新  
任の先生を誘った(現在2017年は希望者枠が  
増え、12名の構成になっている)。

また、本館1階にある教育相談室が物置場所  
になっていたので環境整備も必要だった。カー  
テンがよれよれであったので買い換えてもらい、キ  
ャビネット、テーブルと椅子を整え、「相談中」と  
「入室OK」の札を作り、植物を置き、環境整備

をした。

## 2. 「教育相談委員会」の開催

「教育相談委員会議」を定期的に関くべきだと考えた。「委員会開催のおしらせ」の通知を1週間前にメンバー一人ずつに配った。

また本文に書くことはためらわれたが、委員会を開くときには必ずコーヒーを用意した。明治大学の諸富祥彦先生の講演会で聞いた「お菓子作戦」がヒントになっている。教員同士の協力が大切であり、一人では疲弊してしまう時代である。コミュニケーションを図るためには、穏やかな雰囲気は欠かせない。

最初の委員会では、教育相談の方法（受容や傾聴等）について触れた。委員会の先生たちが生徒と面談する時のために記録簿を作った。A4判の記録用紙を次のように作成した。

### 相談記録用紙

【#】氏名、学科、学年、組、出席番号、性別、生年月日、相談担当者名、面接日、場所、時間、主訴、面接内容

次回の予約（面接日、時間、場所、担当者名）

また、担任の先生に「気になる生徒」を記入してもらい一覧にした用紙を配付して㊟として委員会内では共通理解を図ることにした。「気になる生徒」として4月に担任に提供を呼びかけているのは、以下である。

学校を休みがち、教室に居場所がない様子、保健室によく行く、図書館によく行く、いじめを受けている様子、からかわれている様子、引きこもりがち、友人があまりいない、か

んもく（口を閉ざして黙ってしまうこと）、虐待を受けているかもしれない、摂食障害、排泄障害、何か悩んでいるようだ、家庭の問題があるようだ、行事の時にひとりである、その他

■ 表2 教育相談委員会の時期と内容

回	時期	内容
第一回	4月初旬	委員長・副委員長を選出
第二回	4月下旬	年間計画について 気になる生徒について情報交換 5月のカウンセリング通信の発行について
第三回	6月中旬	研修会の準備 教育相談部総会・講演会の報告 気になる生徒の情報交換
第四回	7月中旬	教育相談講演会の反省 9月のカウンセリング通信の発行について 気になる生徒の情報交換
第五回	10月中旬	夏季研修会の報告 気になる生徒の情報交換
第六回	12月下旬	1月のカウンセリング通信の発行について 地区研修会の報告 気になる生徒の情報交換
第七回	3月下旬	4月のカウンセリング通信の発行について 「教育相談年報」の発行について オリエンテーション用「教育相談の案内」の編集と発行について 気になる生徒の情報交換 1年間の反省 その他

※ 定期的な委員会は表の通り。  
臨時で行う委員会（生徒指導上の問題、関係者会議等）は省いた。

### 3. 1年間の予定・計画

教育相談関係の年間計画は教務部に連絡した。原案を筆者が立てて委員会で検討した。主に広報関係や研修会、委員会についてである。学校行事に組み込ませることが大事であると考えた。

### 4. 広報活動としての教育相談

#### 「カウンセリング通信」の発行

##### 『カウンセリング通信』のねらい

本校では、現在「カウンセリング通信」を全校生徒対象に年5回発行している。発行を決めた時点で、「カウンセリング通信」発行のねらいを明確に考えた。

本校で生活する生徒達が、担任や学年団の先生や学科、教科の先生以外に、相談できる先生がいるのだと言うことを知ってもらうことが第1のねらいである。つまり本校の教育相談活動の周知である。

そして、青年期の心理及び発達課題や現代の高校生の精神保健面でのサポートについてわかりやすい言葉で知らせる、つまり情報発信を第2のねらいにした。

##### 『カウンセリング通信』のネーミングと対象

通信の名前については、「教育相談通信」がいいか「カウンセリング通信」にするか、または別の名前、例えば「ラポール」「ハート通信」などにするか迷ったが、「カウンセリング」と言う言葉を使ってみた。

これは生徒達がカタカナに慣れていること、スクールカウンセラー（以下「SC」と表記）という言葉が学校に根付き始めているこ

と、「カウンセリング」という言葉がマスコミ等を通じて現代用語として定着していることが理由である。

また、広報活動の対象は生徒にした。保護者や教員対象の通信もあるだろうが本校の場合は生徒対象の通信である。ただし、当然教員や保護者も意識した。教員にも回覧している。

最初に作ったときには、各クラスに1枚を配付した。掲示を担任に依頼した。しかし、授業で教室に行くと、掲示されていない。

そこで次年度には全校生徒に配付を試みた。しかし「全校生徒に配付する必要があるのか」という教員からの声もあり、その次の年には、裏面に「教育相談申し込み用紙」を掲載することで「紙の無駄だ」という声が出ないように工夫をした。

■ 図8 「カウンセリング通信55号」(2017.4)



■ 表3 2016年度発行の「カウンセリング通信」での内容・留意点・意義役割

号・時期	対 象	内 容	留 意 し た 点	※	※※
50号 2016/4/6 始業式	2年生 3年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 進級おめでとう充実した高校生活を</li> <li>● 新しい挑戦（自分の知らない自分）</li> <li>● こんなことはない？『ストレスをためやすいチェック』</li> <li>● 教育相談の利用方法</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2・3年生へのメッセージ</li> <li>● 簡単な心理テストを入れ、全ての生徒が一度は通信を読むことに配慮</li> </ul>	③ ④ ⑤	(1) (3)
51号 2016/4/7 入学式	新入生	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 新入生おめでとう 良い友良い師良い先輩に出会ってください</li> <li>● 『詩 始まる 作つく（作詞家）』</li> <li>● 本校の教育相談の利用方法</li> <li>● 学校以外の教育相談機関</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 入学したばかりの生徒にメッセージ</li> <li>● 新入生がカウンセリングが必要な生徒が多い学校に入学したという印象を持たないように配慮</li> <li>● 本校教育相談や外部の相談機関の紹介</li> </ul>	④ ⑤	(1) (3)
52号 2016/5/2	全校生	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育相談週間があります</li> <li>● スクールカウンセラー12回来校 カウンセラーの紹介</li> <li>● 水工教育相談委員会の先生メンバー紹介</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 今年の教育相談担当の先生の紹介、生徒に親しみやすくPRすることを配慮</li> </ul>	⑤	(1) (3)
53号 2016/9/1	全校生	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 秋の教育相談週間が始まります</li> <li>● 3年生頑張り 面接で緊張する人</li> <li>● 先生の勉強会</li> <li>● スクールカウンセラーの来校日</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● いじめについて教員も一丸になっていることをPRする</li> <li>● 3年生の就職試験の緊張緩和のアイデアを紹介</li> </ul>	① ③ ⑤	(1) (3) (4)
54号 2017/1/10	全校生	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2017年はどんな年になる？</li> <li>● 伊藤美誠選手の作文『そして世界の頂点へ』</li> <li>● 寄稿『なぜものづくりをするのか？』鈴木則夫副校長</li> <li>● スクールカウンセラーの来校日</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 今年の希望や夢を描けるような内容であることを配慮</li> </ul>	① ② ⑤	(1) (2) (3)

毎回、裏面には「相談申し込み用紙」を印刷して生徒が相談を申し込めるようにした。

※ 國部(2009)の言う発達課題の①～⑤(①学業、②進路、③性格・自立、④社会性・人間関係、⑤健康)。

※ ※小島(2009)の言う学校だよりを出す意義・役割の(1)～(4)[(1)情報公開(2)啓発活動(3)PR(4)協力・連携へのメッセージ]のいずれに属するか、分類した。

その後毎年、両面印刷の形にして生徒全員に配付している。現在は「教育相談の申し込みは簡単です。この用紙の裏面を使いましょう。委員会の先生の名前と顔は本館一階の教育相談室前に掲示しています。その先生に渡して下さい。顔が分からない場合

は、担任か保健室の先生に渡して下さい。または相談室前のブルーの箱の中に入れて下さい。カウンセリングの担当者から直接連絡が来ます。呼び出しの放送はしません。」という文章を入れるようにしている。また、内容にも気を使うようにした。

## 『カウンセリング通信』の内容

小島(2009)は「学校だよりには、保護者および地域住民その他の関係者に、教育活動や学校運営の状況に関する情報を提供する役割がある」と述べている。また「学校だよりを出す意義・役割を、次の4点」としている。

(1)情報公開 (2)啓発活動 (3)PR (4)  
協力・連携へのメッセージ

学校の通信活動について、岩上・横山(1998)は、「学校の教育目標なり教育方針をふまえての通信活動であるべき」と述べ、「子供を支援する材料、支援する方法などを保護者や地域社会の人々に提供することに発行の意味がある」とし、「支援する内容や方法は立場によって違うが、広い立場、共通の立場で、そしてしなやかな考え方で発行していくこと」を勧めている。

また、國分康孝(2009)は教育カウンセリングが扱う子どもの発達課題を5つあげる。

①学業、②進路、③性格・自立、④社会性・人間関係、⑤健康

これらは、「カウンセリング通信」の内容はどうすべきか、というヒントになると考えた。実際に、昨年度本校で発行した『カウンセリング通信』を振り返ると表3のような内容になっている。

発行して分かったことは、「カウンセリング通信」は、広報活動の一環として欠かせないということ、生徒への広報という意味合いはもちろんであるが、大規模校では教員に教育相談を理解してもらう役目もあること、であった。

## 5. 職員研修会

いじめによる自殺が全国的に話題になってから、校内研修会を実施するよう県からの通達があった。講師をどう依頼するか管理職と相談したが、高教研教育相談部役員として研修会の担当をしていたことで、存じ上げている先生に講師を依頼した。時期を7月の期末考査の初日にして毎年実施している。委員会で計画→職員会議にて要項を配付→研修会実施→事後アンケート→アンケート結果の公表、という形で実施してきた。

課題は、参加する教員が毎年ほぼ同じ方々である点である。年1回実施していたが、昨年度からは2回実施している。今年度の7月に行った研修会(演題:いじめ事件を振り返って-いじめと発達障害-)の事後アンケートに寄せられた先生方の感想は表4の通りである。

■ 表4 いじめ職員研修会 アンケート結果

- 発達障害といじめは大きく関係があると思っていました。自殺の後はそのことが言えなくなるのが問題、と思いました。
- 生徒の成長にも問題がある場合があることを改めて認識しました。
- 生徒をみる「視点」をいろいろ持たないといけないと感じました。
- いじめに関する学校の体制を再確認してみたくなった。
- 取手のいじめの話は事実関係があまり明らかにされてなく、話し合っただけと言われても充実した話し合いも出来なかった。
- いじめ問題はとても難しいです。大人の社会でも教育者の社会でも「いじめ」と

感じられることを近年多々感じます。教員免許更新の制度では特に強く感じます。

- 1時間では少ない気がする。資料がしっかりされているので、時間をかけて聞いてみたい。
- うつ→自殺が発達段階や発達障害との関連があることが理解できました。
- 物事をそれぞれの立場で多面的に見るのは難しいと感じました。やはり、日頃の関係性の積み重ねなんだと思いました。等

### III校内浸透期

#### 1. 教育相談担当教員の写真の掲示

教育相談室の前に「今年度の教育相談委員会のメンバーは私たちです」という集合写真を貼りたいと考えた。同様なことを「カウンセリング通信」で発信したいと思った。目的は、①校内に担任以外に相談担当の先生がいること、②その先生達の顔の認知、である。大規模校の生徒は自分が関わる先生以外、顔も名前も分からないからである。

■ 図9 教育相談室前 掲示板の様子(2017年度)



しかし、この提案をしたときに、顔写真を通信に載せることや、校内に貼り出すことに抵抗感のある先生方がおられた。そこで通信には委員会の先生の名前だけ載せて生徒達に紹介した。

写真については何度も、先生方に提案をした。現在は教育相談室の前に「今年度の委員会の先生方の紹介」の写真が出せるようになった。また、「カウンセリング通信」にも顔写真と生徒への一言メッセージを掲載している。このことで効果が出た。つまり、この先生なら相談しても良いのだと思ったという生徒が、「カウンセリング通信」の裏面の「相談申し込み用紙」を直接手渡す、という現象が起こるようになった。

#### 2. 「教育相談年報」の発行

ある大学の「カウンセリング年報」というものを見たことがきっかけで、「年報」というものはこのような活動には良い報告書となると考えて2007年から作成することにした。

前述の、小島(2009)の言う「広報の目的(1) 情報公開(2) 啓発活動(3) PR(4) 協力・連携へのメッセージ」のすべてに属していると考えられたからだ。ちなみに「目次」は下のようになっている。

#### 『教育相談年報』目次

- 1 相談件数の報告  
(月別延べ人数と内容)
- 2 広報活動の報告
- 3 研修会の報告
- 4 委員会の報告
- 5 本年度のメンバー
- 6 本年度の通信

年報の「今年度の相談者数の合計」を昨年度と比べて、“今年が少ないから今年良かった”

と評価する教員に出会い、「合計欄」を載せないことにした。筆者は教育相談は数では評価できないと考えるようになってきたからである。先生方の温かな応援はありがたかったが、教育相談は件数だけではないと感じる。「1件」と「10件」を比べたら確かに「1件」のほうが少ない。しかし「重い重い、たったの1件」も教育相談にはあると思うのだ。

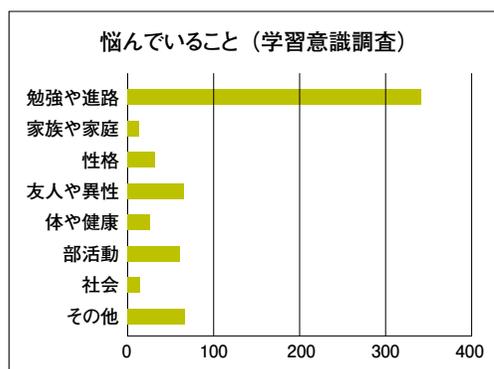
### 3. 全校生徒の「悩み調査」

本校生徒が何に悩んでいるか、客観的な資料を得ることは大切だと考えた。筆者が学習指導部長になった時（2011～2015年）に、学習や生活に関するアンケートのほかに「悩んでいること」の項目も追加して全校生徒にアンケートをとった。すると、本校生徒の悩みの第1位は「勉強や進路」であることが分かった。そして学年が進むに従ってその悩みが増加することが分かった。その後、毎年、悩み調査の結果は同じような結果が出ている。

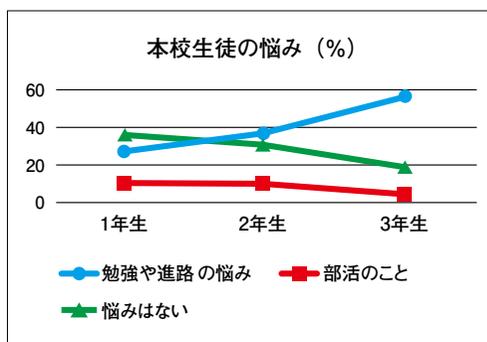
また、生徒との会話や面接で、筆者が多くの生徒に共通していると知った本校生徒独自の悩みがある。

それは「学科の悩み」である。専門教科を十分

■ 図10 悩んでいることは何ですか(人)(2013年度)



■ 図11 学年別 悩みの中身(2015年度)



に理解しないで入学してしまったために「この学科がこのような勉強をするとは思わなかった」という生徒がかなりの数になる。また、第1次志望の学科に合格出来ず、第2次志望の学科に入学した生徒にもその悩みがあることがわかった。しかし大部分の生徒は自然に適応していく。少数の生徒は専門教科に興味を持たない3年間を過ごすことになるので支援が必要となる。

「情報技術科」と「情報処理科」の区別を理解しておらず、商業高校の情報処理科の内容を実は希望していたことに気がついた者もいた。また「農業土木科」と「本校の土木科」の説明を細かく受けなくて中学時代の偏差値により振り分けられて入学した者もいた。

入学したら、あるクラスでは40人の中でたったひとり、自分だけが女子だったと落胆している女子生徒や、少数で構成される女生徒集団の人間関係に悩み、不登校になる女子生徒など、女生徒の相談（本人からや担任からの相談）は今も頻繁にある。

### 4. 「教育相談週間」を作る

「教育相談週間」を春と秋に2回実施することを思いついた。5月のゴールデンウィーク後と9月の夏休み後は、生徒が学校不適應になりやすい時

期でもある。放課後、教育相談室を一定時間開けて教育相談委員会の教員が待機していることにより、生徒の相談を受け入れやすい機会を作る目的である。期間は毎年5月のゴールデンウィーク後の2週間と、9月始業後の2週間の2回である。

また、委員会のメンバーになっても1年間生徒の相談を受けず教育相談室に入らないで終わってしまう先生方がいた。改善策はないかと考え、当番制なら教員が相談室に入ってくれることもできると考えた。結果は、10年間のうちの春の2週間と秋の2週間で33件の相談があった。そのうち筆者が扱った相談は28件である。当初は、生徒が相談に来るだろうかと危ぶみながら待機していた。しかし「カウンセリング通信」の裏面の「申し込みの用紙」を丁寧に切り取って持って来る生徒がいた。たとえ少数でも、教育相談を必要とする生徒がいるのであれば、この「週間」は大事であると考えられる。

## 5. オリエンテーション

入学式の日にリーフレットを配付している。内容は以下の通りである。

### 豊かな高校生活を

- 思春期・青年期の心の嵐について
- 教育相談（カウンセリング）とは何か
- 申し込みの方法
- 教育相談室の場所

これらも前述の小島(2009)の唱える(1)(2)(3)を意識したものである。

そして、新入生オリエンテーションの際に、筆者は巨大な名札をぶら下げて体育館に赴き、「教育相談の紹介」をしている。エンカウンター（主にジャンケン自己紹介）を交えながら高校生の心理

についてや教育相談の受け方などの話をしている(図12)。「オリエンテーションのジャンケンの時に、初めて隣の人と話をして友達になった」と後日、1年生に言われることがあり、入学して間もない時の「エンカウンター」は貴重であると感じる。

■ 図12 オリエンテーションの様子



## 6. 委員会の教員を誘って外部機関研修

筆者が高教研の役員の時には、水戸地区の機関や施設見学を企画した。そのために、本校の先生方に研修の参加を呼びかけて一緒に参加することが出来た。21年度は水戸地方裁判所見学、22年度は児童相談所見学をした。その後は筆者が役員を辞め、見学会が講演会になり、関係機関見学はなくなった。

## IV活動安定期

### 1. 緊急時のチーム援助

「学校心理学」を提唱する石隈(1999)は、「日本における心理教育的援助サービスの実践として代表的なものが『学校教育相談』である」として、「日本の学校心理学が支える心理教育的援助サービスは、一人ひとりの子どもの学習面、心理・社会面、進路面、健康面に焦点を当て、3段階の援助サービスがある。…入学時の適応、学習スキル、対人関係スキルなどすべての子どもを対象とする一次的援助サービスと、登校し

り、学習意欲の低下など一部の子どもを対象とする二次的援助サービスと、不登校、いじめ、LD、非行など特定の子どもを対象とする三次的援助サービスの3段階である」と説く。

つまり新入生へのオリエンテーションは1次的援助サービスである。4月に「気になる生徒」として担任に情報提供をしてもらい委員会で話題にしている生徒達や、筆者が「心の地図」等で注意して継続的に見守っている生徒は2次的援助サービスに包括される。緊急で対応する必要が出て来る生徒が毎年いる。これが3次的援助サービスである。いじめ、中学の同級生の死により動揺の激しい生徒、リストラをしたと筆者に携帯電話してくる男子生徒、交際していた女子生徒が交通事故死した男子生徒、災害の被害にあった生徒などがこれにあたる（事例はプライバシー保護の立場から事実と表現を変えた）。その時は、石隈の言う「作戦会議」が要る。本校では「関係者会議」と称して会議を行っている。内容は、

### 1 現状

担任からの経過報告、副担任や学科の先生からの観察の様子、部活動の顧問の観察、保健室の様子、教育相談の係から、状況に応じて保護者や管理職の同席。

### 2 これからの対応

(※ アンダーラインは出席者)

上記の囲みの通りで、司会は筆者（教育相談委員長）か学年主任であることが多い。

特に、非常時に特定の生徒の見守りが必要な場合は委員会の後、職員に説明してプリントを配付する。また、職員集団にも動揺が生じるような問題が起こる時もある。そのような場合も委員会の後、プリントを配付して説明し協力を依頼する。

## 2. 組織的教育相談活動

震災後は本校にSCが年に8～12回訪れるようになった（国・県の予算）。それまで日の当たらないポジションであった教育相談がにわかに注目され「SCを活用しなければならない」必要性が出てきた。SCの生徒面接や助言を頂いたり研修会を開催することで教育相談の理解が校内で深まる作用があったと感じる。また、教員同士の連携にもなり、それは教員の意識にも良い影響が出た。

## 6 仮説の検証と成果

### 仮説①について

教育相談体制が出来上がり、校内に浸透した。1次的援助サービスによる見守り→観察やアンケートで2次的援助サービス→その中の希望者や必要と思われる生徒に3次的援助サービス、と連動した教育相談体制が出来て機能性を発揮している。通信は57号までになり広報活動の継続の大切さを感じる。生徒指導の件数が少なくなったことも成果と言えるのではないだろうか。委員会のメンバーは希望者枠に6名が集まり現在12名になった。

### 仮説②について

「少数ではあっても救える生徒がいるのではなかろうか」と考えたことは今思えば「3次的援助サービス」である。この心構えは正しかったと感じる。大きな事件が何回か起こり、「関係者会議」は必要に迫られた。SCの配置も効力になった。生徒からの相談申し込みのほかに担任や保護者からの依頼を受け、組織的な活動が出来ようになった。

## 7 考察

- ① 振り返ると、筆者の行ってきたことは一つの「組織論」の実践である。組織論としては、個人行動は称賛されるべきではない。今津（2015）は『『個業』から『協業』へと切り替えるべき』と言うが協働で得たものはとても大きい。
- ② たとえば教育相談関係の「指定校」になり、上意下達の形で体制作りが行われれば、もっとスムーズに校内に浸透しただろう。しかし、これまでの多くの事業がそんな形で校内に作られ、指定校の期間が過ぎると形骸化してしまうということもたびたび見て来た。一教員が必要を感じて単独活動をし、徐々に校内に体制が構築されていくのとは別物だが筆者のような試み？も興味深いのではないだろうか。
- ③ 相談対象の生徒に「集団からの孤立」がある。青年期の友達の重要性を筆者は現場で感じている。また筆者は司書教諭なので教育相談の必要な生徒がしばしば図書館にいる光景を見る。生徒にとって「居場所」があることがどれほど心の安定に繋がるかを感じる。図書館の新たな機能ではなかるうか。
- ④ 教育相談に興味や関心を持つのは、文系教科の教員に多いと感じている。体育及び理数系教科の教員の方が「心」とか「寄り添う」ということさいまに猜疑的な気持ちになられるような印象を受ける体験をした（全ての先生に該当する訳ではない）。おそらく、専門教科の持つ特性に関係があるのだろうと推察する。

## 8 課題

- ① 2001年度以降「SC配置」という全国的な現象があった（本校は2011年度～）。その後、各学校には変化が起こった。それまでは筆者のように「学校心理士」「教育カウンセラー」等の資格を取って研修をし、生徒の相談を担当する教員が存在していた。

しかし学校現場に「臨床心理士」資格を持つSCが心理専門職として配置された後は、前述した資格保持者の教員に生徒の相談を依頼してくる教員が減った。特にこれは若い先生方に多いと感じている。生徒の詳細まで解らないSCに心の問題が丸投げされ、時にトラブルになる場合があると聞くことがある。前述のような教員は、SCと生徒の面接予定を調整したり担任や授業担当者に連絡するコーディネーター役や、相談関係の立案・運営役等と変化した学校が多い。
- ② 大多数の学校にはSCが常駐されていない。このような中、大きな問題が起こった時に、SCを呼ぶ時間の余裕はない。即、現場の教員が動かねばならない。管理職や関係学年、学科や保護者と連携し、解決までの道筋をつけるためにすぐに動ける、教育相談やカウンセリングに経験のある教員は必要だと思う。SCはあくまで外部の人という意識が現場にはあり「3次的援助サービスのその後」という印象である。
- ③ 筆者が本校を退職した後に今の体制がどうなるか不安はない。現在の副委員長に全てを委ねるべく今年度1年間を掛けて申し送りをしている。筆者は茨城県NIE

アドバイザーであるため広報作成は苦を感じない。しかし全ての教員がそうではないし、筆者の苦手分野の理数・情報に秀でた教員が本校には多いから今後はその特性が活用できるだろう。

委員会の中を大きく3つの係分担（(a)広報統計係 (b)研修係 (c)相談係）にすることを提案したいと考える。今になって振り返れば、筆者は全てを行っていたが、多大なストレスを抱えたり、時間がかかったことを考えると、コミュニケーションと係分担と協働は必須だと考える。

- ④ 現在、本県では退職直後の「学校心理士」の教員はSCの職務に就けない。山崎（2016）が「カウンセラー資格の位置づけや職能団体の制度設計などの検討は重要な課題である（カウンセリング研究第49巻第2号）」というように、多種の資格の整備は、国家的な規模としての課題ではなからうか。

## 9 おわりに

本文の中に、解決までに非常に苦勞した事例、手を取り合って保護者や生徒と喜んだ成功事例等を書きたい気持ちは強かったが、関係者が読めば生徒が特定できるような相談や事件のため守秘義務を貫き、執筆は控えた。

大事なのは力量か、資質か、自問自答し続けている。15年間の総括として筆者は今、教員の人格が最も大事であると思っている。

本校で筆者は、教育相談委員長を長年、務めている。また、国語科教員として授業・課外・進学指導、茶道部顧問としての指導、図書部長としての図書・視聴覚活動（毎日昼休みに、新

聞第一面の記事を生徒が校内放送するNIEの指導）など、多数の生徒や教員と関わり忙しい生活を送っている（過去には当然、担任の仕事にも携わっていた）。教育相談だけを担当しているわけではないことが、今思えば功を奏したように思うのである。

最後に、体制作りや相談活動に理解を示し協力してくれた多くの職員の方々と、相談を通して出会った生徒や保護者に感謝したいと感じている。また、「課題」に書けなかった課題として筆者の退職後の人生もあることを記し文を結びたい。

### 参考文献

- 石隈利紀（1999）  
学校心理学 誠信書房  
今津孝次郎（2015）  
教師が育つ条件 岩波新書  
岩上薫・横山健次郎（1998）  
学年・学級通信の作り方講座 文教書院  
大村はま（1986年）  
国語教室通信 共文社  
小倉 広（2011）  
任せる技術 日本経済新聞出版社  
桑原知子（2001）  
教室で生かすカウンセリングマインド 日本評論社  
國分康孝（1998）  
育てるカウンセリングが学級を変える 高等学校編 図書文化社  
國分康孝（2009）  
教育カウンセリング概説 図書文化社  
小島 宏（2009）  
学校だより「巻頭言」の書き方&文例 学事出版  
佐藤 徹（2010）  
教職論—教職に就くための基礎・基本 東海大

学出版会

高野清純(2000)

事例発達臨床心理学事典 福村出版

中尾安次(2000)

不登校・家庭内暴力・病弱児のQ&A ミネル  
ヴァ書房

中野 明(2010)

ピーター・ドラッカーの「マネジメント論」がわか  
る本 秀和システム

日本カウンセリング学会編集委員会(2016)

カウンセリング研究第49巻第2号 日本カウ  
ンセリング学会

油布佐和子(2009)

教師という仕事リーディングス日本の教育と社  
会 日本図書センター

渡辺三枝子(2000)

学校に生かすカウンセリング ナカニシヤ出版

# 「科学課題研究」を中心に据えた 女子の理系進学支援 教育プログラムの開発



ノートルダム清心学園清心女子高校 代表  
南九州大学教授

あきやましげはる  
**秋山繁治**

---

1956年生まれ。2011年広島大学大学院理学研究科生物科学専攻、後期博士課程修了。博士(理学)。  
1984年から2016年11月まで、ノートルダム清心学園清心女子高等学校教諭。同年12月から南九州大  
学教授。現在に至る。連絡は、宮崎県都城市立野町3764番地1の同大学都城キャンパス 教養・教  
職センターまで。

---

【カリキュラム・学校づくり】

女子の理系進学支援

10月27日夜、東京の学習院大構内。清心女子高校生命科学コースの1、2年生がパネルに研究発表のポスターを貼っていた。同女子高が2009年から毎年1回全国に呼びかけて実施している発表者が女子だけの「集まれ！理系女子・女子生徒による科学研究発表交流会」の準備だ。発表に参加するという同高2年光畑夏奈さん(17)に科学研究の魅力について聞くと、「試行錯誤を経て正



発表資料を前に生徒と話す秋山さん(左)  
(10月27日、東京都豊島区の学習院大で)

カリキュラム・学校づくり ノートルダム清心学園清心女子高校(岡山県倉敷市)

しい実験方法を見つけたときの喜びが大きい」との答えが返ってきた。

日本は先進諸国に比べ理工系分野の女子大学生や女性研究者の割合が低い。清心女子高はこうした状況を打開しようと、06年度に生命科学コースを開設。10年以上にわたり、女子生徒の理系進学を支援するカリキュラム開発に取り組んできた。

同コースでは、マレーシアや沖縄の大学と連携し、多様な自然体験ができる野外実習を実施。森林の二酸化炭素吸収量の比較研究に発展した。一連の取り組みのかいあって、研究の道に進む卒業生が増えている。

コース開設に尽力した元同高教諭で南九州大(宮崎県)教授の秋山繁治さん(61)は「高校教育の可能性を他校にも伝えたい」と喜ぶ。

(堀内佑二)

佐藤学・学習院大学教授「学外の研究者とも連携し、大学レベルの科学教育を実現している。また理系の女子高校生ネットワークも全国規模で形成するなど、女性科学研究者育成を目指す卓越した実践だ」

【最優秀賞選評】

佐藤 学 学習院大学教授

「学外の研究者とも連携し、大学レベルの科学教育を実現している。また理系の女子高校生ネットワークも全国規模で形成するなど、女性科学研究者育成を目指す卓越した実践だ」

## 1 はじめに

岡山県内の私立高校は24校あるが、今や“女子校は2校のみ”になってしまった。女子校は、全国的にみると公立の伝統校と女子大に併設された学校、中高一貫進学校は残ってはいるが、マイノリティーでしかない。男女共同参画を目指す社会で、共学校を標準とする時代に、女子校が存在する理由となるような役割はあるのだろうか。“男は仕事、女は家庭”を支える女子教育では、現代社会のニーズには応えられない。女子校であり続ける新たな存在理由が求められる時代が到来している。

日本の合計特殊出生率は2005年に過去最低の1.26を記録した。少子化と高齢化が経済に大きな影響を与えている。原因の一つは女性が子どもを産まなくなったことだが、女性が子どもを産めば解決するような簡単な問題ではない。その原因は、ライフスタイルの変化やそれを支える社会サービス、医療技術の進歩などが複雑に絡み合っているからである。ただ言えるのは、女性が社会構造に大きな変化を与えている時代になってきたということである。そして、それをポジティブにとらえれば、女性の力を取り込んだ社会システムの構築が必要とされる時代になったと考えられる。これまでの「女性の才能を伸ばすことを制限している」「子どもを産み育てにくくしている」社会構造に風穴を開けるような変革が必要で、それを下支えするのが学校教育であると考えている。

女子校の構成者は女子生徒だけである。生徒会活動や実験・実習などすべての教育活動において女子がリーダーシップをとらざるを得ない。そのことを、女子校はリーダーシップを養成するに適した環境と考え、その環境を生かした教育

カリキュラムを開発すれば、これまで科学技術分野に占める女性の割合が極端に少ない日本において、女子生徒の理系進学支援のモデルができると考えた。<sup>1)</sup>

## 2 背景

ノートルダム清心学園清心女子高等学校は、1886年創設のフランスのナミュール・ノートルダム修道女会を母体とした中高6年一貫教育の女子校である。県内に姉妹校として、幼稚園、小学校、大学、大学院がある。進路は、1980年代初めまで、姉妹校を中心にカトリック系大学の文系学部への進学が大きな割合を占めていたが、時代とともに理系を中心に進学先が多様化し、その状況に対応することが必要となり、1986年にコース制を導入した。大学進学という出口の進学実績を上げることを意図したもので、当時、多くの私立高校で導入されている能力別クラス編成的なものであった。国公立大学進学を目指した「特進コース」と私立大学への進学を目指した「進学コース」を設定した。しかしながら、そのコース制は魅力にはなりえなかった。

1990年代後半になって、私学では校名変更・共学化、公立では学区制の変更に先立っての教育課程変更などを含む「特色づくり」の試みが話題になり、マスコミでも大きく取り扱われた。本校でも、これまでのコース制に換わる教育内容を起案するためにプロジェクトチームを組織し、これまでの教育内容の再検討を行い、進路実績という成果を目的としたものではなく、“どのような教育内容が新しい時代に求められているか”という視点で教育内容を再構築した。その結果、2006年度から「生命科学コース」、「文理コース」からなる新たなコース制を導入した。「生命

科学コース」、「文理コース」の新設は、「どのような教育内容が新しい時代に求められているか」という視点での教育改革であり、さらに具体的な女子校の社会的な使命として、「どのような教育内容で女子の理系進学を支援できるか」の問いに答えることが最初の課題だと考えた。2006年文部科学省SSH事業に、研究テーマ「生命科学コースの導入から出発する女性の科学技術分野での活躍を支援できる女子校での教育モデルの構築」で私立女子校として全国で初めて採択していただいた。そして、「科学課題研究」を中心に据えたカリキュラム開発に着手した。

本編では、2006年度から2016年度までの取り組みを中心に報告したい。なお、教育実践については、文部科学省スーパーサイエンス事業（1期2006年度から5年間・2期2011年から5年間）の助成を受けて実施してきたものである。現在、2016年度から3度目（3期5年間）の指定を受け、新たな課題に取り組んでいる。

### 3 研究の目的

本学園前理事長シスター渡辺和子の著書『置かれた場所で咲きなさい』（2012年発行）が1年で100万部を突破し、今では200万部をも突破している。本の帯には、「人はどんな境遇でも輝ける」とある。シスターは、人は置かれた状況はそれぞれ異なっている、今の立場で前向きに生きてくださいというメッセージを贈っている。このような本が爆発的に売れるということは、逆に言えば、今の社会に生きる多くの人々が「今の置かれた場所でしっかり生きてください」という癒やしのメッセージを求めている状況にあるということだと思う。しかしながら、これから今まさに人生を切り開こうとしている世代（若

い女性＝女子生徒）にとって、「どんな境遇でも輝ける」とは言っても、より納得できる場所で、自分の才能を生かせることが理想であり、もし女性であることで、才能を伸ばすことが妨げられたり、職業が制限されることがあるとすれば好ましいことではない。

文部科学省第2期科学技術基本計画（2001年閣議決定）から女性研究者支援が盛り込まれているように、今の日本の学校教育を取り巻く社会背景を考えると、将来の進路を科学分野に求めてリーダーとして活躍できる女性を育成する新たな教育システムが必要だということがわかる。本研究では、男女共学への移行が趨勢になっている状況にあって、あえて「女子校」の新たな可能性を求めて理系進学支援のためのカリキュラムの開発に挑戦した。<sup>2)</sup>

## 4 新たな教育システムの構築

改革の第一歩は、「生命科学コース」の開設であった。当時は全国的に薬学部新設が続いた頃で、女子生徒の医療分野への進学が加速していることを追い風にして、女子生徒の理系進学支援をコンセプトに、まずは生命科学分野からということで、「生命科学コース」が誕生した。そして、従来のシステムから発展させたコースを「文理コース」とした。次の図は2015年度の教育内容を示したものである。

教育内容を『知識』、『体験』、『研究』の三つの構成に分け、『知識』と『体験』で身につけたものを最終的に『研究』に集約するという形でカリキュラムを構成している。そして、①ロールモデルの提示、②国際性の育成、③直接体験の重視、④リーダーシップの育成の四つを盛り込んだ科目を導入した。

# 清心女子高等学校 理系進路選択 支援システム

知識 体験 研究

基礎学力の育成 英語・数学・理科の授業時間数を重点配分



『知識』では、課題研究に必要な知識や技術を得るための科目として「生命科学基礎」、「生命」、「実践英語」を設定した。

『体験』では、多様な自然体験ができるように「自然探究I」（鳥取大学教育研究林「蒜山の森」での森林実習）、「自然探究II」（琉球大学熱帯生態圏研究センター瀬底施設と座間味島での講義・実習）、自然探究A（マレー半島にあるツン・フセイン・オン・マレーシア大学、ボルネオ島にあるマレーシア・サバ大学と連携した環境学習プログラム）を設定した。

『研究』では、研究課題別にグループに分けて取り組む科目として「課題研究」を設定した。

## 5 授業「生命」の誕生

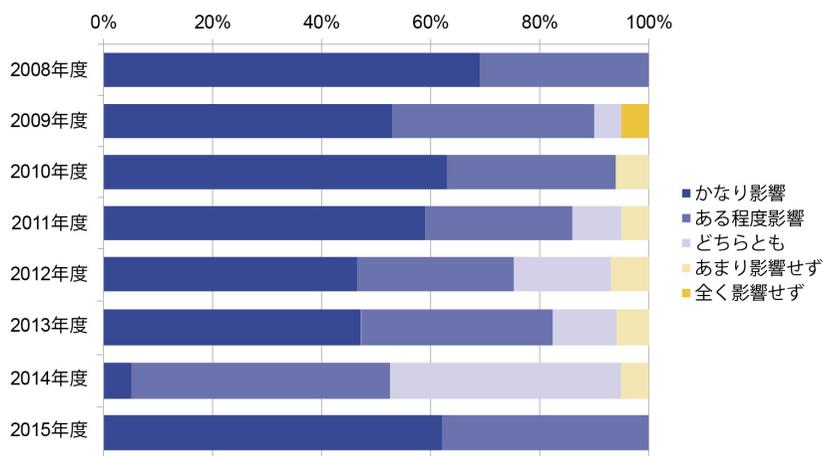
「生命科学コース」を設定する前の段階で、女子教育には性教育が重要と考えてホームルーム活動や総合的な学習の時間を使って実践してきたという経緯がある。性教育は、「不純異性交遊」として生徒指導的に扱われた時代、女子生徒だけを対象とした月経指導教育で扱われた時代を経て、セクシュアリティ教育（人権やパートナーシップなどの人間関係を学ぶもの）へと変遷してきた。今や「性」という枠組みではなく、“「生き方」を考える材料を提供する”ための教育が必

要とされる時代になっている。そのような状況を踏まえて、1998年に総合的な学習の時間の科目として授業「生命」を設定した。<sup>3)</sup>ワークショップ、グループ討議、医師、芸術家、研究者などの講義などを通して、いろいろな側面から「生命」について考える材料を提供するというものである。今回取り組んだ本校の「女子の理系進学支援」のカリキュラム作成は、この「生命」における“生き方教育”の延長線上にある。

「生き方」を考えることが、将来を考える動機となると考えた。「生き方」を教育するとは、「考え方」を一定の方向に導くというものではない。提

示された材料(教育内容)を生徒自身が学んでいく過程で、「考え方」を身につけていくものである。したがって、この授業は、考える材料の提供の役割を果たすものであり、どのように考えるかの試行錯誤をどのように体験させるかが指導上重要になる。「生き方」を考える教育では、教科指導のように多くの知識を持った優位なものが劣位なものに一方的に教えるという図式は成り立たない。適切な材料を供給できるかどうかが大切で、指導する側がどのような経験をし、どのように生きてきたかという自らの生き方が問われることになる。

■ 授業「生命」の進路への影響（高3対象・12月）



## 6 ディベートを導入した「実践英語」とネイティブ担任制

「ディベート」とは、与えられた議題について討議する「言葉を使ったゲーム」である。日常では経験しない立場(役割)を体験することによって、ゲームとして楽しみながら、表現する技術を身につけることができる。ディベートでは、多くの情報を集め、検討し、論理を明確にすることが求め

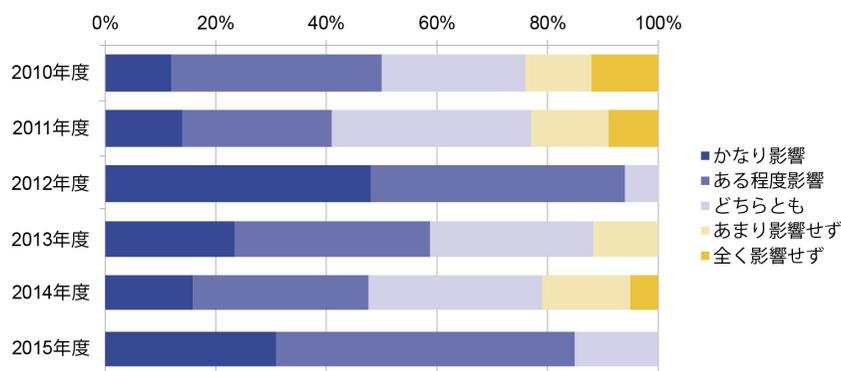
られるので、人前で議論する力、論理的思考力、文章作成力、積極性を磨くことができる。しかしながら、いきなり英語の授業に取り入れることに日本人の英語の教師たちには抵抗があり、拒否された。一方、英会話担当のネイティブの教師たちは学生時代にディベートに取り組んでいたという経験があり、積極的に担当を申し出てくれたので、“ツールとしての英語”を学ぶ科目「実践英語」が誕生した。実践してみると、生徒の方が新しい授業として受け入れ、生命科学分野の議

題(「臓器移植」「ペット飼育」「生殖医療」など)に興味をもち、英語運用能力を身につけるだけでなく、生命科学分野の新しい社会問題についての知識を得るのにも役立っている。日本の科学者は英語でのコミュニケーション能力が不足していると言われるが、英語で考え、意見を述べるができるようになるので、有効な教育方法になると確信している。<sup>4)</sup>

また、「実践英語」での生徒の実態から日常的に英語を使う機会を増やすことがもっとも重要だ

と考え、2000年度から、英会話担当のネイティブを生命科学コース1年生のクラス担任(2人担任制でもう1人は理科担当者)にしている。終礼やLHRなどの日常の学校生活から面接、保護者との個人懇談まで担当している。ネイティブにクラス担任を任せるのは不安という声もあったが、今では「自然探究A」の引率なども担当して「生命科学コース」の教育における役目はさらに大きくなっている。今年度からは、生命科学コース2年生もクラス担任をネイティブに任せている。

■ 「実践英語 (科学英語のディベート)」の進路への影響 (高3対象・12月)



## 7 女子生徒に自然体験が重要

『理科離れしているのは誰か』(松村泰子編)で、「自然体験・生活体験と理科の好き嫌いの関係(中学校)」を、「トンボやちょうちょなどの虫取りをする」かどうかでみる項目がある。男子の理科好き59.3%、理科嫌い35.2%、それに対して女子の理科好き35.9%、理科嫌い27.7%で、男子で有意差があるのに対して、女子では差がなく、しかもその体験自体が少ないことがわかる。女子では外で遊ぶことが嫌いなのは理科好きだと1割強なのに、理科嫌いだと3割と差が大きいこと、理科実験では、男子が中心的な役

割をすることが多く、女子に積極性が低下していく傾向が強いことが報告されている。

自然体験の不足と直接実験に参加する機会の少なさが理科嫌いをつくっているとしたら、女子の理科好きを増やすためには、より多くの自然体験と実験・実習を盛り込んだ教育内容が必要になる。それを踏まえて取り入れた学校設定科目が「自然探究I」「自然探究II」「自然探究A」である。

「自然探究I」(4泊5日)は、岡山県北部の森林を対象にして、講義(森林生態系・生態系樹種の同定・森林の調査方法・環境問題・大学生の卒論発表)と実習(森林の区画を設定し、その区画の樹木の樹高・胸高直径・樹齢を測定し、調査データから1年間の二酸化炭素吸収量

を推定)を実施している。

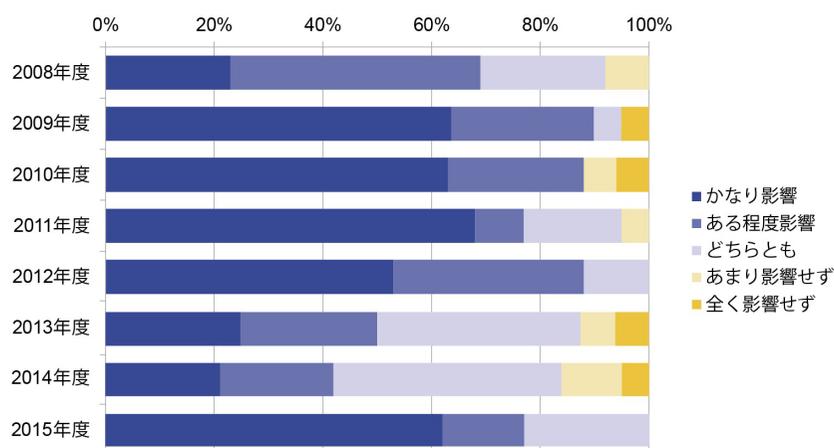
「自然探究Ⅱ」(4泊5日)は、瀬底島での講義(亜熱帯の海の生態系・海辺の生物の調査方法)と実験(サンゴ・プランクトンの顕微鏡観察)、実習(プランクトン捕獲・海辺の生物調査)。沖縄科学技術大学院大学で講義(ロールモデルとして女性研究者が担当)。座間味島での講義(環境省・帰化生物について)と実習(シュノーケリングによる海の生物観察)。

「自然探究A」(10泊11日)は、ツン・フセイン・オン・マレーシア大学での講義(生物多様性について)と自然観察(マングローブ林・熱帯森林)。マレーシア・サバ大学での講義(マレー

シアの熱帯生態系・哺乳類・昆虫・植物・ネイチャーツーリズムについて)と自然観察(キナバル公園・キャノピーウォーク・ラフレシア・マヌカン島・サビ島)。

また、日々の学校生活で、生物実験の研究材料であるサンショウウオの飼育を生命科学コース1年生が日々の清掃活動と同じように当番を決めて担当している。動物飼育では、手を抜いたことがすぐに動物の生死につながる。何も考えないで、機械的に餌を与えているだけでは動物の健康は保てない。生命をあずかるためには、日々の観察が必要であり、観察の大切さを身に染みて学ぶことができる。

■ 「自然探究Ⅱ(沖縄)・自然探究A(ボルネオ)」の進路への影響(高3対象・12月)



## 8

### 課題研究で生徒の適性を引き出す

課題研究は、生命科学(4グループ)、物質科学(1グループ)、数理科学(1グループ)を設定している。指導教員(1グループに1人)が研究するテーマを生徒に説明し、生徒各自がどのグループに属するかを選択する。研究を進めていく過程で、それぞれのグループに大学の先生方

から専門的なアドバイスをいただくという体制をつくっている。科目としては週2時間を設定しているが、興味をもった生徒は、部活動として放課後毎日取り組んでいる。研究テーマを先輩から後輩へと継承していく形になっているので、ストーリーを持った研究に進展でき、レベル的にも深化させることができている。

成果は、積極的に学会や高校生の発表会で公表することになっている。指導教員は、発表の一

か月前くらいからポスター作製や発表の練習に集中的に付き合うことになる。放課後、土日、毎日のように生徒が理科室を訪れる日が続く。生徒はその間に最も急激に成長する。そこで身につけた集中してものごとに取り組む姿勢は、将来の進路を考えるうえで生かされ、納得できる進路に進むことにつながっていく。

また、課題研究の指導をすると、生徒が科学研究を本当に好きかどうかがよくわかる。前向きにまじめに取り組んだほとんどの生徒は、本人が納得した進路に進んでいく。課題研究でもっとも大切なのは、本当に好きなことを見つけさせて、実感させることだと考えている。持たないものを引き出すことはできないが、もともと心の底にあった気持ちを引き出すことはできる。

国際的な比較で、“日本では理系女性が著しく少ない”ことは事実である。その原因は遺伝的な素質なのだろうか。日本だけが男女に遺伝子的な差がある集団から構成されているとは考えにくい。学校教育を中心とした社会状況に原因があるのではないだろうか。潜在的な才能があっても、他人のものさしで将来を決めてしまう生徒が多いとすれば、それは本人にとっても社会にとっても悲劇である。女子生徒への理系進学支援は、理系進学するはずの生徒が、自分の才能に気づかないままに将来を決めるのではなく、本来持っている才能に気づかせ、それを伸ばすことである。

「生命科学課題研究」を科目として設定しているが、「課題研究ばかりしないで、受験勉強をきなさい」という保護者や教員も結構多いと感じている。その方々に「課題研究が勉強の邪魔になると考えて手を抜く生徒が理系に向くと思いますか」と問いたい。日本の科学技術は、コツコツと試行錯誤をしながら研究をすることを生きがいとするような研究者や技術者によって支えられてきたことを再認識してほしい。決して「ほどほどでい

い」と考える人に支えられてきたのではない。確かに高校生が将来について未来を描きにくい時代かもしれない。理系に進む女子生徒に、「物理なんて難しい教科を勉強して大丈夫なのか」とか、博士課程に進もうとする学生に「理系で博士号を取得しても、なかなか研究職に就けないので研究はほどほどにして、生活の安定を求める方がいい」とアドバイスする大人が多いかもしれない。「楽か楽でないか」「損か損でないか」を“xy軸”にして、将来の道を決めるとしたら、何に夢を託すのだろうか。困難が予測されても、それを乗り越えて、科学者や科学技術者として生きていくためには、「好きである」ということがもっとも重要だと思う。学校教育は、生徒の「好きである」気持ちを大切に育てる役割がある。学校までもが“xy軸”で生徒に将来の指針を与えることは、日本の未来を見据えてもマイナスにしかならない。

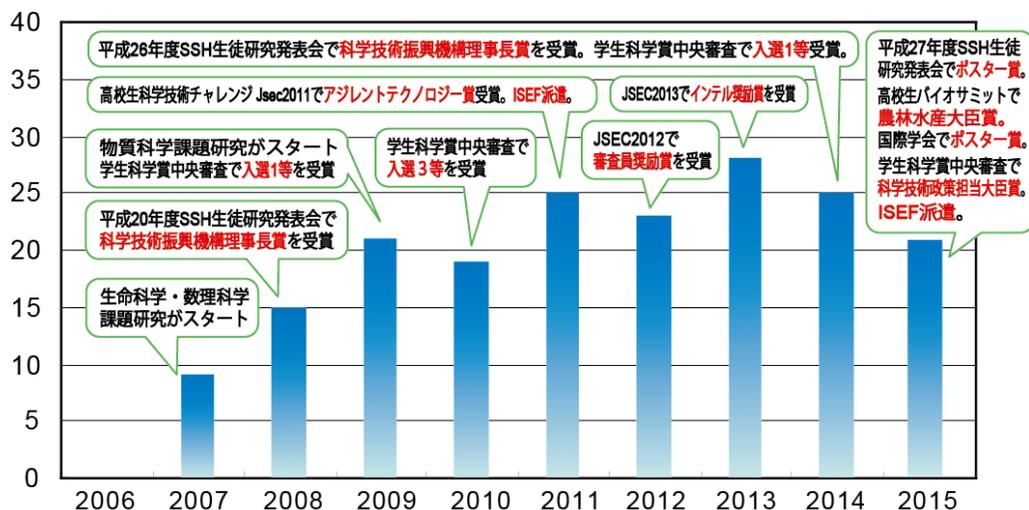
## 9 課題研究の成果を 発表する場を求めて

課題研究に取り組み、生徒にとってわかりやすい成果を得ることができれば、それに伴って前向きに学ぶ姿勢や教科科目の基礎知識など、総合的な学力が伸びると考えた。まず目標を設定することが必要だと考え、「全国レベルの高校生の研究発表会で高い評価を得る」という“わかりやすい”目標を設定した。生命科学コースを開設する前は部活動で科学部はあったものの、発表会に参加した経験などはまったくなかった。高校科学技術チャレンジ(JSEC)や日本学生科学賞への応募などは考えられない状況であった。JSECなどの最終審査会に出場するという目標は、部活でいえば、今まで高校野球で地方大会1回戦すら勝てない野球部を甲子園に導こうとするようなものだった。

まず、生徒たちに「自分たちも科学研究で成果を出せる」という気持ちを持ってもらうことと「学校に科学研究に取り組める恵まれた環境がある」と認識させることが重要で、そのためには、まず一度は研究成果で対外的な評価を得ることが大切だと考えた。最初に発表する場として、全国のSSH校が集うSSH生徒研究発表会を設定した。具体的にターゲットを絞ることで、終着点が設定されるので、それに向かって生徒に目的意識が芽生えたと考えた。取り組んで3年目に「科学技術振興機構理事長賞」の受賞にまでたどりついた。ここで評価されたことが全国レベルの大会を身近なものにしてくれ、後輩たちにも科学研究に取り組む上でのいい流れをつくってくれた。「実践英語」に英語のディベートを導入するなど、教育内容の刷新によって、国際的な学会にも

前向きに参加できるようになった。2015年度はツン・フセイン・オン・マレーシア大学を会場に開催された生物多様性の学会にポスター発表(3件・ポスター賞を受賞)、口頭発表(1件)に参加、2016年度は、中国杭州市で開催された世界爬虫両棲類学会(WCH8)にポスター発表(1件)口頭発表(1件)に参加した。

科学発表での受賞という目標を立てたことは、ぶら下げた“ニンジン”として賛否両論もあるかもしれないが、初期目標として対外的に評価されることは意味があると思う。専門家から客観的な評価を得られたということが、高校生にとって自信になり、研究に前向きに取り組む推進力になったと感じている。以下は、2006年度からの科学発表数の推移をあらわしている。



## 10 テーマはどのように設定したのか。

「生命科学課題研究」で、生命科学コースの4つのグループが取り組んでいるテーマは図のとおりである。これらは大学の研究室のイメージで

研究テーマを設定している。

「生命科学課題研究」以外の「自然探究I」の実習や「生命」のアンケート調査などから派生したテーマも生徒が希望すれば取り組ませている。

「自然探究I」の森林調査から、「遷移段階の異なる森林の二酸化炭素吸収量は違うのか」、「人

# 「生命科学課題研究」



生物部員として1年次から取り組む生徒もいるが、多くは1年生で「生命科学基礎」を学んだ後で、どのグループに属するかを決める。大学との連携を取り入れた形で研究に取り組んでおり、大学の施設を使って指導を受けたり、発表にあたって研究者からアドバイスをいただいたりすることが

できる。課題研究の成果は、学会や研究発表会等に積極的に参加して発信することにより、生徒の達成感に繋がり、理解を深化させ、研究を進展させることに役立っている。

## 発生物学グループ

研究内容 有尾類の繁殖と発生

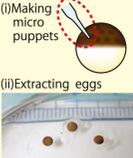
1989年にカスミンショウウオの卵巣が生物教室に持ち込まれてから研究が始まった。

サンショウウオの仲間 (*Hynobius*属) の飼育下での繁殖方法の確立を目指して、幼生を安全に飼育する方法を検討したり、受精させる方法として自然産卵の誘発や人工授精を試みて、受精卵を

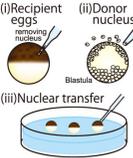
得るのに成功した。現在、アカハラモリのクローン作成に、胎胚の核を未受精卵に移植する方法で挑戦している。

その他には、学校周辺の水田地域でのカメの生息状況の調査やラジオテレメトリーを用いた行動調査、小学校の飼育動物のアンケート調査などをおこなってきた。

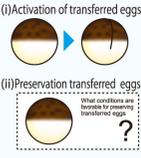
### Preparing for micro injection



### Micro injection



### Raising transferred eggs



### おもな発表歴

- 2014年度 バイオ甲子園2014本審査会 優秀賞  
日本水産学会秋季大会高校生ポスター発表 最優秀賞  
日本動物学会第85回 仙台大会高校生によるポスター発表 最優秀賞  
中国四国地区生物系三学会合同大会 動物分野最優秀プレゼンテーション賞
- 2013年度 第11回高校生科学技術チャレンジJSEC2013最終審査インテル奨励賞優等賞
- 2012年度 第10回高校生科学技術チャレンジJSEC2012最終審査 審査委員奨励賞

## 生物工学グループ

研究内容 野生酵母の分離と定着

花に生息する酵母を題材に、自然界における生物相互の関係ならびに機能を理解することを目指して研究を出発させたが、その研究過程でエタノール発酵能とセルロース分解能を同時に持つ菌株を見つけたことがきっかけとなり、酵母を利用したバイオエタノール生成の研究に大きく舵をきる形になった。

微生物を利用して糖質から生産されるバイオエタノールは、石油に代わる燃料として注目されているが、その原料がサトウキビやトウモロコシ等の食糧であるため、廃材などの木質バイオマスを原料にした新たな生産方法の開発が期待されている。

アルコール発酵能、セルロース分解能、キシロース資化能の全てを持つ酵母の発見を目指して研究に取り組み、*Metschnikowia pulcherrima*の仲間を単離することに成功している。

### 廃棄される木質バイオマスを利用した方法



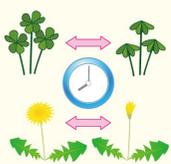
### おもな発表歴

- 2015年度 スーパーサイエンスハイス쿨生徒研究発表会 ポスター発表賞 生徒投票賞 第5回高校生バイオサミットin鶴岡 農林水産大臣賞
- 2014年度 中国四国地区生物系三学会合同大会 生体環境分野優秀プレゼンテーション賞
- 2012年度 バイオ甲子園2012本審査会 創立30周年記念奨励賞 高校化学グランドコンテスト最終選考会 審査委員長賞
- 2011年度 第9回高校生科学技術チャレンジJSEC2011最終審査 アラント・テクノロジー賞

## 時間生物学グループ

研究内容 植物が持つ体内時計

生物リズムの測定を研究テーマに定め、現在までに、セイヨウタンポポの開花リズムの調査、カタバミやデンジソウの葉の就眠運動リズムの測定を行ってきた。就眠運動リズムの測定においては、実験に有用な測定機器を自作し、様々な環境条件下における就眠運動リズムの測定に成功している。



### 自作した就眠運動記録装置の測定原理



デンジソウは環境省レッドリストにおいて、絶滅危惧II類に選定されているので、就眠運動リズムの測定に限らず、保護のための繁殖研究や組織培養も行っている。

また、鹿竹の有効利用の観点から、竹粉を用いたヒラタケやエリンギの菌床栽培も、近年始めている。

### おもな発表歴

- 2015年度 中国四国地区生物系三学会合同大会 植物分野最優秀プレゼンテーション賞
- 2014年度 第62回日本生態学会高校生ポスター発表「みんなのジュニア生態学」最優秀賞 第55回日本植物生理学会年會特別企画「高校生生物研究発表会」優秀賞 第58回日本学生科学賞中央審査入選1等 平成26年度スーパーサイエンスハイス쿨生徒研究発表会 独立行政法人科学技術振興機構理事長賞
- 2013年度 日本植物学会第77回大会高校生研究ポスター発表優秀賞

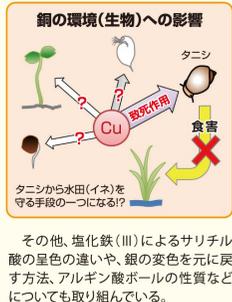
## 環境化学グループ

研究内容 化学物質と環境(生物)との関係

化学物質が環境に及ぼす影響を探索することを中心に、さまざまな環境に取組んできた。

最初は、エステル化反応を環境への影響が少ない条件でできないかと模索した。次に、化学物質の生物への影響を考え、植物の発芽や発根にどのような無機物質が影響するのかがというに着目し、無機物質の種類や濃度を変えた水溶液を与えてスプラウトを育て、その違いを明らかにすることを目標とした。続けて、金属単体が存在することによる影響を見ようとしたのだが、あまり差異が見られず、今度は動物にも目を向けて調べるうちに、体の小さな水生動物であるサカマキガイにおいて金属銅が生存に大きな影響を与えることを見いだした。さらに、大型で似た動物であるスクリンゴガイにも同様の作用があることを確認した。これはジャンボタ

ニシとも呼ばれ、水田における食害が問題になっており、その防止につながることを期待して取り組んでいる。



### おもな発表歴

- 2015年度 日本化学会中国四国支部大会 高校生ポスターセッション
- 2014年度 日本環境化学会 第9回高校環境化学賞 出席
- 2013年度 日本薬学会・日本薬師会・日本病院薬剤師会 第52回中国四国支部学術大会 高校生オープン学会 平成25年度 集まれ! 科学好き発表会 ストリートサティバ特賞
- 2011年度 第8回高校化学グランドコンテスト ポスター発表
- 2010年度 第2回東京理科大学 坊っちゃん科学賞 高等学校部門 入賞

工林と天然林ではどちらが二酸化炭素吸収量が多いのか」などのテーマが生まれた。この研究はさらに「自然探究Ⅱ」の座間味島での調査、沖縄県・久米島での地元中学生との合同調査につながり、「亜熱帯の森林の二酸化炭素吸収量は岡山県北部の森林と違うのか」の研究になっていった。

森林調査は、交流の面でも重要な役割を果たした。久米島の中学生だけでなく、「自然探究A」でお世話になっているツン・フセイン・オン・マレーシアの大学生・大学院生を「自然探究Ⅰ」の森林調査に招待(2015年度さくらサイエンス事業)して、合同で調査を行い、地球環境についてディスカッションする交流にまで発展させた。

また、「生命」では、動物の“命”を考える視点で、小学校への飼育動物のアンケートや生徒の出身小学校への訪問調査のデータを基にした「岡山県下の小学校の学校飼育動物の研究になった。

## 11 「自然探究Ⅰ」からの課題研究

入学して間もない高校1年生の森林実習は、自然体験が非常に少ない女子生徒に「山に入るとは山道をハイキングすることではなく、山道の雑草をかき分けて林床に入るような体験をさせたい」という方向で企画したプログラムである。当初は「樹木の種類を区別できるようになること」と「森林調査を“体験”すること」を目的にして出発した。4泊5日の森林調査での共同作業、そして共同生活が生徒に一体感をうみ、課題に前向きに取り組む姿勢をつくってくれた。この実習が樹木のデータを整理するという“調査”に発展し、さらにその結果から樹木の二酸化炭素吸収能力を比較して分析するという“研究”に変化した。そして、調査地が、人手不足とともに火入れが

されなくなり、放置されている状況にあり、火入れをやめた年代が異なるので、ブナ極相林までいろいろな遷移段階の森林があることを知って、森林によって二酸化炭素吸収量にどのような違いがあるのかを研究するという方向性がうまれた。そして、森林実習を開始して10年を経て、今までの調査データを「地球温暖化防止にはどんな森林が有効か」というテーマで解析した。

解析結果から、天然林では、林齢が増すほど炭素蓄積量と二酸化炭素吸収量が増加する傾向がみられた。人工林では炭素蓄積量と二酸化炭素吸収量の両方とも、天然林よりも低くなる傾向があることが示唆された。また、単一の樹種からなる人工林よりも、多様な樹種からなる天然林の方が効率よく炭素を蓄積し、二酸化炭素を吸収していることもわかった。この森林調査の考察として、生徒たちは、地球温暖化防止のため、二酸化炭素の排出を減らす努力をしていくと同時に、炭素の蓄積量と二酸化炭素吸収量が多く、種多様性の高い森林を維持・管理していく必要があると結論した。<sup>5)</sup>

## 12 教育プログラムの効果

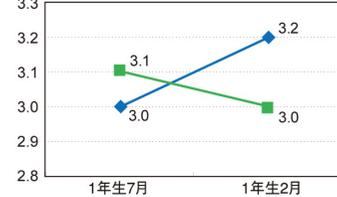
2015年度のデータ(次の図)で、本研究の対象としている生命科学コースの方が、文理コースより教育活動を非常に高い割合で肯定的に受け入れており、学習に前向きに取り組んでいる姿勢がうかがえることがわかる。また、卒業後10年が経過しても、現在の生活に生命科学コースの教育が影響していると8割以上が答え、好奇心・理論へ興味などが向上したと8割が判断していることがわかった。保護者・教職員の理解が進んでいることもわかる。<sup>6)</sup>

## SSH研究開発の成果・生徒の変容

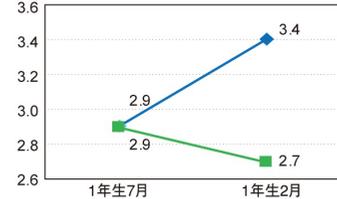
### DATA 1 学習に関する4段階自己評価の変化(1年生)

◆ 生命科学コース (SSH主対象)  
 ■ 文理コース (2年次で文系・理系を選択)

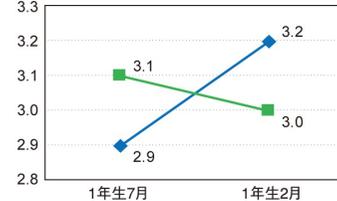
#### ① 真面目に勉強している (段階)



#### ② 学習で新しい興味をもった (段階)

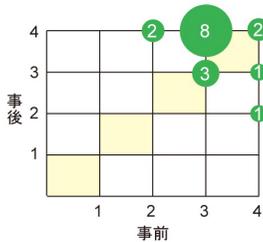


#### ③ 英語の学習に興味がある (段階)

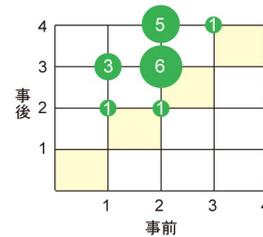


### DATA 2 自然探究 I の影響

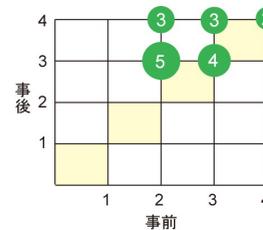
#### ① 自然環境の大切さを理解した



#### ② 調査結果のまとめ方が分かった



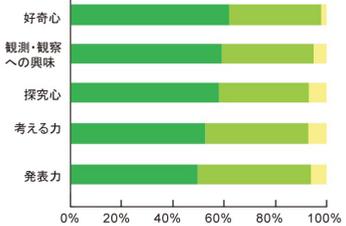
#### ③ 自然環境への関わり方を考えた



### DATA 3 科学課題研究の卒業生の意識

今の環境(仕事・研究)で必要で、教育で向上

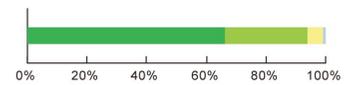
■ 必要だとしても向上 ■ 必要である程度向上  
 ■ 必要だが向上せず



### DATA 4 保護者の意識

SSH活動は理系進学を考える上で有効

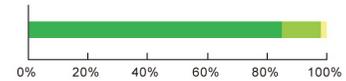
■ そう思う ■ やや思う  
 ■ あまり思わない ■ 思わない



### DATA 5 教職員の意識

課題研究のレベルが向上している

■ そう思う ■ ややそう思う ■ どちらともいえない  
 ■ あまり思わない ■ 全く思わない

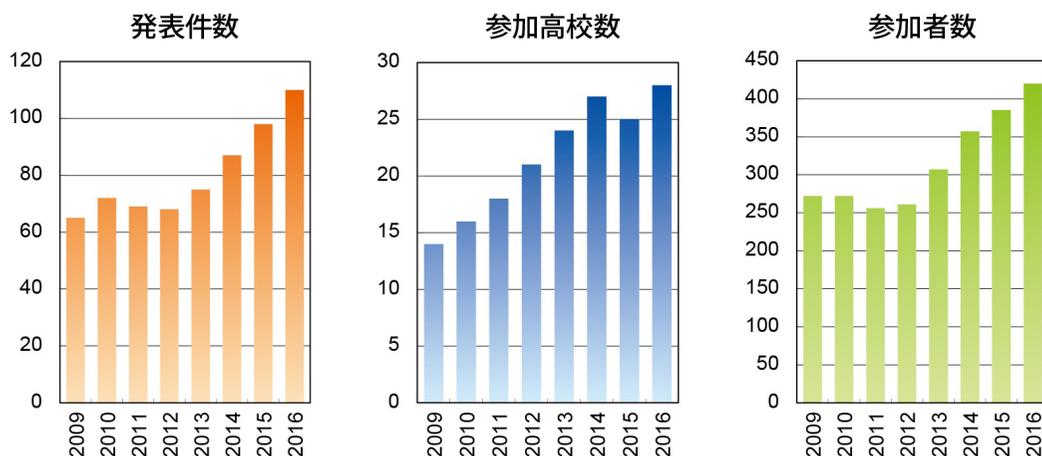


## 13 「発表者が女子だけ」の課題研究発表会を企画

「女子生徒の理系進学支援」の一環として、「科学研究」の成果を研究の途中段階でも気軽に発表できる場として、「発表者が女子だけ」の「集まれ!理系女子・女子生徒による科学研究発表交流会」を2009年から開催している。最初は、近隣の福山大(広島県福山市)を会場にしていたが、年々参加者が増え、2014年度から全国から参加者が集まりやすい場所で開催する

ようになった。2014年度(第6回)は京都大学、2015年度(第7回)は慶應義塾大学で開催した。第8回(2016年度)の学習院大学には、参加者420人、ポスター発表件数110件を集めることができた。実施後の生徒アンケート調査では、「発表を見て刺激を受けた」「進路を考える参考になった」「理系で頑張る気持ちが強まった」の項目において、8割以上が肯定的な回答をしており、この交流会を行うことで、女子生徒が理系進路を目指すうえで意識高揚に対する効果があることが認められた。

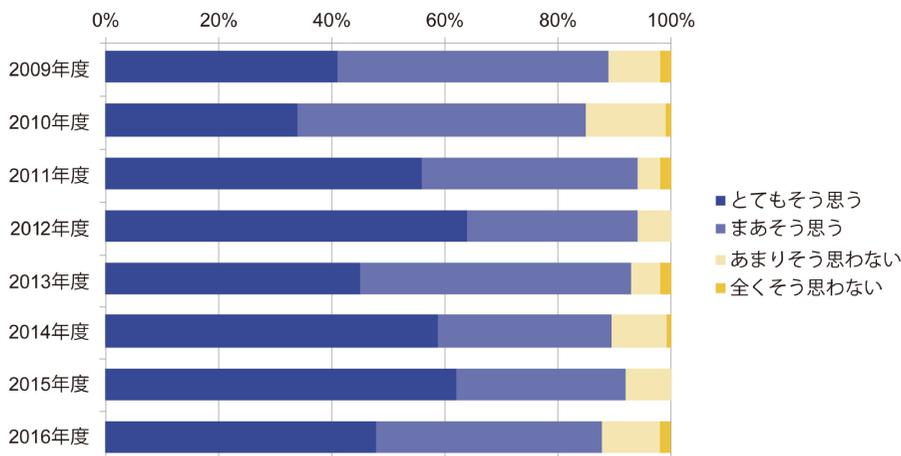
## 集まれ！理系女子 女子生徒による科学研究発表交流会



2017年度は、さらに首都圏(学習院大学)を会場にした交流会に加えて、「九州地区」「東北地区」「中国地区」を会場にした地区の交流会を新たに企画し、理系進学を目指す女子生徒支援の全国的なネットワークを広げていくことを目指した。地方で課題研究に積極的に取り組んでいる学校の科学研究の成果を紹介して、課題研究の取り組みが全国的に盛り上がってくれることを祈っている。

「集まれ！理系女子 女子生徒による科学研究発表交流会」の2009年度から2016年度までの発表件数、参加高校数、参加者数の実績と「理系で頑張る気が強まったか」の問いのアンケート結果を次の図で示した。地方の福山大で「点」として始まった交流会が、都市を変遷して「線」となり、今年度から3か所での地方大会を展開して「面」へとなりつつある。

■ 「集まれ！理系女子 女子生徒による科学研究発表交流会」アンケート  
理系で頑張る気が強まった (参加女子生徒対象)



## グローバルな視点で 理科教育を考える

「なぜ銃を与えることはとても簡単なのに、本を与えることはとても難しいのでしょうか。なぜ戦車をつくることはとても簡単で、学校を建てることはとても難しいのでしょうか。」2014年、17歳でノーベル平和賞を受賞したパキスタンのマララ・ユスフザイさんの言葉である。彼女は“女性が教育を受ける権利”を訴え続けてきた。今も、女子だからという理由で学校教育を受けられない国が存在しているのだ。

私たちが住んでいる日本は、本が自由に手に入る国である。しかしながら、先進諸国と比較すると科学技術分野で活躍する女性の割合は非常に低い。当然、理系に進学する女子生徒は非常に少ない。その打開のために「女性科学者支援」や「女子生徒の理系進学支援」を政府の方針として出している。今回、この状況を少しでも改善するモデルケースになるようなカリキュラム作成の場として、生命科学コースを立ち上げた。これからの社会は、どの分野においても、男女の壁なく能力を出し合って協力できる体制が必要とされるのは事実だからである。

科学技術振興機構『未来の科学者養成講座 開発支援プログラム5年間の開発成果報告』（2013）に、大学が実施している小中高生対象の科学教育では、「男女によるプログラムの違いを設けている実施機関はとくにない」とある。また、「自分の理系の才能に自信がもてたか」の問いに対する受講生の回答に男女差があり、肯定が男子29.2%、女子13.5%で、女子は自信をもちにくい傾向にあったとしている。そして、まとめとして「この傾向は、女性の才能育成とキャリア形成に関わる問題として内外に指摘されていることと符合する」と明示されており、理系トッ

プ人材育成事業においても、女子の自信をどう育むかということが重要な課題の一つとして取り上げられている。

今回の取り組みで、教育カリキュラムを刷新して5年で生徒の“科学研究”で成果を得ることができ、10年で“科学研究”を通して他校の生徒や研究者と交流を進めることができた。そして、“科学研究”に取り組む過程で英語の運用能力育成の必要性を痛感することになり、“科学研究”が懸け橋になって、国境を超えた交流を実現した。今、学校教育で話題になっているグローバル教育を進めていくためのヒントも、本校が取り組んできた「知識」、「体験」、「研究」を絡めた教育プログラムにあるのではないかと考えている。<sup>7)8)9)10)</sup>

今、学校教育では、パソコンやiPadなどのハード的な進歩が大きな影響を与えており、科学技術の恩恵も受けている。教材開発においてもその成果が目立っている。しかしながら、逆に今だからこそ、学校教育の根幹に“直接体験”と“交流(人間関係)”があることを忘れてはならないと考えている。このカリキュラムを実践して、“自然”の役割と生徒たちの互いの協力関係の大切さを痛いほどに感じさせてもらった。

これまで女子の理系進学支援をテーマに、高等学校段階の教育プログラム開発を中心に取り組んできた。次の段階は併設中学校と連結した教育プログラム開発と現時点で実現できていない系列大学との高大接続だと考えている。さらに充実した教育モデルを提示できるように、新たな試みに着手して、生徒たちがそれぞれの将来に向けて夢を描いて巣立っていけるような教育プログラムを提供したいと考えている。

## 15 科学教育への思い

私自身は、大学卒業時に研究を志すものの、経済的な理由で大学院進学をあきらめ、高等学校の教員として就職した。40歳過ぎた頃休職して修士課程は修了したものの学位の取得は断念していた。そんな時、大学の先生から「研究できる環境がないなら、高校に研究できる環境をつくれればいい」と紹介されたのがSSHだった。SSHは、生徒の科学研究だけでなく、教師である私にも科学研究の機会を与えてくれたのだ。そして、SSH採択によって放課後コツコツと科学研究に取り組む行為が、職場（教育現場）で市民権を得ることができたことは、私にとって大きな救いだった。教育現場では学習指導と生徒指導が中心、部活動でも体育系が中心で、物理・化学・生物等、いわゆる理科（科学）系の部は細々と存続していればいい方という状況だったからである。しかしSSHに取り組んで3年目の2008年に広島大学大学院理学研究科生物科学専攻に入学し、生徒の課題研究の指導の傍ら自分自身の研究を進め、3年後の2011年に博士（理学）を取得することができた。在職したままでの学位取得の過程での苦労は、論文作成指導だけでなく生徒への指導にいろいろな面で生かされていると実感している。

「生命科学コース」の開設から始めた今回の教育プログラム開発については、「数理科学課題研究」や「物質科学課題研究」を設定する前の段階では、SSH採択時のヒアリングでも女子の理系進学支援が必要なのは「数学・物理・化学」分野であって「生物」分野ではないのではないかという疑問を投げかけられることが多かった。そんな中、私は「生命科学コース」の開設から始めたのである。その理由は次の3つである。

①今から10年前は薬学部の新設などがあり、医学系・生物系を中心に女子の理系進学が激増した時期であったので、この機会をとらえて女子の理系進学機運を高めたかった。②科学技術者といえど生命科学に関連する「生命尊重」、「自然保護」などの社会的な問題についての理解が必要だと考えた。③生物（生命科学）分野は、高校生でも研究テーマを見つけやすいので科学の入り口になる。本校のSSH運営指導委員の元日本物理学会会長の坂東昌子先生が、本校の生徒の発表を聞いて「物理・化学に比べて生物は多様で未知なことが多いので、高校生にはやりがいがあるだろう。意欲的に新しいことに取り組んでいるのに感心した」との意見を述べられた。そして私の身近には、高校で生物部所属だったのに今では物理教師になっていたり、息子が高校では物理部所属だが生命科学専攻で博士課程に進学していたり、私自身も化学から生物科学に大学院で大きく研究テーマを変えているという状況がある。研究分野は、その人の心の底にどんなものに好奇心を持つかで決まってくると考えている。理科は「数学」「物理」「化学」「生物」に向かって基礎から応用へと複雑化していくが、縦割りに区別される「分野」ではなく、相互に関連し合いながら自然をひも解くためのツールになるものだと理解している。

学問や研究には範囲などというものもない。むしろ既存の範囲から逸脱するところから生まれる。学校でまじめに勉強をすれば不可避免的に生ずる疑問や興味は、追求していくと教科書の範囲から逸脱することは避けられない。しかしながら、大学受験を意識した高校生は胸に抱えた疑問や興味を押し殺して、一定の範囲内の知識だけを完全に覚えることを要求されることになる。十代の最も頭の柔軟な時に、重箱の隅をつつくようなことをしなければならぬのはつらいこと

である。だからといって「勉強なんてつまらない」と学問から離れていくのはあまりにももったいない。高校を卒業していく生徒たちに、生命科学コースで体験した“知的な感動”を大切に、前向きに学び続けて欲しいと思う。

平成23年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書・5年次, (2016)

---

## 参考文献

- 1) 日本私立大学連盟, 理系女性はなぜ少ないか, 大学時報, No.310, pp.14-25(2006)
- 2) 秋山繁治, 30年の性教育の実践・「学級通信」から授業「生命」、女子生徒の理系進学支援へ, 関西性教育研修セミナー10周年記念誌「性について、語る、学ぶ、考える」, pp78-81(2017)
- 3) 秋山繁治, 総合的な学習の授業「生命」での生き方教育, 現代性教育研究月報, Vol.23, No.8, pp.1-5(2005)
- 4) 問田雅美, ツールとしてのディベートによる英語力養成, 中国地区教育学会研究紀要, No.23, pp.51-61(2013)
- 5) 秋山繁治, 森林の二酸化炭素吸収量の推定・自然を体感できる森林調査の実践, 生物の科学遺産, Vol.71, No.6, pp576-586(2017)
- 6) 秋山繁治, 「実際に触れること」が科学的思考を育てる, 理科の教育, 12月号, 通巻689号, Vol.58, pp.22-25(2009)
- 7) ノートルダム清心学園清心女子高等学校, 平成18年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書・5年次, (2011)
- 8) ノートルダム清心学園清心女子高等学校, 2015年度SSH研究成果報告, (2016)
- 9) ノートルダム清心学園清心女子高等学校, 文部科学省スーパーサイエンス事業資料集2015, (2016)
- 10) ノートルダム清心学園清心女子高等学校,

# 地場産業を軸とした地域連携

～ Win WinからTotal Winへ～



大阪府立堺工科高校 定時制の課程 代表  
堺工科高校首席

やすだみつのり  
**保田光徳**

---

1959年生まれ。1982年国立大阪教育大学教育学部数学科卒業。同年大阪府立堺工業高等学校定時制の課程勤務。2005年大阪府立堺工科高等学校定時制の課程勤務。2013年同校指導教諭。2014年同校首席。現在に至る。進路指導主事・「堺学」担当教員・「東北支援プロジェクト」リーダー・「ゆめ・チャレ」実行委員長・「堺工科エコプロジェクト」リーダー。連絡は大阪府堺市堺区大仙中町12-1の同校まで。mysktg@sakai-t.osaka-c.ed.jp 090-3620-5851

---



校名入りの作務衣（さむえ）姿でオリジナル線香を販売する生徒たち（堺市堺区で）

「ブドウの香りがしますよ」「一度試してみてください」。堺市中心部の商店街で10月中旬の日曜、堺工科高校定時制の生徒たちが、箱入りの線香を販売した。

同高定時制では2005年度から、堺の地場産業・線香と包丁の製法を伝統工芸士から学ぶ授業「堺学」を行っている。ブドウの香りの線香は昨年、授業で開発した。「学んでいる技術が社会に役立つことを実感

## 学んだ技術で人の役に

### 地域社会教育活動 大阪府立堺工科高校定時制の課程

してもらいたい」。指導する保田光徳教諭(58)は語る。

東日本大震災を機に、活動は広がった。生徒たちの提案で、宮城、岩手両県の被災地にゆかりの花の香りをつけた線香を届け、授業で作った包丁を家庭科の授業用に小中学校へ贈った。昨年からは仮設住宅を訪問し、包丁を研ぎ直すボランティアも始めた。

津波の犠牲になった妻の形見というさびた包丁をよみがえらせると、持ち込んだ男性は「天国で喜んでくれている」と涙を流した。

3年生の仲野竜太郎さん(17)は「勉強したことで人の役に立てることがわかった」と振り返る。保田教諭は「技術だけでなく、人間性も磨いてほしい」と願う。

(浦西啓介)

佐藤一子・東京大学名誉教授「生徒は地元伝統産業の技術習得を通じて、地域の職人や子どもたち、東日本大震災被災地の被災者らと交流し『自己有用感』に目覚めた。社会に学ぶことの意義を示した実践だ」

#### 【最優秀賞選評】

佐藤一子 東京大学名誉教授

「生徒は地元伝統産業の技術習得を通じて、地域の職人や子どもたち、東日本大震災被災地の被災者らと交流し『自己有用感』に目覚めた。社会に学ぶことの意義を示した実践だ」

## 1 定時制高校生の現状

生徒は全体的に自分に自信がもてず、コミュニケーション能力が低い。また深夜までスマートフォンやゲームに熱中し、基本的な生活習慣が身につかず、昼間継続して働くことが出来ない。定時制高校本来の役割である勤労青少年の学ぶ場ではなくなりつつある。そこで本校においては以下の4点を実践するために下に記す2~4の項目に取り組んでいる。

- 伝統地場産業を学び、「ものづくり」を通じて地域に誇りを持ち、自分にも誇りを持つ。
- 地場産業を通して学校外で様々な職業体験をし、基本的な生活習慣を身につけ、コミュニケーション能力等をつける。
- ボランティア活動に積極的に参加し、他者から感謝されることにより自己有用感を持つ。
- 小学生等に教える立場に立つことにより、自分に自信を持つ。

## 2 堺学

土曜講座として堺の伝統地場産業を学ぶ「堺学A」(打ち刃物)2単位・「堺学C」(お線香)2単位・「堺学B」(打ち刃物上級)1単位を開講しており、生徒は工科高校ならではの「ものづくり」の大切さを学んでいる。授業は教員3名と伝統工芸士(特別非常勤講師)3名の計6名で担当している。

「打ち刃物」受講の生徒は、世界に一つだけしかない「包丁」の製作に取り組み、約5か月かけて「オンリーワン包丁」を完成させ、地域の産業に誇りを持ち、ものづくりを通じて自分に自信を

持つことが出来た。

また、「お線香」受講の生徒は、線香の色や香り、パッケージデザインまでを考え、伝統工芸士の指導のもと、線香工場で自分たちが作り上げた線香の袋詰め及び箱詰め作業を行い、商品化している。自分たちが作った物を商品にすることにより、責任感が芽生え(消費者・お客様に対する)、物を大切にする気持ちが強くなった。

「堺学」の成果物は地域のイベントにおいて展示・販売を行っている。最近では大型商業施設や百貨店等からの展示・出店依頼が多数あり、多くの方々に知られるようになり、下記3の「東北支援プロジェクト」や様々な職業体験、4の「ゆめ・チャレ」に多大な良い影響を与えている。

## 3 東北支援プロジェクト

2011年3月11日に「東日本大震災」が起こった。被害の状況をテレビ等で見た「堺学」を学んでいる生徒から、自分たちが作った「包丁」と「お線香」を用いて、被災地の支援をしたいという声が上がリ、学校と地域が協力し「東北支援プロジェクト」を立ち上げることになった。

被災地に連絡すると、津波の被害により小中学校の家庭科で使用する包丁が流されて困っているという。早速「堺学B」で検討を重ね、小中学生が使いやすいように改良した102丁の「包丁」を作成し、被災地の小中学校へ寄贈した。「堺学C」においては、被災地各市の花の香りの「お線香」を製作し、被害に遭われた多くの方々への鎮魂の思いを込めて、「お線香」そのものと、生徒が販売実習で得た売上金の一部を寄贈した。

現在も「包丁」、「線香」、「義援金」の支援を続けている。



2012年に被災地を訪問し、岩手県釜石市長に「包丁」と「お線香」、「義援金」を渡した際、線香の原料の「タブの木」が釜石市の市木であることがわかり、釜石市の「タブ」を使って本校生徒に「お線香」を作ってもらいたいという依頼があった。

生徒と地域の方々に釜石市の被災状況を話し、市長からの依頼を伝えると、「被災地のためになるのであれば」と一丸となって支援することが決まった。

生徒は送付された「タブ」を使って「お線香」の製作に取りかかった。被災地の事を考えながら、2013年3月11日の慰霊祭に向けて、参列者数の800箱(これまでに作ったことのない膨大な量)を作り上げ「絆」という名前をつけた。

生徒会が主となり、生徒全員で想いを込めて800枚のメッセージカードを書き、箱の中に添



えた。地域の方と釜石市に赴き、慰霊祭当日に参列者の方全員に「絆」を手渡しさせて頂いた。このことが大阪と被災地のマスコミに大きく取り上げられ、生徒は自分に自信を持つようになり、ボランティア精神が芽生え、自己有用感をもつことが出来た。

2014年には大阪府教育委員会(現大阪府教育庁)の「災害ボランティア活動事業」に「東北支援プロジェクト」が選ばれ、生徒4名と教員1名が被災地を3泊4日で訪問し、生徒は地震・津波の被害状況を実際に見ることが出来た。

被害は想像以上で、3年を経過しているのに遅々として進んでいない復興状況に心が痛んだ。また、宮城県気仙沼市の教育委員会や岩手県釜石市長に自分たちが作った「包丁」「お線香」及び「義援金」を直接手渡し、感謝の言葉と感謝状等を頂いた。

仮設住宅を訪れた際、被災者の方々と「スライム作り」や「ビンゴゲーム」などで交流し、たくさんの笑顔に出会う事が出来た。また、岩手県立釜石高等学校定時制との意見交換会では、自らの体験談を聞かせて頂き、生徒は震災について本当に多くの事を学んだ。

当初は、「生徒は、震災によって身も心も傷ついているので体験については触れないで下さい」という釜石高校の先生方からの依頼であった。しかし、一人の生徒が体験談を語ってくれた。

「私の母は津波で行方不明になりました。毎日のように海辺を探し歩きました。正直、母が見つかって欲しいという気持ちと、見つかって欲しくないという気持ちが交錯していました。2年が経過して母の下半身だけが見つかりました。DNA鑑定で母とわかりました。(中略) 体験を話すことは、本当は辛くて悲しいことなのです。あの日の事を思い出すからです。でも話をすることにより、聞いて頂いた人の教訓になればありがたいこと





2017年7月には不用品(使用済みの天ぷら油等、処分に困っている油)を用いて発電することが出来る「バイオディーゼル発電機」を作製した。本校主催のイベント「ゆめ・チャレキャンドルナイト」(当日、付近の電気を消してもらい、電気の大切さとエコロジーについて小学生と高校生、地域住民とが一緒になって考えるイベント)において「電気について考える」重要な役割を果たした。

自然災害が多発している昨今、「車中泊」等、電気の使えない状況で生活することを余儀なくされている方々の役に立つことが出来れば幸いである。

また、地域の防災においても「バイオディーゼル発電機」は重要であると考えます。

今後も「微力けれども無力ではない」をスローガンに支援を続けていきたい。

#### 4

### ゆめ・チャレ(子ども仕事体験・堺工版キッザニア)

これまで地に地場産業をはじめ、様々な職業体験を実施してきたが、生徒は体験するだけでは仕事の内容等がよくわからないという現状であった。体験した仕事内容をより深く理解するためには、教える側の立場に立つことが重要な事だと考え、本校生徒が職業体験をして仕事を理解し、小学生の職業体験をサポートするという「ゆめ・チャレ」プロジェクトを立ち上げた。

前に述べたように、本校は「堺学」という授業

で、伝統地場産業である「包丁作り」と「線香作り」を、地域の伝統工芸士の方々から学んでいる。本校生徒が作った「包丁」と「線香」及び義援金を東日本大震災の被災地に寄贈していることがマスコミ等に取り上げられ、本校の地場産業との取り組みが地域の方々の知るところとなり、学校と地域の企業・店舗と一緒に出来る取り組みについて考えようということになった。

そこで地域の商店街と本校が協力して、「キッザニア」をモデルとした、小学生仕事体験事業の「ゆめ・チャレ」(夢に向かってチャレンジ)を具体的に計画することとなり、「キッザニア甲子園」を訪れ、バックヤードの視察をさせて頂いた。その際、「こんな事は出来るわけがない」と痛感した。多大な資金が必要であること(高校生・小学生の職業ごとのユニフォーム一式、小学生の給料、材料費、会場費、保険、クリーニング、講師謝金等その他諸々の経費)が課題となった。諦めかけていた時に、大阪府教育委員会(現大

### 第1回 ゆめ・チャレ(子ども仕事体験)

**内 容** プロの指導のもと、堺工科高校定時制の生徒がサポーターをし、様々な種類の仕事を体験できます。給料として疑似通貨(ユーロ)がもらえます。その疑似通貨(ユーロ)を自分で作った商品や、お友達が作った(買入れた)商品を買回ることができます。

**日 時** 平成 25 年 12 月 15 日 (日) 11:00~17:00(体験によって時間が異なります)  
夜間開講の30分前までで奥野晴明堂ホールに集合ください。

**場 所** 山之口商店街内 奥野晴明堂ホール 〒590-0852 堺市堺区中之町東 2-1-4

**対 象** 現在住の小学生 必ず保護者同伴でお申し込みください。

**申 込** すべてのコースが予約制です。  
 申込締切 平成 25 年 12 月 2 日(月)まで  
参加申込書につきましては、裏面に詳しくあります。注意事項をお読みの上お申し込み下さい。  
 すべて抽選のため、当選者には、FAXかメールでご連絡させていただきます。  
 12月8日(金)までに連絡がない場合は、落選となります。  
 注意 駐車場はあきませんので公共交通機関をお使いください。

番号	体験名	実施時間	定員	内容	企業
1	パン屋体験	11:00~	5名	パンをつくってみよう	ペナギーツ bakery
2	包丁製作体験	11:00~	5名	包丁をつくってみよう	定香齋 丸衣部
3	お灸体験	11:00~	5名	お灸をつくってみよう	広部 高徳堂
4	お香作り体験	13:00~	5名	お香をつくってみよう	業野晴明堂
5	ジュエリー製作体験	13:00~	5名	ジュエリーをつくってみよう	萬字堂
6	和紙製作体験	13:00~	5名	和紙をつくってみよう	阿土屋商店
7	包丁作り体験	13:00~	5名	包丁・キリガミをつくってみよう	桜葉天竺麩作匠
8	和菓子体験	13:00~	5名	和菓子をつくってみよう	丸手菓子舗
9	レストラン体験	15:00~	5名	レストランのお弁当をつくってみよう	なにわ亭
10	和衣製作体験	15:00~	5名	かんざし・マフラー FFK600-グッズ	藤衣部

**参加無料だよ!**

主催：大阪府立堺工科高等学校定時制  
 お問い合わせ 072-241-1401 朝川敬順  
 注意：定時制のみ 18:00~20:00 にお問い合わせください。

阪府教育庁)に「高校生による小学生の仕事体験サポート事業」についての趣旨説明を行うと、かなりの予算を計上して頂いた。また、企業・店舗側も小学生・高校生のキャリア教育の手助けが出来るならと、時間面・資金面において全面的に協力をしてもらえることとなり、地元堺市役所の方々も積極的に支持してくれ、関係機関・団体の協力要請もしてくれた。

そこで、地場産業関係者及び地元商店街店主等に「ゆめ・チャレ」の内容を具体的に説明し、協力を呼びかけ、何とか実現に向けての方向性が決まった。

次に地域の小学生を募集するための「チラシ」の作成に取りかかった。本校職員と地域の方々で「ゆめ・チャレ」について整理することにした。

- ①職業体験数と体験内容②受付や体験場所等の確保③安全面(保険等)④応募方法⑤チラシ配布方法と配布小学校数⑥名札や修了証⑦給料(疑似通貨)⑧給料による買い物⑨本校生

徒・職員の体制について等々。何日も話し合いをして次のような流れが決まった。

- ① Faxか郵送での申込受付
- ② 抽選後、結果の通知
- ③ 当選者へは詳細の案内
- ④ 当日受付
- ⑤ 名札配布
- ⑥ 体験ごとのユニフォーム貸与(コック服・作業衣・ツナギ・エプロン等を本校で用意)
- ⑦ 高校生のサポートで職業体験(各店舗・会場にて)
- ⑧ 修了証とお給料(ユーマ)を渡す
- ⑨ 記念撮影
- ⑩ お給料でのお買い物(ユーマの有効期間は約2週間)。この流れを1日4~5回転する。

### 第2回 ゆめ・チャレ(子ども仕事体験)

**内 容** プロの指導のもと、堺工科大学定時制の生徒がサポートをし、様々な種類の仕事を体験できます。  
給料として疑似通貨(ユーマ)がもらえます。その疑似通貨(ユーマ)により、ゆめストアでお買い物ができます。

**日 時** 平成26年2月28日(日)10:00~17:00(体験によって時間が異なります)  
実施時間の30分前まで「奥野晴明会館」に集合ください。

**場 所** 山之口商店街内 奥野晴明会館 〒590-0032 堺市堺区市之町東2-1-4

**対 象** 現在住の小学生 必ず保護者同伴をお願いいたします。

**申 込** すべてのコースが予約制です。  
申込締切 平成26年2月2日(月)まで  
参加申込書につきましては、裏面添付しております。注意事項をお読みの上お申し込み下さい。  
すべて抽選となり、当落者には、FAXでご連絡させていただきます。  
2月6日(金)までに連絡がない場合は、落選となります。

番号	体験名	実施時間	定員	内 容	企 業
1	パン作り体験	10:00   12:00	各5名	パンをつくってみよう	ペーパードールズ
2	匂い袋製作体験	10:00   18:00	各5名	匂い袋をつくってみよう	衣香除久太郎
3	お味噌汁作り体験	12:00	5名	お味噌汁をつくってみよう	マツダ物産 本店
4	お餅作り体験	10:00   16:00	各5名	お餅をつくってみよう	奥野晴明会館
5	ジュース作り体験	10:00   16:00	各5名	ジュースをつくってみよう	萬葉堂
6	包丁づくり体験	12:00   16:00	各5名	包丁をつくってみよう	徳島刀物製作所
7	和菓子づくり体験	12:00   14:00	各5名	和菓子をつくってみよう	丸田菓子舗
8	レストラン体験	12:00   14:00	各5名	和菓子をつくってみよう	なにお亭
9	和食器体験	14:00   16:00	各5名	レ스토랑のお弁当をつくってみよう	徳久保
10	和食器体験	14:00   16:00	各5名	レ스토랑のお弁当をつくってみよう	徳久保
11	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	和紙の折り紙をつくってみよう	紙友会
12	ジュース作り体験	14:00   16:00	各4名	和紙の折り紙をつくってみよう	紙友会
13	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
14	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
15	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
16	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
17	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
18	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
19	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
20	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
21	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
22	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
23	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
24	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
25	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
26	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
27	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
28	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
29	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
30	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
31	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
32	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
33	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
34	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
35	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
36	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
37	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
38	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
39	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
40	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
41	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
42	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
43	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
44	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
45	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
46	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
47	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
48	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
49	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
50	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
51	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
52	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
53	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
54	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
55	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
56	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
57	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
58	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
59	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
60	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
61	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
62	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
63	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
64	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
65	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
66	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
67	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
68	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
69	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
70	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
71	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
72	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
73	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
74	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
75	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
76	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
77	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
78	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
79	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
80	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
81	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
82	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
83	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
84	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
85	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
86	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
87	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
88	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
89	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
90	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
91	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
92	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
93	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
94	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
95	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
96	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
97	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
98	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
99	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
100	ジュース作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋

\*体験時間の指定はできません。

主催：大阪府立堺工科大学 定時制 (お問い合わせ先)  
〒590-0801 堺市堺区大仙山町12-1  
☎ 072-241-1401 観川 敬頼 宛  
\*お問い合わせは、18:00~20:00にお願います。

### 第3回 ゆめ・チャレ(子ども仕事体験)

**内 容** プロの指導のもと、堺工科大学定時制の生徒がサポートをし、様々な種類の仕事を体験できます。  
給料として疑似通貨(ユーマ)がもらえます。その疑似通貨(ユーマ)により、指定の場所でお買い物ができます。

**日 時** 平成26年12月21日(日)10:00~17:00(体験によって時間が異なります)  
実施時間の30分前まで「奥野晴明会館」に集合ください。

**場 所** 山之口商店街内 奥野晴明会館 〒590-0032 堺市堺区市之町東2-1-4

**対 象** 現在住の小学生 必ず保護者同伴をお願いいたします。

**申 込** 申込締切 平成26年12月1日(月)まで  
参加申込書につきましては、裏面添付しております。注意事項をお読みの上お申し込み下さい。  
12月10日(水)までに連絡がない場合は、落選となります。

番号	体験名	実施時間	定員	内 容	企 業
1	パン作り体験	10:00   12:00	各5名	パンをつくってみよう	ペーパードールズ
2	匂い袋づくり体験	10:00   16:00	各5名	匂い袋をつくってみよう	衣香除久太郎
3	マツダ物産体験	12:00   14:00	各5名	D5でマツダ物産を体験しよう	マツダ物産 本店
4	お餅づくり体験	10:00   16:00	各5名	お餅をつくってみよう	奥野晴明会館
5	ジュースづくり体験	12:00   16:00	各5名	かわいイブレスレットをつくってみよう	萬葉堂
6	包丁づくり体験	10:00   12:00	各5名	包丁をつくってみよう	徳島刀物製作所
7	和菓子づくり体験	12:00   14:00	各5名	和菓子をつくってみよう	丸田菓子舗
8	レストラン体験	12:00   14:00	各5名	洋食屋さんのお弁当をつくってみよう	なにお亭
9	和食器体験	14:00   16:00	各5名	レ스토랑のお弁当をつくってみよう	徳久保
10	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	和紙の折り紙をつくってみよう	紙友会
11	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
12	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
13	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
14	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
15	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
16	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
17	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
18	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
19	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
20	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
21	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
22	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
23	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
24	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
25	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
26	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
27	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
28	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
29	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
30	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
31	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
32	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
33	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
34	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
35	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
36	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
37	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
38	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
39	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
40	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
41	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
42	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
43	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
44	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
45	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
46	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
47	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
48	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
49	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
50	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
51	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
52	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
53	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
54	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
55	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
56	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
57	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
58	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
59	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
60	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
61	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
62	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
63	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
64	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
65	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
66	ジュースづくり体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
67	お寿司作り体験	14:00   16:00	各5名	お寿司をつくってみよう	お寿司屋
68	ジュースづくり体験	14			

### 第4回 ゆめ・チャレ(子ども仕事体験)

内容: プログラムの指導のもと、理工科高校定時制の生徒がサポート役し、様々な種類の仕事を体験できます。  
 資料として履歴書(ユーパ)の用紙が配布されます。その履歴書(ユーパ)により、指定の場所でお祝い物ができます。  
 日時: 平成27年11月20日(日)10:00~17:00(体験上乗って時間が異なります)  
 会場: 近鉄西宮駅20分徒歩で「美野町明覚ホール」に集合ください。  
 場所: 山之内商店街内 美野町明覚ホール 〒590-0902 堺市堺区市之町東2-1-1  
 対象: 現在住の小学生 必ず保護者同伴で開催いたします。  
 申込: 申込締切 平成27年12月1日(火)まで  
 ※参加料は無料です。お申し込みの際は、注意事項をお読みの上申し込みください。  
 ※すべて抽選となります。当選者には、FAXにてご連絡させていただきます。  
 ※2月10日(未)までに連絡がない場合は、落選とさせていただきます。  
 ※参加費: 参加費は参加者のための公共交通機関代を別途ご負担ください。

番号	体験名	実施予定時間	定員	内容	企業
1	パン屋さん体験	10:00-12:00	各6名	パンをつくらう	ペーカリーマルミ
2	サッシュ(甘い)餅づくり体験	10:00-16:00	各6名	サッシュ(甘い)餅をつくらう	沈香屋久次郎
3	マクドナルド体験	12:00-14:00	各6名	D.S.でマクドナルドを体験しよう	マクドナルド第一食品
4	お餅づくり体験	10:00-16:00	各6名	お餅をつくらう	美野町明覚
5	ジュエリーづくり体験	12:00-16:00	各6名	かわいらしプレスレットをつくらう	真野堂
6	包丁づくり体験	10:00-12:00	各6名	包丁をつくらう	塩原刀物製作所
7	和菓子づくり体験	12:00-14:00	各6名	和菓子をつくらう	大島菓子舗
8	レストラン体験	15:00	6名	接客販売のお手伝いをつくらう	徳茂亭
9	和食器体験	14:00-16:00	各6名	和食器の製作体験をつくらう	藤次郎
10	ジュースづくり体験	14:00-16:00	各4名	カラメルジュースをつくらう	紙カフェ
11	お寿司屋さん体験	14:00-15:00	各4名	お寿司をつくらう	伊勢寿司
12	靴木アート体験	10:00-12:00	各4名	靴木アート作りをつくらう	靴屋 美 AUKAJU
13	ハンコづくり体験	10:00-12:00	各6名	石のハンコをつくらう(篆刻)	藤玉堂印刷
14	菓子の体験	14:00-16:00	各6名	菓子のホームステーションをつくらう	鶴の館
15	木工体験	14:00-16:00	各4名	竹細工をしよう	木匠の工房
16	お花見体験	10:00-12:00	各6名	フクラヤシランをしよう	花匠の工房
17	和食器体験	14:00-16:00	各6名	和食器の製作体験をつくらう	藤次郎
18	和食器体験	14:00-16:00	各6名	和食器の製作体験をつくらう	藤次郎
19	和食器体験	14:00-16:00	各6名	和食器の製作体験をつくらう	藤次郎
20	和食器体験	14:00-16:00	各6名	和食器の製作体験をつくらう	藤次郎
21	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
22	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
23	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
24	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
25	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
26	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
27	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
28	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
29	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房

※体験時間の指定はできません。  
 ※参加料は無料です。  
 ※お問い合わせ先: 協賛: 美野町明覚・大小路界隈活性化委員会・藤本商店会  
 協力: 堺山之内商店街振興組合  
 主催: 大阪府立理工科高等学校 定時制 (お問い合わせ) 〒590-0901 堺市堺区大田中町 12-1 ☎ 072-241-1401 佐藤 教頭 宛  
 ※お問い合わせは、18:00~20:00にお願いします。

### 第5回 ゆめ・チャレ(子ども仕事体験)

内容: プログラムの指導のもと、理工科高校定時制の生徒がサポート役し、様々な種類の仕事を体験できます。  
 資料として履歴書(ユーパ)の用紙が配布されます。その履歴書(ユーパ)により、指定の場所でお祝い物ができます。  
 日時: 平成28年2月20日(日)10:00~17:00(体験上乗って時間が異なります)  
 会場: 近鉄西宮駅20分徒歩で「美野町明覚ホール」に集合ください。  
 場所: 山之内商店街内 美野町明覚ホール 〒590-0902 堺市堺区市之町東2-1-1  
 対象: 現在住の小学生 必ず保護者同伴で開催いたします。  
 申込: 申込締切 平成28年2月2日(火)まで  
 ※参加料は無料です。お申し込みの際は、注意事項をお読みの上申し込みください。  
 ※すべて抽選となります。当選者には、FAXにてご連絡させていただきます。  
 ※2月10日(未)までに連絡がない場合は、落選とさせていただきます。  
 ※参加費: 参加費は参加者のための公共交通機関代を別途ご負担ください。

番号	体験名	実施予定時間	定員	内容	企業
1	パン屋さん体験	10:00-12:00	各6名	パンをつくらう	ペーカリーマルミ
2	サッシュ(甘い)餅づくり体験	10:00-16:00	各6名	サッシュ(甘い)餅をつくらう	沈香屋久次郎
3	マクドナルド体験	12:00-14:00	各6名	D.S.でマクドナルドを体験しよう	マクドナルド第一食品
4	お餅づくり体験	10:00-16:00	各6名	お餅をつくらう	美野町明覚
5	ジュエリーづくり体験	12:00-16:00	各6名	かわいらしプレスレットをつくらう	真野堂
6	包丁づくり体験	10:00-12:00	各6名	包丁をつくらう	塩原刀物製作所
7	和菓子づくり体験	12:00-14:00	各6名	和菓子をつくらう	大島菓子舗
8	レストラン体験	15:00	6名	接客販売のお手伝いをつくらう	徳茂亭
9	和食器体験	14:00-16:00	各6名	和食器の製作体験をつくらう	藤次郎
10	ジュースづくり体験	14:00-16:00	各4名	カラメルジュースをつくらう	紙カフェ
11	お寿司屋さん体験	14:00-15:00	各4名	お寿司をつくらう	伊勢寿司
12	靴木アート体験	14:00-16:00	各4名	靴木アート作りをつくらう	靴屋 美 AUKAJU
13	ハンコづくり体験	10:00-12:00	各6名	石のハンコをつくらう(篆刻)	藤玉堂印刷
14	木工体験	14:00-16:00	各4名	竹細工をしよう	木匠の工房
15	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
16	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
17	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
18	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
19	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
20	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
21	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
22	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
23	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
24	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
25	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
26	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
27	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
28	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房
29	お花見体験	10:00-12:00	各6名	お花見体験をつくらう	山月工房

※体験時間の指定はできません。  
 ※参加料は無料です。  
 ※お問い合わせ先: 協賛: 美野町明覚・大小路界隈活性化委員会・藤本商店会  
 協力: 堺山之内商店街振興組合  
 主催: 大阪府立理工科高等学校 定時制 (お問い合わせ) 〒590-0901 堺市堺区大田中町 12-1 ☎ 072-241-1401 佐藤 教頭 宛  
 ※お問い合わせは、18:00~20:00にお願いします。

全くの手探り状態で第1回ゆめ・チャレが行われることとなった。チラシを6小学校に配布、10体験実施、応募者数107名、体験者数68名。その後第2回は6小学校に配布、28体験実施、応募者数235名、体験者数129名。第3回は7小学校に配布、34体験実施、応募者数312名、体験者数167名。第4回は8小学校に配布、43体験実施、応募者数436名、体験者数205名、第5回は11小学校に配布、52体験実施、応募者数620名、体験者数241名という右肩上がりの状況で、今ではかなりの抽選倍率

	実施日	協力企業数	体験数	応募者数	体験人数
第1回	2013/12/15	10	10	107	68
第2回	2014/2/23	18	28	235	129
第3回	2014/12/21	20	34	312	167
第4回	2015/12/20	24	43	436	205
第5回	2017/2/26	29	52	620	241

となっている。

小学生は、初めての職業体験に戸惑いながらも真剣に取り組み、「お給料」(疑似通貨ユーム)をもらう喜びと「働く」ということの大切さを学び、生まれて初めてもらった「お給料」800ユーム(800円相当)を保護者と相談しながら、大切に使用している光景も印象的だ。

また、本校生徒は、小学生をサポートするために一生懸命に仕事を覚え、戸惑っていた小学生にアドバイス出来るのが嬉しくて仕方がない様子で、授業では見せたことのない生き生きとした表情で取り組んだ。

この5年間で新聞に掲載されたり、堺市長をはじめ多くの方々が挨拶に訪れたり地域的一大イベントに成長した。本校生徒・職員と地域の連携と、「ゆめ・チャレ」に関わって頂いている皆様のおかげで、2年、3年と継続する事が出来ている。

「ゆめ・チャレ」は2017年1月に「文部科学

省・経済産業省キャリア教育推進連携表彰」において「優秀賞」として表彰された。



最近では徳島県や静岡県等、他府県からの視察や講演依頼があり、本校の取り組みが注目されてきている。他府県においてもぜひ取り組んでもらいたい事業である。



## 5 生徒の変容

以上の取り組みの結果、生徒は地域に誇りを持ち、自分に自信を持ち「自己有用感」を高めることが出来た。そして、地域の方々との関わりの中で「基本的生活習慣」を身につけることが出来た。まさに学校・家庭・地域が協力して生徒を育てている。



また、ボランティア活動に対する意識も高まり、教員側からではなく生徒側からの積極的な意見が出るようになり、近年、お世話になっている地域の清掃活動や、近隣の高齢者世帯への「電球交換」の活動等に取り組んでいる。

さらに地域企業・店舗の協力により、本校在学生の就労率は約95%を誇っており、学校斡旋就職率は100%になった。

これらの取り組みに、本来の定時制高校のあるべき姿(勤労青少年の学ぶ場)に戻りつつある。

本校の取り組みにより「定時制高校」の存在価値がこれまで以上に認められることを願ってやまない。

## 6 今後の展開

我々は、今後も地域と共に成長していくことが重要だと考えている。現在、大阪府堺市は、百舌鳥・古市古墳群を世界遺産に登録することを申請している。本校は世界最大の前方後円墳である仁徳天皇陵の近くに位置するので、地場産業を通して、世界遺産登録祈願を地域と共に盛

り上げていこうと考えている。

また、災害が多発している昨今、自分たちが出来ることを、世界に向けて発信していくことが大切であると考え、被災地にエールを送る意味も込めて、2016年12月に「ギネス記録」に挑戦した。タイトルは「お線香を使った世界一大きなモザイク画」で、図柄は「前方後円墳」である。生徒と教員が一丸となり見事に「ギネス世界記録」を達成し、世界一を獲得した。地域の産業である「線香」と地域の誇りである「前方後円墳」とをコラボさせた素晴らしい記録であると自負している。

地域との「トータルウイン」の世界を作り上げるために、今後も、日々精進していく所存である。

読売新聞 (朝刊) 平成29年1月5日

# 線香モザイク画 ギネス世界記録

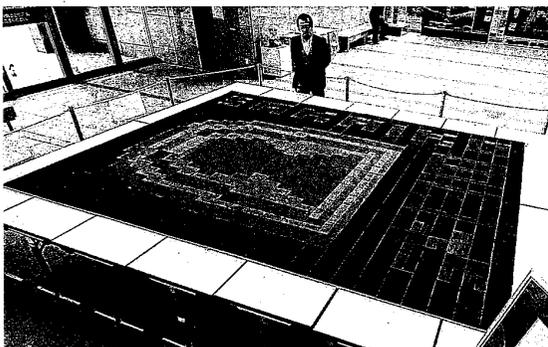
堺工科高制作

約3万7000本の線香を使い、「お香で作ったものは世界最大」とギネス世界記録に認定された前方後円墳のモザイク画(10・48平方尺)が4日、堺市役所本館1階に展示された。6日までの一般公開される。

府立堺工科高(堺市堺区)が創立80周年を記念して、堺の地場産品でもある線香で制作。昨年12月17日、生徒ら約600人が黒や緑など4色の線香(長さ約14cm)を接着剤で板より1枚に貼り付け、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産への登録を願って前方後円墳を描いた。

それまでの世界記録は、兵庫県淡路市で2010年7月に作られた4・83平方尺。当日は、2倍以上のモザイク画が完成したものの、公式認定員による点検で板に隙間が見つかったため失格となり、並べ直してようやく記録更新と認められたという。

企画から約2年間をかけて準備してきた採田光徳教諭(57)は「線香が折れたり、欠けたりしてもダメなので、事前に予行演習をして臨んだ。生徒たちが頑張った作品を世にひ見してほしいと話している。



堺工科高の生徒たちが手がけた線香によるモザイク画(堺市役所)

# 「まわしよみ新聞～新聞の 魅力・可能性を伝えるNIE～」



まわしよみ新聞実行委員会 代表  
観光家／commons・デザイナー

むつ さとし  
陸奥 賢

---

1978年大阪・住吉生まれ、堺育ち。最終学歴は中卒。放送作家、ライター、生活総合情報サイトAll About (オールアバウト) の大阪ガイドなどを経験。2007年に地元・堺を舞台にしたコミュニティ・ツーリズム企画で地域活性化ビジネスプラン「SAKAI賞」を受賞(主催・堺商工会議所)。観光プロデューサーとして2008年から2013年まで日本最大のまち歩きプロジェクト「大阪あそ歩」(2012年に観光庁長官表彰受賞)に携わった。現在は「大阪七墓巡り復活プロジェクト」「まわしよみ新聞」「直観読みブックマーカー」「当事者研究スゴロク」「大阪モダン寺巡礼」「演劇シチュエーションカード 劇札」「歌垣風呂」(京都文化ベンチャーコンペティション・とらや賞受賞)「仏笑い」など、観光、メディア、まちづくり、教育に関連する一連のcommons・デザイン・プロジェクトを企画・立案・主宰している。應典院寺町倶楽部世話人。大阪いちようカレッジ主任講師。大阪府高齢者大学講師。著書に『まわしよみ新聞のすめ』。連絡先はメールアドレス mutsu\_satoshi@ybb.ne.jp 携帯電話080-3032-0096。

---

## 記事切り抜き壁新聞に

「『7年ぶりに親と話した』のは、何がきっかけやったんやろ」。1日、大阪市の喫茶店に集まった男女5人が、ひきこもりの経験者らが制作している「ひきこもり新聞」の切り抜きを見せ合いながら話し込んでいた。持ち寄った新聞を読み比べて切り抜き、感想を語り合い、1枚の壁新聞に再編集する「まわしよみ新聞」。会場には、全国紙や地方紙、子ども向けの新聞などが用意され、話題は尽きない。実行委代表の陸奥賢さん（39）は見守るだけ。「新聞は身近なネタの宝庫なので、みんなで読めば面白い。4時間半続いたこともある」と振り返る。

大人の遊びとして2012年に発案。口コミで広がり、受け身ではなく自ら学ぶ「アクティブラーニング」の手法として注目され、学校でも活用されている。「4コマ漫画でも広告でも、何でもいい。テーマを決めないからこそ、参加者が主体性を発

NIE まわしよみ新聞実行委員会（大阪市）



気になる記事の切り抜きを並べて話し合う陸奥さん（中央）と参加者（大阪市西成区で）

揮できる」と語る。

「やり方を教えてほしい」と、韓国の若者が訪ねてきたこともある。ホームページには、「インターナショナル版」と銘打ち、英語と韓国語、中国語で方法を紹介。「いずれは世界中に広めたい」と考えている。

（佐々木伶）

小原友行・福山大学教授「まわしよみ新聞は、他者との対話を生み出し、その中から新聞の新たな価値を作り出す挑戦的な営みとして高く評価できる。教師教育や生涯学習の方法としての可能性も秘めている」

### 【最優秀賞選評】

小原友行 福山大学教授

「まわしよみ新聞は、他者との対話を生み出し、その中から新聞の新たな価値を作り出す挑戦的な営みとして高く評価できる。教師教育や生涯学習の方法としての可能性も秘めている」

# 1 はじめに

私は、普段は観光、まちづくり、地域おこしのプロデューサーとして活動をしているものです。10代半ばから、学校で勉強することよりも、実社会に出て仕事することに生きがいや喜びを感じ、いろんな仕事を転々としてきました。一度、読売新聞の新聞配達のアルバイトをやったこともあります。また20代前半にテレビ業界に入り、放送作家・リサーチャー・ライターといった仕事にも携わりました。学校関係者や教育関係者ではなくて、テレビ、ラジオ、雑誌、ウェブといったメディア業界に長くいた人間で、メディアの可能性を考えたり、その活動領域を広げることに興味・関心があります。

30歳を超えてからメディア業界だけではなく、観光業界やまちづくり業界の仕事も増えていったのですが、ひょんなことで大阪の下寺町にある應典院という浄土宗寺院と関わりを持つことになりました。應典院の住職は秋田光彦といい、若い頃は東京で映画プロデューサーをやっていたという異色の経歴の僧侶です。秋田住職が1997年に再建した應典院(大阪大空襲で焼失していました)は「葬式をしない寺」(檀家がない寺)を標榜し、NPOで運営され、かつ本堂が



劇場空間になっているという、これまた異色の寺院なのですが、大阪中の若い演劇人、アーティスト、クリエイターが集い、「日本一若者が集まる寺」とも呼ばれています。

この應典院で年に一度、「コモンズフェスタ」という総合芸術文化祭が実施されています。お寺といえば、現在では「葬式仏教」と呼ばれ、お葬式のときのみに使われるといったイメージが強いですが、かつてのお寺は「寺子屋」という学校であったり、「出開帳」といったイベント会場であったりと、多様な使われ方をしていました。コモンズフェスタというのは、かつてのお寺のように、そうした多様な人が出逢う場(コモンズ)でありたいということで、実施されています。私は、應典院のスタッフからのご依頼で、そのコモンズフェスタの企画委員になり、そこで「まわしよみ新聞」という新聞を使ったワークショップを2012年9月に提案、2013年1月に実施しました。



まわしよみ新聞は、以下のような手順で実施します。

- ① 4、5人で1チームを作る。いろんな新聞を持ってきて、みんなで、それらの新聞を回し読む。その中から「気になった記事」「面白いと感じた記事」「興味・関心を覚えた記事」などを切り抜く。広告や天気予報や四コマ漫画でも構わない。何枚、記事を切り取ってもいいが、ひとり3枚以上は記事を切り抜く。時間は15分から20分ぐらいを目安とする。
- ② 記事を1枚ずつ、順番にテーブルの上に提示していき、その記事について、みんなで話し合う。目安の時間は30分ほど。
- ③ みんなが面白いと思った、いろんな記事がテーブルの上に集まっているので、それらをまた再編集して、1枚の壁新聞にする。記事にコメントやイラストを書きこんだりしても良い。目安としては30分から40分ほど。
- ④ 出来上がった壁新聞（まわしよみ新聞）を、作った場所やいろんな場所に掲示して、通りすがりの人や、いろんな人に読んでもらう。

ワークショップ全体の時間は約1時間30分ほどです。既存の新聞を、みんなで再編集して、世界にひとつだけのオリジナルの壁新聞にしてしまう…というだけの非常に単純なワークショップなのですが、試験的に大阪のカフェで参加者を募って実施してみると、予想以上に「これは面白い」「新聞の魅力を再発見した」と評判になりました。いろ

んな場所で、いろんな方とやってみました。どこでやっても参加者が熱中するので、企画者の私も驚き、これは本格的に取り組んでみよう、公式サイト(<http://www.mawashiyomishinbun.info/>)を作り、「オープンソースのメディア遊び」として、2013年1月に広く世間に「まわしよみ新聞をやってみませんか?」と呼びかけました。またインターネットだけではなく、世間の人に、もっとまわしよみ新聞を広める手段として、2014年9月には『まわしよみ新聞のすゝめ』（著者：陸奥賢／編集：まわしよみ新聞実行委員会）という本を執筆し、クラウド・ファンディングで資金を集め、自費出版したりもしました。

当初は私の知人・友人たちが、まわしよみ新聞を一種のコミュニケーション・ツールと捉えて活用してくれていたのですが、じわじわと参加者のクチコミで「まわしよみ新聞は面白い」という認識が広まりだし、そうすると、私自身もまったく予想だにしない展開が次から次へと起こっていきました。

まず驚いたのが、新聞社がまわしよみ新聞の取り組みを始めたことでした。当初は地方の新聞社のニュースカフェとの連携が多くありました。とくに西日本新聞社の地域創造プロジェクト



「NEWS cafe『まわしよみ新聞』」は業界関係者からも高く評価されて、2014年11月には「日本新聞協会地域貢献賞」を受賞しました。現在では地方新聞社だけではなく、東京の大手新聞でも、新聞の価値を手軽に伝えられるツールとして、まわしよみ新聞が取り入れられるようになっています。

次に驚いたのが、新聞関係者に注目されだすと、教育関係者がまわしよみ新聞に着目し始めたことでした。とくにNIE関係者から「アクティブ・ラーニングのワークショップとして、まわしよみ新聞は使える」と認知され、様々な学校で取り組みが始まっていきました。私自身は、まわしよみ新聞は一種の「メディア遊び」として始めたものでしたので、教育の現場で使われたことは青天の霹靂のような事態でした。

また教育関係者に使われたことで、瞬間に北は北海道、南は沖縄まで日本全国各地の小学

校、中学校、高校、大学などで、まわしよみ新聞が実施されることになりました。正直、申し上げますと、私自身、まわしよみ新聞の価値を過小評価していた部分があり、しかし、様々な教育関係者の方との交流で、その大いなる可能性を気づかせていただきました。まわしよみ新聞は、NIEとして、一体、どのような効果があるのか？ まわしよみ新聞の教育的効果や価値とはなにか？ それらのことを拙文ですが、ご報告したいと思います。



## 2 取り組みの狙い・まわしよみ新聞の効果

### 1. 「自分語り」ではなく「世間語り」から始めるから対話がしやすい

まわしよみ新聞は、そもそもは應典院という寺を開いて、多様な人が集まり、どういった人たちなのかを知りたい…ということから考案されました。アイスブレイク、コミュニケーション・ツールという側面が強いものです。参加者同士で集まって、自己紹介をすればいいのですが、初対面で、自分のことをいきなり話すのは苦手という方も世の中には大勢います。そうしたことから、まず新聞を持ち込んで、それを読んでもらって、気になった記事や興味関心を覚えた記事を切り取ってもらって、それについて話をしていく…という構成にしました。

こうやって個人から情報を発信するのではなく、記事から情報を発信することで、「自分語り」ではなく「世間語り」から対話を始めていくことが可能です。初対面の方と、テーブルに座って、まったくなにもない白紙の状態から、いきなり「な

にか話題提供をして」といわれても、大勢の人は緊張してしまうでしょう。なにを話をしているのかわからなくなる。そこに「話のネタ」として新聞記事があれば、それが対話の「踏み台」になってくれて、とても話がしやすくなります。



このスタイルは、NIEの現場でも非常に有効でした。学生たちでまわしよみ新聞を実施する場合は、初対面というわけではないのですが、それでも学生たちの大部分は「自分語り」が苦手なようです。「世間語り」から始めることで、あまり照れなどがなくて、すんなりと場の話を始めることができます。普段はまったく話をしないという学生が、まわしよみ新聞をやってみると、急に生き生きと自分の興味・関心のある記事について喋り出して驚いたといった先生方の報告をうけたこともあります。

## 2. 「ノーテーマ」であるので「主体者性」「当事者性」が発揮されていく

まわしよみ新聞で、どんな記事を切り取ればい

いのか?と説明するときに、私は「面白いと思った記事」「興味・関心を覚えた記事」「なんとなく気になった記事」などを切り抜こうと学生たちに伝えます。このときにわかりやすく「面白いと思ったらどんな記事でもいい。新聞にはいろんな記事が載っている。政治や経済、料理や囲碁・将棋。テレビ欄。ラジオ欄。広告でもいいし、4コマ漫画でもいいよ」と伝えます。これは、いろんな先生方に「衝撃を覚えた」といわれました。ある小学校で、そのように伝えると、学生たちから「4コマ漫画を切り取ってもいいの!?!」と驚きの声が上がったそうで、学校現場では、かなり思い切った手段であったようです。

いろんな先生方と話をしましたが、それまでも

新聞を使った授業は数多くあるし、記事を切り抜くといったNIEも数多くあるようですが、そこでは大抵「テーマありき」が多かったといいます。例えば「平和」であるとか「震災復興」であるとか「オリンピック」であるとか、先生方が学生たちに先行してテーマを与えて、その範囲内で新聞記事を利用しようとする。

まわしよみ新聞は、そうしたテーマで縛るということは基本的にはやりません。思い切って学生たちを信用して、自由に記事を選択させます。その結果、広告記事ばかりの学生もいれば、4コマ漫画ばかりを選択する学生なんてのも出てきます。しかし、その記事の選択を最大限、許容します。その学生にとって「それが興味・関心がある」という記事を提示してもらうことで、初めて、その学生の「主体性」「当事者性」が浮かび上がってくるからです。主体的に、当事者として話をするのが許されることで、学生はのびのびと能動的に話をしていきます。

先生や大人たちが、子供たちに先行して「テーマ」を与えることで押し付け型の教育になってしまい、そうした教育に新聞を用いることは、下手をすると新聞のことが嫌いになりかねません。これはNIEとしては最大の失敗といえるでしょう。そうならないように、トップダウン型の押し付け型の教育ではなくて、学生自身の主体的な、当事者性を尊重して、対話を深めていくボトムアップ型の教育をやらうというのが、まわしよみ新聞の基本姿勢です。そこがアクティブ・ラーニングのツールとして最適であると評価され、日本全国の学校現場で使われることになった要因でした。

また「新聞のどこを切ってもいい」「どんな記事を切り取っても大丈夫」というのは、日本の新

聞のクオリティ・ペーパーとしての優秀性を反映しているともいえます。どこを切り取っても世相を表していて社会教育の教材になりえる。雑誌や週刊誌などは扇情的な記事も多く、学校現場で用いるにはふさわしくない記述が数多くみられます。しかし新聞は、社会の公器・社会の木鐸としての性格が強いメディアです。こうした新聞の誠実な公共的性格があつてこそ、まわしよみ新聞のような「(学生の主体性を尊重して) どこを切ってもいい」という懐の深いアクティブ・ラーニングが可能となっています。



### 3. 多様な記事が出てくることで 「他者の世界観」に触れることができる

まわしよみ新聞はノーテーマなので、学生たちがどんな記事を選んでくるのか、まったく読めません。多様な記事が出てきます。ある学生は「地域おこしの記事」を選べば、ある学生は「新作映画の記事」を選んだりもします。「その記事は、ぼくは(私は)絶対に切り取らない」といった記事もたくさん出てきます。しかし、そこが最も重要で、そうすることで「他者の世界観」に触れることができます。

情報化社会の主要メディアはインターネットです。インターネットは確かに便利で、とくに検

索性に優れたメディアです。しかし、検索性に優れているがゆえに弊害も起こりえます。「自分の世界観から抜け出ることができない」という弊害です。つまりインターネットを使っていると「知らない単語」「聞いたことがない言葉」「未知の検索ワード」を検索することがないという問題です。



なにか自分が興味あることがあって、それを調べするにはインターネットは非常に適したメディアでしょう。そういう意味でいえば、インターネットは「虫の眼」的なメディアです。細かく、いろいろなことを突き詰めて調べていくことに非常に向いている。しかし、世の中は、同時多発的に、いろいろなことが進行しています。近視眼的な「虫の眼」だけでは、どうしても世界観が狭くなり、結果、「ある特定の分野にはやたらと詳しいが、世間一般的な常識をまったく知らない」といった知識偏重が生まれ、社会性を損ねてしまいます。実際に、若者たちは「ネット依存」で「新聞離れ」の傾向にあるので、そうした若者たちが増えつつあります。なにを喋っているのかわからなくて、人と対話するのが苦手という若者も増えています。そうしたインターネット偏重時代だからこそ、「虫の眼」だけではなくて、時には視野を広くして「自分の世界以外の世界はどうなっているのか？」

「他者の世界はどうなっているか？」ということを知る「鳥の眼」も必要です。

そうした「鳥の眼」を養うために、最も適した情報媒体が新聞です。新聞は朝刊一紙で、約30万文字以上、300以上の記事が掲載されているといえます。価格も安く、読売新聞の場合、たったの130円で、世の中全般の動向が総覧できます。インターネットが検索性に優れたメディアであるならば、新聞は総覧性に優れたメディアです。そして、まわしよみ新聞は「ノーテーマ」で「どんな記事でもいいから、興味があれば、いろんな記事を切ってみよう」と推奨することで、総覧的なメディアである新聞の特性を最大限に発揮することができます。

また新聞を学生ひとりで読むのではなくて、4、5人のグループワークで、みんなで回し読むことで、より幅広い視野を獲得することができます。結局のところ、学生が一人で新聞を読んでいても、その学生の世界観…自分の興味・関心のある領域から逸脱することはなかなかありません。一人だけではなくて、みんなで集まって、各自が興味・関心のある記事を切り取って開示しあう。そうしたグループワークをすることで、多様な記事が集まり、他者の世界観を発見し、複合的な視野を獲得し、世の中、全般に一体、なにが起こっているのか？ということが可視化され、立体視されていくわけです。

学生一人だけの、個人的なワークショップでは、新聞の総覧性の魅力や可能性を最大化できません。グループワークすることで…他者の世界観（興味・関心ある記事）を持ち寄り、シェアすることで、「集合知」が立ち上がり、世の中全般を様々な視点で俯瞰する鳥の眼的な視野が獲得できます。

#### 4. 「新聞作り」「ものづくり」という 共同体験であること

まわしよみ新聞は、みんなが選んだ記事を再編集して最後にまた壁新聞（まわしよみ新聞）として再編集するというワークショップです。新聞を読んだり、記事を切り取ったり、それについていろんな人の意見交換をすることは、情報のインプットをする時間といえますが、最後に、情報のアウトプット（新聞化）も行います。

このときに重要なことは、「読者（他者）を意識して、まわしよみ新聞を作ってほしい」ということです。ただ自己満足に壁新聞を作って終わりではなくて、広く世間の人に読まれてこそ、新聞は新聞たりえます。読者（他者）を意識して、新聞を作ることで、「作り手側の気持ちに立つ」ことによって、より新聞（メディア）というものの構造を深く知ることが可能です。「目立つ写真を中央にもってこようか?」とか「イラストで新聞記事を表現しよう」といった創意工夫なども生まれてきます。

また作ったまわしよみ新聞は、学校の廊下や掲示板などに貼ることを推奨しています。通りすがりの学生が、まわしよみ新聞を見て、選ばれ



た新聞記事に興味・関心を覚えたり、自分たちでもやってみようといった動きにも繋がります。実際に滋賀県の龍谷大学では社会学部の授業でまわしよみ新聞を作成して学内に掲示していたら、それが政治学部の学生に読まれて、政治学部でもまわしよみ新聞が次々と実施されていく…といった波及効果が生まれました。自分たちで作ったまわしよみ新聞が、誰かに読まれて、他者に波及していくことで、メディアの力、メディアの可能性などにも気づくキッカケになります。

こうした「記事を切ったり」「記事を貼ったり」といったことが容易に可能であるのも、じつは新聞が「加工性」に優れているという特徴を持つアナログ・メディアであるからでこそです。こうした「切り貼り」はインターネットでは不可能です。まわしよみ新聞は情報をインプットする際は、新聞の「総覧性」という特徴を活かしていますが、情報をアウトプットする際は、新聞の「加工性」を活かしたNIEといえるでしょう。

#### 5. メディアの特性を知り、リテラシーを育む

まわしよみ新聞は、いろんな新聞を持ち込んで  
回し読むことで、同じニュースでも新聞社によっ

て扱い方が違うということがわかります。書かれている論調や文字量、写真の大きさなどでも、それぞれの新聞社のスタンスなどが自然と伺えます。

また、まわしよみ新聞は、インターネットにはない「総覧性」や「加工性」を利用したワークショップで

す。まわしよみ新聞をやると、メディアには、メディア固有の個性や特性があるという当然のことも自然と気づかされます。

真に豊かな情報化社会は、インターネット偏重ではなくて、インターネットはもちろんのこと、新聞や本、雑誌、テレビやラジオ、他者との対話といった、様々なメディアに触れて、それらのメディア特性を理解し、リテラシーを育むことで到来するものだと考えています。まわしよみ新聞はこれからの情報化社会に必要なメディア・リテラシーを涵養するものでもあります。

### 3

## 大学・小学校・中学校・高校などでの事例報告

まわしよみ新聞が初めて教育の現場で実施されたのは2012年10月の京都精華大学の竹内厚先生の「プロデュース論」でした。そこを皮切りに立命館大学、京都橘大学環境、大阪成蹊大学、関西学院大学、成美大学…と、当初は大学関係者のあいだでまわしよみ新聞が急速に広まっていきました。

大学でのまわしよみ新聞の面白い事例としては、立命館大学の学生たちが、まわしよみ新聞を授業で作成したあとに、その魅力にはまって、先生を抜きにして、自分たちで勝手に、自主的にまわしよみ新聞を作るサークル活動を始めたということがあります。「授業で実施したワークショップを面白いと夢中になって、生徒たちが企画してやりはじめた」なんていうのは前代未聞のことだそうで、これはまわしよみ新聞を実施したY先生も驚いたそうです。とくに企画メンバーの吉村茜衣さんは、まわしよみ新聞の魅力について以下のようなことを語ってくれています。

「1つの記事に対して、法学部の学生と国際関係学部の学生では視点や考え方の違いがあるなど、多様な見方があるのだと実感する」

「社会の問題にはさまざまな要因によって起きていると気づくことができます。そして、社会に対する自分の意見をアウトプットできる貴重な場でもあります」

「新聞を読んでいるときに『この記事、法学部の人だったらどう考えるのかな』というように、さまざまな立場から物事を考えられるようになり、記事を深く読むことができるようになりました。以前より視野が広がったと感じています」(立命館大学のネットメディア『+Rな人』より)

みんなで多様な記事を切り抜いてインプットして、集合知で読み解いて壁新聞として再編集し、情報発信(アウトプット)する…というまわしよみ新聞の魅力が端的に語られているコメントといえるでしょう。

こうした大学での動きが評判を呼んで、やがて教育関係者に広まり、高校・中学校・小学校にまで波及していきました。小学校の事例では、北海道の登別市立富岸小学校の牧野広太先生の事例が非常に特徴的です。これは牧野先生が北海道新聞のまわしよみ新聞の特集記事を読んで興味を持ち、『まわしよみ新聞のすゝめ』を購入したことから取り組みが始まったといえます。

牧野先生は6年生の担当ですが、先生が自宅で購入している新聞や、同僚の先生が購読している新聞の朝刊、夕刊を使用します。現在は新聞を取っている家庭も少なくなったので、こうした先生方の協力、提供によって新聞を調達しているそうです。そして児童は3~4人の担当班が交代で休憩時間などを使って「帰りの会」までに

まわしよみ新聞を仕上げます。また自分たちが切り取った記事について「事実」「意見と根拠」「提案」を発表するのですが、なによりも素晴らしいのは、これを毎日、実施していることです。

まわしよみ新聞は全体では90分ほどの時間が必要になるので、授業で実施するとすると、どうしても2コマは必要になってきます。毎日、まわしよみ新聞を実践することはなかなか難しい。そこで休憩時間を新聞作成の時間に当てること

で、毎日、発表するということが可能にしました。

こうなると児童の休憩時間が、まわしよみ新聞作りで費やされることに懸念がありますが、6年生クラスは総勢33名で、児童がまわしよみ新聞を担当するのは「9日間に1回」「10日間に1回」といったサイクルだそうで、とくに負担感はないそうです。むしろ「ノーテーマ」「なにを切り取ってもよい」「学生の自主性を貴ぶ」というまわしよみ新聞なので、児童たちは嬉々として新聞作りに取り組むそうです。

主催：福間中学校1学年・地域連携部  
コミュニティ・スクール福間中学校  
**地域の方と「まわしよみ新聞」**

まわしよみ新聞とは、新聞を読んでもう一度記事を読み直し、おしゃべりを楽しみ、最後はみんなで新聞を作るという新聞を使った遊びです。「どうしてその記事に目がとまったのか？」を紹介し合うことで、いろいろなモノの見方や考えに触れることができます。

平成27年2月27日(金) 受付 13:45  
14:05～15:55

会場：福間中学校 体育館  
(駐車場はグラウンドを利用してください。)

**申込方法** 裏面のFAX用紙に記入し、福間中へ  
FAXもしくは電話でお申し込みください。

参加者：福間中学校1学年179名・保護者・学校運営協議会・地域の方  
お問い合わせ：福間中学校 地域連携部 藤原 隆次  
TEL(0940)42-1124 FAX(0940)42-7606

**新聞で遊ぼう！語ろう！**

また毎日、まわしよみ新聞を作って発表するというのを繰り返すことで、児童たちの新聞への読解力、編集力、発表力が飛躍的に向上したといえます。一般的に小学生が作ったまわしよみ新聞は写真、広告などが多いのですが、牧野先生のクラスでは政治・経済といった社会的な記事も多く、そういう意味でも、見事なまわしよみ新聞活用といえます。

中学校の面白い事例では、福間中学校での「300人親子まわしよみ新聞」があります。これは福岡県福津市で、学校と家庭と地域を結びつ

けるコミュニティスクールの取り組みがあり、その特別授業の一環として実施されたものです。中学1年生230名と、生徒の両親・地域ボランティアの方など70名の計300名で一斉にまわしよみ新聞を実施するというもので、「日本一の参加者数を誇るまわしよみ新聞」です。

まず大人たちがまるで転校生のような形の前に出て自己紹介をし、各テーブルに着席し、先生方がまわしよみ新聞を説明します。その後、まわしよみ新聞を実際に作成しますが、中学生と大人が新聞記事をモチーフに「読む」「語る」「聴く」



また福岡中学校の白木照久校長からも「中学生の活字離れ、新聞離れが進むなか、新聞に興味を持つ意味でもまわしよみ新聞は有効だ。新聞記事を教材に、読む、聞く、話すの言語活動ができる。子どもたちの知識が増え、さまざまな見方や考え方が広がる」という感想を頂きました。実際に2015年から3年連続（2015年、2016年、2017年）で実施されていて、今後も

継続していくとのことです。

高校の教育現場でも、まわしよみ新聞は取り入れられていましたが、三省堂の高校国語教科書『明解国語総合』（平成29年度版）に収録されたことにより、2017年から高校の教育現場で、必修科目の授業の一部として実践されることになりました。



その『明解国語総合』の編集委員でもある大阪府立北野高校の榎井英人先生は、高校や大学で過去に何度もまわしよみ新聞を実施しています。授業を受けた学生は「一人で学習するよりも誰かと一緒に活動したほうが、自分では思いつかないようなアイデアが生まれ、自分の考えが広がるのだと感じました」といった感想を述べています。榎井先生は、実践を紹介する記事の中で「ウケ狙いで広告を切り取ったりする生徒がいる一方、人権に関する記事を選ぶなど、真面目な生徒もいます。生徒の集団や個性によって、内容は変わります。メンバーを入れ替えたり、何度も行ってみることで、生徒がより多様な情報に気づく機会になる」と指摘しています。そして、現場の先生たちに向けて「(まわしよみ新聞は) 気

軽に試みていただきたい活動」だと推奨しています。

こうして日本全国各地の小・中・高・大と幅広い教育機関でまわしよみ新聞は実施されて、その勢いは、さらに拡大傾向にあります。近年では、ついに日本国内を飛び越えて、海外でもまわしよみ新聞が実施されています。

例えば韓国・釜山ではアプコムというメディア研究所の若者たちが、わざわざ来阪して「まわしよみ新聞のやり方を教えてほしい」と私に直接、指導を申し込みに来ました。日本に留学中の韓国人大学生が、たまたまFacebookでまわしよみ新聞を見て興味を覚えて仲間とやってみたと

ころ、大いに盛り上がり、これは素晴らしいと教える請いにきたといいます。まさかまわしよみ新聞が、海外の若者にまで注目されるとは思いませんでしたが、私がやり方を指導すると、彼らは喜んで韓国に戻りました。現在も韓国の大学などで学生たちと一緒にまわしよみ新聞を実施しています。

また台湾でも銘伝大学の許均瑞先生が日本語教育の一環で、まわしよみ新聞を取り入れています。参加した学生たちからは「他人が興味を持つ記事について話が聞けて楽しかった」「社会に出てからも仲間同士で楽しめそう」といった感想を頂き、許先生からも「新聞をじっくりと読む習慣を身につけてもらうきっかけになる上、プレゼンをする際の自信を養う効果も期待できる。学生自らが記事を選択するので、取り組みへの意欲も自然と高まる。これから社会へ出ていく学生にとって、非常に役に立つ」(読売教育ネットワーク・会報19号・2016年7月号)と絶賛されました。

## 4 これからの展望

まわしよみ新聞は当初は地域から派生しまし

## 読売教育ネットワーク

レポート



台湾北部の桃園市にある銘伝大学の応用日本語学科で今春、日本語学習の一環として「まわしよみ新聞」の授業が行われた。試験的な実践だったが、学生たちの反応もよく、担当の許均瑞副教授は「今後は学期ごとに3〜5回、取り組んでいきたい」と意気込んでいる。

### 台湾の銘伝大学で「まわしよみ新聞」

「まわしよみ新聞」の授業で、気に入った新聞記事を切り抜く学生たち(銘伝大学提供)

銘伝大学



出来上がったまわしよみ新聞の一例(銘伝大学提供)

#### 「読売ワークシート通信」も活用

許副教授は、読売新聞記事を題材に国語や社会、英語など様々な科目を学ぶ「読売ワークシート通信」にも注目。自身の講義にも取り入れるなど、日本や台湾の新聞を使ってユニークな日本語教育を実践している。

5月には、ワークシート通信を活用した日本語学習教材「新聞日語(ニュースの日本語)」(台湾・五南図書出版)も出版しており、今回の「まわしよみ新聞」授業の実践についても論文にまとめ、台湾の学会や研究誌で発表する予定だ。



「読売ワークシート通信」を活用した日本語学習教材「新聞日語」

「まわしよみ新聞」は大抵の街づくりプロジェクト、陸奥野さんが考案した、新聞を使ったタプルワーク。仲間同士が新聞を持ち寄って、それぞれ気に入った記事を切り抜き、その面白さを語り合う。その後、切り抜きを自由なレイアウトで配置し、新たな見出しやイラストを加えて独自の壁新聞を編集する。通常はいくつかのグループに分かれて取り組み、それぞれが完成させた壁新聞を発表し合

って、出来栄を論評し合う。

同学科では、今年3〜5月、4年生4人が1グループに分かれ、読売新聞などを使って「まわしよみ新聞」の制作にチャレ

ンジした。今年1〜3月に発行された読売新聞計80ページのうちから記事を選び、それをトップニュースにするか、どんな見出しにするかなどを約2か月間かけて議論し、グループごとに完成させた。

学生からは「この活動を通じて新しい日本語の単語を習得できた」「他人が興味を持つ記事について話が聞けて楽しかった」「社会に出てからも仲間同士で楽しめそう」などの声が上がった。

許副教授も「新聞をじっくりと読む習慣を身につけてもらうきっかけになる上、プレゼンをする際の自信を養う効果も期待

している。学生自らが記事を選択するので、取り組みへの意欲も自然と高まる。これから社会へ出て行く学生にとって、非常に役に立つ」と評価している。

「まわしよみ新聞」は全国的に広がっているが、海外での活動は珍しい。考案者の陸奥野さんは「日本語教育に取り入れられるのは日本教育に比べて、現在の日本を知るには新聞がよい教材になる。今後ぜひ取り組んでもらえたらうれしい。活

字離れは日本ばかりでなく世界的に進んでいるので、全地球的に紙の新聞の良さを見直すきっかけになってくれれば」と期待している。

たが、NIEという分野で大発展を遂げて、活動領域を一気に広げていきました。2012年9月からの約5年間でまわしよみ新聞の実施回数は私が把握しているだけでも2000回を超えます。編集長(まわしよみ新聞を主宰・企画したことがある方)もすでに500名を超えています。まわしよみ新聞の参加者数は、もはや把握できません。数万人を超えています。

また、2015年からは「全国まわしよみ新聞サミ



ット」が実施されて、日本全国各地から編集長が集いますが(2015年は50名以上。2016年は70名以上と増加中です)、学校関係者・教育関係者の参加が非常に多く、「すでにNIEでまわしよみ新聞を取り入れた」という先生方の成果の発表や、「今後、まわしよみ新聞をNIEに取り組みたい」という意欲的な先生方が集まって、意見交換やネットワーク化が始まっています。福岡県で「300人まわしよみ新聞」をやると、宮城県でも「300人まわしよみ新聞」を実施する…といったような地域を超えた連携・連動が生まれています。海外進出なども、積極的にアプローチして、今後も増やしていきたいと思っています。

最後に、ひとつ、ほほえましいエピソードを。NIEでまわしよみ新聞を体験した小学生が家に帰って、ご両親に「新聞を買って!」とねだったそうです。その家では新聞を買っていなかったもので、もちろん両親は驚きました。しかし子供に言われるままに新聞を買うと、「まわしよみ新聞をしよう!」と誘われ、子供が進行役でやってみると、ご両親までもまわしよみ新聞にはまってしまったとか。NIEは「教育に新聞を」ですが、まわしよみ新聞で「NIH」(ニュースペーパー・イン・ホーム)が実現したそうです。「家庭に新聞を」。まわしよみ新聞の可能性として、こういったことも起こり得るのだなと思っています。

「ネット偏重」「新聞離れ」というのは、じつは日本だけの話ではなくて、全世界的な兆候です。鈴木伸元氏の『新聞消滅大国アメリカ』は衝撃的なレポートで、私も戦慄を覚えました。まわしよみ新聞が新聞の良さ、可能性を再発見するツールとなり、「新聞離れ」を食い止めるNIEとして活用されることを大いに期待していますし、私自身もそうした取り組みを今後も実践していくつもりです。



# 日本の伝統文化 蚕の飼育体験を通して



社会福祉法人峰悠会 おおぞら保育園 主任保育士

こぼやしまりこ  
**小林真理子**

1962年生まれ、1983年育英短期大学卒業後、4年間保育士として勤務。その後、結婚、4人の子どもに恵まれ、第4子が年中になる2002年にすぎの子幼稚園教諭として復帰し、1年勤めた後、2003年現保育園の創立時に保育士として勤務し15年目を迎える。

【幼児教育・保育】



座繰りについて話をする小林さん  
(群馬県桐生市のおおぞら保育園で)

蚕育て伝統文化知る

10月、保育園に1匹のヤマユガが舞い込んできた。「朝、見つけたよ。これは何だろう」

子どもたちに見せると、室内にある標本と見比べ、「似ている」と声が上がった。図鑑を開き、繭を作るヤマユガであると分かると、子どもたちは目を輝かせた。

群馬県桐生市は織物の産地で、保育園のある地域でも、養蚕が盛んだった。保育園では、市内の人からヤ

幼児教育・保育 おおぞら保育園(群馬県桐生市)主任保育士 小林真理子さん 55

ママユガの卵をもらい、裏山のクヌギに付着させて育てている。

子どもたちが蚕を育て、生糸ができるまでの過程を学ぶ取り組みも行っている。繭から糸を取り出す座繰り体験をしたこともある。

今年5月、富岡製糸場がある富岡市の市民養蚕事業に参加し、もらった蚕が繭になるまで約20日間、エサやりやフンの掃除などをした。言葉数の少ない園児がエサとなる桑の葉を毎日持参してくれたり、蚕が繭を作るための「まぶし」を園児の祖父が手作りしてくれたり、ドラマも生まれた。

小林さんは「飼育体験を通して地域の伝統文化についても知ることができた。家族との関係を深め、命について考える機会ともなった」と話している。(小野淳)

秋田喜代美・東京大学教授「園児が蚕の飼育に生き生きと取り組む姿が伝わる。幼児の疑問を大切に指導し、『もっと知りたい』という探求心を養っている。生命の大切さを学ぶ上でも良い実践例だ」

【最優秀賞選評】

秋田喜代美 東京大学教授

「園児が蚕の飼育に生き生きと取り組む姿が伝わる。幼児の疑問を大切に指導し、『もっと知りたい』という探求心を養っている。生命の大切さを学ぶ上でも良い実践例だ」

## 1 蚕の取り組みの背景



園周辺の新里地区は、明治時代より養蚕が盛んで、農業の中で一番の生産高を誇っていた。大正時代に入るとますます養蚕が盛んになったが、大正9年の第1次世界大戦後の不景気と大正12年の関東大震災などで繭の値下がり、昭和30年代に入ると化学繊維が出てきて生糸の値段が下がってしまった。そこで、当園の設立者“小池高次氏”が子どもの蚕を共同で飼う「稚蚕共同飼育所」を作り、これが成功し、昭和44年、関地区の小池高次氏は、群馬県養蚕農業協同組合主催の「繭生産合理化コンクール」で『農林大臣賞』を受賞、他にも大日本蚕糸会社から『蚕糸功績賞』を受賞した。そんな父を持ち、養蚕農家の環境で育った“小池文司氏”が園長となったすぎの子幼稚園では、開園と共に活動の中で子ども達が自宅から蚕を持ち寄り、園で飼育を行うようになった。しかし、近年、養蚕を営む農家は新里・関地区でわずか一戸となり、その歴史を実際見て学ぶ機会は、ほとんどなくなったことから、数年後、園での飼育がなくなってしまった。

幼稚園に隣接しておおぞら保育園が開園し、再び10年前に“日本絹の里”で幼虫を頂き、養

蚕経験のある先生の指導の下、年長組で飼育。再開した当初は飼育することが精一杯であった。翌年、卵の孵化に成功し、繭から真綿作りまで発展した。この経験から、毎年、年長児で蚕の飼育を行うために、前年度の年長児が次年度の年長児に「5月中旬に蚕の飼育をして欲しい」ことを記載した手紙を残し、継続していけるようにした。

それでも、年長児の担任はその他の活動も多く、蚕のエサやりまで手が回らず、子ども達と一緒に育てるというよりも、子ども達が帰宅してからの担任の居残りの仕事になってしまうこともあり、毎年の飼育が難しくなっていった。そして、またしても蚕の飼育が中断してしまった。

再び、蚕の飼育が再開されたのは、富岡製糸場が世界遺産に登録されたことがきっかけとなり、群馬県の伝統文化の継承を見直し、3年前

### 天蚕の幼虫と繭



からは富岡シルクブランド協議会の市民養蚕事業「おかいこを育てて繭をつくりませんか」の企画に参加して飼育を行うこととなった。

また、蚕（家蚕）と同時に天蚕と呼ばれる“ヤマムガ”を近隣の方のご協力で卵を頂き、クヌギの木に山付けし飼育を行っている。白と黄緑色の繭の神秘さを実感できる実体験を行い感性を養っている。

## 2 蚕の飼育



本園の教育目標具現化のために園内や園周辺の豊かな自然環境と関わる子どもの姿の中に、“なんでだろう？”“もっと知りたい”という探求心が多く芽生えている。

自然に積極的に働きかける子どもたちの姿は、五感を通して、『観て・触<sup>み</sup>って・感じる心』を培っている。

自然を通して本物に触れる体験、その中でも、地域との関わりの深い「蚕の飼育」に焦点を当て、3年前から参加している富岡シルクブランド協議会の市民養蚕事業「おかいこを育てて繭をつくりませんか」の企画の飼育体験を行っている。3年間の飼育体験事例から、子ども自身の育ちと同時に、家庭や地域の関わりがどのように深

まるかに視点をおくことにした。



## 3 実践事例

### 1. 平成27年度の飼育体験を通して

#### 飼育の環境

成長が間近で観察できる様に、また、室内での飼育と全学年で観察できる様に、戸外での飼育と環境を分けて行う。

## 飼育場所



室内



戸外



戸外

## エサ

人工飼料は冷蔵庫に保管しその都度持ってきて与えた。桑の木は園内にあり、平成27年、県養蚕試験場より桑の苗5本を頂く。

以前養蚕を営んでいた方のアドバイスで、葉っぱがすぐに乾燥してしまうので、濡れタオルにはさんで袋に入れて日陰に置いておくといいの

こと。→やってみると日持ちして食べもよかった。なるべく広げて重ならないようにしないと蚕が上に出てこれないとのこと。

午前と午後の2回エサを与えた。1日に1回程度はエサやり前にウンチの掃除もした。

網を用意し、エサやりの時に蚕の上に置き、その上に桑をのせる。網を2枚使用すると掃除もしやすい。

## 【導入として】

富岡シルクブランド協議会より、蚕をいただけるということで、保育の活動の中(帰りの会)で子ども達に伝える。本に載っている蚕の写真を見せながら、

保育者:「今度、保育園にこれをいただけるのだから。この虫さん知ってる?」

R:「知ってる!ほし組(4歳児)の時に見た。こういう丸いのにね、葉っぱと一緒にのつた」

保育者:「Rくん、よく覚えてるね。前のそら組(5歳児)さんもお世話していたの。今度はみんながお世話してくれる?」

K:「いいよ!」

保育者:「でもさ、みんなは何食るとか、どんなふうに世話をすればいいのかとか、蚕のこと、まだ分からないことがいっぱいあるよね? お部屋を探したらね、こんなに蚕の本があったの。みんなで見たりして蚕のことを調べてみたいと思



います。これ置いておくから後で見せてみてね」

次の日の朝、所持品始末を終えると早速、蚕の本を見る姿が多く見られた。



保育者:「何か分かったことある？」

Y:「桑の葉を食べるんだって」

保育者:「そうなんだ! よくわかったね」

Y:「ここに書いてあるよ」

保育者:「ほんとだね。じゃあさ、このことを知らない友達もいるからみんなに分かるように書いて貼っておこう」

紙と模造紙を用意しておき、調べたことを書いて貼れるように設定しておいた。Rくん、Kくんも桑の葉を食べることやウンチの形など、わかったことを真剣に紙に書いていた。その日の帰りの会でそのことを取り上げて紹介した。数日後、クラスに置いてある蚕の本をグループごとに渡して、調べることにした。友達と一緒に本を見ていく中で、産

んだときは卵が黄色いことや、成長すると幼虫は蛾になるということに気付いた様子があった。

### 【5月22日】

蚕をもらってきて、子ども達に蚕について話をする。「眠」という言葉も覚える様子があった。蚕の実物を見たことで大きさも分かりやすい様子があり、今は3齢幼虫でどんどん大きくなっていくということも、蚕の一生の表を見ながら説明すると真剣に聞く姿があった。午後の着替え後にも観察を行い、「まだ寝てる」「起きているのもいるよ」「脱皮した皮がある」など様々なことに気付く様子が見られた。

蚕の飼育を楽しみにしていた子ども達。事前に図鑑などで調べて蚕は何を食べて育つのかを知

人工飼料を食べる蚕



桑の葉を食べる蚕



り、前日から、家から桑の葉を持って来ている子どももいた。富岡から頂いてきた飼育セットに人工飼料もあったことから、人工飼料と桑の葉で育つ蚕の比較をして、かいこの大きさや色・ウンチの大きさ等の違いが出てくるのか…？ 飼育をしていくうえで、子ども達に気付いて欲しいという保育者の思いから、室内のなかで、それぞれ分けて飼育していくことにした。また、園長先生に戸外にも飼育小屋を作って頂き、温度の違いなど色々な環境により発育の変化があるのか…？を子ども達と共に観察していくことにした。

### 【5月27日】

エサやりや糞集めをなるべく子ども達と行えるように関わった。糞は手で集めていたが抵抗感を持つ様子は見られなかった。人工飼料のエサも最初は「くさい」と言っていた子もいたが、「みんながこのご飯あげないと、蚕お腹すいちゃうよね」「ご飯あげたから喜んで食べているね」など声掛けをすることで、「やりたい」「あげたい」と進んで行く様子が見られるようになった。観察している中で、脱皮した後の皮を見つけた。

K:「先生、なんかあった!」

保育者:「ほんとだ。これ何だろうね?」

K:「なんだろう?」

保育者:「蚕って、どんどん大きくなっていくときに何していくのだけ?」「着ていた服がちっちゃくなっておっきいのにするんだよね」などヒントを与えると、

K:「脱皮だ!」当園では、20年前からオオムラサキの一生の観察や、ジャコウアゲハやカブトムシを1年を通して観察できる環境があるため、“脱皮”については、すぐに理解をすることができた。

保育者:「そうだね。脱皮するんだよね。Kちゃん、よく気付いたね」その後、Eも脱皮した皮を見つけた。

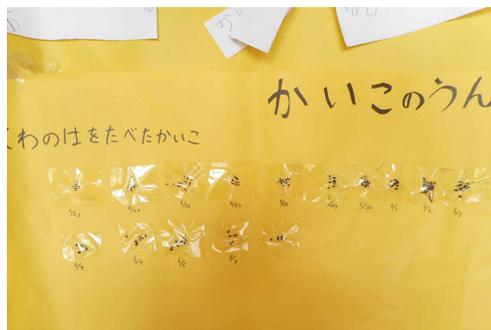
E:「先生、これなあに?」

保育者:「これね、Kちゃんも見つけたやつだ。Kちゃんが知っているから聞いてごらん?」

E:「これ何?」Kに尋ねる。

K:「脱皮だよ」

E:「脱皮したのか」保育者が間に入ることで友達同士で教えあう姿も見られた。



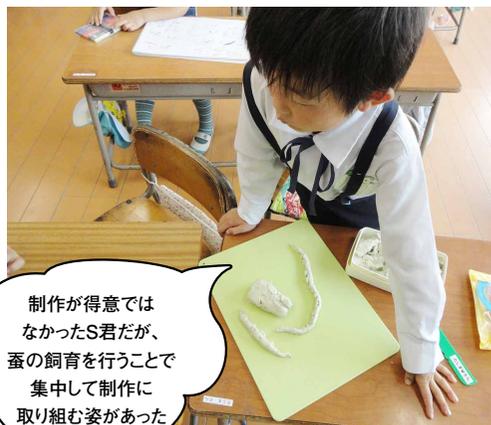
### 【5月28日】

集めた糞を模造紙に掲示してあり、何日か経つと初日よりだいぶ大きくなった様子があった。そのことに気づき、

R:「大きくなっているね」

保育者:「なんで大きくなっているのかね?」

R:「蚕が大きくなっているもん、ウンチだって大きくなるよ」



保育者:「そうだね。たくさん食べて大きくなっているものね」糞も大きくなっていっていると気付く様子もあった。

また、日頃からあまり集中力のないSは、粘土で遊んでいる時に、粘土の蚕を作ったりダンボールで制作した桑の葉と蚕を家庭から持参したりと興味を持つ姿が出てきた。

## 【6月2日】

人工飼料で育てている蚕が、育って大きくなってきた。しかし、その中で3匹程小さい蚕がいた。

保育者:「なんでこっちの蚕は小さいのだろう? 同じ部屋で同じエサなのにね」

K:「ふとつちよのが邪魔で食べられないんだよ」

保育者:「そっか。大きい蚕がいてエサが食べられないから大きくなれないのかもしれないね。じゃあ、どうしてあげればいいと思う?」

K:「あつちとこつちで分けてあげればいいよ」

H:「でも、こつちに来てエサ食べられちゃうよ」

K:「じゃあ、紙とかでさ、こつちにこないようにしてあげる?」

保育者:「そうだね。何かいいのあるかな?」廃材を出してみた。

K:「これは?」

H:「これも使えそう」

K:「これとこれをテープでくっつければいいんじゃない?」



H:「テープ持ってくるよ」友達同士で相談しながら進める姿が見られた。

K:「できた」

保育者:「いいのができたね。じゃあ、これ置いて仕切りにしてあげようね」

K:「でも、これじゃ、ふとつちよのが乗り越えてこつちに来ちゃうかも」

保育者:「じゃあ、これで大丈夫か、明日来た時に見てみよう。大きいのが越えて来てたらまた違うのにしてあげよう」帰りの会でクラス全体にも仕切りを作って設置したことを発表する。



## 【6月3日】

保育者:「大きい蚕、仕切り登っちゃった?」Kに聞いてみた。

K:「大丈夫だった!」その後も「大きくなった」「やっぱりエサが食べられなかったんだ」と観察しな

がら成長を喜ぶ姿が見られた。帰りの会の前に、まぶしを設置した。繭になる前は触らないよう話をした。

R:「じゃあ、さわらないでねって書いておく?」

保育者:「そうだね。いい考え」Rに紙に書いて貼ってもらった。設置してすぐ1匹登り始めた。

K:「もう入ってる。糸でてる」「わあ〜、すごい!」

子ども達の感動の瞬間!

### 廃材を使用してのまぶし制作



【6月4日】

保育者:「外の蚕のおうちにはまぶしないよね?どうしよう」

R:「1個持って行ってあげる」

保育者:「そうすると、こっちのまぶしが立っていらなくなるし、登ってるのもあるよ」

R:「つくる?」

保育者:「いいね。作ってあげようか。廃材出すから考えて作ってみよう。蚕は自分と同じくらい小さいおうちが好きなんだって」それぞれが思い思いに制作した後、蚕小屋へ設置した。

【6月9日】

蚕が繭を作り始めた。以前、子ども達が手作りして設置したまぶしにも繭を作っている様子があった。外の蚕小屋へ行き、様子を見てきた。

保育者:「蚕どうなってる?」

M:「繭になってる!」

保育者:「そうだね。どこで繭になってるかな?」

R:「Rが作ったやつに入ってる!」

S:「ほんとだ。こっちにも繭になってるよ」

保育者:「みんなが作ってくれたまぶし、使ってくれてよかったね。自分で作ったものを使ってくれたという喜びを味わうことができた。

【6月12日】

人工飼料で育てていた蚕がほとんど繭になったので、まぶしから取り出した。

保育者:「先生が取るからみんなで箱に入れてくれる?」子ども達に順番に箱入れをしてもらった。

K:「なんか音がした!」

K:「カラカラ言ったよ」

保育者:「何の音だろうね?」

K:「中でサナギになってるんだよ」「蛾になるんだよね」図鑑絵本などで調べてきたので、繭の中でサナギができ、その後、蛾になるということを理

解している様子が見られた。



### 【6月19日】

まぶしに繭ができたので、子ども達と一緒に取り出した。人工飼料と桑と与えたエサが違うので比較をした。

保育者:「最初は色を見てもよいか。こっちの箱とこっちの箱で違うところはある？」

R:「こっちが茶色い。」蚕小屋で育てたもの(エサは人工飼料から桑)を指差す。

保育者:「なんで茶色いんだろう？」

K:「ウンチがついてるからかな？」

Y:「おしっこがついてるのかも」

保育者:「そうかもね」けばを取ってみた。

保育者:「ほんとだ。けばを取ったら白くなったね。葉っぱの上で繭になったから、ウンチとかもつきやすかったのかもね」次に大きさを比較した。

保育者:「なんで小さいのと大きいのがあるのかな？」

K:「ご飯が食べられなかったから」

Y:「糸があんまりなかったから」

K:「繭になるときに体が丸くなったから」

保育者:「いろんな理由が考えられるね。じゃあ、人工飼料で育てた繭と桑で育てた繭はどう？」

子ども達:「人工飼料の方が大きくて、桑の方が小さい!!」

K:「人工飼料の方が栄養がたくさんあって、食べると大きくなって、桑も栄養あるけど人工飼料の方がたくさんあるんだ」

保育者:「そうかもね。人工飼料は栄養がたくさん入っているのかもね」色や大きさを比較し、子ども達の気付きもたくさん拾えた。自分達で育てた蚕の繭を集めるということで嬉しそうに取り組む姿があった。



### 【考 察】

蚕の飼育を通して、日頃から何事にも興味のあるK君につられ、他の子ども達も図鑑などを用いて、積極的に蚕について調べる姿が見られた。特に、体を動かす事は得意だが、何かに集中して取り組むことが苦手だったE君、R君、H君、S君達が熱心に図鑑で調べ、蚕のウンチの清掃やエサやり等のお世話を進んで行う姿が見られた

のには、蚕の飼育を行った成果がうかがえた。

その中でも、S君は制作活動の中で、粘土で蚕や桑の葉作りに集中して取り組むようになり、飼育することによって表現活動に発展していく姿には成長が感じられた。

また、H君は蚕の世話をすることによって、畑の作物に対しても気にかけるようになってきた。雨の降ったある日、「雨が降って、土の中のじゃがいもも大きく育つね」と、家庭にて発信する姿があったと、保護者の方から報告があり、生き物の飼育から作物の成長にも興味<sup>つな</sup>が繋がり、色々な面で成長していることがうかがえた。

今後の活動として、一部の繭を座繰り体験へと発展させるため、冷凍庫に入れ、サナギを殺して繭から糸を引くことを子ども達に伝えると、「かわいそう…」という声も聞かれたが、本当に繭から糸になるのかの疑問への興味関心が高まり、座繰り体験に期待を持っている様子<sup>う</sup>がうかがえた。

蚕の飼育を通して、責任感や集中力が芽生えた子ども達。子ども自身が疑問に対して確信への糸口を見いだしたり、壁に当たったりしながら、かつて、日本の伝統産業であり、この地域でも農家の主産業であった養蚕業を直接体験することができた。そして、日本の近代化のための生糸や絹織物等を輸出し、今日の日本の発展の礎を築いたことを保育者と共に学習することができた。

また、子どもたちから『桐生は日本の機どころ』『繭と生糸は日本一』の「上毛カルタ」に結びつき、カルタと実践を通して、自分のふるさとを大切に<sup>こ</sup>する心を育てていきたい。

今後も直接体験を通して『観て・触って・感じる心』と養蚕業や絹織物業の日本の伝統産業の両者を併せて、教材としてさらに研究を進めていきたい。



## 2. 平成28年度の飼育体験を通して

**飼育場所** 4歳になるまで室内での飼育を行う



## 飼育場所



戸外蚕小屋



## エサ



人工飼料は冷蔵庫に保管し、その都度持ってきて与えた。

桑は図書館前、「むしむしの家」の裏側、近隣の方の畑、子ども達が持参。

## 【導入として】

富岡シルクブランド協議会より、蚕をいただけるといふことで、『うまれたよ！ カイコ』の絵本の読み聞かせを行い、蚕についての導入を行う。

保育者：「蚕って知っている？」

K：「前にほし組の時にみた」

保育者：「蚕は何を食べるの？」

K：「桑の葉っぱ」絵本で確認してみる。

子ども達：「本当だ！」

保育者：「桑の葉っぱって保育園のどこにあるわけ？」すぐに思い出せず、ヒントを与えていく。

K：「図書館だ！」

保育者：「正解。図書館にもあるし、動物ランドにもあるよ。絵本にも載っていたけど、蚕って大きくなったらたくさん桑の葉っぱを食べるみたい」

N：「保育園のだけじゃ足りないかも…」

## 園の玄関ホールに繭の展示



**保育者:**「じゃあうちに桑の葉っぱがあるか聞いてきて」子ども達に桑の葉があるか確認する宿題を出した。

玄関ホールにある、蚕の掲示物を見に行く。

**H:**「これが繭だね」

**保育者:**「触ってみてもいいよ」

**子ども達:**「わあ!糸引いた!!」「柔らかいね」「フワフワしてる」

**H:**「カラカラ音になる!!」

**保育者:**「繭の中には何が入ってるって絵本に書いてあったっけ?」

**H:**「サナギが入ってるからカラカラするのか!」

実際の蚕を見ていないせいか、まだ実感が湧かない様子もうかがえたが、蚕について興味、関心を深めている様子がうかがえた。これからクラス全体で蚕の世話をしていこうと意欲的になる姿も見られた。

### 【5月23日】

20日に頂いた蚕を教室に置いておく4日程前から桑の葉を家から持参してくる子どもがいて、期待を高めている様子。いただいた蚕を子ども達に見せる。

**子ども達:**「かわいい〜」

**Y:**「ほし組の時見たやつと同じだ。これエサやらなくても平気?」



**保育者:**「今寝てるみたい。顔を上げてみると寝てるってことなんだって」

**N:**「この蚕、下の蚕を枕にしてるよ」

**T:**「みんな動かないから氷オニしてるみたいだね」

**H:**「いっぱいだけど苦しくないのかな?」

**Y:**「早く起きないかなー、お世話するの楽しみ」

**R:**「これ1齢幼虫?」

**保育者:**「これが3齢幼虫で、起きたら4齢幼虫になるんだって」

**子ども達:**「えー!小さいんだね」絵本で大きさは見ていたが、実際に見るとその小ささに驚く。

**K:**「こんなに小さいとは思わなかった」

**保育者:**「そろそろ起きるからエサをやるのだけど、蚕のエサは桑の葉っぱだよ?」

**子ども達:**「うん」

**保育者:**「でもね、桑の葉だけじゃなくて人が作ったエサもあるのだって。人工飼料っていうんだ」

よ」人工飼料を見せる。

子ども達:「えー!触ってみたい!」

保育者:「桑の葉っぱとどこが違うだろう?触ってみて」

子ども達:「人工飼料は冷たい!」

保育者:「冷蔵庫に置いておくといいみたい」匂いを嗅ぐ子ども達。人工飼料は「臭い!」「いい匂い」と意見が分かれる。

桑の葉は「お茶の匂いだ」「蚕の匂いもする」という感想だった。

保育者:「人工飼料と桑の葉っぱ、食べると何が違うと思う?」

H:「どっちがおいしいだろう?」子ども達は意見を出し合い、蚕の大きさやエサやウンチの違いに興味を持った。

保育者:「それでは、実験してみよう! エサによって大きさやウンチはどうなるのか観察しよう」

子ども達:「いいね! そうしよう!!」

保育者:「今ここに500頭の蚕がいます。どうやって分ける?」子ども達と相談し、200頭を桑の葉、300頭を人工飼料での飼育に決定した。エサを与えるために、蚕を移動する。

R:「脱皮した皮がある!」

子ども達:「どれ? あ、本当だ!!」「蚕の皮ってこういうのなんだ」「本当に4齢幼虫になったんだね」保育者はそれをいくつか取っておき、後日掲示をした。



エサを与える。

子ども達:「食べてる!!」

H:「桑の葉っぱを食べて、葉っぱから顔出した!」

R:「食べる時、顎が動いてるよ」

保育者:「人が作ったエサと、桑の葉っぱ、どっちがおいしいのかな?」

H:「桑の葉だよ! 栄養満点だもん」子ども達は大興奮をして初日を迎えた。

昔、養蚕をしていたという幼児の祖母が園の蚕の様子を見に来てくださり、保育者はアドバイスをもらいながら、不慣れではあるが、子ども達との飼育を行った。



### 【5月26日】 蚕のエサの違いはなんだ?

蚕のエサやりが毎日の日課になった頃。

K:「柔らかいウンチと固いウンチがあるね」

保育者:「みんなと一緒だね」

E:「コロコウウンチとバナナウンチだね」

保育者:「人工飼料と桑の葉の違いはどう?」

K:「桑の葉の方が大きいウンチしてる」

E:「やっぱり桑の方が栄養があるんだね」

昨年度は、人工飼料の方が栄養があると、子ども達と検証していたが、保育者はそれを伝えずに観察をしていくことにした。糞の違いも分かるように、後日、保育者が掲示をした。



いな」蚕小屋に蚕が移動しても変わらず、毎日エサやりに励んだ。

この日の夕方、桑を食べていた蚕が数頭顔を上げ出す。

保育者:「あれ? 蚕の様子どう?」

H:「あ、顔上げてるよ!」

K:「顔上げてるってことは眠になるのかな?」

H:「腹筋つかってる!」

E:「5齢幼虫になるんだ!」次の日から蚕は全て眠に入り、29日に5齢幼虫となった。



### 【5月30日】 5齢幼虫に成長

子ども達:「脱皮していた!!」蚕の成長を喜ぶ姿が見られた。

子ども達:「これからもいっぱいエサをあげないとだね」脱皮した皮の大きさが4齢と5齢でどのくらい違うのか分かるように掲示をした。

### 【5月27日】 蚕小屋の完成

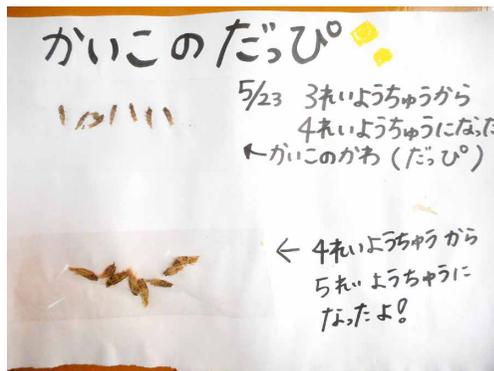
教室に隣接する屋上に園長と子ども達が協力して蚕小屋を作ったので、より観察がしやすい環境となった。

H:「蚕大きくなってきたよね」

K:「蚕外に移動したけど、鳥に食べられないとい



### 昔の蚕かごを使用し「このめ」の段作り



**【5月31日】**

H:「いっぱい桑の葉っぱ食べるようになったね」

M:「昨日より大きくなっている」

保育者:「Hちゃんのお婆ちゃんが5齢幼虫になると顔が違って言っていたけど、何が違うのかな?」

H:「口が変わったよ」

E:「色が前より白くなったよ。あと、『い』の模様が大きくなってはっきりした」

H:「顔が変わったよね。少しオレンジっぽくなった」

K:「ウンチが大きくなったよ」

H:「蚕の足の吸盤が強くなった! Hにくっついてくる〜」エサの量も増えた。

A:「さっきあげたのに、もう食べちゃったね」

蚕が4齢幼虫の時には小さくて触るのも「潰れないかな」と恐る恐るだった子ども達だが、5齢幼虫になり、蚕の体もしっかりしてきたことで、触れ合いがしやすくなり、さらに親しみが湧いた様子。

ウンチの大きさも引き続き記録をし、掲示をした。



**【6月3日】まぶし作り**

保育者:「もうすぐ繭になるから、お部屋作らないとだね」おやつでジョアが出る。

E:「これ、蚕のお部屋に使いそう!」



子ども達の提案から、頂いたまぶしだけでなく、廃材でも作ろうと決めた。

N:「うちからいっぱいトイレトイレットペーパーの芯、持ってきたよ」子ども達と一緒にまぶし作りを行った。

保育者:「本物のまぶしもあるんだよ」

子ども達:「わ〜すごい!」

保育者:「これでも使って繭にしてあげようね。でも



ね、このまぶし、前の繭の糸が少し残ってるの…」

子ども達:「みんなで取ろう!」まぶしの制作に合わせて、掃除も行う。

R:「これでいつ繭になっても大丈夫だね」



#### 【6月8日】 繭になり始める

子ども達:「繭になってる!」

保育者:「繭になる前に蚕の色が変わるみたい」

K:「黄色っぽいね。なんかみんな足が黄色くなってきたよ」

R:「うわ! おしっこしてるよ! やっぱ繭になる前におしっこ出るんだね」

A:「まぶしに入れてもこの子は繭になりたくないみたい。どっか行っちゃう」

保育者:「蚕は自分で繭になるお部屋を選んだって」

子ども達:「そうなんだ! どの部屋にするのかな?」

H:「この蚕、今繭作ってるよ」

子ども達:「うわ〜本当だ! 頑張れ!」

#### 【6月9日】

H:「昨日作り始めた繭が綺麗な繭になってる!」

成長が遅れ、小さかった蚕も繭になり始めた。

小さい繭は赤ちゃんと言って可愛がっていた子ども達。

M:「赤ちゃん蚕も繭になった!」

子ども達:「かわいい〜」

その後、次々と繭になり始めた蚕。保育者は蚕が繭になる時は触っちゃダメと子ども達に伝えた。触りたい気持ちを抑えながらも、繭になる蚕を応援していた子ども達の姿が見られた。

#### 【6月13日】 蚕が死んじゃった

11日の時点で残り数十頭、繭になっていない蚕がいた。保育者は天候などを配慮し、室内に蚕を移動させ帰宅。12日は日曜日ということで職員が出勤せず、そのまま室内で過ごした蚕。しかしその日は思ったよりも暑い日になり、室温が上昇した可能性があり、13日の朝見ると蚕がたくさん死んでいた。

子ども達:「え、蚕死んでる!」「こっちも死んでる」「いっぱい死んじゃった」

保育者:「なんでだろうね…。実は土曜日にお部屋に入れて帰って、昨日はずっとこの部屋の中に蚕がいたの」

K:「暑かったのかな?」

保育者:「そうかも知れないね」

子ども達:「かわいそう…」

H:「死んじゃった蚕、やわらかいよ」

E:「蚕が黒くなってる。やっぱり暑くて焦げちゃったんだ」

保育者:「この蚕どうしようか」

子ども達:「お墓を作ってあげようよ」

子ども達の提案から、後日、お墓を作って埋葬した。命について考える。



### 【6月15日】 繭を取ろう!

保育者:「そろそろ繭を取ってみようか」

H:「わあ! すごい糸!!」

M:「フワフワしてて気持ちが良い」

Y:「なんか雪みたいだね」

E:「見て、カラカラ音が鳴る!」

R:「サナギがいるんだね」

K:「なんだか指がすべすべになってきた」

E:「あれ? こっちの繭は丸なのに、この繭はピーナッツの形してるよ」まぶしの違いによって繭の形が少しずつ違うことに気付いた子ども達。

保育者:「なんでこっちのまぶしの方が綺麗な繭が出来たのかな?」

R:「蚕が小さかったんじゃない?」

H:「ピーナッツの形をしている繭の方はまぶしが狭かったんだよ、きっと」

保育者:「桑の葉を食べていた蚕の繭と、人工飼料を食べていた蚕の繭の違いはどうか?」

E:「桑の葉を食べていた繭の方が大きいよ」

H:「やっぱり栄養があったんだね」

保育者:「やっぱり自然の物がいいんだね。すごいね! みんな大発見だったね」

H:「この繭、富岡製糸場に返しちゃうのでしょ?」

保育者:「そうだよ」

子ども達:「なんか寂しいね」

保育者:「でもきっと蚕はみんなに育ててもらって嬉しかったと思うよ」

前年度は、人工飼料の方が大きく育ち人工飼料に栄養が沢山含まれているという見解に至ったが、翌年は桑のみで育てた蚕の方が大きく育ち、昔ながらの自然の桑の方が蚕を育てるのに良いという答えを子ども達が見いだした。保育者はどちらも否定せず、気温や桑の葉の状態や環境で蚕の食べ方も変わってくるのではないかと考え、次年度の飼育にて答えを導き出せることに期待することにした。

### 【座繰り体験】

座繰り機を園専用に専門業者に注文し作って頂く。過去の蚕の飼育を通して、実際に繭から糸が出来る場面を直接体験させたいために、地域の方のご協力で座繰り体験も経験していた保育者が中心となり、園での座繰り体験を初めて行った。ぬるま湯の中で繭を煮て、糸を引き出す作業はなかなか上手くは出来なかったが、子ども達は実際に糸になっていく様子を見て、目を輝かせていた。

子ども達:「すごい! 糸が出る」「細いね」「クルクル回ってる!」「おもしろいね」「踊っているみたい」

## 専門家による過去の座繰り体験



### ●糸がだんだん巻き取られていくと…

子ども達:「サナギが出てきた」「ちょっとかわいそう…」

保育者:「蚕の命をもらって糸を作るんだよね。ありがとう」

●一匹の蚕がはく糸の長さが約1.3km位で、子ども達が園の行事の駅伝大会で走る農道の一周のコースと同じことを伝えと、よりいっそうビックリする姿がうかがえた。

### 【考察】

#### ①子どものやる気

前年度の年長児の取り組みを間近で見ていた子ども達は、「今度は自分たちの番だ」と蚕の飼育にとても意欲を持って取り組むことが出来た。蚕が園にくる何日も前から自宅や祖母の家にある桑の葉を持参してきた子ども達。繭になるまで毎日、子ども達が桑の葉を持参していた。そ



れだけ、興味関心が高かった。園の桑を取りに行った際にも保育者が切った桑をみんなで協力しようと一生懸命運ぶ姿が見られた。協調性を育てたい年齢だけに、この蚕の飼育を通して友達と協力することも学ぶことが出来たように感じる。登園するとすぐに「蚕はどう?」と蚕の様子を

見に行く子ども達の姿があり、蚕がクラスの一員のような存在にもなっていた。また、蚕の死では「どうして死んじゃったのだろう」と考えたり、「かわいそう」と悲しんだりする姿が見られ、生命の大切さや尊さを学ぶきっかけにもなった。

今回の蚕の飼育では、知識のない保育者が本で調べたり、経験者にアドバイスをもらったりしながら試行錯誤して行っていた。

## ②保護者の協力

蚕小屋を保育室の外の登降園の出入り口横に設置したことで、登園時や降園時にエサやり、ウンチ交換を子ども達と行っていると、沢山の保護者が声をかけてくれ、協力してくれた。

「昔、祖母の家で蚕を育てていたんです。懐かしいなあ〜という話や「昔は〜だった」「蚕の飼育、まぶしのやり方はこうした方が良い」などたくさんの保護者が色々な話をしてくれた。「桑を乗せる網があると掃除がしやすい」と昔、養蚕をしていた時に使用していた網を持ってきてくれた方もいた。また、「桑は足りていますか?」と毎朝、子どもと一緒にたくさん持ってきてくれる祖母の方もいた。

また、家庭でも子ども達が「桑が足りない」「寒くて蚕が死んでしまった」「繭になったよ」と報告することで、送迎の際には保護者の方からの気にかける様子があり、親子で蚕の成長の様子を覗いて行かれる方が多くいた。

中には「初めて蚕を見ました」「触るのは無理!」と言っていた保護者の方も成長していく蚕の様子を気にして観察していく姿がうかがえた。今までは子ども達の関わりだけだったが親子での共通の話題となったことで、子ども達も今まで以上に興味関心が持てたように感じた。

## ③蚕小屋を協力して作る

この年はたくさんの頭数の飼育となったため、

園長先生と男性職員、地域の方が協力し蚕小屋を作ってくれた。教室に隣接した蚕小屋は登降園時、また、保育活動中もいつでも観察できる環境となった。そのため、「かわいいね」と手のひらに乗せて可愛がる様子が見られ、ウンチの掃除やエサやりをほとんどの子が毎日関わる事が出来た。中でも、すぐに見られる環境で飼育をしていたため、最後まで蚕を一度も触れずにいた女兒も、毎日必ず他の子がお世話をしている時はそばでず〜っと、蚕の成長を見つめる姿もうかがえた。

## ④土・日曜日の餌くれ

年長児の多くの子ども達がお休みとなる土日の飼育は、以前は数頭ずつ子ども達が家に持ち帰り、家庭で保護者の方にも協力して頂いたこともあったが、今年度は担当が土曜日・日曜日と自主的に出勤し飼育を行った。

しかし、もう少しで繭になるだろうという日曜日は、「もうエサはやらなくても良い」と判断し、まぶしに移動をさせて、鳥に食べられないように室内に入れてその日は様子を見に行かなかった。その結果、月曜日の朝、様子を見ると残っていたほとんどの蚕が死んでいた。

保育者同士検証する中で、日曜日は30℃以上に気温が上昇し閉め切りの状態だったため、暑さで死んでしまったのか? または、その明け方からは雨も降り、気温が20℃以下となり寒さで死んでしまったのか? が課題となった。

## ⑤人工飼料と桑の葉

今年度は、人工飼料と桑の葉を食べて育つ蚕の違いについて学びたいという保育者の思いから、エサの違いについても学び、観察していくなかで、発見や気づきを子ども達から出来るようになったのも成長を感じた。

## 興味津々な保護者達



### 【結果】

- 桑の葉の方が育ちが良かった。
- 繭になるのも桑の葉の方が早かった。
- 5齢2日目位から、人工飼料から桑の葉を与えた方が人工飼料のみよりは繭になるのが早かった。
- 繭の大きさも桑の葉の方が大きかった。

子ども達は「**桑の葉の方が栄養満点なんだね**」という結論に繋がった。

### ⑥みんなの協力

富岡製糸場から蚕をお世話して頂き、エサとなる桑は近隣の地域の方の畑にある物を提供して頂いたり、祖父母の方が孫のために毎朝、桑の枝切りをして持たせてくれたり、蚕小屋の制作を園長先生や地域の方の協力の下、設置してくれ

たり、子ども達も全員が協力し飼育に励み、“みんなの協力”が一丸となり、素晴らしい蚕の飼育体験が行えた。

蚕飼育経験のない保育者も「昔は本当に養蚕が多かったのだ」と実感した。今では養蚕をしている農家はほとんどないが、群馬県民として、蚕に親しみを持って昔ながらの伝統文化を継承していかなければならないと改めて感じた。今回の蚕の飼育を通して子どもだけでなく、保育者も蚕の飼育の難しさや楽しさを学ぶことが出来て、とても良い経験となった。

## 3. 平成29年度の飼育体験を通して

### 新しい蚕小屋での飼育

富岡シルクブランド協議会の市民養蚕事業「おかいこを育てて繭をつくりませんか」の企画では、蚕の飼育3年目を迎え年長児を中心に行う。

昨年は、以上児の受け入れ場所の屋上で飼育小屋だったが、未満児や子育て支援センターに来園の地域の方の目にも触れられるように、子育て支援センターのエリア内に蚕小屋を設置した。そのために、0・1歳児も蚕に興味を示したり、飼育担当クラス以外の以上児も気軽にお世話をしたりできる環境になった。



## 【エサ別飼育】

今回もエサ別に分けて飼育を行い、過去2年間で答えの違った疑問点の追究をした。

①桑の葉だけを与える ②人工飼料だけを与える ③桑の葉と人工飼料両方を与える の3パターンでの飼育を行う。その結果、②人工飼料だけを与えた蚕が一番大きく育ち、大きな繭を作る結果なった。子ども達は、「人工飼料は栄養が考えられて作られているから、一番栄養があるんだ」と答えを出していた。

しかし、保育者は、断定しきれない思いが残った。なぜなら、今回は飼育場所が保育場所から離れていたために、まめにエサをやることが出来ず、桑の葉がカラカラになっているのに気付かなかつたり、他の活動が忙しく1日1回しかエサやりが出来なかったこともあった。そのため、桑だけの飼育の蚕はエサが食べられなかったり、人工飼料の方は余分に与えていたため、量が充分に足りていたことが考えられる。このことから、3年間継続してエサ別飼育を行ったが、それぞれ環境が違う飼育のため比較が出来ず、桑と人工飼料のどちらの方が栄養があるのか、答えは導き出せないままとなった。

## 【家族と共に】

今年度は、園での飼育の他に、希望者に5頭ずつ飼育を任せ、毎日家に持ち帰りお世話してもらうことにした。

子ども達に希望を募ると、ほぼ全員持ち帰り飼育を希望したが、約束として「おうちの人がOKだったら」ということにした。ほとんどの保護者が「ちょっと無理…」と、子どもが頼んでも自宅飼育を断ってきた。祖父母の送迎の家は、快く持ち帰りをしても翌日「ママがダメと言うので…」と返してくるお宅もあった。

いつも控えめであまり園でも言葉を発しない



女児Yちゃんと、突発的に手が出てしまい少し乱暴な男児S君は持ち帰り<sup>かな</sup>たいという気持ちが出て、毎日継続して自宅での飼育を行うことができた。Yちゃんは自分がお世話をして成長していく蚕の飼育を通して、自信が出てきて何事にも積極的になり、苦手だった鉄棒や縄跳びの練習にも一生懸命取り組むようになった。S君は毎日責任をもって蚕のお世話をすることで、優しさが芽生え、お友達とのトラブルも少なくなってきた。

しっかり者だが、言葉数の少ないAちゃんは毎日桑の葉を持参していた。ミニ運動会で保育者も朝から慌ただしく蚕のエサやりも忘れていた日、祖母と桑の葉を部屋まで持って来てくれ、保育者もエサやりを忘れていたことさえも忘れていたため、クラス全体にも紹介し、桑を持参してくれたことに皆で感謝を表した。そのことをきっかけに思ったことを保育者に自信を持って発信す

る姿が見られるようになった。

また、昔、養蚕業をしていたという3世代家族の男児T君のお宅では、乾いた桑を与えているのを見て「かわいそう」と涙を流した曾祖母が毎日桑を取って来て与える役目になり毎日楽しそうだったという報告を受けた。祖父は、孫が一生懸命トイレットペーパーの芯で繭を作るためのまぶし作りをしているのを見て、日頃から無口な祖父が黙って外に出て何かしていると思ったら、「自然の物で作ったまぶしの方がいい」と手作りまぶしを作っていたと「家族全員が蚕の飼育のおかげでひとつになれた、楽しい時間が過ごせました」と報告も頂く。

祖父の手作りまぶし



## 4 蚕の飼育体験を通し

自園は子ども達の将来の「生きる力」、一人ひとりの子どもが意欲的に遊び、自然の中で幅の広い学習を直接体験することを大切にしている。幼児期は心身の遊びを中心にした生活の中で、発達に必要な豊かな体験を得るために適した教育環境をつくり出すことが大事になる。子ども達が主体的に興味・関心を持って探求心を深めるた

めの環境として、オオムラサキやジャコウアゲハ、カブトムシなど、1年を通して昆虫に関わり観察出来る環境やポニーヤブタ、ウサギなどの飼育を通して命の大切さに触れたり、作物の生長を通して育てる喜びを味わったりと、これまでも素晴らしい環境の中、保育・教育を行うことができていた。

しかし、蚕の飼育体験はこれまでの昆虫や動物・作物では経験出来なかったことを習得出来たように感じる。

蚕は3齢幼虫から20日間位は毎日エサやりや糞の掃除と手を抜かず関わっていかなければならない。

オオムラサキやカブトムシなどは、クヌギやエノキの木があったり、ジャコウアゲハはウマノスズクサの葉があったりすれば、子ども達が時々その場に行き観察することが出来た。動物も当番活動を順番で行うため、毎日行わなくてはならないものではない。作物の水やりも雨が降れば毎日行う必要もなかった。

蚕は毎日、かつ午前と午後と休むことなくお世話をしなければならぬ。エサの交換をしなかったり、部屋の温度も気かけないと死んでしまったりと、20日間は遊びより何よりも優先しなければならなかったため、他の動物の飼育以上に愛情が湧き、死んだときは悲しみも深くなった。そのため、飼育に関わった子ども達の気持ちの変化や成長した部分が著しく顕著に表れたように思う。

3年間の蚕の飼育を通して子ども自身が学び、感性を養い探求すると同時に、家庭との関わりが深まることとなり、園と家庭との保育の質の向上に繋がり、貴重な体験活動となった。

今年度は、今後の予定として職員研修で「日本絹の里」(高崎市)、子ども達とは世界遺産「富岡製糸場」に勉強会に行く予定もしている。

# 「地域の色・自分の色」を テーマとした 美術館×学校×地域の取り組み



「地域の色・自分の色」実行委員会 代表

「地域の色・自分の色」実行委員会 委員長

てる やまりょう じ

**照山龍治**

---

1952年生まれ。1975年熊本大学工学部卒業。同年大分県庁採用。2005年総務部人事課長。2008年総務部審議監。同年7月総務部審議監(併)教育委員会総務審議監。2009年病院局長(病院事業管理者)。2011年生活環境部長。2012年財団法人分県文化スポーツ振興財団専務理事。2013年公益財団法人分県芸術文化スポーツ振興財団専務理事。現在に至る。連絡は大分市高砂町2番33号の同財団へ。

---

【美術教育】

美の感性 島から学ぶ

「白い石があった」「これ、赤紫色になりそう」――。10月下旬、瀬戸内海に浮かぶ人口約2000人の大分県・姫島の海岸で、地元の姫島小の子どもたちの元気な声が響いた。

子どもたちが拾い集めていたのは石。細かく砕いて様々な色の絵の具を作り、思い思いの絵を描くという。6年の大海大和君(12)は「石から絵の具ができるとは思わなかった。最初はびっくりしました」と目を輝かせた。

取り組みが始まったのは2014年。日本ジオパークにも認定される自然豊かな島に暮らす子どもたちに、美術的な感性を育んでもらおうとの計画が持ち上がった。

島特産の車エビの殻なども使い、約3年間で200色以上の色を作った。活動を通じ「島が好きになった」と話す子もいたり、他人との対話が苦手だった子が、周

美術教育 「地域の色・自分の色」実行委員会 (大分市)



子どもたちと海岸で石を選ぶ照山委員長(中央)＝10月28日、大分県姫島村で

囲を気遣うようになったり、好ましい効果が表れ始めている。

実行委員長を務める大分県芸術文化スポーツ振興財団の照山龍治専務理事(65)は「古里や個性に自信が持てるようになっていく。島の良いところを知れば郷土愛が芽生え、将来、子どもたちが島に帰ってくるかもしれない」と話している。(瀬戸聡仁)

宮坂元裕・横浜国立大学名誉教授  
「子どもたちは姫島がたくさんの色に満ちていることを知り、地域の魅力を再発見した。県、学校、住民が一丸となり、美術の力で郷土愛を芽生えさせた優れた実践である」

【最優秀賞選評】

宮坂元裕 横浜国立大学名誉教授

「子どもたちは姫島がたくさんの色に満ちていることを知り、地域の魅力を再発見した。県、学校、住民が一丸となり、美術の力で郷土愛を芽生えさせた優れた実践である」

## 1

## 取り組みの経緯と 姫島村の現状

平成27年度に開館した大分県立美術館(OPAM)は、公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団が大分県より委託を受けて管理運営している美術館である。大分県から美術を活用した人材育成と地域振興を求められ、開館前の平成26年度よりアウトリーチを始めることとなった。具体的には、県内各地に足を運び、地元の小中学生と地域の素材(鉱物や植物、生き物)を使って顔料や染料を作る取り組みである。この体験的な学習の狙いは、子ども達が地域のすばらしさを再発見し、自分のよきにも気付くことである。本研究では、県内で美術館から地理的に最も遠い姫島で実践してきたアウトリーチに焦点を当て、その経緯と実践内容について報告する。その上で、この活動が島の子どもの達や学校にどのような影響を与えたのか、そして地域にどのような変化をもたらしたのかを明らかにしていきたい。

姫島村は、周囲を海で囲まれた離島であり、火山活動により形成された独特の地質地形や豊かな生態系を持つ地域である。近年は、水産業の衰退による人口減少・少子高齢化、子どもの学力不足に悩まされてきた。美術教育についても、児童生徒数が少ないため学校に美術教員がいない、近くに美術館がなく本物の芸術作品に触れられる機会が極めて少ない等、子ども達が自ら学びの機会を得ることが困難な状況にある。

そのような中、姫島村は地質・地形から地域のすばらしさを再認識し、それを村内外に発信する手段として日本ジオパークに申請をし、平成25年に見事認定を受けた。一方、東日本大震災の教訓をふまえ、県及び姫島村をはじめとする市町村は、地域防災計画の見直しを進めている最中であった。これが契機となり、姫島の小中

学生を対象に、地質地形から地域の魅力を再発見するジオ学習を開始した。ジオ学習は、村民や観光客に村の魅力を伝える「ジオ案内人」の育成へと発展し、人材育成・地域振興につながっている。そこで我々は、ジオ学習に美術館のアウトリーチを連動させ、「色」という美術的な視点を加えた取り組みを行うことにした。子どもに地域素材等を使った造形的な遊びを体験させることを通して、地域のよさと自分のよさ、それらの可能性に気付かせていく活動である。アウトリーチは、今年で4年目を迎えた。

## 2 目的・方法

大分県立美術館のアウトリーチの目的は、「色」という視点から身の回りの豊かな自然に関心を持ち、ふるさとの魅力や自ら学ぶ楽しさを感じると子ども・地域を育てることである。ここでいう「色」とは、地域の色(ふるさとの色)を意味する。大分県の18市町村それぞれに「地域の色」があることを地元住民と共有することや、子ども達一人ひとりが「自分の色」を一色探しだし、生涯の宝物として保存・継承できることの2点を目標に掲げ、「地域の色・自分の色」というテーマで年1回、2日間の日程で実施している。アウトリーチでは、子どもに作品や素材の本物に触れる機会を与えること、自然物から顔料を作って絵を描く等の体験の中で子どもの興味を広げ探究心を高めることを重視している。本取り組みの主な柱は、大分県立美術館の教育普及プログラムと大分の鉱物・植物等から成るオリジナル教材の活用、県教育委員会・市町村教育委員会・地域と一緒にあって取り組むための仕組み作り、地域と協働した地域教材の開発の3点である。

## 3

## 「地域の色・自分の色」の 取り組みの経緯

### 1. 学校、教育委員会との連携の仕組みづくり

活動の開始から平成28年度まで、大分県立美術館は次のような取り組みを行ってきた。

年 月	内 容
平成25年2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大分県知事諮問機関答申 「芸術文化を活用した人材育成・地域振興を行うべきである」</li> </ul>
平成26年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 開館1年前に、教育普及グループを設置した。</li> </ul>
平成26年6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域の鉱物から絵の具をつくるワークショップを開始した。 大分県教育委員会「ふるさとの魅力発見・継承推進事業」と大分県立美術館のプログラム「大分県から絵の具をつくる」の連動について協議し、「地域の色・自分の色」というテーマでの連携がはじまった。</li> </ul>
平成26年10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 姫島小学校にて「姫島まるごとジオ・ミュージアム」を開催した。</li> <li>● 姫島の全小中学生を対象に「ザ・ピグメント 姫島色をつくる」を実施した。</li> <li>● 保護者等村民を対象に講演会を実施した。</li> </ul> <p>姫島村長、教育長との協議で、「取り組みが長く続くための仕組みとして、村教委の事業である姫島村青少年健全育成村民会議の事業に位置づけることや、学校の教育課程に位置づけることを検討したい」との提案も受け、「小学校1年生が中学校卒業までの9年間を見据えた10ヵ年計画」で「姫島ジオ・ミュージアム」を行うこととなった。</p>
平成27年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 姫島村立姫島小学校及び中学校で、姫島まるごとジオ・ミュージアムを教育課程に位置付けた。</li> </ul>
平成27年5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 県下全小学生6万人を対象に「ファーストミュージアム体験事業」を開始。 姫島小学校の子ども達全員が大分県立美術館に来館した。</li> </ul>
平成28年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小学校4年生を対象に「アクティブラーニング美術教育推進事業（県教育委員会主催）」を実施。姫島小学校4年生が大分県立美術館を訪問した。</li> </ul>

## 2. 美術体験プログラムの開発と実施

以下は、平成26年～平成28年までの3年間で開発し、実施したプログラムである。

### ① 姫島色をつくるプログラム

身近な鉱物や植物など地域資源を素材として、顔料や染料を作り、ふるさとの色と自分の色を体感するプログラムである。小学校4～6年及び中学生を対象とした。

#### 平成26年度 ザ・ピグメント ～絵の具は石からできている？～

##### <内容>

小学生は、学校に近い達磨山下海岸で石を採取し、その石で顔料づくりを行い、絵を描いた。中学生は、顔料づくりの体験に併せて、県内の石仏や壁画で使われている絵の具と地域の鉱物に関する講座を受講した。加えて、学校の授業の中で、地域のシンボルである里山を題材とした「自分色に染まる矢筈岳」をテーマに、手作りの顔料を使って、ふるさとの色を体感した。



#### 平成27年度 いのちの色 ～植物～

##### <内容>

学校の周りの植物から染料を作り、布を染めるプログラム。小学生は、様々な植物の花や葉、実や茎などを混ぜあわせた雑草ブレンドというテーマで染色に取り組んだ。中学生は、植物の使う部位を考え、染めあがりを想定するなどして染色した。姫島の湧き水である拍子水を媒染に使い発色させた。



#### 平成28年度 墨に五彩あり？ ～車えびシェルブラック～

##### <内容>

姫島の特産品である車エビの殻から、黒の顔料を作るプログラム。車エビの殻を蒸し焼きにして、その炭から顔料をつくり、実際に絵を描いた。小学生は、班で共同制作し、びょうぶ屏風仕立ての画用紙に、車えびシェルブラックで、ふるさとの魅力を表現した。



## ②身体を動かすプログラム

### 平成26年度 布と戯れる・ふわふわ、もこもこの気持ち (対象:小学校1～3年生)

#### <内容>

体育館で、8メートル四方の大きな布を使って、体を動かすプログラム。波打って雲のようにになっている布の上を歩く、空気をはらんで膨らんだ布の中に入るなど、身体を活性化させるプログラム。また、布に姫島の様々な風景を映し鑑賞した。



### 平成26年度 積むぞ、我らの姫島砦 (対象:小学校1～3年生)

#### <内容>

学校の近くにある達磨山下海岸に行き、石や漂流物を使ってオブジェ（姫島砦<sup>とりで</sup>）を作るプログラム。達磨山下海岸の特徴である丸みを帯びた石や黒曜石などの鉱物を集めたり、それを積み上げたり、漂流物など様々な素材をミックスして、自由にオブジェを作り上げた。



### 平成27年度 色・イロたっぷり カラフル・インスタレーション(対象:小学校1～6年生)

#### <内容>

12色の紙テープで遊びながら、色の美しさを体感するプログラム。紙テープを床いっぱい転がして体育館をカラフルに変身させた。紙テープを集めて山盛りにしたり、そこから、紙テープをちぎったりして、最後は、紙吹雪にして楽しんだ。



### 平成28年度 影をつかまえる 日光写真の楽しみ方(対象:小学校1～3年生)

#### <内容>

感光紙の上に文房具を置いて、日光写真を作るワークショップ。光を当てる時間や光の強さなどに気を付け、変化する色の不思議を体感した。また、子ども達は文房具の置き方にこだわりを持って取り組んだ。



## 4 活動結果および考察

### 1. プログラムの内容についての考察

#### ①美術体験を通して、豊かな感性を育成する

一般的に、美術を楽しむために必要な能力は「絵を描く才能(技能)」や「美術に関する深い知識」であると思われがちだが、それは大きな間違いである。本当に必要な能力は、「見ることを楽しむ力」、つまり鋭敏な感性である。作品を見ることも作ることも、何かを表現する活動は「きれいだな」「面白いな」と感じることから始まる。大分県立美術館のプログラムでは、何気ない日常にある身近なものに目を向けて「きれいだな」「面白いな」と感じることを「美術している」と表現する。新たな発見やそこから生まれる感動を大切にしている。子どもや大人に豊かな感性を育むため、身体を動かすプログラムを実施している。身体を動かして心身を解放することが、感覚を活性化させ、感性を豊かにすることにつながると考えているからだ。

姫島で実施した取り組みの中では、「布と戯れる・ふわふわ、もここの気持ち(H26)」や「色・イロたっぷり カラフル・インスタレーション(H27)」がこれにあたる。前者のプログラムを例にあげて説明すると、直径8メートルほどの布を使って参加者全員で遊ぶ活動である。布を全員で持って上下に揺らすと布が空気と触れ合ってどンドン形が変わり、大きな波が打ち寄せて来るような、ふわふわの雲の上を歩いているような感覚になる。布で空気をつかまえると巨大な卵状のドームが出現し、子ども達から大きな歓声が上がった。一枚の布から生命をもった生き物へとイメージが広がっていく。空気をはらんだドームの感触は心地よく、子ども達は布に身体を預けて布に

包まれる感覚を楽しんだり、愛おしそうに撫でて抱きしめたり、布を叩いたり、無数の遊びが生まれた。一見すると子どもがただ遊びに没頭しているだけに見えるが、こういった直接的な体感を伴う行為は、身体と感覚を活性化させることができると考えている。心身が解放されることで、その後の活動が生き生きとしたものになる。プログラムの最後に、ドーム状の布の中に潜って非日常的な感覚を楽しむ活動を取り入れた。ドームをスクリーンにして身近な景色の写真を投影すると、子ども達は「これは〇〇だ!」「かわいい〜」「きれいだね」と大歓声を上げた。見慣れた景色も、新鮮な目と心で見ると見え方が変わり、新たな発見や感動が生まれてくると思う。

#### ②身近な自然への関心を高めること

大分県立美術館は、芸術文化を通じた人材育成・地域振興を目指して活動している。その地域でしか採取できない石や土、植物などを素材としたプログラムを開発し、実践している。土や



石、植物など、その地域独自のものを美術的な視点から見直すことで、地元の魅力を発見することができると考えている。

姫島村は7つの火山からなる独特な地質を持っており、姫島で採れる石は色や形が豊富である。植物も多く、彩り豊かな美しい場所であるが、姫島の子ども達には当たり前にあるものであり、何らかのアクションがなければその価値を認識することは難しい。そこで、「姫島色をつくる(H26～28)」や「積むぞ、我らの姫島砦(H26)」というプログラムを実施し、姫島の魅力を体感できるようにした。



「姫島色をつくる(H26～28)」(小学校高学年の取り組み)では、平成26、27年度は、顔料や染料の素材を探すため、子ども達と一緒に学校の近くの海岸や学校の周りに散策に行くことから始めた。子ども達には馴染みの深い場所であるはずなのに、次々に色々なものを先生や美術館職員の元へ持って来ては「これは何？」と質問を投げかけていた。美術という視点から身近な自然を見直すことで、その美しさに気が付かせることができた。平成28年度は、車エビの殻を乾燥させて蒸し焼きにし、黒色絵の具を作った。地元の特産品から絵の具を作る体験は、生まれ育った地域を今までとは違う視点から見ることにつ

ながったのではないかと思う。

また、「影をつかまえる 日光写真の楽しみ方(H28)」は、太陽光を使った活動である。一見すると理科の実験のようだが、現在の学校現場では、理科の授業中に日光写真づくりを経験できる学校は少ないのではないだろうか。本プログラムでは、子ども達は理科の実験ではなく工芸の作品づくりとして日光写真に取り組み、色の変化や影を写し取ることを楽しんでた。我々は、このような経験の積み重ねが、身近な自然への関心を高めるきっかけになると考えている。

### ③美術・文化理解の視点について

「姫島色をつくる(H26～28)」プログラムを通してできた顔料・染料と、それを使って生みだされた色や作品については、途中の段階で必ず全員で見比べる時間を設定している。こうすることで、作品や素材を「見る」ことを楽しむことができるようになる。活動の中で、色の違いに対する発見や「きれい」「すごい」という感動を次々に自分の言葉で表現した子ども達。自然に「美術する心」が育っている様子をうかがうことができた。

プログラムの中で、子ども達は天然の色彩の美しさに気が付いているようだ。だが中には、青や赤といった鮮やかな色彩がないことに気が付く子どももいる。そのような子どもの知的好奇心に応えるため、プログラムの最後にミニレクチャー



を取り入れている。通常では入手困難な青や赤の顔料はどうやって入手するのか、大分の文化財である石仏や神社仏閣と顔料との関係について等、子ども達から出される疑問に丁寧に応えながらレクチャーを行っている。本物の青（アズライト、ラピスラズリ）、赤（辰砂）などを間近に見せると、子ども達から歓声が上がった。地域の文化財にも目を向けさせ、絵の具づくりと日常をつなげることで美術文化理解に向けた基盤を養うことができたと感じている。

## 2. 子ども達の学びの姿から捉えた成長の記録

平成26年～平成28年までの3年間を通して、子ども達の表情や行動にも変化が生まれている。ここからは、その例を取り上げる。子ども達の様子は、以下の育成すべき資質・能力の整理表に従って、教育効果を判断する。なお、本表は、中央教育審議会教育課程部会芸術ワーキンググループ平成28年7月19日 資料「小・中・高を通じ、図画工作科、美術科芸術科（美術、工芸）において育成すべき資質・能力の整理（案）」を参考に作成した。

A：知識・技能 (教科に固有の知識やスキル)		B：思考・判断・表現 (教科の本質に根ざした見方・考え方)		C：学びに向かう力 (人間性)
a：知識	b：創造的な技能	a：表現	b：鑑賞	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 発想や構想する際に活用する知識</li> <li>② 表現方法や用具の扱いなど、技能を働かせる際に活用する知識</li> <li>③ 作品などのよさや美しさなどを感知取る際に活用する知識</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 思いついた活動や、表したいことに合わせて材料や用具の特徴を生かして使い、創造的に表す技能</li> <li>② 思いついた活動や、表したいことにあわせて、表し方を工夫し、創造的に表す技能</li> <li>③ 前学年までの材料や用具などについての経験を生かして、創造的につくる技能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 色作りや色を見ることをきっかけとして、造形的な活動を思いついたり、表したいことを見つけたりする</li> <li>② 感性や創造力、手や体全体の感覚などを働かせて、形や色、材料などを操作しながら創造的に思考・判断し、表し方を工夫する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 手や身体全体の感覚を働かせて、色をとらえる</li> <li>② 複数の色を比較し、その差異から、色の特徴をとらえる</li> <li>③ 画材としての質感や発色などの視点を持って、色材をとらえる</li> <li>④ 素材や色材、作品などから見たことについて話しながら、創造的に思考・判断し、よさや美しさなどを感知取る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 色や素材への関心、積極的に関わる態度</li> <li>② 自分のイメージにあった色を作り出そうとする意欲</li> <li>③ 素材が色材に生まれ変わることへの喜び</li> <li>④ 色に対する解釈の多様性を理解しようとする態度</li> <li>⑤ 色の持つ意味や役割などを積極的に活用しようとする態度</li> <li>⑥ 色という視点から、人や社会とかかわる態度</li> <li>⑦ 地域の自然・歴史・文化への関心</li> <li>⑧ 美的なものへの憧れ</li> </ul>

①児童A(女子)の人間性(学びに向かう力)の成長

児童Aは3年間を通して、この取り組みに対して特に熱心であった児童の1人である。児童Aは、この3年間でC②とC⑥の能力に、特に大きな変化があった。以下、児童Aの3年間の活動最中の様子である。

平成26年度、児童Aは小学校4年生であった。

た。

子ども同士でのコミュニケーションはあまり得意ではないらしく、美術館職員や教員に声をかける様子が多く見られた。特に、美術館職員Bに対しては、顔料づくりの作業中もなかなか離れようとせず、Bが他の子どものところに行くとき目で追いついて手が止まってしまう、作業に集中できない様子が多く見られた。

平成26年度の活動の様子	心が育まれる場面	人間性C②	人間性C⑥
	自分で拾ってきた石を金づちで砕き、顔料を作っている。 A「出来てるよ」 自分の作っている顔料をBに見せる。Bの反応を気にしている。	自分の成果を見てほしい。	Bと関わろうとする。
	<u>Bが他の子どものところへいくと、Bの動きを目で追いつける。再びBが近くになると「板がはずれた」と呼び止める。</u> Bの興味を自分に向けるような行動が見られる。	集中できていない。	Bと関わろうとする。
	A「 <u>ゴマみたい</u> 」と石の粉を見て喜ぶ。 B「おいしそうだね。細かいゴマになってきたね」Aはうれしそうな笑みを浮かべた。	色を何かに例えようとする。	Bと色について話す。
	Bが側にいない時は、手は動いても、 <u>友人に話しかけたり目をきよろきよろさせたり、作業にあまり集中できないようだ。</u>	集中できていない。	Bと関わることに集中している。

平成27年、児童Aは小学校5年生になった。

前年に比べ、我々美術館職員や教員に話しかけるよりも友人と話し合う様子が多く見られた。作品作りに熱中しすぎると周りの友人の意見が

聞けなくなり、自分が作りたい色にしようとする様子も見られた。

以下は、児童Aが染液づくりに取り組んでいる時の様子である。

平成27年度の活動の様子	心が育まれる場面	人間性C②	人間性C⑥
	植物から染液を作りはじめた。 A「赤い花があったから、持ってきていい?」と自分の思いを友人に伝えている。別の子どもが「いいよ」と返事をする。	色に着目して、作品作りをしようとする。	他の子どもの了解を得ようとする。
	A「ピンクが入っているよ」と新しい発見を喜び、友人に伝えている。 青い実を入れるボウルに、赤い花びらが入っていることに気が付き、取り出す。	色に着目して、作品作りをしようとする。	他の子どもに報告しながら、作業を進める。
	A「〇〇みたいだね」「これ、かわいいと思わない?」と、他の子どもが見せてきた葉っぱを見て、友人の思いに共感を示す。	葉っぱを何かに見立てる。	話しかけられたことに対して、感想を述べる。
	<u>同じ種類の花をさらにたくさん持ってくる。他の子どもに「これ、いらないよ」と言われても、花をボウルに入れ続けた。</u>	自分が作りたい色に合わせて、作業を進めようとする。	他の子の意見に回答しないまま、作業を進める。

平成28年度、児童Aは小学校6年生になった。

本プログラムに対する熱意は高く、同じ班の年下の子ども達を気遣い、面倒をよく見るようになった。教員を相談相手にする場面もあったが、

班員が活動しやすくなるには何をしたら良いかを考え、行動していた。

以下、顔料づくりから絵を描く準備、終えるまでの児童Aの様子である。

平成28年度の活動の様子	心が育まれる場面	人間性C②	人間性C⑥
	A「水、真ん中に置いた方が いいんじゃないかな?」と自分 の考えを伝えている。	使いやすいよう に道具を配置 する。	皆が使いやすい ように、道具 の配置を工夫 する。
	A「足りなくなったら言ってね」 と言うと、他の子どもに「もう 足りない」と言われた。A「ど れくらい入れる?半分くらい入 れる?」と言い、自分の役割を 見いだしている。		コミュニケーシ ョンをとりなが ら、作業を進め る。
	隣の子も達、絵の具の色 が濃いと話していることに気づ く。 A「え、濃いね、そっち」他 の子どもに「入れすぎたのか な?」と、言われて次の方法を 考えている。	自分たちの色 と、他の子ども 達の色を比べ る。	他の子ども達 の様子に気を 配りながら、作 業する。
	A「これ、こっち置いてた方が いいんじゃないかな?」 周りの友人が作業しやすい環 境を自ら考え、行動していた。	使いやすいよう に道具を配置 する。	皆が使いやすい ように、道具 の配置を工夫 する。

## ②児童C(男子)の図画工作の能力(思考力・判断力・表現力)の成長

児童Cも、3年間を通して本プログラムに熱心に取り組んだ児童の1人である。3年間で、Ba①(表現の能力)とBb④(鑑賞の能力)に大きな変化があった。以下、児童Cの3年間の様子である。

平成26年度、児童Cは小学校4年生であった。

顔料の素材となる石を探している時は、気に入った石を見つけては笑顔になり喜んでいたが、作業中は声も上げずに黙々と取り組んでいた。普段から、自ら積極的にコミュニケーションをとる方ではなく、1人で困っている場面も見受けられた。

平成26年度の活動の様子	思考力が育まれる場面	Ba①(表現)	Bb②(鑑賞)
	<p>友人の間を移動しながら、<u>石が見える位置まで体を移動する。</u> 美術館職員の目をじっと見つめて、話をよく聞いている。</p>		<p>色の差異を楽しもうとしている。</p>
	<p>美術館職員の説明を聞きながら、<u>手元を食い入るように見ている。</u></p>		<p>色や質感が変わっていく様子を、しっかり見ている。</p>
	<p>真剣に絵を描いていたが、カメラが近づくと <u>C「だめだ」</u> と言って、<u>絵を隠した。</u></p>	<p>絵を見せようとし ない。(自分の表現したものに自信がない)</p>	
	<p>姫島をテーマに、Cが描いた絵。 ほかの子どもに比べて、色数が少なく、ふるさとへの思いを表す表現力の弱さがみられる。</p>		<p>色数が少なく、色の違いを表現できていない。</p>
	<p>美術館職員によるレクチャーを間近に見たいのだが、自分より背が高い子が周りに多くいたため、<u>見えずに不満げな様子であった。</u></p>	<p>色や色作りを、自ら見ようとし ない。</p>	<p>色や質感の比較をする意欲が強い。</p>

平成27年度、児童Cは小学校5年生になった。

植物から染料が取れることを初めて知ったのか、染料で布が染まっていく様子を不思議そうにじっくりと観察していた。自ら他の班の様子をの

ぞぎに行くなど、他の班と色の違いを比較することについての興味がさらに高まったようであった。しかし、同じ班の子ども達との会話はほとんど見られなかった。以下、児童Cの様子である。

平成27年度の活動の様子	思考力が育まれる場面	Ba①(表現)	Bb②(鑑賞)
	染液を作るために植物を集めた。Cが持っていた草花を上級生が無言で受け取り、はさみで切っていく。自分の思いをうまく伝えられなかったのか、不満気な表情である。	自分の使いたい素材や作りたい色を主張できない。	特徴をつかみ、草花を自分で選んでいる。
	他の班の様子を見に行く。声を出さずに、ゆっくりと他の班の状況を観察している。		他の班と自分の班の色を見て、比べようとしている。
	先生が他の子どもに注意したことに気を付けて、作業を行う。	自分の思い通りの作品ができるよう、丁寧に作業を行う。	
	媒染を行う前後で色を比べるため、媒染をしないように指示が出ていた布を染液につけていた。美術館職員が染液から取り出した布に、真っ先に手を伸ばした。	自分の思い通りの作品ができるよう、丁寧に作業を行う。	色の違いを見ようとする。

平成28年度、児童Cは小学校6年生になった。前年度までと大きく違い、同じ班の友人と話し合いながら作業を進めることができていた。また、化学反応で変化する材料の様子や、与えら

れた道具を熱心に観察していた。イカを描いた時も、周りの友人と大きさや形等を相談しながら描き進める様子が見られた。地元への理解の深まりと捉えている。

平成28年度の活動の様子	思考力が育まれる場面	Ba①(表現)	Bb②(鑑賞)
	友人と協力して、車エビの殻を使った炭づくりに挑戦した。出来立ての車エビの炭に、友人と飛びつく。友人の行動を見て、自ら炭になった車エビを触ってみる。		材料の変化を見ようとする。

	<p>「黒色で白いものを描く」をテーマに絵を描いた。同じ班の子どもが「何を描くか決めた人」というとC「はい、イカ!」と、一番に元気よく答えた。</p>	<p>色を見ることで、自らテーマを決め、堂々と発表できる。</p>	
	<p>他の子どもよりも、じっくりと筆を見て何かを考えているようだ。2本の筆を使って描くシミュレーションもするなど、筆遣いも工夫しようとする。</p>	<p>筆の太さの違い等から使い方を考える。</p>	<p>作品作りにあっただものを選ぶようにする。</p>
	<p>周りの子どもとイカの足の数や形について話しながら、イカの絵を描いていく。</p>	<p>表したいことを、丁寧に、のびやかに表現することができた。</p>	<p>自分の絵と、友人が描いたイカの絵を比べる場面があった。</p>
	<p>Cが描いた絵。<u>姫島でよく捕れるイカの絵を、模造紙の下方に生き生きと描いた。</u>ヒレを薄墨で表現し、触腕が2本伸びている。</p>	<p>イカの皮膚の模様など細部にまでこだわった表現ができた。</p>	<p>周りの絵と関連づけ、物語のイメージが膨らんだ。</p>

### 3. 地域にもたらした変化に関する考察

#### ①子どもを取り巻く教育環境としての学校・保護者・地域

大分県立美術館のアウトリーチは、授業を保護者や地域の方々に公開して一緒に参加していただいたり、ケーブルテレビが島民向けに番組を制作し放送したり、島ぐるみの一大イベントとなっている。また、先生を含め、保護者などの島民向けの講演会や意見交換会なども実施し、子ども達の様子について直接語り合う場を設定し

ている。教員からは「子どもが夢中になって、生き生きと活動する姿を見ることができて、学校としてもよかったと思う」、保護者からは「どうりで近頃、(子どもが)色の話を家でですと思ったら、こういう取り組みをされていたのですね」「知識として知っていることと、実際にやってみることは違う。子ども達が今日、色作りを体験できたことは、一生忘れられない財産になったと思う」、教育委員会職員からは「地域の色・自分の色という視点を持つことが、ふるさとへ思いを深める」等の感想を、多くの方からいただいている。本取り組み

を始めてから、子ども達が授業中や日常生活の中で「きれい!」「すごい!」という言葉が自然と発しているとの声もいただいている。このような子ども達の言葉を、周りの大人がどう拾い上げていくかということも重要になってくるだろう。

姫島まるごとジオ・ミュージアムの取り組みを3年間継続する中で、先生方から子ども達へ「色を比べてごらん」「きれいな黒だね」といった声かけが多く見られるようになった。姫島村教育委員会からも、素材集め等で非常に積極的なご支援をいただいている。教員や行政だけでなく、このような保護者や地域住民が身近に増えていけば、日常の中に美しいものを見いだす子どもの視点や感性が、さらに豊かに育ってくるはずである。

我々が実施する取り組みについて保護者や地域がどのように受け止めているか、どのように変化しているかという視点も大切にしながら、今後

も取り組んでいきたい。

## ②関係者からの評価について

取り組みで最も難しかったのは、大分県立美術館が学校の授業に入ることだった。姫島という小さな村だからこそ生まれる島民の連帯感とどう協働するのか、新たに美術の取り組みを受け入れてもらえるのか。取り組み1年目に感じた不安はいまだに忘れられない。「まずは、どんなものか体験してほしい」というところから始めたの思い出す。そして、ことあるごとに、「子ども達に本物を」というメッセージを伝え、実践を積み上げてきた。それを、陰から支えていたのが「地域の色・自分の色」実行委員会である。

その実行委員会では、年に2回、関係者による協議会を開催し、実績報告等を行っている。美術関係者はもちろん、科学や教育などの専門家、行政の方など様々な方からコメントをいただいている。以下に、その一例を取り上げる。

「この活動は、心を養うということにつながっていると思う。近年、姫島の子ども達の成績が上がっています。中学校はトップクラス、小学校も成績が上がっており、これもこのような活動により、子ども達がやる気を出したからだと思っている」(姫島村民)

「この実践では、色に対する興味・関心はもちろん、色を通して実際に高まっているのは、ふる



さとへの思いなのでは、ということ  
を強く感じています。一中略一思  
いが深まるということが、次につな  
がる活動の中で、主体性が深まっ  
ていたり、あるいは気づきや学  
びが深まっていたり、対話が深  
まっていくおもとになっているの  
ではないかなと思います。授業に  
も波及しているというのが、とても  
わかるような気がします」(行政職  
員)

「思い、気づきというのは非常  
に大事なこと。体験というのは学  
力のベースの部分になって、生き  
る力につながっていく。それから、  
問題が起きた時に、体験を通して  
学んだことが自然とできて解決  
していつているという部分がある  
と思う。それに、教科の知識が加  
わって、大きな問題を解決して  
いく力につながっていくと思う」(大  
分県教育センター職員)

各方面の有識者から、本取り組  
みが子どもの感性や故郷への思いを育み、課題  
解決力の基盤となる「学びに向かう力」の育成に  
貢献しているとの声をいただいている。こうして身  
に付けた図工の知識・技能が、他教科やふるさと  
学習(総合的な学習の時間)の中で活用されて  
いけば、本物の一生ものの知識として、子ども達  
を支える学力になっていくにちがいない。我々の  
取り組みは、姫島の小学校及び中学校において、美術の体験を通したふるさと学習の充実に一  
定の成果をあげることができた。今後も「地域の  
色・自分の色」プログラムの内容充実に向け、地  
域のよさを発信する子どもの育成を支援して  
いきたい。

第三号		平成28年7月8日(金)	
<p>七月八日に、大分の OPAMから、えのさ んやまのさんが来て下 さり、車海老の殻から 黒を作りたす作業をし ました。</p> <p>まず車海老の殻を虫 に入れて、煙が出なく なるまで、コンロで蒸 しました。蒸しおあ、 た海老の殻は、乳はち ですりつぶしました。</p>		<p>黒は黒ハでぞ 車海老の黒ハ 新聞</p> 	
<p>乳はち ですりつ ぶした粉 は、同じ 車海老の 殻から作 ったはずなのに、比 べると、薄い色や濃い色 とさまざまな黒がで きました。最後の作業で すりつぶした粉にのり を入れて、車海老の黒 でできた絵の具を作り 実際に紙に絵を描くこ とになりました。</p>		<p>姫島中学校 三永有希</p> <p>粉の色は 何種類?</p> 	
<p>海の色とは 思えない黒!!</p> <p>私は、車海老の黒で 夕やけの空と猫を描き ました。竹林や夕やけ のグラデーションが難 しかったです。</p> <p>身近なそのから、黒 をつくって私は、色 の違いに感動しました。</p>		 <p>夕やけの空と猫を描いた私</p>	

## 5 総括

平成29年5月30日～31日に、4年目となる  
「姫島まるごとジオ・ミュージアム」を実施した。  
初年度は1年生だった子どもが4年生になり、4  
年生だった子どもが中学生になっていた。そして  
中学生だった子ども達は現在、島の外で高校生  
活を送っている。

この継続的な取り組みによって、子ども達に  
様々な成長が見られていることは先に述べた。こ  
の他にも地元への愛着や、授業態度、理科・科  
学的な発想や疑問など、様々な面で子ども達の

成長や変化が見られていると聞く。姫島中学校では、ふるさと科の時間に学校行事などの出来事をはがきサイズの新聞にまとめる「はがき新聞」を作成しているが、この姫島まるごとジオ・ミュージアムもお馴染みのトピックとなった。このように、他教科との連携にも成功している。さらにこのはがき新聞は、姫島フェリー乗り場で無料配布されており、島民や観光客等の利用者が自由に持ち帰ることができる。はがきとして使用できるようになっているため、地域振興にも一役買っているといえる。

関係機関と島民の皆様のご協力のもと、子ども達が人間性を豊かに育み、自己実現に向けた

力を自ら高めていくことを、この取り組みに関わる全ての方が期待し、見守っている。

---

#### 参考文献

- 藤井康子・木村典之,2017,『地域の色をテーマとした教科融合型学習の研究1ーいのちの色をみる・つくる・感じるアートワークショップの検証ー』大学美術教育学会「美術教育研究」第49号p353-360
- 榎本寿紀、木村典之、山本麻代,2016,『びじゅつってすげえ!2015-2016』アートフル大分プロジェクト実行委員会・大分県立美術館教育普及グループ



## 講 評

### 【国語教育】 斎藤 孝 (明治大学教授)

応募が8件と少なかったが、ICT活用や図書館活性化、教育漫才などテーマは多岐にわたった。コミュニケーション力の向上を狙いとした実践も複数あった。優秀賞の実践は、独創性と行動力にあふれた取り組みだった。方法の独創性と普遍性、及び明確な国語力向上の成果を次年度以降も期待したい。

### 【算数・数学教育】 秋山 仁 (東京理科大学理数教育研究センター長)

応募は、複数の教員がチームで取り組むプロジェクトが3件、授業や課外活動での個人の取り組みが7件。それぞれが力作だった。「多くの先生の参考と刺激になること」「生徒を活発に活動させていること」「先駆的な実践であること」「時間をかけ、継続的に取り組んでいること」を主たる基準に審査した。

### 【理科教育】 滝川 洋二 (NPO法人ガリレオ工房理事長)

応募は8件と昨年度より少なかったが、レベルの高い、工夫にあふれた研究が寄せられた。子供らに自然を探究させる方法の実践、自然観察の楽しさや大切さを伝える研究などがあった。ただ、他の研究との比較が不十分だったり、これまでの研究に何を付け加えるのか、実践の特徴が明確でないものも見受けられた。

### 【社会科教育】 谷川 彰英 (筑波大学名誉教授)

この20年間で最高の19件の応募があった。社会科の授業改善や主権者、キャリア、防災の教育など多様な実践が寄せられ、社会科教育の幅の広さを感じさせた。堅実かつ意欲が伝わる作品が多かった。ユニークなものには「AIとの共生」を考える実践や「笑える!学べる!政治教育ショー」などがあった。

### 【生活科・総合学習】 奈須 正裕 (上智大学教授)

12件の応募があり、主題は環境、キャリア、平和、福祉、食など多様。多くが、地域に目を向け、その価値を掘り起こし、新たに創造することで活性化を図るとともに、地域との関わりの中で生き方を考える、というものだった。概して質は高かったが、子ども主体の「探究」になっていない事例も散見された。

### 【健康・体力づくり】 田中 喜代次 (筑波大学教授)

昨年と同じ2件の応募だった。健康づくりに関する実践報告とスポーツゲームに関する報告だった。いずれも優れた作品で、最優秀賞は5年間にわたる取り組みの成果だ。2020年には東京オリンピックが控えている。来年度は、ユニークなスポーツ活動や科学的な体力づくりの取り組みなどの報告を期待したい。

### 【外国語・異文化理解】 田近 裕子 (津田塾大学教授)

部門名に「異文化理解」を加えて2年目。今回の応募は例年並みの8件だが、内容は豊かだった。英語教育そのものの研究は5件。新タイプとして英語教育と異文化理解をセットにしたものが2件、日本語教育と異文化理解のセットが1件あった。最優秀、優秀賞は将来の教育への示唆に富む優れた作品だ。

### 【児童生徒指導】 河野 義章 (東京学芸大学名誉教授)

小中高校の教員だけではなく、スクールカウンセラー、心の相談員、絵画教室の主宰者らから9件の応募があった。通信制高校の実践報告は、生徒との触れ合いを大切にしようとする先生方の願いと苦悩があふれていた。興味深い実践が多いが、さらに読み手がワクワクするようなまとめ方の工夫を望みたい。

## 講 評

### 【カリキュラム・学校づくり】 佐藤 学 (学習院大学教授)

18件の応募があった。地域との連携、総合学習、伝統文化の教育など、多様な課題を中心に、カリキュラム・学校づくりを試みる作品が目立った。学校組織の強化と一体化した実践もあり、注目すべき好ましい傾向と言える。ただ、改革ビジョンが説得的でないものも散見された。熟考を期待したい。

### 【地域社会教育活動】 佐藤 一子 (東京大学名誉教授)

関西・中国地方を中心に14件の応募があった。教育機関と地域社会の連携で困難を抱える子供・若者を支え、自立心と自己有用感を高める実践など、現代的課題に迫る報告が多かった。地域の自然や文化を通じ感性を育む実践、小学校での図書館教育、外国人支援ボランティア活動報告など多彩な報告が寄せられた。

### 【NIE】 小原 友行 (福山大学教授)

新設部門だったが、14件もの意欲的作品が寄せられた。新学習指導要領の改定直後のせいかな、同要領が求める資質、能力の育成を目指す作品が多かった。次は、NIEの新たな価値を創造する挑戦的取り組み、また、単なる教師の実践紹介にとどまらず、子供の具体的な成長の姿が見られるような作品を期待したい。

### 【幼児教育・保育】 秋田 喜代美 (東京大学教授)

今回の応募は5件と少なかったが、どの実践も園の独自性を生かした長年にわたる教育の報告であり、いずれからも誠実に保育に向き合っている姿が伝わってきた。最優秀賞は実践した内容の面白さと共に、子どもが変化<sup>せ</sup>する過程を捉え、保育者の実践に対する振り返りなどを精緻に記録した点で特に優れていた。

### 【美術教育】 宮坂 元裕 (横浜国立大学名誉教授)

過去最多の16件の応募があった。小中学校の連携ほか、中学校や高校と外部団体、また、大学生が小中学校に向く活動など、外部との協力による活動報告が多かった。最優秀賞、優秀賞のほかにも、東日本大震災や熊本地震に関連して、子どもたちを元気づける取り組みにも優れたものが見られた。

## ■ 第66回読売教育賞部門別応募件数の内訳(カッコ内は前年度)

①国語教育	8 (21)
②算数・数学教育	10 (13)
③理科教育	8 (17)
④社会科教育	19 (15)
⑤生活科・総合学習	12 (17)
⑥健康・体力づくり	2 (2)
⑦外国語・異文化理解	8 (6)
⑧児童生徒指導	9 (11)
⑨カリキュラム・学校づくり	18 (19)
⑩地域社会教育活動	14 (17)
⑪NIE	14
⑫幼児教育・保育	5 (前年度は特別支援教育=20)
⑬美術教育	16 (前年度は音楽教育=2)
応募総計	143 (160)

---

## 第66回読売教育賞 優秀賞受賞者

### 【国語教育】

埼玉県越谷市立東越谷小学校校長

田畑 栄一

### 【カリキュラム・学校づくり】

埼玉県所沢市立三ヶ島中学校

沼田 芳行 (代表)

### 【算数・数学教育】

東京学芸大学付属国際中等教育学校教諭

小林 廉

山形県遊佐町立遊佐中学校教諭

信夫 智彰

### 【地域社会教育活動】

兵庫県立篠山東雲高校教諭

菊川 裕幸

山口県下松市立図書館

長弘 純子 (代表)

### 【社会科教育】

埼玉県熊谷市立大原中学校教諭

久保 貴史

大阪府枚方市立樟葉南小学校教諭

角崎 洋人

### 【NIE】

京都市立葵小学校

小林 正幸 (代表)

東京都武蔵村山市教育委員会

今井 一馬 (代表)

### 【生活科・総合学習】

兵庫県高砂市立北浜小学校

松田 敦子 (代表)

岐阜県関ヶ原町立今須中学校教諭

藤井 健太郎

### 【美術教育】

滋賀県立膳所高校教諭

山崎 仁嗣

### 【外国語・異文化理解】

さいたま市浦和区

芥川 明子

茨城県立取手第一高校教諭

大滝 修

# 読売教育賞 最優秀賞一覽 受賞者名簿

— 第1回 昭和27年(1952) ～第65回 平成28年(2016) —

- 第1回 1952年(昭和27年)
- 〈小学校〉  
千葉県館山市立北条小学校・校長 和泉 久雄  
香川県仲多度郡筆岡小学校・校長 杉岡 茂  
山口県下関市立本村小学校・校長 村田 幸一
- 〈中学校〉  
秋田市立久保田中学校・教諭 小西 三治  
福岡県築上郡椎田中学校・教諭 加来 孝義
- 〈高等学校〉  
北海道立倶知安高等学校・教諭 桑原 義晴  
島根県立松江産業高等学校・校長 鎌田 武
- 〈盲ろう学校〉  
宮城県立盲学校校長兼ろう学校・校長 赤木 将為
- 第2回 1953年(昭和28年)
- 〈道德教育〉  
山梨県甲府市立穴切小学校・校長 米山 圭蔵
- 〈社会科〉  
大分県大分市立春日町小学校・校長 倉成 英敏  
香川県香川大学附属坂出小学校・教諭 佐柳 正  
神奈川県足柄上郡福沢小学校・校長 井上 喜一郎
- 〈基礎能力〉  
新潟県北魚沼郡広瀬村立中条小学校・校長 品田 文松  
山口県美祿郡大嶺町立麦川小学校・校長 豊島 誠  
秋田市立中通小学校・教諭 浅野 ヒナ
- 〈特殊教育〉  
新潟市立舟栄中学校・教諭 中村 与吉  
京都市立生祥小学校・教諭 熊谷 君子  
愛知県立名古屋ろう学校・校長 今井 柳三
- 〈学校新聞〉  
新潟県南蒲原郡鹿峠村立中浦小学校・教諭 磯野 修二
- 第3回 1954年(昭和29年)
- 〈作文教育〉  
長野県上水内郡栄村栄小学校・教諭 大日方千秋
- 〈職業教育〉  
愛知県碧南市立新川中学校・校長 神谷 義雄
- 〈へき地教育〉  
新潟県仙田村立十日町高校定時制課程仙田分校・主任 保坂安太郎
- 〈理科教育〉  
秋田県天王町立天王中学校・教諭 片岡 太刀三
- 〈勤労青少年教育〉  
島根県大原郡日登村立日登中学校・校長 加藤 歆一郎
- 〈新聞教育〉  
大阪府堺市立英彰小学校・教諭 岡本 園子
- 〈幼稚園教育〉  
兵庫県明石市立播陽幼稚園・園長 内匠 ちゑ
- 〈特殊教育〉  
東京都世田谷区立青島中学校・教諭 小杉 長平  
山口県立ろう学校・校長 泉 吉美  
長崎県北松浦郡佐々町立石小学校・教諭 近藤 益雄
- 第4回 1955年(昭和30年)
- 〈現場教師の研修活動〉  
山口県美祿郡秋芳町立嘉万小学校・代表 原川 馨
- 〈算数・数学教育〉  
静岡県浜名郡庄内村立村柳小学校・校長 山下 百十二  
滋賀県近江八幡市立八幡小学校・校長 坂口 完二
- 〈幼児教育〉  
麗和幼稚園(埼玉県浦和市)・園長 中島 修
- 〈普通学級の遅進児指導〉  
山梨県北都留郡上野原町立島田小学校・校長 塩野 隆洋
- 〈定時制教育〉  
北海道立前田高等学校・教諭 行本 一雄

- 〈P T A活動〉  
三重県飯南郡大河内第二小学校P T A・代表 三崎 邦次
- 〈健康教育〉  
香川県小豆郡内海町立安田小学校・校長 久留 島武保
- 〈教具の自作・改作・利用(授業研究)〉  
新潟県三条市三条高等学校・教諭 有本 進作  
兵庫県伊丹市教育委員会・指導主事 田辺 綱雄

- 第5回 1956年(昭和31年)
- 〈家庭科教育〉  
新潟県南蒲原郡大面村立大面中学校・教諭 田中 トマ
- 〈学校と地域社会の共同活動〉  
山口県徳山市立今宿小学校育英会・会長 清水 勇
- 〈遠足・修学旅行〉  
埼玉県浦和市立大原中学校・教諭 荒幡 義輔
- 〈理科教育〉  
新潟県南魚沼郡大和村立大崎中学校・校長 桑原 理助  
埼玉県川越市立大東東小学校・教諭 相原 健一
- 〈視覚教育〉  
秋田県大曲市立大曲小学校・校長 東海 林和美
- 〈クラブ活動〉  
新潟県柏崎市立第二中学校・校長 村山 貫一
- 〈定時制と技能者の養成〉  
兵庫県立北兵庫高校定時制・主事 林 博夫

- 第6回 1957年(昭和32年)
- 〈学校図書館経営〉  
千葉県香取郡栗源町立栗源小学校・校長 松本 玄
- 〈算数・数学教育〉  
新潟県新潟市立万代小学校・校長 竹山洋一郎
- 〈美術教育〉  
大阪府堺市立榎小学校・教諭 藤岡 静子
- 〈国語教育〉  
徳島大学学芸学部附属中学校・教諭 福岡 八郎
- 〈外国語教育〉  
秋田県雄勝郡羽後町立西馬音内中学校・教諭 岩佐 利克
- 〈学級経営〉  
福島県信夫郡吾妻村立野田小学校・代表 内池 幸吉
- 〈進路指導〉  
山梨県立甲府工業高校・校長 古屋 一雄
- 〈勤労青少年教育〉  
広島県立神辺高校天津野分校・主任 木村 国夫

- 第7回 1958年(昭和33年)
- 〈小学校の算数・理科教育〉  
宮城県栗原郡尾松小学校・代表 大宰 陸郎
- 〈ローマ字教育〉  
秋田大学学芸学部附属小学校・教諭 斎藤 千弥男
- 〈音楽教育〉  
石川県七尾市立西湊小学校・代表 山崎 常雄
- 〈映画教育〉  
福岡県久留米市立西国分小学校・教諭 市村 一夫
- 〈高校のクラブ活動〉  
新潟県立中央高校・校長 島津 政雄
- 〈特殊教育〉  
奈良県奈良市立鼓阪小学校・教諭 西村 幸治  
福島市立福島第四中学校・教諭 中丸 良彦
- 〈定時制通信教育・技能者養成教育〉  
兵庫県立佐用高校平福分校・主任 春名 一明
- 〈成人教育活動〉  
埼玉県北埼玉郡騎西町立種足中学校・教諭 岡田 正明  
大分県南海郡上野婦人学級・運営委員長 工藤 妙

- 第8回 1959年(昭和34年)

〈学校経営〉  
 千葉県香取郡笹川中学校・校長 柳沢 徹夫  
 〈道徳教育・生活指導〉  
 大阪市東成区玉津中学校・校長 直原 兵平  
 〈科学教育〉  
 愛媛県八幡浜市立大島中学校・教諭 乗松 尚  
 北海道立函館中部高校・教諭 渡辺 英郎  
 〈作文教育〉  
 新潟県佐渡郡金井小学校・教諭 吉原 清  
 〈作文教育〉  
 山口県大島郡久賀高校・教諭 岡田 貞義  
 〈工作教育〉  
 青森県中津軽郡相馬小学校藍内分校・教諭 小島 良蔵  
 〈体育教育〉  
 埼玉県秩父郡間明平中学校・校長 近藤 八十夫  
 〈テレビ教育〉  
 新潟県東頸城郡松之山小学校・校長 関谷藤四郎  
 〈勤労青少年教育〉  
 香川県立琴平高校定時制・主事 三好 和夫  
 〈PTA活動〉  
 福島県信夫郡湯野小学校・校長 今井 豊蔵

■ 第9回 1960年(昭和35年)

〈学校経営〉  
 青森県佐井小学校川目分校・教諭 沢田半右衛門  
 〈道徳教育・生活指導〉  
 大分県大分市立滝尾小学校・教諭 二宮 重幸  
 〈科学技術教育〉  
 岡山県井原市立井原中学校・教諭 塩田 啓二  
 山口県長門市水産高校・教諭 黒子 三良  
 〈歴史教育〉  
 山梨県山梨市立加納岩中学校・教諭 石原 国光  
 〈読書指導〉  
 大阪府大阪市立滝川小学校・教頭 浜中 重信  
 〈複式教育〉  
 徳島県鳴門市立島田小学校室分校・教諭 西条 益夫  
 〈養護教育〉  
 兵庫県豊岡市立豊岡北中学校・教諭 藤本 晴雄  
 〈勤労青少年教育〉  
 新潟県両津市立東中学校・教諭 小野 良泰

■ 第10回 1961年(昭和36年)

〈学校行事〉  
 静岡県庵原郡由比町立西小学校・代表(校長) 榛葉 弘  
 〈基礎学力〉  
 佐賀県佐賀郡春日小学校・代表(校長) 鶴田 辰次  
 新潟県東頸城郡下保倉小学校・校長 坂井 勝司  
 〈外国語教育〉  
 京都府京都市立九条中学校・教諭 山田 芳夫  
 〈校外生活指導〉  
 千葉県銚子市立明神小学校・代表(校長) 堀 竜之助  
 〈中・高校の理科教育〉  
 岐阜大学附属中学校・教諭 近藤 芳彦  
 福岡県立糸島高等学校・教諭 若宮 義次  
 〈クラブ活動〉  
 宮城県柴田郡村田町立沼辺中学校・教諭 庄司 正明  
 〈盲・ろう教育〉  
 福岡県立福岡ろう学校・教諭 今任 統夫  
 〈スポーツ指導〉  
 佐賀県立佐賀高等学校・教諭 野口 七郎  
 〈就職後の補導〉  
 宮城県栗原郡一迫中学校・教諭 菊地 義彦  
 〈高校の産学協同〉  
 北海道立岩見沢農業高校・教諭 清水 小十

■ 第11回 1962年(昭和37年)

〈職員会議〉  
 新潟県新潟市立沼垂小学校・校長 松浦 雅公  
 〈小学校の社会科(とくに地理教育)〉  
 徳島県鳴門市立撫養小学校・教諭 河野 睦也  
 〈国語教育(とくに文法・表記の指導)〉  
 静岡県浜名郡北浜中学校・教諭 鈴木 波男  
 〈技術科教育〉  
 埼玉県熊谷市立大原中学校・教諭 佐藤 一司  
 福岡県八幡市立中央中学校・代表(校長) 豊田 喜祐  
 〈中学生の生活指導(とくに進学・非行児指導)〉  
 徳島県名東郡佐那河内中学校・校長 速水 清一  
 埼玉県浦和市立岸中学校・教諭 野村 英一  
 〈盲教育〉  
 東京教育大学附属盲学校・教諭 河合 久治  
 福井県立盲学校・教頭 今川 勇  
 〈農業高校の再編成〉  
 富山県立富山産業高校・校長 久世 幸治

■ 第12回 1963年(昭和38年)

〈学校経営〉  
 長野県大町市立大町小学校・代表(校長) 松田 吉辰  
 〈社会科(とくに政治・経済・社会)〉  
 宮城県仙台市立東華中学校・教諭 白石 和巳  
 〈話しことばの指導〉  
 徳島県徳島市立富田小学校・教諭 宮崎記代江  
 〈科学教育〉  
 神奈川県足柄下郡理科教育研究会・代表 神保 憲朗  
 福岡県北九州市立荻ヶ丘小学校・教諭 生野 ヒサ  
 〈道徳教育〉  
 埼玉県熊谷市立荒川中学校・教頭 中村 邦夫  
 宮城県仙台市立北六番丁小学校・教諭 渡辺 健二  
 〈ホームルーム〉  
 徳島県立徳島商業高校・代表(校長) 森 孝三郎  
 〈進学指導〉  
 新潟県刈羽村立刈羽中学校・代表(校長) 小林 睦治  
 〈特殊教育〉  
 千葉県千葉市立蘇我中学校・教諭 大石 三郎  
 大分県大分市立新生養護学校・校長 高橋 矩夫  
 〈定時制・通信教育〉  
 千葉県立千葉東高等学校・代表(校長) 石毛 貞雄  
 〈教育委員会〉  
 長野県教育委員会教学指導課・代表(課長) 太田 美明  
 島根県出雲市教育委員会・代表(教育長) 長岡 豊盛  
 〈成人教育活動〉  
 高知県室戸市立羽根中学校・教諭 吉本 珖

■ 第13回 1964年(昭和39年)

〈小中学校の国語教育〉  
 千葉県山田町立八都小学校・代表(校長) 小林 邦治  
 〈高校の数学・理科教育〉  
 千葉県習志野市立習志野高校・代表(校長) 山口 久太  
 〈小中学校の道徳〉  
 新潟県出雲崎町立西越中学校・代表(校長) 安達 孝司  
 〈特別教育活動〉  
 山口県立柳井商工高校・代表(職業指導主事) 守政 輝雄  
 〈幼稚園教育〉  
 福岡県北九州市立小倉幼稚園・代表(園長) 黒木 道子  
 〈辺地教育〉  
 山形県東根市立東郷小学校入分校・教諭 柏倉 博  
 奈良県奈良市立田原小学校柳ノ川分校・教諭 大東 幸雄  
 〈教育委員会の活動〉  
 奈良県教育委員会指導課・代表(課長) 今西 宗一

〈教育研究所の活動〉  
信濃教育会教育研究所・代表(所長) 上田 薫  
新潟県立教育研究所・代表(所長) 小林 正直

■ 第14回 1965年(昭和40年)

〈小中学校の作文教育〉  
埼玉県川越市立大東西小学校・教諭 大橋 清一  
〈小中学校の社会科教育〉  
兵庫県小中学校郷土学習研究グループ・代表  
(兵庫県三原郡緑町立広田中学校・校長) 野上 安郎  
〈小中学校の理科教育〉  
佐賀県佐賀市立鍋島小学校・代表(校長) 古賀 清次  
奈良県五条市立阿太小学校・教頭 山口 裕文  
〈小中学校の音楽教育〉  
熊本県熊本市立白川小学校・教諭 松村 きみ子  
〈進路指導〉  
徳島県立池田高等学校・代表(校長) 岩橋 昌  
〈辺地教育〉  
岐阜県馬瀬村立中切小学校川上分校・教諭 岩倉 昭雄  
〈辺地教育〉  
岐阜県馬瀬村立中切小学校川上分校・教諭 岩倉 縫子  
秋田県矢島町立矢島小学校金ヶ沢分校・教諭 遠藤 昌夫  
〈特殊教育〉  
千葉市立院内小学校 言語治療教室・主任 大熊 喜代松  
〈定時制高校における学習指導〉  
福岡県立門司高等学校・教諭 相川 秀和

■ 第15回 1966年(昭和41年)

〈学級経営における能力別指導〉  
富山県滑川市立北加積小学校・代表(校長) 井原 正則  
〈小中学校の国語教育〉  
静岡県新居町立新居小学校・代表(校長) 山下百十二  
〈理科教育〉  
岐阜県大垣市立宇留生小学校・代表(校長) 河合 正一  
鳥取県米子市立弓ヶ浜中学校・教諭 岸岡 務  
〈中高校の外国語教育〉  
山梨県立甲府南高校・代表(校長) 日向 誉夫  
〈工作〉  
奈良県北葛城郡新庄町立新庄小学校・教諭 前田 馨  
〈体育〉  
愛知県丹羽郡大口町立大口北小学校・代表(校長) 奥村 久男  
〈辺地教育〉  
山形県朝日町立立木小学校木川分校・教諭 鈴木 基介  
〈成人教育〉  
愛媛県立松山工業高校定時制・主事 田井能喜三郎  
〈教育研究所の活動〉  
群馬県教育研究所・代表(所長) 佐野 金作  
〈教育委員会の活動〉  
大分市教育委員会・代表(教育長) 池見 喬

■ 第16回 1967年(昭和42年)

〈学校経営〉  
千葉県佐原市立佐原中学校・校長 本宮 源一  
〈幼児教育〉  
奈良県大和郡山市立郡山幼稚園・園長 花木 イソ  
〈小中学校の算数・数学教育〉  
鹿児島県立養護学校・教諭 高浜 正海郎  
〈中学校の歴史教育〉  
静岡県田方郡韮山町立韮山中学校・教諭 斎藤 宏  
〈小中学校の道德教育〉  
奈良県奈良市立鼓阪小学校・校長 奥西 徳義  
〈学校給食の指導〉  
神奈川県鎌倉市立御成小学校・校長 林 邦雄  
〈安全教育〉

三重県伊勢市立修道小学校・校長 野呂 敏  
〈辺地教育〉  
鹿児島県大島郡十島村立中之島小日之出分校・教諭 芝 貞夫  
鹿児島県大島郡十島村立中之島小日之出分校・教諭 芝 礼子  
〈特殊教育(精薄児の指導)〉  
北海道旭川市特殊学級担当者会・代表 橋本 勝朗  
〈教育研究所の活動〉  
新潟県新潟県市立教育研究所・所長 阿部 守衛  
〈公民館の活動〉  
北九州市教育委員会戸畑支所社会教育課(福岡県) 林 栄代

■ 第17回 1968年(昭和43年)

〈学校経営〉  
山梨県甲府市立南西中学校・校長 井上 英信  
新潟県新発田市立第一中学校・校長 菅井 豊吉  
〈中学校の国語教育〉  
香川県立観音寺第一高等学校・教諭 佐藤 寛志  
〈小学校中学年の社会科教育〉  
岐阜県洞戸村立洞戸小学校・教諭 角竹 弘  
〈小中学校の理科教育〉  
熊本県八代市立第一中学校・教諭 蓑田啓一郎  
高知県高知市立初月小学校・教諭 中山 湧水  
〈中学校の外国語教育〉  
福井県福井市立明道中学校・校長 林 繁樹  
〈小中学校の道德教育〉  
茨城県日立市立大久保中学校・教諭 沢畑 登  
〈安全教育〉  
広島県賀茂郡西条町立西条中学校・校長 下崎 実  
〈辺地教育〉  
長崎県小値賀町立小値賀小学校六島分校・教諭 田中 竜美  
〈身体障害児の教育〉  
山梨県立盲学校・校長 飯島 五郎  
〈進路指導〉  
千葉県立千葉商業高等学校・校長 吉井 正男  
〈PTA活動〉  
名古屋市立有松小学校PTA・会長 水谷 善彦  
〈教育委員会の活動〉  
岐阜県加茂郡東白川村教育委員会・教育長 安江又右エ門

■ 第18回 1969年(昭和44年)

〈小学校の算数教育〉  
香川県観音寺市立南小学校・校長 長尾 茂  
〈小中学校の理科教育〉  
青森県八戸市立吹上小学校・校長 佐藤政二郎  
〈中学高校の国語教育(特に読解指導)〉  
兵庫県立福崎高等学校・教諭 福島 浩之  
〈小中高校の芸術教育〉  
秋田県大曲市立大川西根小学校・校長 鎌田 五郎  
新潟県岩船郡山北町立下海府中学校・教諭 青木 繁  
〈小中高校の保健体育〉  
千葉県野田市立宮崎小学校・校長 平野 喜一  
〈小中高校の道德教育〉  
大分県日田市立三芳小学校・校長 佐藤誠一郎  
〈小中高校の特別教育活動〉  
群馬県沼田市立蓮根中学校・校長 大川 善夫  
〈辺地教育〉  
香川県塩江町立塩江小学校樺川分校・主任 岡田 弘治  
〈成人教育〉  
黄十字学園(東京都台東区)・責任者 松永 健哉  
福岡県山門郡大和町栄皿垣 大津 勇  
〈教育研究所の活動〉  
富山県福光町教育センター・所長 渡辺 諭吉

■ 第19回 1970年(昭和45年)

〈小中学校のカリキュラム編成〉  
 千葉市立本町小学校・代表(校長) 山本 喜治  
 〈教育機器の利用(教育工学)〉  
 北海道亀田郡大野町立萩野中学校・校長 岡村 達  
 〈小学校の国語教育(特に読解または作文)〉  
 青森県八戸市立八戸小学校・校長 川村 義一  
 島根県松江市立乃木小学校・教諭 渡辺 郁子  
 〈中学高校の数学教育〉  
 宮城県仙台市立東華中学校・教諭 南 明子  
 〈高校の理科教育〉  
 埼玉県立秩父農工高等学校・教諭 福島 義一  
 〈小中高校の芸術教育〉  
 千葉県柏市立柏第一小学校・代表(校長) 富沢 定一  
 広島県東部区工美術教育連盟・代表 来山 武雄  
 〈中学高校の進路指導〉  
 島根県松江市立第四中学校・代表(校長) 田中 邦男  
 〈小中高校の国際理解の教育〉  
 埼玉県立戸田高等学校・教諭 小川 隆通  
 〈教育委員会の活動〉  
 青森県三戸郡三戸町教育委員会・教育長 松尾 禎吉  
 〈幼児教育〉  
 福岡県北九州市立中島幼稚園・園長 原田 寛子

■ 第20回 1971年(昭和46年)  
 〈小中学校の国語教育〉  
 茨城県石岡市立府中中学校根当分校・教諭 田崎しづえ  
 〈算数・数学教育〉  
 熊本県山鹿市立山鹿小学校・教諭 瀬口 忠一  
 〈理科教育〉  
 東京都文京区立第九中学校・教諭 刈込 実  
 福岡県北九州市立米町小学校・代表(校長) 山本 桂一  
 〈社会科教育〉  
 香川大学教育学部附属坂出中学校・教諭 作花 典男  
 〈小中高校の芸術教育〉  
 千葉県長生郡一宮町立一宮小学校・代表(校長) 森 芳男  
 宮城県仙台市立西多賀小学校療養所分校・代表(教頭) 半沢 健  
 〈小中高校の体育〉  
 秋田県南秋田郡昭和町立豊川小学校・代表(校長) 若松 研一  
 〈道徳教育〉  
 徳島県美馬郡半田町立半田小学校・教諭 佐藤 周子  
 〈公民館の活動〉  
 岡山県真庭郡新庄村公民館・館長 畔高 義正  
 〈高校の定時制通信制教育〉  
 新潟県立小出高校定時制・主事 後藤 三夫

■ 第21回 1972年(昭和47年)  
 〈小中学校の文学教育〉  
 広島県世羅町立大田小学校・代表(校長) 山口 博人  
 〈小学校の算数教育〉  
 山形県西川町立入間小学校・代表(校長) 槇 清哉  
 〈理科教育〉  
 長野県松本市立旭町中学校・教諭 倉田 稔  
 兵庫県姫路市立城北小学校・教諭 城谷 義子  
 〈小中高校の社会科教育〉  
 青森県立弘前中央高校定時制・教諭 川口 光勇  
 〈小中高校の芸術教育〉  
 秋田県平鹿郡雄物川町立里見小学校・校長 能登谷 清  
 〈教育機器の導入と利用〉  
 愛媛県立今治工業高校・教諭 大内 信俊  
 〈辺地教育〉  
 石川県石川郡河内村立河内小学校・教諭 福岡 克美  
 〈成人教育活動〉  
 岐阜県郡上郡明方村立明方中学校・校長 金子 貞二  
 千葉県銚子市立若宮小学校PTA・代表(会長) 常盤 豊司

〈盲ろう教育〉  
 東京都渋谷区立大向小学校・代表(教諭) 北原 貞治  
 〈幼児教育〉  
 島根県八束郡穴道町立穴道幼稚園・代表(教諭) 新田 旭子  
 ■ 第22回 1973年(昭和48年)  
 〈小中学校の国語教育〉  
 島根県簸川郡多伎町立岐久小学校・教諭 岸田千代子  
 徳島県小松島市立千代小学校・教諭 杉本 恒子  
 〈理科教育〉  
 岐阜県加茂郡七宗町立神淵小学校・教諭 渡辺 住夫  
 徳島県立池田高等学校・教諭 梅本 利広  
 〈情操教育〉  
 千葉県館山市立第二中学校・代表(校長) 星谷 悌二  
 〈過疎地教育〉  
 宮崎県西郷村立山瀬小学校校長崎分校・代表(校長) 佐藤九州男  
 香川県丸亀市立手島小学校・代表(教諭) 福浜 一雄  
 〈特殊教育〉  
 宮城県仙台市立町小学校・代表(校長) 伊藤 竜夫  
 山形県立山形聾学校・教諭 鏡隆左工門  
 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉  
 大分県臼杵市立市浜幼稚園・園長 篠田美佐子

■ 第23回 1974年(昭和49年)  
 〈小学校の国語〉  
 高知県吾川郡伊野町立伊野小学校・教諭 山脇 映子  
 〈小中高校の算数・数学教育〉  
 兵庫県姫路市立城陽小学校・教諭 高田クミ子  
 〈小中高校の理科教育〉  
 徳島県徳島市立高校・教諭 佐々木靖典  
 〈小中高校の社会科教育〉  
 広島県瀬戸町立瀬戸小学校・代表(校長) 伊藤 準蔵  
 〈小中高校の音楽教育〉  
 山形県立山形西高校・代表(校長) 笠原 二郎  
 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉  
 しらかば保育園(神奈川県横須賀市)・園長 浜田 幸生  
 ルーテル愛児幼稚園(秋田市)・代表(園長) 片桐 格  
 〈肢体不自由児教育〉  
 千葉県立桜が丘養護学校・教諭 斎藤 皓子  
 佐賀県立金立養護学校・教諭 米光 光子  
 〈成人教育活動〉  
 奈良県橿原町教育委員会・代表(社会教育課長) 梶野 雄介  
 〈教育委員会の活動〉  
 徳島県那賀郡木頭村教育委員会・代表(教育長) 走川 輝一  
 奈良県教育委員会・代表(教育放送課係長) 大西 照雄

■ 第24回 1975年(昭和50年)  
 〈小中学校の国語教育〉  
 福島県いわき市立錦小学校・教諭 佐々木義勝  
 〈小中高校の算数・数学教育〉  
 宮崎県東臼杵郡西郷村立山瀬小学校校長崎分校・教諭 斎藤 敬亮  
 〈小中学校の理科教育〉  
 長野県伊那市立伊那中学校・教諭 征矢 哲雄  
 〈道徳教育〉  
 千葉県旭市立第一中学校・代表(校長) 江ヶ崎 貞雄  
 〈美術教育〉  
 岩手県釜石市立八雲小学校・代表(校長) 畠山 理助  
 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉  
 山形県立山形盲学校・代表(校長) 鈴木 栄助  
 〈肢体不自由児教育〉  
 千葉県千葉市立松ヶ丘小学校・教諭 山本 朋江  
 〈成人教育活動〉  
 京のおんな大学・主宰 富士谷あつ子

■ 第25回 1976年(昭和51年)  
 〈小中学校の国語教育〉  
 千葉県銚子市立興野小学校・代表(校長) 堀 竜之助  
 徳島県徳島市立加茂名小学校・教諭 以西 久代  
 〈小中高校の算数・数学教育〉  
 群馬県渋川市立西小学校・教諭 小林巳喜夫  
 〈小中学校の理科教育〉  
 栃木県宇都宮市立清原中学校・教諭 小筆恵美子  
 千葉県夷隅郡大多喜町立上瀑小学校・代表(校長) 大岩富士雄  
 〈小中高校の社会科教育〉  
 神奈川県平塚市立港小学校・代表(教諭) 小室 修二  
 〈小中高校の保健室活動〉  
 福井県大野市立下庄小学校・養護教諭 金森 恭子  
 埼玉県大宮市立東大成小学校・養護教諭 桜井すゝ代  
 〈進学問題にどう対処したか〉  
 栃木県立鹿沼高等学校・教諭 小谷野力勇  
 青森県八戸市立第一中学校・校長 松村 剛  
 〈在学青少年の学校外教育活動〉  
 佐賀県佐賀郡東与賀町立東与賀中学校・代表(前校長) 納富 兼次  
 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉  
 誠信幼稚園(広島県福山市)・代表(教諭) 檀上 順子

■ 第26回 1977年(昭和52年)  
 〈小中高校の国語教育〉  
 山口県光市立室積小学校・代表(校長) 藤山 敏見  
 岩手県立杜陵高校・教諭 松浦 好  
 〈小中高校の算数・数学教育〉  
 滋賀県甲賀郡甲西町立岩根小学校・教諭 佐川 愛子  
 〈中高校の理科教育〉  
 大分県立中津北高校・教諭 安倍 慎  
 〈小中高校の保健室活動〉  
 長崎県立長崎東高校・養護教諭 高原 二三  
 〈小中高校の情操教育〉  
 熊本県熊本市立西原小学校・教諭 武藤 哲雄  
 〈障害児教育〉  
 茨城県日立市立大久保小学校  
 「ことばの教室」・代表(教諭) 丸山 勝雄  
 〈過疎地教育〉  
 新潟県中魚沼郡津南町立中津峡小学校・代表(校長) 庭野 忠男  
 〈幼児教育(幼稚園・保育所)〉  
 鳥取県倉吉市立上井第一保育園・代表(主任保育) 石賀サチ子  
 〈教育研究所の活動〉  
 北海道教育研究所連盟・代表(委員長) 斎藤 実

■ 第27回 1978年(昭和53年)  
 〈小中高校の国語教育〉  
 滋賀大学教育学部附属小学校・教諭 吉永 幸司  
 〈小中高校の算数・数学教育〉  
 大分県別府市立鶴見小学校・教諭 松島桂太郎  
 〈小中高校の理科教育〉  
 栃木県立宇都宮高校・教諭 篠原 尚文  
 〈小中高校の社会科教育〉  
 北九州市教育委員会たしろ少年自然の家(福岡県)・指導主事 池田 正光  
 〈道徳教育〉  
 福島県いわき市小学校教育研究会  
 道徳教育研究部・代表(部長) 根本 篤  
 宮城県亶理町立亶理中学校・教諭 斎藤 公隆  
 〈小中高校の生活指導〉  
 篠ノ井旭高等学校(長野県長野市)・代表(校長) 若林 繁太  
 〈障害児教育〉  
 徳島県立聾学校幼稚部・代表(主事) 安川 宏  
 神戸市小学校教育研究会  
 心身障害児教育研究部・代表(部長) 溝下 宏

〈幼児教育〉  
 奈良県田原本町立南幼稚園・代表(園長) 片岡 良一

■ 第28回 1979年(昭和54年)  
 〈国語教育〉  
 徳島県立城北高校・教諭 佐野 泰臣  
 〈算数・数学教育〉  
 山口県光市立室積小学校・教諭 原田 慶子  
 〈理科教育〉  
 埼玉県秩父郡大滝村立上中尾小学校・代表(校長) 新井 肇司  
 青森県立青森高等学校・教諭 石戸 励  
 〈社会科教育〉  
 千葉県東金市立城西小学校・代表(校長) 加瀬 国雄  
 〈情操教育〉  
 栃木県真岡市立中村中学校・代表(校長) 榎戸 隆夫  
 東京都足立区立寺地小学校・教諭 江藤 勝久  
 〈障害児教育〉  
 京都府立与謝の海養護学校・校長 青木 嗣夫  
 〈幼児教育〉  
 秋田県南秋田郡飯田川町立若竹幼児  
 教育センター・飯田川保育園長 石川 郁子  
 〈社会教育活動〉  
 群馬県邑楽郡明和村立明和西小学校・PTA前会長 渡辺 茂  
 〈教育研究所の活動〉  
 新潟県地区理科教育センター研究協議会・会長 風巻 友重

■ 第29回 1980年(昭和55年)  
 〈小中学校の国語教育〉  
 福井県坂井郡丸岡町立平章小学校・教諭 松本千代子  
 〈算数・数学教育〉  
 静岡県浜松市立北小学校・教諭 高橋 莞爾  
 〈理科教育〉  
 新潟県立新潟盲学校・教諭 金安 健一  
 〈情操教育〉  
 茨城県新治郡桜村立桜中学校・教諭 飯野五十吉  
 〈障害児教育〉  
 佐賀県立金立養護学校養訓部・代表(教諭) 重松 康雄  
 〈幼児教育〉  
 岐阜県瑞浪市立瑞浪幼稚園・代表(園長) 尾石 安正  
 学校法人高千穂学園高千穂幼稚園(東京都)・園長 久野登久子  
 〈学校の指導・運営〉  
 鳥取県鳥取市立美保小学校・代表(校長) 木下 政雄  
 〈社会教育活動〉  
 千葉県市婦人大学セミナー・代表 国吉 君子

■ 第30回 1981年(昭和56年)  
 〈国語教育〉  
 東京都立足立西高等学校・教諭 清水 和夫  
 〈算数・数学教育〉  
 福島県立二本松工業高校数学科・代表(教諭) 本間 正幸  
 〈理科教育〉  
 千葉県立北貝塚小学校・代表(校長) 小山 天祐  
 〈社会科教育〉  
 千葉県立千城台南中学校・教諭 安藤 一郎  
 千葉県立千城台南中学校・教諭 本保 弘文  
 〈言語教育〉  
 東京都目黒区立東山小学校・代表(校長) 榊原 侑一  
 〈障害児教育〉  
 大分県立別府養護学校・教諭 宇都宮鏡子  
 〈児童生徒指導・情操教育〉  
 広島県尾道市立長江中学校・教諭 八ッ塚 実  
 〈学校の指導・運営〉  
 東京都文京区立湯島小学校・代表(前校長) 小沢恒三郎  
 〈社会教育活動〉

広島市立安西小学校PTA会長 沖 繁  
 〈教育活動・教育政策の研究・実践〉  
 静岡県清水市教育委員会・代表(教育長) 油井 猛治  
 栃木県宇都宮市立雀宮中学校・教諭 長岡 孝之  
 栃木県宇都宮市立姿川中学校・教諭 網川 浄

大阪市立こども文化センター  
 「こども詩の会」・代表(神戸女子大教授) 足立 卷一  
 〈学校の指導・運営〉  
 東京都荒川区立日暮里中学校・代表(教諭) 桐山 京子  
 〈教育活動・教育施策の研究・実施〉  
 広島県工業教育検討グループ・代表  
 (広島県立広島工業高校校長) 松前 実

■ 第31回 1982年(昭和57年)

〈国語教育〉  
 清心女子高校(岡山県倉敷市)・教諭 光元 聡江  
 〈算数・数学教育〉  
 宮城県仙台市立南小泉中学校・教諭 久道 登  
 〈理科教育〉  
 関の自然を調べる会・代表  
 (岐阜県関市立下有知小学校校長) 山口常二郎  
 〈社会科教育〉  
 長野県北佐久郡軽井沢町立軽井沢東部小学校・教諭 小林 秀夫  
 〈障害児教育〉  
 長崎県立長崎養護学校・代表(校長) 内堀 勝見  
 〈児童生徒指導〉  
 千葉県夷隅郡岬町立岬中学校・代表(校長) 菰田潤七郎  
 〈幼児教育〉  
 兵庫県姫路市立めぐみ保育所・所長 森川 紅  
 〈学校の指導・運営〉  
 愛知県西尾市立室場小学校・代表(校長) 高須 音次郎  
 〈教育活動・教育施策の研究・実践〉  
 千葉県立千葉商業高校・代表(校長) 久保田一磨

■ 第34回 1985年(昭和60年)

〈小中学校の国語教育〉  
 福島県郡山市立大島小学校・代表(元校長) 星 幸雄  
 千葉県茂原市立茂原中学校・元教諭 渡辺 昇子  
 〈算数・数学教育〉  
 長崎県平戸市立獅子小学校・代表(校長) 真辺 静男  
 〈理科教育〉  
 東京都大田区立嶺町小学校・教諭 中馬 民子  
 〈社会科教育〉  
 高根県松江市立白濁小学校・教諭 森 泰  
 〈障害児教育〉  
 東京都立足立養護学校中学部・代表(教諭) 脇坂 順雄  
 〈児童生徒指導〉  
 奈良県王寺町立王寺小学校・教諭 池島 徳大  
 〈情操教育〉  
 埼玉県大宮市立指扇小学校・教諭 高橋 昭子  
 〈社会教育活動〉  
 大月市社会教育委員(山梨県)・元委員長 山口 英夫  
 〈教育活動・教育施策の研究・実践〉  
 静岡県立静岡工業高校(定時制)・教諭 小堀 一郎

■ 第32回 1983年(昭和58年)

〈国語教育〉  
 千葉県富津市立吉野小学校・代表(教諭) 渡辺 さわ  
 〈算数・数学教育〉  
 東京都世田谷区立松原小学校・代表(教諭) 坪田 耕三  
 〈理科教育〉  
 長崎県北松浦郡小値賀町立小値賀中学校・教頭 真鍋 信義  
 〈社会科教育〉  
 千葉県夷隅郡岬町立長者小学校・代表(校長) 田中 益男  
 〈障害児教育〉  
 社会福祉法人「しいのみ学園」(福岡市)・園長 昇地 三郎  
 〈児童生徒指導〉  
 山口県美祢市立伊佐中学校・代表(校長) 原田 卓雄  
 〈幼児の教育〉  
 横浜市教育センター 幼児教育センター・所長 白石 伸子  
 神奈川県横浜市立小菅ヶ谷小学校・教諭 堀井 巳恵子  
 〈学校の指導・運営〉  
 新潟県新潟市立外ヶ輪小学校・代表(校長) 大滝 末次  
 〈社会教育活動〉  
 福岡県子供会研修隊連絡協議会・会長 宗村 道生

■ 第35回 1986年(昭和61年)

〈国語教育〉  
 愛知県名古屋市立南光中学校・教諭 吉村 勇善  
 〈算数・数学教育〉  
 長崎県郷ノ浦町立初山小学校  
 算数科学習指導研究会・代表(校長) 末永 正幸  
 〈理科教育〉  
 東京都大田区立入新井第一小学校・教諭 三石 光子  
 埼玉県東川村立東川中学校・教諭 酒井 克  
 〈社会科教育〉  
 福岡県北九州市立永犬丸西小学校・教諭 青柳 睦  
 〈学校体育〉  
 千葉県大多喜町立西畑小学校・代表(校長) 渡辺 五郎  
 〈障害児教育〉  
 東京都立石神井ろう学校・代表(元教諭) 小川美佐子  
 〈児童生徒指導〉  
 千葉工商高校(千葉市)・教諭 林 芳隆  
 〈学校の指導・運営〉  
 神奈川県川崎市立高津中学校・代表(教諭(応募時)) 馬場 英顕  
 〈社会教育活動〉  
 川崎市若生こども文化センター企画会議委員 十文字美恵

■ 第33回 1984年(昭和59年)

〈国語教育〉  
 福岡県八女郡黒木町立枝折小学校・代表(校長) 栗山 シヅカ  
 宮城県栗原郡若柳町立畑岡小学校・教諭 吉田 よし子  
 〈理科教育〉  
 富山県富山市立八人町小学校・代表(校長) 水野 平  
 〈社会科教育〉  
 千葉県船橋市立高郷小学校・教諭 斎藤 武也  
 〈障害児教育〉  
 千葉県立検見川小学校まきのご学級・代表(教諭) 金沢 義広  
 千葉県立検見川小学校まきのご学級・代表(教諭) 奥村 兼弘  
 〈児童生徒指導〉  
 新潟県南魚沼郡六日町立六日町  
 中学校58年度第三学年部・代表(教諭) 田村 賢一  
 千葉県立更科小学校・教諭 福田 節子  
 〈社会教育活動〉

■ 第36回 1987年(昭和62年)

〈国語教育〉  
 青森県八戸市立根城中学校・教諭 橋本 ヤス  
 〈算数・数学の教育〉  
 山口県立南陽工業高等学校・教諭 竹本 芳朗  
 〈社会科教育〉  
 新潟県長岡市立南中学校・教諭 小森ケン子  
 〈学校体育〉  
 岐阜県岐南町立東小学校・代表(校長) 吉田 豊一  
 〈障害児教育〉  
 福岡県北九州市立八幡西養護学校・教諭 原 敏夫  
 〈学校の指導・運営〉  
 新潟県立新発田南高等学校・教諭 田中 洋一

昭和女子大学附属昭和小学校(東京都)・代表(教頭) 已波 瑠美  
(教育委員会・教育研究所の調査研究活動)  
群馬県松井田町教育委員会・代表(教育長) 小板橋 文夫

■ 第37回 1988年(昭和63年)

(国語教育)  
東京学芸大学附属世田谷中学校・教諭 高橋 俊三  
(理科教育)  
岡山県立玉野高等学校・教諭 宮崎 武史  
福島県立福島女子高等学校・教諭 菅野 幸雄  
(児童・生徒指導)  
栃木県大田原市立大田原小学校・教諭 加藤 治朗  
(幼児の保育)  
東京都千代田区立錦華幼稚園・教諭 原田 愛子  
(障害児教育)  
秋田県立秋田養護学校・養護教諭 中村 幸子  
(学校の指導・運営)  
群馬県上野村立上野中学校・代表(教務主任) 大島 道男  
山形学院高等学校「小さな親切の会」  
(山形県)・代表(顧問) 堤 幹夫  
(社会教育活動)  
若人の集い実行委員会(北海道八雲町)・代表(委員長) 高木 一哉  
(教育委員会・教育研究所の調査研究活動)  
千葉県柏市教育委員会・代表(教育長) 古谷 武雄

■ 第38回 1989年(昭和64年/平成元年)

(国語教育)  
鳥根県桜江町立川越小学校・教諭 山田 澄子  
(算数・数学教育)  
岩手県一戸町立小島谷中学校・代表(校長) 野里 広  
(理科教育)  
広島県世羅町立西大田小学校・代表(校長) 井上 右三  
(社会科教育)  
神奈川県川崎市立向丘中学校・教諭 永島 正雄  
(障害児教育)  
東京都練馬区立旭丘中学校・教諭 永野 佑子  
(学校の指導・運営)  
福岡県北九州市立山の口小学校・校長 和田 啓子  
徳島県那賀川町立那賀川中学校・代表(校長) 稲飯 章  
(社会教育活動)  
山梨県ボランティア協会・代表(事務局次長) 岡 尚志  
東京都世田谷区「自然の教室」・主宰 秋山 元治  
(教育委員会・教育研究所の調査研究活動)  
栃木県足利市教育委員会・前教育長 中村 章

■ 第39回 1990年(平成2年)

(国語教育)  
静岡県立藤枝北高等学校・教諭 田中 宏和  
(理科教育)  
愛知県名古屋市長猪子石小学校・教諭 中野 光孝  
工学院大学高等学校(東京都八王子市)・教諭 後藤 道夫  
(社会科教育)  
三重県伊勢市立東大淀小学校・代表(教頭) 塩崎 勝彦  
(幼児の教育)  
長野県保育専門指導員 宮崎 清  
(障害児教育)  
「直方に小規模通園施設をつくる会」  
(福岡県直方市)・代表(会長) 中島 康男  
(学校の指導・運営)  
福岡県北九州市立曾根中学校・校長 品川 洋子  
宮城県栗原郡築館町立築館中学校・代表(教諭) 鈴木 信勇  
(社会教育活動)  
東京都多摩市立北豊ヶ丘小学校  
ゆりの木会課外活動委員会・代表 早川たか子

少年少女文化財教室(大阪府箕面市)・代表(主宰) 辻尾 栄市

■ 第40回 1991年(平成3年)

(国語教育)  
茨城県阿見町立竹来中学校・教諭 中根 瑛子  
(算数・数学教育)  
山口県岩国市立通津小学校・代表(校長) 藤田 梅二  
(社会科教育)  
東京都荒川区立第二日暮里小学校・教頭 望月 公子  
(外国語教育)  
東京都豊島区立朝日中学校・校長 石川 英子  
(児童・生徒指導)  
盈進高等学校(広島県)・代表(教頭) 杉原 耕治  
(幼児の教育)  
東京都中央区立京橋朝海幼稚園・教諭 宇井 靖子  
(障害児教育)  
鳥取県立白兔養護学校・代表(校長) 徳永 好三  
(学校の指導・運営)  
静岡県静岡市立安東小学校・代表(校長) 山本 良苗  
(社会教育活動)  
広島県広島市中央公民館・代表(館長) 松原 明二  
(教育委員会・教育研究所等の調査研究活動)  
新潟県中学校教育研究会・代表(会長) 梅山 郁雄

■ 第41回 1992年(平成4年)

(国語教育)  
青森県立五戸高等学校・教諭 川上 信子  
(算数・数学教育)  
愛知県知立市立知立中学校・教諭 三浦 祥志  
(理科教育)  
山口県防府市立牟礼小学校・校長 城 成治  
福島理科の会・代表(会長) 大室 幹男  
(社会科教育)  
岐阜県美濃加茂市立山手小学校・代表(校長) 渡辺 均  
(外国語教育)  
福井県立武生東高等学校国際科・代表(教諭) 内田 勝夫  
(体育の教育)  
山口県阿武町教育委員会・派遣社会教育主事 新川 美水  
(障害児教育)  
タウン症児の早期療育を進める会「ひまわりの会」・代表 岡部 伊子  
(児童・生徒指導)  
長野県中野市立高社中学校・元校長 竹内 隆夫  
(学校の指導・運営)  
茨城県石岡市立関川小学校・代表(校長) 入澤 薫  
(社会教育活動)  
岩手県三陸町立甫嶺小学校・代表(校長) 高橋 淳

■ 第42回 1993年(平成5年)

(国語教育)  
神奈川県藤沢市立滝の沢小学校・教諭 阿部 直久  
群馬県桐生市立東中学校・教諭 四分一 勝  
(算数・数学教育)  
山形算数・数学評価研究会・代表(会長) 山本 正明  
(社会科教育)  
東京都立秋留台高等学校・教諭 村野 光則  
(体育の教育)  
神奈川県藤沢市立小学校体育研究会 南 英毅  
(幼児の教育)  
静岡県磐田市立東部小学校附属  
南御厨幼稚園・代表(副主任) 角皆 恵子  
(障害児教育)  
愛知県名古屋市長平田小学校・非常勤講師 堀田喜久男  
(学校の指導・運営)  
山口県美祿市立重安小学校・教諭 井上 葉子

東京都北区立北中学校内不登校児童  
生徒訪問指導室・囑託員 島田 葉子  
〈社会教育活動〉  
群馬県生涯学習センター・代表(館長) 千吉良 覺

■ 第 43 回 1994 年(平成 6 年)  
〈国語教育〉  
奈良県立添上高等学校・教諭 矢尾 米一  
〈算数・数学教育〉  
千葉県立船橋豊富高等学校数学科・代表 滝沢 洋  
〈理科教育〉  
栃木県宇都宮市立若松原中学校・教諭 南木 義男  
〈社会科教育〉  
千葉県市川市立第八中学校・教諭 竹澤 伸一  
〈生活科の指導〉  
東京都江戸川区立大杉東小学校・教諭 宮原千香子  
〈体育の教育〉  
静岡県浜北市立新原小学校・代表(校長) 大石 修司  
〈外国語教育〉  
財団法人津田塾会 津田英語会・講師 股野 儷子  
〈児童生徒指導〉  
神奈川県大磯町立大磯中学校・代表 吉田 文彰  
〈障害児教育〉  
東京都立墨東養護学校・教諭 渡辺美佐子  
〈社会教育活動〉  
川崎市ふれあい館(神奈川県)・代表(館長) 斐 重度  
岐阜県高山市農業委員 谷口いわお  
〈学校の指導・運営〉  
佐久島の教育を育てる会・代表 安井 克彦

■ 第 44 回 1995 年(平成 7 年)  
〈国語教育〉  
兵庫県神戸市立湊小学校・教諭 鹿島 和夫  
大阪教育大学附属平野中学校・教諭 辻井 義彦  
〈算数・数学教育〉  
東京都大田区立道塚小学校・教諭 横山美登里  
〈理科教育〉  
千葉県立船橋高等学校  
リニアモーターカー同好会・代表(教諭) 大山 光晴  
〈社会科教育〉  
埼玉県飯能市立飯能第一中学校・教諭 福田 英樹  
〈生活科の教育〉  
三重県四日市市立常磐西小学校・教諭 宮沢知可子  
〈体育の教育〉  
福島県大信村立信夫第一小学校・代表(校長) 鈴木 紳一  
〈児童生徒指導〉  
長野県佐久市立中込小学校・前校長 木内 保敬  
〈学校の指導・運営〉  
広島県深安郡神辺町立神辺小学校・教諭 妹尾 敬士  
〈障害児教育〉  
東京都立小金井養護学校・前教頭 前迫美知子

■ 第 45 回 1996 年(平成 8 年)  
〈国語教育〉  
盈進中学校(広島県)・代表(校長) 杉原 耕治  
〈算数・数学教育〉  
広島県福山市算数教育研究会・代表 紺谷 光男  
〈理科教育〉  
富山県立大門高等学校 理科部・代表(教諭) 藤井 修二  
〈社会科教育〉  
東京都目黒区立田道小学校・教諭 望月みどり  
〈外国語教育〉  
茨城県十王町立十王中学校・教諭 大内 富夫  
〈学校の指導・運営〉

神奈川県川崎市立南菅中学校・校長 芳野 菊子  
千葉県八千代市立米本南小学校・代表(校長) 田中 強  
〈地域社会教育活動〉  
茨城県総和町立西牛谷小学校・元PTA会長 長浜 音一  
〈教育カウンセリング〉  
大阪府立松原高等学校・教諭 佐谷 力  
東京都八王子市立第一中学校・委嘱スクールカウンセラー 黒沢 幸子

■ 第 46 回 1997 年(平成 9 年)  
〈算数・数学教育〉  
川崎市立中学校数学科図形教育研究チーム・代表(校長) 馬場 英顕  
〈理科教育〉  
福岡県北九州市立鴨生田小学校・代表(校長) 小山田 鈴子  
〈社会科教育〉  
愛知県下山村立下山中学校・教諭 川合 英彦  
〈生活科・総合学習〉  
兵庫県教育委員会阪神教育事務所・指導主事 松田 智子  
〈体育の教育〉  
神奈川県横浜市立南小学校・代表(校長) 安武 寿雄  
〈外国語教育〉  
白百合学園中学高等学校(東京都)・教諭 桑原 雅乃  
〈児童生徒指導〉  
高知市立高知商業高等学校・教諭 岡崎 伸二  
埼玉県川越市立寺尾中学校・教諭 山崎 祐一  
〈学校の指導・運営〉  
千葉県立君津農林高等学校・教諭 宗政 恒興  
〈地域社会教育活動〉  
千葉県習志野市立秋津小学校・代表(校長) 宮崎 稔  
〈障害児教育〉  
京都市立新道小学校弱視教室・代表(教諭) 中東 朋子

■ 第 47 回 1998 年(平成 10 年)  
〈国語教育〉  
大阪府立清水谷高等学校・教諭 清水 直樹  
〈理科教育〉  
福島県伊達町立伊達中学校・講師 菅野 サチ  
〈社会科教育〉  
愛知県豊田市立梅坪小学校・教諭 外山記代子  
〈生活科・総合学習〉  
愛知県蒲郡市立形原中学校・教諭 島内三都子  
〈体育の教育〉  
山口県防府市立新田小学校・教諭 水野 昭  
〈外国語教育〉  
愛知県西尾市立花ノ木小学校・代表(教諭) 高橋 正治  
〈児童生徒指導〉  
岡山県笠岡市立新吉中学校・教諭 池本 文子  
〈幼児教育・保育〉  
東京都千代田区立和泉幼稚園・園長 佐瀬スミ子  
〈学校の指導・運営〉  
兵庫県立鈴蘭台高等学校・教諭 青島 成夫  
〈地域社会教育活動〉  
千葉県松戸自主夜間中学・代表 藤田 恭平  
愛知県立港養護学校・教諭 高村 豊

■ 第 48 回 1999 年(平成 11 年)  
〈国語教育〉  
京北中学校(東京都)・教頭 川合 正  
共立女子第二中学・高校(東京都)・教諭 渡辺久仁子  
秋田県立能代北高校・教諭 貝田 桃子  
〈算数・数学教育〉  
お茶の水女子大学附属高校(東京都) 室岡 和彦  
〈理科教育〉  
滋賀県安土町立老蘇小学校・教諭 西川 伸一  
〈生活科・総合学習〉

愛知県碧南市立中央中学校・教諭 金子てる子  
 〈体育の教育〉  
 奈良県大和高田市立高田小学校・教諭 西川 潔  
 〈外国語教育〉  
 常葉学園高校（静岡県）・教諭 永倉 由里  
 〈児童生徒指導〉  
 大阪府立門真西高校・教諭 佐藤 功  
 〈教育カウンセリング〉  
 よりよい子供の育ちを考える会・代表 市川 紀史  
 〈学校の指導・運営〉  
 愛知県名古屋市長西陵商業高校・教諭 影戸 誠  
 新潟県十日町市立飛渡第一小学校・代表（校長） 根津敬一郎  
 〈地域社会教育活動〉  
 庄内地域づくりと子育て・文化協同の会・代表 塩野 俊治  
 〈障害児教育〉  
 障害児基礎教育研究会・代表 水口 浚

■ 第49回 2000年（平成12年）

〈国語教育〉  
 東京都品川区立立会小学校・代表（校長） 長谷川清之  
 〈理科教育〉  
 上越教育大学附属中学校（新潟県）・教諭 熊木 徹  
 〈社会科教育〉  
 三重県四日市市立日永小学校・教諭 伊藤 浄二  
 〈生活科・総合学習〉  
 横浜市教育センター（神奈川県）・専任研究員 鷺山龍太郎  
 愛知県岡崎市立六ツ美北部小学校・教諭 都築真美子  
 〈体育の教育〉  
 徳島県阿南市立橘小学校・教諭 小笠 明寛  
 〈児童生徒指導〉  
 福島県立石川高等学校・教諭 庄司 一幸  
 〈学校の指導・運営〉  
 宮城県北上町立相川小学校・校長 菅原 義一  
 長野県塩尻市立片丘小学校・校長 手塚 恒人  
 〈地域社会教育活動〉  
 愛知県岡崎市立泰梨小学校父母教師会・代表 鈴木 好彦  
 〈幼児教育・保育〉  
 東京都新宿区立戸塚第三幼稚園・教諭 三本 敦子

■ 第50回 2001年（平成13年）

〈国語教育〉  
 滋賀県立甲西高等学校・教諭 猪飼由利子  
 〈算数・数学教育〉  
 宮城県立ろう学校・教諭 中村 好則  
 〈理科教育〉  
 和洋国府台女子高等学校（千葉県）・教諭 栗谷川 晃  
 〈社会科教育〉  
 東京都立町田高等学校・教諭 本杉 宏志  
 〈生活科・総合学習〉  
 福島県福島市立清水中学校・教諭 柳沼 宏寿  
 徳島県上勝町立上勝小学校・教諭 藤本 勇二  
 〈外国語教育〉  
 女子聖学院中学校高等学校（東京都）・教諭 山下ルミ子  
 〈児童生徒指導〉  
 和歌山県和歌山市立真志中学校・教諭 小笠原登志美  
 〈学校の指導・運営〉  
 愛知県額田町立大雨河小学校・教諭 荻野 嘉美  
 〈地域社会教育活動〉  
 栃木県立栃木工業高等学校国際  
 ボランティアネットワーク・代表（生徒会長） 門澤 美治  
 愛知学泉短期大学 神谷 良夫  
 愛知市民教育ネット 毛受 芳高  
 〈障害児教育〉  
 マジカルトイボックス・代表 吉澤 千恵

〈音楽教育〉  
 立教小学校（東京都）・教諭 志村 尚美

■ 第51回 2002年（平成14年）

〈国語教育〉  
 静岡県浜松市立高等学校・教諭 堀江マサ子  
 〈算数・数学教育〉  
 東京学芸大学教育学部附属世田谷中学校・教諭 羽住 邦男  
 〈理科教育〉  
 埼玉県立越谷北高等学校・教諭 清水 龍郎  
 〈社会科教育〉  
 山口県大島郡久賀町立椋野小学校・教諭 桑原 真洋  
 〈生活科・総合学習〉  
 新潟県新潟市立真砂小学校・教諭 藤橋 一葉  
 東京都大田区立矢口小学校・教諭 中村 泰之  
 〈体育の教育〉  
 岐阜県下呂町立下呂小学校・代表（校長） 今村 豊  
 〈外国語教育〉  
 昭和女子大学附属昭和小学校（東京都）・代表 小泉 清裕  
 〈児童生徒指導〉  
 埼玉県羽生市立東中学校・教諭 加藤 昭  
 〈教育カウンセリング〉  
 大阪府立松原高等学校・教諭 佐谷 力  
 〈学校の指導・運営〉  
 東京都板橋区立金沢小学校・校長 高山 厚子  
 〈地域社会教育活動〉  
 東京都立市ヶ谷商業高等学校・教諭 千葉 勝吾  
 〈幼児教育・保育〉  
 大阪府立芥川高等学校・教諭 高橋 真子  
 〈美術教育〉  
 東京都品川区立第三日野小学校・代表（教諭） 内野 務

■ 第52回 2003年（平成15年）

〈国語教育〉  
 愛知県北設楽郡設楽町立田口小学校・代表（校長） 藤本 好男  
 〈算数・数学教育〉  
 田園調布雙葉中学高校（東京都）・教諭 足立久美子  
 〈理科教育〉  
 福井県福井市立明倫中学校・教諭 宇野 秀夫  
 〈社会科教育〉  
 埼玉県立所沢北高校・教諭 水村 裕  
 〈生活科・総合学習〉  
 長野県小県郡丸子町立丸子北中学校・教頭 小室 邦夫  
 大阪府立城山高等学校・教諭 中村 和幸  
 〈学校の指導・運営〉  
 青森県立柏木農業高等学校・教諭 佐藤 晋也  
 〈地域社会教育活動〉  
 千葉県立四街道養護学校教諭 /  
 NPO法人あかとんぼ福祉会理事長 松浦 俊弥  
 〈障害児教育〉  
 神奈川県立平塚ろう学校・教諭 佐渡 雅人  
 〈音楽教育〉  
 千葉大学教育学部附属小・中学校・講師 桐原 礼

■ 第53回 2004年（平成16年）

〈国語教育〉  
 東京都羽村市立羽村第二中学校・教諭 水野 美鈴  
 〈算数・数学教育〉  
 新潟県魚沼市学習指導センター・指導主事 松沢 要一  
 〈理科教育〉  
 神奈川県三浦市教育委員会学校教育課・指導主事 益田 孝彦  
 〈社会科教育〉  
 東京都杉並区立和田中学校・教諭 杉浦 元一  
 〈生活科・総合学習〉

福岡教育大学附属福岡小学校・教諭 光延正次郎  
 〈保健・体育の教育〉  
 茨城県つくば市立竹園西小学校・教諭 新井 清司  
 〈外国語教育〉  
 兵庫県伊丹市立伊丹高等学校・教諭 久保 裕視  
 〈児童生徒指導〉  
 沖縄県立北部工業高校・教諭 比嘉 靖  
 〈学校の指導・運営〉  
 宮城県七ヶ浜町小・中学校校長会・代表(町教育長) 中津川伸二  
 〈地域社会教育活動〉  
 長野俊英高等学校郷土研究班(長野県)・代表(顧問) 土屋 光男  
 神奈川県川崎市臨港中学校区地域教育会議・事務局長 宮越 隆夫  
 〈幼児教育・保育〉  
 学校法人大泉善哉学園ほや幼稚園(東京都)・副園長 鈴木 朋子  
 〈美術教育〉  
 福岡県福岡市立愛宕小学校・教諭 馬場 真弓

■ 第54回 2005年(平成17年)

〈国語教育〉  
 文部科学省海外子女教育指導員(欧州統括) 富澤 敏彦  
 〈算数・数学教育〉  
 東京都中野区立桃丘小学校・教諭 吉田 映子  
 〈理科教育〉  
 長崎県立長崎西高等学校・教諭 田中 清  
 〈生活科・総合学習〉  
 香川県木田郡庵治町立庵治第二小学校・教諭 佐々木広子  
 今治明德高等学校矢田分校(愛媛県)・教諭 藤本 文昭  
 〈保健・体育の教育〉  
 岩手県種市町立宿戸中学校・校長 渡邊不二夫  
 〈外国語教育〉  
 滋賀県立草津東高等学校・教頭 山岡 憲史  
 〈児童生徒指導〉  
 東京都多摩市立多摩中学校・校長 山本 修司  
 〈教育カウンセリング〉  
 香川県警察本部生活安全部少年課・課長補佐 香川 雅之  
 〈学校づくり〉  
 山形県羽黒町立(現鶴岡市立羽黒)第三小学校・前校長 佐々木勝夫  
 香川県高松市立仏生山小学校・校長 古沢 博美  
 〈地域社会教育活動〉  
 山口県立下関商業高等学校・養護教諭 石田 法子  
 大阪府立農芸高等学校・教諭 石田 真一  
 〈障害児教育〉  
 東京都立城南養護学校・代表(研究部主任) 川上 康則

■ 第55回 2006年(平成18年)

〈国語教育〉  
 茨城県下妻市立豊加美小学校・代表(校長) 堤 光子  
 〈算数・数学教育〉  
 岩手県花巻市立八重畑小学校・代表(校長) 三田村幸治  
 〈理科教育〉  
 香川県立丸亀高等学校・教諭 川村 教一  
 〈社会科教育〉  
 岡山県倉敷市立多津美中学校・教諭 野崎 洋子  
 〈生活科・総合学習〉  
 愛知県名古屋市長東築地小学校・教諭 酒井喜八郎  
 〈児童生徒指導〉  
 三重県いなべ市立員弁中学校・教諭 出口 省吾  
 〈教育カウンセリング〉  
 埼玉県教育局・南部教育事務所・指導主事 児玉 裕子  
 〈学校づくり〉  
 長野県豊科高等学校・教諭 穂苅 稔  
 〈地域社会教育活動〉  
 NPO法人霧島食育研究会(鹿児島県) 千葉しのぶ  
 〈美術教育〉

埼玉県立浦和高等学校・教諭 波田野公一

■ 第56回 2007年(平成19年)

〈国語教育〉  
 宮城県仙台市立北仙台中学校・教諭 中村 大輔  
 〈算数・数学教育〉  
 山梨大学教育人間科学部附属中学校・教諭 清水 宏幸  
 〈理科教育〉  
 山口県立厚狭高等学校・教諭 児玉伊智郎  
 〈社会科教育〉  
 慶應義塾湘南藤沢中・高等部(神奈川県)・講師 金杉 朋子  
 〈生活科・総合学習〉  
 千葉県千葉市立高洲第二小学校・教諭 山岸 早苗  
 〈保健・体育の教育〉  
 奈良県生駒市立あすか野小学校・教諭 前田 香織  
 〈外国語教育〉  
 福岡県大野城市立大野南小学校・教諭 上原 明子  
 〈児童生徒指導〉  
 高知市立横浜小学校・教諭 汲田喜代子  
 〈学校づくり〉  
 東京都港区立港陽小学校・校長 角田美枝子  
 〈地域社会教育活動〉  
 阿波木偶人形会館(徳島県)・館長 多田 健二  
 〈障害児教育〉  
 鳥取県鳥取市立浜坂小学校・教諭 鈴木 伝男  
 〈音楽教育〉  
 埼玉県さいたま市立本太中学校・教諭 森角由希子

■ 第57回 2008年(平成20年)

〈国語教育〉  
 兵庫県三田市立けやき台小学校・教諭 伊崎 一夫  
 〈算数・数学教育〉  
 東京学芸大世田谷中学校・教諭 山崎 浩二  
 〈社会科教育〉  
 青山学院高等部・教諭 松本 通孝  
 成蹊中学・高等学校・教諭 日高 智彦  
 〈生活科・総合学習〉  
 愛知県西尾市立寺津小学校・校長 高橋 正治  
 〈保健・体育の教育〉  
 埼玉県越谷市立鷺後小学校・教諭 岩本 利夫  
 〈外国語教育〉  
 岩手県一関市立一関中学校英語科代表 教頭・千田幸範  
 及川 千佳  
 佐藤 久美  
 小野寺明子  
 富山 彩  
 〈児童生徒指導〉  
 滋賀県長浜市立西中学校・教諭 澤 豊治  
 〈学校づくり〉  
 東京都練馬区立豊玉南小学校代表(研究主任担当) 遠田 公博  
 〈地域社会教育活動〉  
 青森県立八戸第二養護学校・教諭 西里 俊文  
 〈美術教育〉  
 川崎市立はるひ野小中学校教諭 川合 克彦

■ 第58回 2009年(平成21年)

〈国語教育〉  
 千葉大学教育学部付属小学校教諭 大木 圭  
 〈算数・数学教育〉  
 山口県立岩国高等学校教諭 西元 教善  
 〈理科教育〉  
 青山学院高等部教諭 池田 敏  
 〈社会科教育〉  
 本郷学園本郷中学高等学校教諭 横山 省一

〈生活科・総合学習〉  
兵庫県篠山市立大山小学校教諭 酒井 達哉  
〈教育カウンセリング〉  
徳島市立上八万小学校カウンセリング  
研究会代表徳島市立上八万小学校教諭 辻 映子  
〈学校づくり〉  
静岡県立磐田農業高等学校代表 塚本行博校長  
〈地域社会教育活動〉  
大森学園高等学校 生徒会ボランティア教諭 安達 毅  
〈地域社会教育活動〉  
NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 辻英之代表理事  
梶さち子会長  
〈特別支援教育〉  
吹田市立教育センター主幹 森田 安德  
吹田市立吹田第三小学校指導教諭 辻本 裕子  
〈音楽教育〉  
川崎市立藤崎小学校総括教諭 志村 恵子

■ 第59回 2010年(平成22年)

〈国語教育〉  
岡山県赤磐市立吉井中学校・教諭 北川久美子  
〈算数・数学教育〉  
高知県土佐教育研究会 久保 博行  
松下 泰三  
室戸市立吉良川小学校・教諭 矢田 敦之  
〈理科教育〉  
石川県立翠星高等学校・教諭 宮下 正司  
〈社会科教育〉  
大阪府高槻中学・高等学校・教諭 楊田 龍明  
〈生活科・総合学習〉  
新潟県長岡市立上組小学校・教諭 水谷 徹平  
〈外国語教育〉  
ノートルダム学院小学校(京都市)・教頭 行田 隆一  
〈児童生徒指導〉  
東京都府中市立府中第三中学校・元教諭 高橋 芳宏  
〈教育カウンセリング〉  
東京女学館中学高等学校・教育相談室長 渡邊 正雄  
〈学校づくり〉  
学校法人明晴学園・教頭 榎 陽子  
〈地域社会教育活動〉  
鹿児島市立清水小学校・前校長 池田 昭夫  
清水小学校水泳同好会・前会長 有蘭 良一  
〈幼児教育・保育〉  
社会福祉法人高原福祉会・理事長 高橋 保子  
〈美術教育〉  
東京都多摩市立北豊ヶ丘小学校・主任教諭 柴崎 裕

■ 第60回 2011年(平成23年)

〈国語教育〉  
埼玉県立浦和第一女子高校・講師 長島 猛人  
〈算数・数学教育〉  
大阪教育大学付属池田中学校数学科代表(副校長) 上原 昭三  
(教諭) 山戸 正啓  
〈社会科教育〉  
興南学園興南中学校(那覇市)・教諭 門林 良和  
〈生活科・総合学習〉  
茨城県水戸市立稲荷第一小学校・教諭 池田 裕子  
〈外国語教育〉  
愛知県豊橋市立青陵中学校・教諭 桃野己恵子  
〈学校づくり〉  
静岡県浜松市立光明小学校・元校長 河島 秀夫  
〈地域社会教育活動〉  
宇都宮市立旭中学校・教諭 田崎 透

〈特別支援教育〉  
福岡県久留米市立小森野小学校・教頭 山田 俊之  
〈幼児教育・保育〉  
福井県教育庁地域サイエンス博士 山田 儀一  
〈音楽教育〉  
千葉県立院内小学校・教諭 桶田 加代  
〈美術教育〉  
新潟県阿賀野市立笹岡小学校・教頭 青木 善治

■ 第61回 2012年(平成24年)

〈国語教育〉  
栃木県日光市立落合西小学校・教諭 見目 宗弘  
〈算数・数学教育〉  
志の算数教育研究会(東京都)・代表 盛山 隆雄  
加固希支男  
山本 大貴  
松瀬 仁

〈理科教育〉  
出雲科学館(島根県)・名誉館長 曾我部國久  
〈生活科・総合学習〉  
鹿児島県奄美市立伊津部小学校・教諭 中島賢太郎  
〈外国語教育〉  
大阪女学院中学・高等学校(大阪市)・教諭 中藤 優子  
〈児童生徒指導〉  
福井県鯖江市・立待小学校・教諭 岩堀 美雪  
〈学校づくり〉  
大阪府立東百舌鳥高等学校・教諭 稲川 孝司  
〈地域社会教育活動〉  
ウーマンズフォーラム魚(東京都)・代表 白石ユリ子  
〈特別支援教育〉  
神奈川県立金沢養護学校・副校長 渡邊 昭宏  
〈音楽教育〉  
リトミック・ピアノ教室(名古屋市)・主宰 浦浜 麗名

■ 第62回 2013年(平成25年)

〈国語教育〉  
神奈川県大和市立西鶴間小学校・教諭 山根 幸一  
〈算数・数学教育〉  
福井県越前市立吉野小学校・教諭 宮脇 真一  
〈理科教育〉  
岡山県倉敷市立多津美中学校・教諭 難波 治彦  
〈社会科教育〉  
千葉県立有吉小学校・教諭 江崎 広章  
〈保健・体育の教育〉  
石川県加賀市立錦城小学校・代表(教諭) 釜親美和子  
〈外国語教育〉  
鳥取県立鳥取西高校・教諭 辻中 孝彦  
〈教育カウンセリング〉  
愛知県碧南市立大浜小学校・教諭 長田 洋一  
〈学校づくり〉  
神奈川県立綾瀬西高校・総括教諭 竹本 弥生  
〈地域社会教育活動〉  
神奈川県立中央農業高校・草花部顧問 高橋晋太郎  
〈幼児教育・保育〉  
愛知県豊田市立平山こども園園内研究会・代表(保育士) 渡辺 紫乃  
〈美術教育〉  
佛光大学教育学部特任教授 橋本 忠和

■ 第63回 2014年(平成26年)

〈国語教育〉  
岐阜県加茂郡白川町立白川小学校・代表(校長) 宮内智鶴子  
〈算数・数学教育〉  
長野県屋代高等学校・附属中学校・教諭 横澤 克彦  
〈理科教育〉

